9784152079459

1910097018002

ISBN4-15-207945-2

C0097 P1800E

定価1800円(本体1748円)

THE
MYSTERIOUS
PRESS
Tokyo

■粋で、しかも油断できない……エレガントで緻密な小説を生み出す名手ロス・トーマスは、殺人と脅迫の見事な物語をつくり上げた。 ——ロサンゼルス・タイムズ

■本当に面白い。密談、裏切り、罠——わくわくさせる要素がどっさりある。 ——ワシントン・ポスト・ブック・ワールド

■含蓄のある文章、ニヤリとさせ、読み終えるのが惜しい気持ちになる出色の作品。 ——シカゴ・トリビューン

Digitized by the Internet Archive
in 2014

https://archive.org/details/isbn_9784152079459

MYSTERIOUS PRESS BOOKS

夜の闇の中へ

コーネル・ウールリッチ／稲葉明雄=訳

定価1545円

◆

神が忘れた町

ロス・トーマス／藤本和子=訳

定価1500円

◆

ノックス師に捧げる10の犯罪

ヨゼフ・シュクヴォレツキー／宮脇孝雄・宮脇裕子=訳

定価1800円

◆

黄昏にマックの店で

ロス・トーマス／藤本和子=訳

定価1800円

◆

私書箱9号

ジャック・オコネル／松下祥子=訳

定価1800円

◆

妨害電波

ジャック・オコネル／松下祥子=訳

定価2300円

発行 THE MYSTERIOUS PRESS, TOKYO

発売 早川書房

VOODOO, LTD.

by Ross Thomas
Copyright © 1992
by Ross E. Thomas, Inc.
Translated by Yoshimi Kikuchi
First published 1995 in Japan
by Hayakawa Publishing, Inc.
This book is published in Japan
by arrangement with
Warner Books, Inc., New York
through Japan Uni Agency, Inc., Tokyo.

獲物（えもの）　〈検印廃止〉

1995年8月20日　初版印刷
1995年8月31日　初版発行
著者　ロス・トーマス
訳者　菊地（きくち）よしみ
発行者　早川　浩
発行所　The Mysterious Press, Tokyo
発売元　株式会社　早川書房
郵便番号101　東京都千代田区神田多町2-2
電話　03-3252-3111（大代表）
振替　00160-3-47799
印刷所　中央精版印刷株式会社
製本所　中央精版印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります
ISBN4-15-207945-2 C0097
Printed and bound in Japan
乱丁・落丁本は小社制作部宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取りかえいたします。

Yellow-Dog Contract (1976)
Chinaman's Chance (1978)『大博奕』志摩政美訳／立風書房
The Eighth Dwarf (1979)『八番目の小人』藤本和子訳／ミステリアス・プレス文庫2
The Mordida Man (1981)『モルディダ・マン』山本やよい訳／ミステリアス・プレス文庫6
Missionary Stew (1983)
Briarpatch (1984)『女刑事の死』藤本和子訳／ハヤカワ・ノヴェルズ
Out on the Rim (1987)『五百万ドルの迷宮』菊池光訳／ミステリアス・プレス・ブックス（早川書房）
The Fourth Durango (1989)『神が忘れた町』藤本和子訳／ミステリアス・プレス・ブックス（早川書房）
Twilight at Mac's Place (1990)『黄昏にマックの店で』藤本和子訳／ミステリアス・プレス・ブックス（早川書房）
Voodoo, Ltd. (1992) 本書
Ah, Treachery! (1994)

〈オリヴァー・ブリーク名義〉
The Brass Go-Between (1969)
Protocol for a Kidnapping (1971)
The Procane Chronicle (1972)『強盗心理学』尾坂力訳／立風書房
The Highbinders (1974)
No Questions Asked (1976)

うか。

その次作 *Ah, Treachery!* は、一九九二年の大統領選挙にからむ巨額の政治資金紛失事件と、軍部およびCIAによる過去の不正の隠蔽工作が並行して展開していくなか、そのはざまで翻弄されざるをえない立場におちいった男の奮闘を描いている。来年、同じくミステリアス・プレスから刊行の予定なので、年来のロス・トーマス・ファンも、本書で初めてその明晰にして屈折した語り口に魅せられた読者諸賢も、等しくご期待あらんことを。

一九九五年七月

ロス・トーマス著作リスト

〈ロス・トーマス名義〉

The Cold War Swap (1966) 『冷戦交換ゲーム』丸本聰明訳／ハヤカワ・ミステリ1044

The Seersucker Whipsaw (1967)

Cast a Yellow Shadow (1967)

The Singapore Wink (1969) 『恐喝』筒井正明・近見昌三訳／立風書房

The Fools in Town Are on Our Side (1970)

The Backup Men (1971) 『クラシックな殺し屋たち』筒井正明訳／立風書房

The Porkchoppers (1973) 『ポークチョッパー　悪徳選挙屋』筒井正明訳／立風書房

If You Can't Be Good (1973) 『可愛い娘』筒井正明・近見昌三訳／立風書房

The Money Harvest (1975) 『悪魔の麦』筒井正明訳／立風書房

のならない連中なのだが、現状分析、推理、決断の正確さに比類のない能力をみせるウーには全員が一目置いている。中国中常位の継承権　ずいぶんと木偶のようだが　を所有するという人を食った経歴の持ち主のウーも、四十代後半に入り、鷹揚な微笑と悠揚せまらぬ態度に磨きがかかって大人の風格がいっそう増してきたようだ。しかし、クリムから仕事の依頼があるまでは、子供たち　ふた組の双子　の授業料捻出にも四苦八苦していたという窮乏ぶりが何ともおかしい。

十四歳のときサンフランシスコのメソジスト派の孤児院をウーとともに脱走して以来、彼とハートナーを組んでいるクイン・ライ・フェファントは、寡黙なヒーローとしての面目をさらに増してきている。ウーがフリンストン大学に行けた経緯とともに、二人の驚くべき経歴・特技の　事も本書で明らかにされるのでお楽しみに。

アサカイ・オヴァライのほうは、その異の世界での顔の広さと、旧故にかけた詐欺師ぶりか相変わらず小気味がいい。第二次大戦時の陸軍少尉で宇宙くずれのソース・ストーリングスは、すでに六十五歳になっているか、グループ最年長の〝知恵袋〟として、〝変幻自在のカメレオン〟として、まさに水を得た魚のように嬉々としてさまざまな役柄を見事にこなしているし、面色のはいってもまたまた現役なのはまさにご同慶のいたりというところである。元財務省秘密捜察局員で、五年の辛酸を嘗めてきたシェア・ファルコも、冷徹で謎めいた美女ぶりは健在、その一筋縄ではいかない駆け引的な自動公式は今回も目が離せない。

かくも個性の強い面々のそろいぶみに加え、ストーリングスの娘婿でもある敏腕の刑事弁護士ハワード・モントが、〝五百万ドルの迷宮〟、〝ファラオス・プレス・フォクス　早川書房　に続いて登場しているのも嬉しいことのひとつである。他の作品との関連では、あの〝モルティタ・マンション〟ミステリアス・プレス文庫6　のチャブ・タンシーとも、その昔、ウーとテェファントは一緒にあやしげな仕事をしたことがあるらしい、裏の世間も狭いものである。次作の〝Mr. Timmis〟（1991）では、本書で殺人容疑をかけられている女優のアイオニ・キャンフルか、高層の客の凝視を浴びながらレストランをよきっていく場面かある、と出てしまいては、ロス・トーマス・ファンのひそやかな楽しみのほんの一部を奪ってしまうことになる

兄妹か、二度の催眠療法を行なったあと行方不明になったのだという。ヘルフリの信用に係わることだし、その後、兄妹もしくは第三者による恐喝その他の事態が起こる可能性もある。面倒なことにならないうちに催眠術師兄妹を捜しだしてほしい、というのがグリムの依頼内容だった。

方、五年前からノース・ストーリングズと組んで仕事をしているアザガイ・オウァビイは、このときアンマンにいたが、耳ざとくウーテュー社に持ち込まれたうまい話を聞きつけると、策を弄してストーリングズとともに割り込んでくる。ちょうど、前回の一件で四人の男を裏切る格好となったジョージア・ブルーが、マニラの女子刑務所から出所してくる時期にあたっていたので、ブルーへの同情を感じていたウーは、彼女も仕事仲間に加えることにする。

かくして、ロサンジェルスに集結した五人のそろいぶみから事態が急展開していくわけだが、五年前の感情的しこりが残るデュラントとジョージア・ブルーという厄介な爆弾を抱えたまま、トラブル処理には最高の腕を持つ五人がそれぞれの役割を果たしていくことになる。そのスピーディな物語を追いながら、われわれ読者は、本書でもまた、いかにもロス・トーマスらしい丁々発止の駆け引きを大いに堪能させてもらえる。三十年ほど前の処女作『冷戦交換ゲーム』（ハヤカワ・ミステリ1044）以来、ロス・トーマスは入り組んだプロットの名作を数多く生みだしてきているが、本書の筋立ては、ページを繰る手を止めて頭をひねるといったほどのことはなく、軽快なテンポで心地よくお話が進行していくことになる。

"五百万ドルの迷宮"で絶妙の（不）調和をかもしだした五人組の再登場する今回の『獲物』は、紋切り型の宣伝文句を使えば、"あの凄腕の五人が帰ってきた"といったところだろうか（"運よく、同窓会と同じで、一時的な結びつきにすぎない"というのがデュラントの口癖だ）。このくせ者ぞろいのグループのまとめ役として抜群のリーダーシップを発揮するのは、今回もまたアーティ・ウーである。五人が五人とも、それぞれたがいの力量を認め合いながらも、相手を出し抜くことに自分の存在意義を見いだそうとしているかのようなまことに油断

訳者あとがき

この十年来、独特のひねりのきいたロス・トーマスの作品は訳出されるたびに好評をもって迎えられ、わが国でも根強いファンの層を形成しているようだが、その中でも、九九二年に発表した本書『獲物』(一九九三年)は、五百万ドルの賞金・スリル・アクション・ロマンス・冒険満載で、しかも政治と資金の五百万ドルをまんまとせしめた男の九年間が、五年後にふたたび姿をあらわし、協力して事件解決にあたるという実に爽快で楽しい作品に仕上がっている。

アーティ・ウーとクインシー・フェファートは、九年間の大仕事ののち、それぞれ金をもって、自由で自立した生活を送っていた。一九八六年のマニラ、香港の出来事というのは、五百万ドルの賞金で、その後のウーとフェファートの自由奔放な各種のトラブル処理を代行する会社をパートナーに迎えたのだが、ウーの名声を借りれば、〝利他主義を仕事にしている〟ということになる、株で大損したり何やかやで、いまや経営は火の車となっている。そんなある日、あらゆる種類の専門家を世界中どこにでも派遣する会社、ハルファ！の会長、エンノ・クノムなる男がウーとフェファート社を訪れてくる。ハリウッドの女優兼監督のアイオニ・キャンフィルが、婚約破棄した映画プロデューサーを殺害した容疑で起訴されているのだが、キャンフィルは事件当夜の記憶を喪失していた。そこで、彼女の記憶を呼び戻したいという弁護士の依頼で、ハルファ！は催眠術師の兄妹を派遣した。ところが、その催眠術師

彼は首を振った。「きょうは何時に終わるのかね？」

「六時ですけど？」グロリア・ランサムの答えは質問の形を取っていた。それでは遅すぎるかと心配してでもいるかのようだ。

「では、その時間に迎えにこよう、たぶん、今夜飛行機をチャーターして、飛んでいけるだろう」

「信じられない！」

「六時に会おう、グロリア」そう言って、ストーリングズは笑顔をみせ、営業所をあとにした。

外に出ると、ストーリングズは通りを渡り、サンタモニカ・ブルヴァールの北側を歩いていった。公園のベンチにやってくると、彼はひとりの男の隣に腰をおろした。六十代後半か七十代前半のその男は、フィルム編集者を引退した身だという。結局、二人は現政権と経済の話をしはじめ、終結したばかりの偽戦争を、朝鮮戦争、ヴェトナム戦争、第二次大戦と比べて論じ合った。引退したフィルム編集者はずいぶんと世情に通じていて、楽観的な観測はまったくしていなかった。

帰り際に、立ち上がった老人はストーリングズを見おろして言った。「あんたはまだ引退していない、違うかね？」

「まだいまのところ」とブース・ストーリングズは答えた。

「これをわたしに描いてほしい？」

ブルーはうなずいた。

なくなるまで、高級ホテルで暮らしてシャンパンを飲みたいかね？」

彼女はほほ笑んだ。「あなたは？」

イエスと言えば、彼女は一緒に来るとストーリングズにはわかっていたが、同時に、それが悲惨な結末を迎えることになるのもわかっていた。そこで、心のなかではイエスと言ったが、口に出しては、「いや、それほどでも」と答えた。

は言った。「何か必要だったら――あるいは、気が変わったら。電話番号はハウイに教えとくつもりよ」

「何だね？」

「わたし、いまだに、あなたにかなりお熱なのよ」ジョージア・ブルーは言った。

リーヒルズにある〈バジェット〉の営業所に走らせた。そこで、生まれながら陽気で気立てのいいグロリア・ランサムに車のキーを手わたした。

いつものあたたかい態度で挨拶した受付嬢は、彼と一

窓ガラスが割れていないかを確認した。オフィスに戻り

「映像作品は手に入ったよ」ストーリングズはそう答え

うなことを言っていた、とぼんやりと思い出していた。

"ワォ"とか"すごい"とか"素敵ですね"といった言

した仕事があるのかね？」

「週末はお休みです」

「タホー湖に行ってみたい？」

「ご冗談でしょう？」

アビイは、荷造りを終えると、マリブのジェムスター・リムジン・サーヴィスに電話して、ブリッジズ・ホテルまで送ってもらうよう頼んだ。そこに小さめのスイート・ルームが一週間予約してあった。ブリッジズで何も面白いことが起こらなければ、サンフランシスコに行ってみる。そのあとは、いつでも香港が待っている――少なくとも、一九九七年までは。

オヴァヒイを見送ってから、グレース・ストーリングスはジョージア・ブルーの寝室に入っていった。彼女は機内に持ち込めるバッグに服を詰めていた。ストーリングズは椅子に腰をおろし、彼女がグレイのドレスをたたむのを見つめていた。ニーマン・マーカス百貨店で買った服だ。それがたたまれて詰め込まれたところで、彼は尋ねた。「どれくらいひどかったのかね――例の宿では？」

「わたしは、デュラントとジャック・ブローチのどちらを選択するかを迫られ、デュラントを選んだ。でも、ブローチは、わたしがそうすると知っていた、というか、知っていたようにみえた。で、そのまま歩き去った。というか、そうしようとした。アザガイがいなかったら、そうしてたはずね」

「デュラントは何と言ってた？」

「ありがとうと。ほかに言うことがある？」

ジョージア・ブルーは室内を見まわし、詰め込むべきものが残っていないのを確認すると、バッグのジッパーを閉めた。ベッドから封筒を拾い上げ、コーチのハンドバッグに突っ込む。それから、ベッドのかたわらに膝をつくと、マットレスの下に手を差し入れ、二五口径の小型セミオートマチックを取りだした。シャック・ブローチの右上腕、肩に近いあたりを撃った拳銃だ。「これよ」と言って、彼女は二五口径をストーリングズに投げわたした。彼は片手で受けとった。

「それでブローチを撃ったの」

「足首に装着する拳銃のようだが」

「そうよ」

「どこで手に入れたんだね？」

「〈ギャップ〉に買い物に行った日があったでしょう？」

ストーリングズはうなずいた。

「そのあとあるバーに立ち寄って、バーテンに訊いてみたのよ。婦人が護身用のものを手に入れられる場所を知ってるかって。たまたま、彼の友だちに扱ってる人がいたの」

「そろそろブースが、〈マクドナルド〉のエッグ・マフィンを持って戻ってくるころだと思う」

と聞いてみたほうがよさそうだ

ベル・エアで？」

「それはうらやましい」ウーは言った。

入った五つの封筒の分配は、午前十時十九分、ブース・ストーリングズの手によって何の儀式もなしに行なわれた。そのあと、デュラントは中座して自分の寝室に戻り、アイオニ・ギャンブルに電話して、一緒に昼食をどうかと尋ねた。

「お昼は都合がつかないけれど」ギャンブルが答えた。

「でも、ディナーなら空いているわ」

「その前に出発することになる」

「ロンドンに帰るの？」

「しばらくは」

「こちらにも戻ってくるんでしょう？」

「ひと月後くらいには」

「連絡して。ここで一緒にディナーをいただきましょう」

「そうすることにする」と言って、デュラントは電話をルスに戻ってきたとしても、彼女に連絡しはしないし、彼女のほうでもそれを承知している、ということを意味

ドアの開いたジョージア・ブルーの寝室の前を通ったデュラントは、彼女が窓辺に立ち、海を眺めているのに気づいた。ベッドの上には、小切手と現金五千ドルの入った封筒が投げだされたようにのっていた。

「だいじょうぶか？」デュラントは尋ねた。

ブルーが振り返った。「元気よ」

「おれが間違ってた、そうじゃないか？」

「さよなら、クインシイ」そう言って、ジョージア・ブルーはまた太平洋のほうを向いた。

コルドでロンドンに戻るつもりでいた。アザガイ・オヴ

な借りが。彼に、そっくり揉み消す方法を考えだしてくれたら恩に着る、と率直に打ち明けた。必要とあらば、ミス・ローザ・アリシア・チャヴェスが〝大きな中国人〟を目撃したと考えているまさにその時間に、オーシャン・アヴェニューで、あんたとデュラントが一ドル札を配っていた、と誓えるホームレスを十数人かき集められるということも伝えた。ほかにも証人がいるともほのめかした」

「彼はその話を信じた？」

「いや。しかし、それでやる気になった。彼は、自分に借りのある誰かに連絡した。その誰かがまた誰かに連絡した。そうやって話が上へ上へと伝わっていき、最終的には、何者かが受話器を取って連絡し、そのひとことであんたは釈放された」

「きみに借りができたな」アーティ・ウーは言った。

「そのとおり」とモットは答え、黙って数歩進んでから尋ねた。「なぜ、じっと坐って逮捕されるのを待ってたのかな？」

「連中に誰かを逮捕させる必要があったからだ」ウーは説明した。「レンタカーの領収書やらクレジットカードの追跡調査が行なわれていたろうし、われわれが町にいるのを知っていた人間があまりに多い。警察に誰かを差しだす必要があった。ジョージアではだめだ。適法とは言いがたいパスポートを所有しているので、いちばん弱い存在だからな。アザガイは候補のひとりだった。彼ならうまいこと言い抜けることもできたはずだ。しかし、彼にはわれわれが必要とするコネがいろいろとあったし、それに、みずからの身を気高い犠牲に供したという話を、この世の終わりまで聞かされることにもなりかねない。次なる候補はブース。しかし、運よく彼は、自分の木馬に夢中になっていたし――リック・クノーヴランドの件だな――それに、財務を担当し、われわれの食事の世話もしていた、たいしたものは食わせてもらえなかったが。残るはデュラントとわたし。しかし、わたしは、ブルー〟デュラントの実験を押し進めたかった。すると、あとはわたししかいない。それに、考えてみれば、わたしにはそれ以上に建設的な仕事が残っていないのも認めざるをえなかった」そこでモットを見おろし、微笑した。

「満足したかね？」

「実に興味深い」とモット。

「朝食を食べていくかね？」

「何が出るのかな？」

美に主張するものだ。おおむね彼女は沈黙に主張をしている。

「あの戦争は我々の勝利に終わるかもしれない」

「まだ言うか。まだ二十二日も先のことだ。二十二日は二十二日だ。その間にどんなことが起こるかもしれないではないか。ま、ほどほどにしておけ」

「いまやもはや我慢しているのだ」モッシュは言った。

「二十数万の兵士が」

「二十万の言葉を、賛成票を……」

「二十八万一、二万一、もはや、誰かに賛成して反乱するぐらい、言うことも聞かない」

そのあと二人は黙ってテラスを見ていた。おおぜいの人々がモッシュを見おろしてこう言った。「ヤーホイ、ハーホイ、来のとおり、どこかおかしくなったわたしを歓迎をされた……」

「賛し者り」

テーブルは数回うなずいた。理解したのだと自覚に私も理解していたしかしくされた。「正しく置きたい」

「ギャンブル事件を……」というより、ギャンブル事件と考えられていたものを……我うためにわたしが一年前に事実した。この二つの出来事件のある出来に三絶を取った。その男は、おおむねこうした。「それはおおむね大き

44

故ウィリアム・ライス邸の食堂で、年代物の細長いテーブルを囲んで半ダースのライフ・フェローたちが、ロンドンのエンノ・グリムと電話で話し終えたのは、ロンドン時間で午後二時五分、マリブでは朝の六時五分のことだった。受話器を置いたデュラントは、アザガイ・オヴァビイのほうを向いて言った。「ミスタ・グリムは、われわれの払った努力に大いに感謝してる。言葉どおりではないかもしれないが、こんなふうに言ってた――あなたがたはいまいましい仕事を実に見事に果たしてくれた」

「金の件はどうなった?」オヴァビイが訊いた。

「ジェニー・アーリスが電信送金の手続きにかかってる。グリムの話では、ウェストミンスター銀行が扱うらしい。われわれの銀行が開く九時までにはこっちへ着くはずだという」

「全額?」

「全額」

「おれたちの取り分は、ちゃんとアーティが言ってたとおりになる?」

「誰もあんたの分をかすめ取りはしないさ、アザガイ」

「訊かないことには、誰もそう言ってくれないからな」

短い間があってから、デュラントが言った。彼女はどうしてる?」

「誰のことだ?」

デュラントは黙ってオヴァビイを見つめた。

「ああ。アイオニのことか。元気さ。多少疲れ、多少面くらってもいるか。だが、あの金でいくらか元気づいた。大金じゃないが、結構な額だからな」そこで言葉を切り、嘘をつくことにする。「あんたのことを尋ねてたよ」

「どんなことを?」

「ま、あんたは無事だったのか、どうするつもりでいるのか。そういったことさ」ふたたびひと呼吸おく。「おれにも、わたしのエージェントにならないかと尋ねた」

デュラントの唇がぎゅっと結ばれ、非情な感じを与え

バッグには百ドル紙幣の札束が詰まったままだった。
「すごい。誰のお金？」
「あんたのだ。三十万ドル――いくぶん欠けるが。ジャック・ブローチがあんたから盗んだ金の一部だ。おれが盗り返した。もちろん、おれひとりでじゃないが。ジョージアと、糞ったれデュラントにも少々手伝ってもらった」
「すると、これが架空の百万なのね、そうでしょう？例のテープを買い戻すはずの百万――ただし、百万もなければ、テープもなかった」
「だいたいそんなとこだ」
「これどうしたらいいの？」
「貸し金庫があるんじゃないのか？　そこに入れとけよ。必要になったら、そのつど取りだせばいい」オヴァビイは立ち上がった。「おれはもう行かないと――だが、またあんたに会えて最高に楽しかったよ、アイオニ」
「これからどうするつもり？」
オヴァビイは満足そうな笑みを浮かべた。「さしあたり、たいしたことは何もしないだろう」
「坐って、アザガイ」
オヴァビイはまた腰をおろした。長い沈黙が続く間、ギャンブルは彼をまじまじと見つめていたが、やがていった。「わたしのエージェントになる気はない？」

て言った。「なぜなら、あのろくでなしがわしの家の眺望を台無しにしたからだ、それが理由じゃよ」

「あなたの家の眺望？」

「あんたの家にも眺望があるはずだな？」とクリーヴラント。「そうとも、どこかの間抜けがやってきて、その家のまん前に、八、九階建てのヒルを建てたとしたらどうじゃ。それでも腹が立たんかね？」

「殺そうと思うほどには」

その眺望が、この世で自分に残された唯一のものだとしたらどうじゃ？」リック・クリーヴランドは言った。

午前二時を少しまわったころ、マリブの保安官事務所支所は、アーティ・ウーが釈放されたばかりの独房にリック・クリーヴラントを監禁した。それまでに、クリーヴランドはウィリアム・A・C・ライス四世の殺害を素直に認め、また同じ状況になったならば、ふたたび同じことを繰り返すだろうと公言さえしていた。

午前三時十六分、匿名の通報によって出動した州警察のハイウェイ・パトロールは、トパンガ・キャニオンの朝食つき宿で、コリーン・カレンとジャック・ブローチの死体を発見した。匿名の通報者、アザガイ・オヴァビイがハイウェイ・パトロールを呼んだのは、カレンが、何人かの保安官補に賄賂を渡し、潜伏宿の経営を目こぼししてもらっていると話したのを思い出したからだった。

午前三時三十八分。青いキャンバス地のバッグを持ったオヴァビイは、サンタモニカのアテレード・トライヴにある、アイオニ・ギャンブル邸のドア・チャイムを鳴らした。求めに応じて彼が名のると、きちんと服を着たアイオニ・ギャンブルがドアを開いた。

「階上のオフィスに行こう、アイオニ」オヴァビイは言った。

「今夜はもうこれ以上ゴタゴタはたくさん」

「こいつは気に入るさ」

メンフィスの綿花商が作らせたデスクを前にして坐ったアイオニ・ギャンブルは、目の前に青いバッグが置かれるのを極度に警戒した目つきで見つめていた。「何なのこれは？」

「開けてみな」

「なぜ？」

「開けてびっくりの素敵なものだから」

ギャンブルは立ち上がり、バッグのジッパーを開いた。

分厚い本を手に取った。「で、リックが、ビリー・ライスを撃ったのはあんたではないと話すことになる。自分が撃ったのだと」

「わたしを笑わせようとしてるわけじゃないでしょうね？」とギャンブル。「違う。もちろんそんなはずないわ」

「あんたの乗っているような車を借りると、[illegible]かかるか知っているかね、アイオニ？」

「今度はいったい何の話をしようというの？」

「一日四百ドル、それに一マイルあたり五十セント。それだけかかるわけだ。さらに、五千ドルの保証金――現金もしくはクレジットカードで。ただし、カードの利用限度額がそれに耐えられるならだが。ここにいるリック[illegible]

[illegible]

「そんな覚えはないが」

「いや、たしかに借りたとも。そうして、その晩の十一時か十一時半ごろ、ビリー・ライス型のドライヴウェイに乗り入れて停め、車をおりて、ドアベルを鳴らした。誰がドアを開けたにせよ――ライス自身だったかもしれ[illegible]

いと言った。ま、そういったようなことを。二人とも留置に入ると、あんたはライスを二度撃ち、その拳銃をニレの木で作った小さなテーブルの上に置いておいた。玄[illegible]入ってきた者の目にはかならずとまるはずだし、ことによったら手に取るかもしれんわけだ。アイオニがまさにそれをした」ストーリングズは彼女を見やった。「リックは、あんたであれほかの誰であれ、すぐに入っていけるように、玄関ドアも開けておいた。リックの使った拳銃は重要な証拠といえる。それは、パラマウントの映画セットから盗まれたものだった。当時そこでは、あるテレビ映画の見本ビデオを撮っていた。リックもそれに出演していた――間違いないな、リック？」

[illegible]

を飲み干すと、さらにもう一杯注いだ。

アイオニ・ギャンブルはクリーヴランドを凝視し続けていたが、老俳優のほうは彼女を見ようとしなかった。

「なぜそんなことを？」ギャンブルが尋ねた。「ビリーを殺すようなことを？」

[illegible]

ぐっとあおると、顔をしかめ、ようやくギャンブルを見

ランドが言った。老俳優はスコッチのグラスを上げると、「われらがジャックに」と言って飲み干し、すでに三分の一ほど減っているボトルから注ぎ直した。

キャンブルの顔から警戒の色が消え、妙に穏やかな表情が浮かんだ。ほかの感情はすべて消し去られてしまったようにみえた。「ジャックをご存じでしたの？」ともに長年会っていない共通の知人の消息でも尋ねるかのように、彼女はクリーヴランドに訊いた。

「あの男が開業しはじめたころから知っとったよ」とクリーヴランド。「わしはあいつの最初の依頼人のひとりじゃった。あいつがあまりに大物となったために、あるいは、わしがあまりに小物となったために、あいつはわしを見捨てたわけじゃ」

ギャンブルは礼を失さない程度にうなずいてから、ふたたびストーリングスを見やった。「なぜジャックはわたしを恐喝するようなことを？　お金が必要だったの？　お金なら貸してあげたのに」

「あんたには貸すだけの金が残っていない」ストーリングズは言った。「彼がすべて盗んでしまった。横領したと言ったほうがいいかもしれんが」

「わたしにはお金がない？」

「たいして」

「ジャックが盗んだというの？」

ストーリングズは黙ってうなずいた。

「すると、ハウイ・モットへの謝礼はどうしたらいいの？」

ハウイへの支払いなら心配いらんよ」ストーリングズは二五口径の小型セミオートマチックをポケットから取りだし、デスクの上に置くと、それはもう忘れてしまったような表情になった。

「彼が無料で弁護してくれるはずないわ」とキャンフル。

「そんなこと期待するわけにはいかない」

「公判が開かれることはないだろう」ストーリングズは言った。「少なくとも、あんたを対象にしては」

「いったい何が起こっているというの、フース？」穏やかな表情が突如怒りに取って代わられた。「はっきり説明して。必要なら、赤ちゃんに話して聞かせるようにして」

「われわれはマリブの保安官事務所に出頭することになる。いや、支所と呼んだほうがいいかな」

「わたしたち二人で？」ギャンブルが訊いた。

「リックとわたしだけだ」と言って、ストーリングズは

[illegible]

オヴァビイは死んだ男に目を戻し、それからジョージア・ブルーを見て言った。「ジャック・ブローチ？」

彼女はうなずいた。

「テープはどうなった？」

「テープはないのよ」

「少なくとも、連中に利用できるようなのは」デュラントが補足した。

オヴァビイは顔をしかめ、周囲を見まわした。「コリーンはどうした？」

「ブローチが証人を残したがらなかった」ブルーが言った。

「きみをのぞいて」とデュラント。

「彼は、わたしに証人になってほしかったんじゃない。共犯者になってはしかったのよ」そこでひと呼吸おく。「彼とわたしは取り引きしたわけだから、違う？」

「この男はウージーを持ってた」オヴァビイが言った。「いまいましいウージーをだ。何だって、あんたら二人はまだ歩きまわってられるんだ？」

「責めるならジョージアを責めてくれ」デュラントが言った。

43

モノトのスイート・ルームのオフィスで、ブース・ストーリングズはブロンドの秘書のデスクの電話を切ると、部屋に一脚だけの安楽椅子にぐったりと坐ったままのアイオニ・ギャンブルを振り返った。

「また悪い知らせなの？」ギャンブルが尋ねた。

「ジャック・ブローチが死んだ」ストーリングズは言った。「誰かに撃ち殺された。彼があんたを恐喝していた男だった――われわれがドラム缶と呼んでいた男」

アイオニ・ギャンブルの顔が驚愕にゆがみ、目が大きく見開かれた。「ジャックが死んだ？」

ストーリングズはうなずいた。

「彼がわたしを恐喝していた？」

「ブローチは昔から性悪のろくでなしじゃった」ブルネットの秘書のデスク・チェアに坐ったリック・クリーヴ

「あの二人はどうしようもなく前立ってきて、おれたちの恐喝計画を反故にしたがった。で、自分たちの品をどこかの大衆コンッノ紙に売ろうってんだ。ま、そんなことは阻止しなくちゃならん、じゃないか？」

「ウーンーな丁ばなさせるんだ、ジョーンア」ブェノントが言った。

頭を撃ってやってことよ？

「頭を撃ってもらえれば最高」

「もちろん」ブローチが続けた。「きみとおれとの関係は、おれとグディスン兄妹との関係とはまったく違ってた。きみとおれは対等だ。で、取り引きも対等に行なった」

「アーノがなければ、取り引きもないのよ、ジャック」ジョージア・ブルーが言った。「残念だけど」

ジャック・ブローチは落胆したように頭を振ると、右手にウージーを持ったまま立ち上がった。銃口は下に向けられ、指は引き金から離れている。左腕から流れでた血が、セーターの下を通り、床にしたたり落ちているのにも気づいていないようだった。

歯を食いしばり、かすかに唇を動かしてデュラントが言った。「あのいまいましい銃を手ばなさせるんだ、ジョージア」

「おれは出ていく」そう言って、ジャック・ブローチは開いている引き戸のほうへゆっくりと向かった。戸口の手前で足を止めた彼は、ジョージア・ブルーを振り返った。いぜんとして、彼女は小型のセミオートマチックを両手で握って狙っていた。「いまになってきみが何と主張しようと、ジョージア、おれたちは実際に取り引きしたんだ」

ブローチは前方に向き直り、引き戸を抜けて玄関ホールに入っていった。階段のそばには、アーティ・ウーから借りたザウエル・セミオートマチックを右手に持ち、アサカイ・オウァにイが立っていた。

オウァにイの姿が目に入ると、ブローチはウーンーを上げようとした。その銃口が向けられる前に、オヴァビイは情容赦なく発撃も込んだ。ブローチが寄木張りの床に大の字に伸びると、オヴァビイはそばに寄っていき、奇妙なものでも見るような目つきで見おろし、靴の先で突いた。目を上げると、コリーン・カレンのヴォルヴァーを手にして、デュラントが引き戸を抜けてくるところだった。一瞬遅れて、ジョージア・ブルーが出てきた。小型の五連発は、一見忘れ去られたかのように、体

ブロードは銀行家たちを見まわした。――まったくそうしたかったもんだ、ミスター・デュラント。ほんとにそう思うよ――

ブロードは右手の手錠の片方を自分の下まで引きおろしていた。ネイヴィー・ブルーのタートルネックのセーター、黒いズボンの裾からは白い靴下と黒革のブーツがのぞいていて、垂をつけて磨かれたように輝いている。そのブーツはダークすぎたとデュラントは言ったが、一方でウージーの扱いに慣れているようなのが気に入らなかった。

不意にブロードは突進を引っ込め、金の入ったバッグのかたわらに右膝をついただけで、目とウージーはデュラントに向け続けていた。左手でバッグのジッパーを探り、探しあてると、ジッパーを引いて開いた。ちらりと目を落とす。バッグには百ドル紙幣がぎっしり詰まっていた。

ブロードの目がバッグに落ちた瞬間、ジョージア・ブルーは二三口径の小型セミオート・マチックを右足首のホルスターから引き抜いた。左膝にのせていた足首だ。

彼女は膝をついているジャック・ブロードの左上腕を撃った。ブロードはうめき声を上げ――驚きなのか苦痛なのか、あるいはその両方なのか――ウージーを取り落とした。左手で傷口を抑さえ、驚きの表情を浮かべてジョージア・ブルーを見つめた。――撃ったな――それは質問でもあり、断言でもあった。

立ち上がったジョージア・ブルーは、八三口径を右手で構え、ブロードを狙いながら言った。「あきらめるのよ、ジャック――

しかし、すでにブロードの右手は取り落としたウージーをすばやくつかみ直していた。「危ない、ミスター・デュラントはおれが撃つことになるようだ――

「そってこれたらいい」とブルー。

ブロードは唇をしかめた。不利の事態にあってもし、たじろんでもいるかのようだ。――おれたちは取り引きしたんだ、きみとおれは――

――――

――取り引きだ――とブロード。「テープなどありはしない　少なくとも、おれたちに利用できるテープは。アイネニはビリー・ライスを殺さなかったのさ。誰かがやったのおは言わんでくれよ、おれには言うないんだからな――

――グディスン兄弟のことは？――

「二人がひとりへる」二人に〝止まれ〟と命じた男が言った。

全員を殺して片づけるなんてことはやしないわ」メリーは言った。「まずリムジン運転手。次に間抜けなグレイス人見張り、どこだかわからないけれど、今度はフリーウェイにはかけてる」

「あとひとり殺るだけでいい」男が言った。「女が後を片づける」

「なぜわたしが？」

「きみの金を手に入れ、共同責任を負うために。ほかに理由があるとでも？」

彼女がそうするとは思えないから、ファーストネームを使ったな

「いったいなぜだ？」男が訊いた。

「何も利益がないから」

「三十万ドルが利益でないわけあるか」

「おれの足元に置いてあるバッグか？」

金のはいったバッグか？

「金の入ったバッグ」デュラントは同意した。「ただし、なかに今はない。紙だけだ。はじめから紙だけだ。等々イニシャルのバッグナンバー」

「嘘をついてるに決まってる」

「見てみたらいい」

「嘘にしろそうでないにしろ、とにかく、ショーンアはあんたを殺すことになるはずだ。一種の――何と言ったらいいかな、「罪の償いとして？」

「罪の償い結構。デュラント、彼女は悔い改めるべき罪をたくさん持ってる。しかし、その行為は賢いとはいえんだろう」

「おれたちはみんなちょっと賢すぎるんじゃないのか？」

「おそらく。しかし、おれを殺そうなら、彼女に銃を渡さなくてはならない。すると、彼女はまずあんたを始末し、それから、おれを利用して自分の尻を救おうとするだろう。ジョージアとはそういう女だ――自分の損失を最小限にする潮時をいつでも心得てる」

「バッグを蹴って前に出せ」男が命じた。

デュラントは一歩下がり、バッグを蹴りだした。

「もう一歩下がれ」

一歩しりぞくと、男が視野に入ってきた。デュラントはにやりとして言った。「これはこれは、ジャック・ブロー先生。ハリウッドのスター・セレブレント第二次大戦は五十年前、昔のことだから、今夜かれかれ

て、シーツの端をまくり上げる。それから、右手の指二本で、お金とパンティのあいだにはさまっているものをつまみ上げ、あたしの左手にのせる」

ブルーは指示どおりにした。三八口径のリヴォルヴァーがふたたびにぎらされると、カンンはそれにチラッと目をやってから確認した。「もう一度あんたに言ってもらおうだね、愛せっぱち」

ジーンズの左のヒップポケットにリヴォルヴァーを突っ込むと、カンンは体と敷布団をわずかにデュラントのほうに向けてこう言った。「言いことをしな、ミスター・愛情は男。二本の指だけで」

一瞬指も使っていいかなと言って、デュラントは尻ポケットからリヴォルヴァーを取りだし、カンンの手のひらにのせた。そこで笑みをみせて、聞いた。

「よりうまい申し出があったのか、コリーンと」

「もちろんさ」

「どれくらい？」

「あんたらにまったく勝ち目はないね」

「いまからではもう遅い？」

[illegible]

ろを向き、この二発をテーブルに置きにいく。あんたら二人は動くんじゃないよ。後ろからウージーが狙ってるんだからね。この二発を撃つはめになったら、あたしらは取りかかる――ま、それが何であれ、取りかかることになる」

カンンは体をまわし、大きな丈テーブルのほうに六歩進んだ。七歩目を踏みだしかけたとき、自動小銃の短い連射が轟いた。四発、とデュラントは思案したが、カンンの黒いセーターのウエストのちょっと上と、背骨のあたりに二つしか弾丸の穴があかなかったので、その考えを捨てた。

銃弾の勢いに乗されて彼女はつんのめり、壁からくずおれていった。床に倒れ込む寸前に、銃弾の二つの穴がともに火を吹き、つなかった二つの穴をオークの床板にあけた。それは、うつ伏せに倒れた太った真っ黒な8の字をデュラントに連想させた。

デュラントは身じろぎをしなかったが、ジョージア・ブルーは震えた。彼女はまず深い息をつき、後ろを振り返った。それから、いちばん近くの背もたれのまっすぐな椅子のところに行き、腰をおろすと、右の足首を左膝にのせた。右膝を支えにして肘を立て、手のひらに顎を置くと、デュラント以外のもうひとりをにらみつけた。

「まったくばかなまねをしたものね」

くりと入っていった。両手で構えた拳銃は、いぜんとして六十度の弧を描いて左右に行き来している。宿の玄関ドアが閉まると、アザガイ・オヴァビイはデジタルの腕時計に目を落とした。8:59:33。

階段の上から聞き馴れた声が流れてきた。「あんたら、少なくとも時間には正確だね」

デュラントとジョージア・ブルーが目をしばたたくと、コリーン・カレンが階段の途中の踊り場にいた。玄関ホールにおりてきはじめた彼女は、くの字に折った右腕に銃身を切り詰めた散弾銃を抱えていた。左手は手すりに沿ってすべらせている。効果的な登場方法だ、とデュラントは思った。黒いジーンズに黒いニットのセーター、編み上げ式の深い運動靴も黒、しかも散弾銃まで持っているわけだから、なかなか優雅な登場のしかたといっていい。

「わたしたちが先なの？」ジョージア・ブルーが訊いた。

「さっき外をまわってきたけど」カレンが答えた。「兎とアライグマしかいなかったね」

「わたしたちどこにいたらいい？」

「この前いたところ――客間」カレンは向きを変え、閉じた引き戸のほうに二人を連れていった。

引き戸の前に来ると、デュラントが言った。「あんたが先だ、コリーン」

カレンは肩をすくめると、左側の引き戸を壁のなかにすべりこませ、客間に入っていった。次にデュラント、最後にジョージア・ブルー。部屋に入った三人は、すでに飲み物が置いてあるオーク材の大きな丸テーブルのところへ向かった。そのとき、背後で男の声が命令を吠えた。

「伏せ！」

デュラントとブルーはヒタッと足を止めた。しかし、コリーン・カレンはくるりと振り向き、散弾銃を構えた。その銃口は、侵入者にではなく、デュラントとブルーに向けられていた。

「二人ともその手をどうにかしな」カレンが命じた。

デュラントは金の入ったハンドバッグをオーク張りの床に落とし、両手を肩の高さにまであげた。ジョージア・ブルーは両腕を体から離しただけだった。

「後ろの男はウージーを持ってる」コリーン・カレンが言った。「それがどんなもんかは知ってるだろうね」目はデュラントとジョージア・ブルーに向けられる。「あんたのすべきことはだね、痩せっぽち。左手の指二本を使っ

がっしりとくいこんでいるにすぎなかった。床の広さは［illegible］り二×四インチの角材で作られ、床には一×十インチのマツの板が張ってあった。子供が遊ぶには明らかに危険すぎる。これまで樹上の小屋なるものを所有したことのな［illegible］ーあるいは作らせた――のは、やはりこれまでこうした小屋を所有したことがなかったからだろう、と考えた。

午後九時少し前、黒いフォードのセダンがレンガ敷きのドライヴウェイをとばしてきて停まると、扇形に広がった駐車場にバックで入っていった。逃げだしやすい向きにしておこうということか。樹上の小屋からオヴァビイが見張っていると、ジョージア・ブルーが助手席側からすべり出してきて、月明かりとポーチの外灯に照らしだされた。リヴォルヴァーを両手で構えた彼女は、目の前をくまなくサッと見まわした。運転手席からおりてきたクインシイ・デュラントは、右手に拳銃を握り、金の入った青いバ［illegible］九十五セント・プラス税金のバッグ――を左手に下げていた。彼は、建物にめぐらされているポーチに続く、九段の階段に向かって足早に進んでいった。

ジョージア・ブルーは後ろ向きに歩きながら、デュラントのあとについていった。彼の背後にあるものすべてを、ブルーの目と拳銃がうかがっている。階段の下に着［illegible］、デュラントは［illegible］、階こしに［illegible］、デュラントは［illegible］一ヤイに［illegible］ようとした［illegible］デュラントは［illegible］背中が自分の背に触れるまで待っていた。アザガイはひとりうなずいて称賛の意を示した。

デュラントはゆっくりと階段を登っていった。彼と背中合わせになったジョージア・ブルーは、ときにはくりと階段を登り、一段ごとに右足を置いてから左の段に移っていった。ともに玄関ドアまで登りつめると、デュラントがベルを鳴らした。その直後、二階建ての古い邸の各階全室の明かりが煌々と灯された。樹上の小屋で張り這いになっていたオヴァビイは、主電源を操作して、全館の明かりをいっせいにつけるのがいいというジョージア・カレンの判断が気に入った。しかし、ポーチの外灯だけを灯しておいて、はかを全部真っ暗にするという芸当をどうやったのだろうと考え、彼女に訊いてみようと心に決めた。

デュラントがドアノブをまわし、ドアが開くと、入っていった。ジョージア・ブルーは後ろ向きのまま、ぱっ

42

午後八時四十九分　アザカイ・オヴァビイは樹上の小屋の床に腹這いになり、コリーン・カレンをそっと見おろしていた。彼女は、五エーカーの敷地内の最終安全点検を終えようとしていた。左手には長さ二フィートの懐中電灯が握られ、右手に持った銃身を切り詰めた散弾銃は、切り落とした銃床を右腰にしっかりとあてがい、銃口はまっすぐ前に向けられている。

八時五十一分。宿に戻ったカレンは、ポーチに続く九段の階段を登り、玄関に入っていった。一分後、建物内の明かりがすべて消えた。残っている明かりは、ポーチに灯されている百ワットの電球二個だけ。

オヴァビイが樹上の小屋を見つけたのは、八時をちょっとすぎたころ、木々のあいだをゆっくりと歩いていたときだった。彼はそれらの木々を原始林とみなしていたが、実際には、マツ、スズカケ、ユーカリ、それにかなり古い数本のカンの生い茂る、三エーカーほどのよく手入れされた木立ちにすぎなかった。それよりさらに前、彼は、宿の長いレンガ敷きのドライヴウェイに続く入口の前を車で通過していた。〈満室〉の赤いネオンが相も変わらずまたたいていた。細いアスファルトの道をそのまま四分の一マイル行ったところで、彼はレンタルのフォードを路肩に停めておりると、ドアをロックし、原始林と思える樹木のなかに姿を消したのだった。

八分後、木の根につまずいたオヴァビイは、バランスを立て直そうとしたが、尻もちをついて倒れ、空をあおぐ格好になった。すると、スズカケの老木に樹上の小屋が作られているのが月明かりに見てとれた。その木はレンガ敷きの長いドライヴウェイから二十ヤードかそこらしか引っ込んでいず、宿の建物からも二十ヤードと離れていなかった。オヴァビイの目に、その小屋はかなり新しいものと映った。地上から少なくとも十四フィートは上にある。長さ二フィートの二×四インチの角材が六本、二フィート間隔で太い幹に釘で打ちつけられ、簡易梯子段となっていた。樹上の小屋そのものは、小屋とはまったくいえず、スズカケの木の最初の木の股に台形の台が

[illegible]った。

[illegible]

つけていただき、ありがとうございます、ミスタ・ニ

ヴランド」

「お役に立てて嬉しいかぎりじゃ」と[illegible]・クリーヴランド。

「ツキなくても、わしはそう思っとるよ」

キッドは弱々しい笑みをうかべて出ていった。ドアが閉まると、アイオニ・ギャンブルがストーリングズを見上げ、

[illegible]

おお、わたしの新しいボディガードというわけね」

それは質問ではなかったので、ストーリングズは何も答えなかった。その代わり、彼はブロンドの秘書のデスクに行き、下段の深い引き出しをあけてみた。そこに入っていたものはただひとつ、二三口径のセミオートマチック[illegible]

それはチョッキのポケットにも収まるごく小型のイタリア製拳銃で、二三口径の弾丸二発が収められていた。片手で隠すことも可能だったが、ギャンブルに見せておくことにする。「拳銃だ、アイオニ。これであんたを撃とうというのではない。ただ、あんたの新しいボディガードが武装していることを知っておいてほしい」彼は小型拳銃を上着のポケットにしまった。

「それも、そんなちっぽけな拳銃で」とギャンブル。「これからどうするのかしら?」

「待つことになる」ストーリングズは答えた。

[illegible]・クリーヴランドは[illegible]・エニ[illegible]に腰をおろした。「何を待つのかね?」

「何であれ起こることを」とストーリングズ。

「で、あんたらは何が起こると考えているのかね?」

「何か恐ろしいこと」アイオニ・ギャンブルが言った。

「何かたくらんでるんですね、ブース」
「わたしの考えを気に入ってくれると思っていたよ。友人が何と言うか聞いてみよう」
ストーリングズはリック・クリーヴランドを振り返った。強い酒を二つ作った老俳優は、ほんの四フィートのところに立ち、両手に持ったグラスのうち右手のほうをちびちび飲っていた。
「今夜五百ドル稼ぎたくないかね？」ストーリングズが訊いた。
「どうやって？」
「アイオニ・ギャンブルのボディガードをわたしと一緒にやる」
「かついでるのか」
「イエス、ノー？」
「もちろん、イエスじゃとも」
受話器に向かってストーリングズは言った。「われわれは二十分か二十五分でそっちに行く」
「ここに着いたら、秘書のデスクの左手下段の引き出しをのぞいてください」とモット。
「ブルネットのデスクかね？」
「ブロンドのほう」
「もうひとつある、ハウイ」
「なんです？」
「アーティに葉巻を持っていってやってくれ」
リック・クリーヴランドはツイードのジャケットに青いシャツ、リーヴァイスの色あせたジーンズ姿になっていた。違法駐車しているメルセデス500SLのところに着くと、彼は、はたと足を止め、車をしげしげと見つめた。「驚いたな、こいつはあの晩、アイオニ・ギャンブルが乗っていたのとそっくりじゃ」
「同じ車だから」とストーリングズは言った。
二人は二十一分でハワード・モットのホテルに着いた。スイート・ルームのドアを開けたモットは、クリーヴランドをアイオニ・ギャンブルに紹介した。秘書のオフィスになっている部屋で、ひとつきりの安楽椅子に坐っていた彼女は、老俳優に笑顔を向けて言った。「あなたのことは、いろいろな映画で百回も観ているにちがいないですわ。これまでお会いしなかったのが不思議ですわね」
「最近はそう仕事しておらんのでな」そう言って、クリーヴランドは二つのデスクと一台のワード・プロセッサ

に静かになった。
止まっていた時、[illegible]気がかりまったところで、スミージンズは急いでハイキミイを着て、[illegible]階段[illegible]家に帰ってきて、[illegible]をノックした。数分後、《風と共に去りぬ》の三[illegible]、ジャン・ヴァルジャンがガウンを着ていた。[illegible]スミージンズだったが、今夜の[illegible]、[illegible]きまであった。[illegible]ぞれ大きな口の[illegible]に火のつ[illegible]バコをくわえていた[illegible]声は言った。
「あなたの家のほうで騒ぎがあったんじゃないかな」タバコをふかしながら[illegible]、ヴァルジャンが言った。
「[illegible]」
[illegible]を言わせてもらえませんか」
「いいとも」ヴァルジャンはドアを大きく開いておき[illegible]に寄り、スミージンズを先に立てて居間に入った。
「電話はそこにある」ヴァルジャンは指さして教えた。
スミージンズは電話[illegible]のボタンを押し、相手に手わたした。「電話をかけている間に、一杯作ってくれないか」
[illegible]

[illegible]
[illegible]を飲むことになるとは」
スミージンズは電話のところへ行き、ハイキミイ・キ[illegible]
[illegible]
う。ヴァルジャンは台所に[illegible]の聞こえる距離にいて、[illegible]のに気づく。
キャップ[illegible]電話に出ると、スミージンズは言った。
「[illegible]の署長が、たった今ハイキミイに手錠を掛けて連れていった。[illegible]運転手を探しあてた[illegible]らしい」
「その[illegible]、[illegible]」キャップは言った。
「そうだ」
「どこへ運転していったのだろう――[illegible]
――」
「おそらく」
「となると、わたしも忙しく動かなければならない――[illegible]」
「そうしよう」スミージンズは[illegible]目を細めた。
「[illegible]
[illegible]
と言ってくれないか」

く」

ストーリングズは百フィートほどそのまま進み、駐車違反の区画を見つけると、メルセデスを乗り入れた。車をおり、スコッチの入った茶色の紙袋を上着のポケットに押し込むと、ハイウェイを走って横切っていった。その際、あやうく轢かれそうになり、その中の運転手から大ばか野郎とののしられた。

ハイウェイの海辺側から戻ってきたストーリングズがライス邸の前に来ると、ちょうどアーティ・ウーが出てくるところだった。早めの夕食をピザですませたときとまったく同じ服装のウーは、二人の私服捜査官に引き立てられ、黒いセダンの一台に向かっていた。後ろ手にまわされた両手首には手錠が掛かっていたが、表情は平然としている。捜査官のひとりがセダンの後部ドアをあけると、後ろ向きになって尻から座席に乗り込むウーの頭がぶつからないようにと、もうひとりが頭のてっぺんに手を置いた。体の向きを変えて座席にもたれかかるとき、ウーの目がストーリングズの目と合った。どちらの男の目にも、相手を認めたきらめきはまったく現われなかった。

ライス邸のドライヴウェイを守る鉄製の門の外に、十数人の野次馬が集まっていた。ストーリングズの見知っている顔もいくつか見受けられた。儀礼訪問した――もしくは、しようとした際に、出会った隣人たちだ。その連中は避けて、代わりに、まだ会ったことのない隣人のうちでいちばん賢そうな顔をした男を選び、にじり寄っていって話しかけた。「あの中国人はヘヒューズ・スーパーマーケット〉で見かけたことがあるな。何をやらかしたんだね？」

「メキシコ人のタクシー運転手を殺したのさ」

「ほう」とストーリングズ。「逮捕されたのはあの男ひとりかね？」

「いまのところ」

「どうも、呪われた家のようだな。大晦日にはビリー・ライスが撃ち殺され、今度は中国人が逮捕されるとは」

この辺じゃ、隣にどんな人間が住んでるか知れたもんじゃない」隣人は言った。「どこの馬の骨だろうと、はした金さえ出せば、何だって借りられるんだからな。おれが思うに、あの中国人はコカインの密売人なんじゃないかな」

「きっとそうだろう、あの家を借りる金が遊んでるってことは」と調子を合わせて、ストーリングズはぶらぶら

41

スイート・ルームで誰がどこに寝るか――あるいは、そもそも眠ることになるのか――と話し合っているハワード・モットとアイオニ・ギャンブルを残して、ホテル[illegible]スト・ハイウェイに入って最初に目についた酒屋で車を停め、驚くほど高価なスコッチ・ウィスキーを一本買った。

[illegible]りはじめた。進むにつれて渋滞はひどくなり、やがて、止まってはちょっと動くという状態になった。ようやく[illegible]パトカーが屋根の帯状ビーコンを点滅させている光景が目に入った。近づきながら数えてみると、ロサンジェ[illegible]

同型のセダンが二台あった。黒いセダンのほうは保安官事務所の私服捜査官のものだろう、とストーリングズはいた。

制服姿の保安官補が二人、ハイウェイの中央に立って[illegible]を急がせようとしていた。十万ドルの車を運転していた[illegible]車し、十万ドルの声と聞こえることを願いながら、いっ[illegible]みた。

三十歳かそこらの保安官補はガンマンに必須の口ひげを生やしていた。「家庭内のちょっとしたいざこざです[illegible]べきものは何もないんです。車を進めてください」

「あれはビリー・ライスの家ではないかね？」ストーリ[illegible]

「誰の家なのか知りません」

[illegible]

違うかね？」

「どうか、そのいまいましい車を出してください。早

したことは口いたくないが――かならずしも最高というわけではない。それゆえ、がっちりと組んで事にあたることを強く勧める――それが不快に思えるにちがいないことは承知しているが」

「病気にでもなったのか？」デュラントが口をはさんだ。

「なぜ？」

「病気になると、あんたはいつも説教じみるから」

「悪い予感にいくぶんさいなまれているのかもしれない」

「それが、わたしたちと一緒に来ないほんとうの理由なのね」ジョージア・ブルーが言った。

「まさしく」

「どんな予感なんだ、アーティ？」デュラントが訊いた。

「空が落ちてきかけてる？」

「話してしまったら、それはもはや予感ではなく、予言になってしまう。いまのところまだ、わたしは予言者にはなりたくない」ウーはジョージア・ブルーからデュラントに目を移し、またブルーに戻した。「ほかに何か？」

「わたしたちの幸運を祈ることはできるはずね」とジョージア・ブルー。

「わたしは心の底から、きみたちがそんなものを必要としないことを祈っている」アーティ・ウーは言った。

のアルマニャックは、小麦粉の空き缶に誰かが隠しておいたのを前に見つけたものだった。おそらくビリー・ライス自身が隠したのだろう、とウーは考えていた。なにしろ、他人に飲ませるのが惜しいような上物なのだ。

[illegible]

やはり〈ギャップ〉の黒いスエットシャツ、裸足にケッズの紺のスニーカーといった格好だった。赤茶色の髪は結色の絹のスカーフをターバン風に巻いて隠している。彼女はスエットシャツをまくり上げて、タイトなジーンズで平たい腹にじかに留められている、三八口径のスミス&ウェッスンのリヴォルヴァーを見せた。

ウーはよろしいといったようにうなずくと、デュラントのほうに点検の目を向けた。裾に折り返しのついた灰・緑色のツイードのズボンは、古いが高価なスーツの一部だったのは明らかだ。足元はニューバランスのはき古したランニング・シューズ。上体をおおうのは、〈ΦδΘ〉というギリシア文字のついたえび茶色のスエットシャツ。

[illegible]

「クロゼットのいちばん上の棚で見つけた」デュラントはそう答えて、オヴァヒイとブルーがコリーン・カレンから買ったもう一足のスミス&ウェッスンを取りだした。それを注意深く調べて見ポケットに戻すと、つけくわえた。「ズボンはガレージの古着箱から失敬してきた」

「考えていたんだが」ウーが言った。「そう、ひとつふたつ言っておきたい。何かまずいことが起こったら、電話を見つけてここに連絡してくれ。誰も出なかったら、ハウイ・モットのところに連絡する。何かいいことが起こったら、やはり同じことをする――まずここに連絡し、誰も出なければ、ハウイのところに」

「ということは、あんたはここにいないかもしれない」デュラントが言った。

「その可能性はある」

「ほかに何もすることがないのなら、アーティ」ジョージア・ブルーが言った。「わたしたちのあとについてきて、[illegible]

「きみたちにわたしは必要ない」とウー。「二人が組めば、[illegible]

ると、きみたちは実にもって有能だが、しかし――こう

「もう一度、アーティの言葉を言ってくれないか――正確に」

「何であれ、壊れたもののあと始末をするように、と言っていた」

「〝誰であれ〟でなく、〝何であれ〟と言ったのはたしかかな？」

「〝何であれ〟と言っていた」

オヴァビイの顔に堅く邪気のない笑みが浮かんだが、それもすぐに消え、代わって期待する表情が浮かんだ。

「わかるかな、ノース？　今回の件は、結局のところ、なかなか興味深い結果になるかもしれんぞ」

アイオニ・ギャンブルを助手席に乗せて、ストーリングズはレンタルのメルセデス・ロードスターを走らせていた。セヴンス・ストリートを南進してモンタナ・アヴェニューまで行き、そこで右折して海のほうへ向かい、そのあとまた南に折れてフォース・ストリートに入った。フォース・ストリートを行くのがいちばん早くて安全だ、とギャンブルが教えたのだ。そのあと彼女は、ウィルシア・ブルヴァールに着くまで口を開かなかった。

「わたし、これとそっくりな車を持っているわ」ギャンブルが言った。

「そっくり同じというわけではないな。これは借りものだが、あんたのは違う」

「彼女の名前は何といったかしら――あなたの娘さん、ハウイの奥さんは？」

リディア

「お子さんは彼女ひとり？」

「もうひとり娘がいる。ジョアナ。しかし、そっちのほうは少々じゃじゃ馬でな」

アイオニ・ギャンブルはふたたび黙り込んだが、海に臨んだハリート・モットのホテルまで一ブロックのところに来たとき、尋ねた。「この一件が、最終的に、すべて丸く収まる可能性はあるとお考え？」

「映画みたいにかね？」ストーリングズは応じた。「ないな」

「わたしもそう思うわ」アイオニ・ギャンブルは言った。

午後八時十四分。出発の時間になると、デュラントとジョージア・ブルーはアーティ・ウーの前にやってきた。年代物の細長いテーブルの上座に坐り続けていたウーは、葉巻と上等なアルマニャックを楽しんでいた。その一本

ストーリングズは思った。ふと手を伸ばした彼女は、ついてもいないごみを彼の左肩から払い落として尋ねた。

「正確に言うと、あなたはウーデューのために何をしているのかしら？」

わたしは老いた知恵袋だな。記憶の宝庫。同時にまた良心と、財務担当でもあるし、使い走りでもある」

それ以前には？　いせんとして強い興味に駆られているといった様子だ。

若い弁護士、大学院生、政府の顧問官、終身在職権の希望のない大学教師をあちこちして。しばしば、かなりの数のシンク・タンクと財団の助成金を受ける。で、いちばん最近は、オヴァヒイ・ストーリングス商会の年上だが格下のパートナー」

本物だったのか見せかけだったのかはわからないが、それまでのギャンブルの興味はすべて消え失せ、さらなる怒りに取って代わられた。「あなたとアザガイはパートナーなの？」それは軽罪ではなく重罪だ、といった調子をストーリングズは聞きとった。

「アイオニ」オヴァヒイがうながした。

「何かしら？」

「さっさとバッグを詰めてくるんだ」

ギャンブルは彼に食ってかかりはじめた。拒絶し、言い争い、わめき散らす準備さえ整っているようだったが、そこでオヴァヒイが一度だけドアのほうにうなずいてみせた。実のところはたんなるうなずきではない、とストーリングズは考えた。拒絶することを許さない、有無を言わせぬ無言の命令なのだ。彼女はためらっていたが、くるりと背を向け、玄関ホールに向かいはじめた。そこで振り返りそうになったが、ふたたび決心を変え、急ぎ足で居間を出ていった。ムースがあとを追っていく。ギャンブルがほんとうに二階に上がったのを確認してから、オヴァヒイは居間に戻ってきて尋ねた。

「アーティは誰をいちばん心配してる　デュラントかジョージアか？」

「彼は、コリーン・カレンに対する懸念を少々口にしたにすぎない」ストーリングズは答えた。

オヴァヒイはトパンガ・キャニオンの宿の女主人のことをしばらく考えていたが、ある結論に達すると、ストーリングズにもそれを教えた。「ああ、コリーンの矛先を金で百八十度転換させるのは可能だな」それから眉根を寄せ、読みにくい手書きの文字を判読しようとでもいうかのように、ストーリングズをまじまじと見つめた。

だ。

「いいかげんにしてくれ、アイオニ」オヴァビイが腹立たしそうにいった。「彼はブース・ストーリングスだよ――ハウイの義父の」

両手がゆっくりと下げられた。口が罠のようにパクッと閉じられ、目がふたたび大きさを取り戻す。急に頭を小さめながら、いまや怒りに強ばった口をなんとかこじあけ、彼女はいった。「わたし、自分の居間で拳銃を振りまわされるのが嫌いなのよ」

「振りまわしていたのではなく、レスト・トーリングス」

「渡そうとしていたのだよ」

オヴァビイのほうに向き直り、ザウエルの握りを先にして差しだす。オヴァビイは拳銃を受け取ると、チラッと目を走らせてから、上着のポケットに入れた。毎朝、腕時計のバンドを締めたあとにしているかのようなしぐさだ。

新たな怒りがキャンブルの顔をよぎり、口は苦々しげな詰問口調になった。「拳銃も持ってなかったの？　自分の拳銃も持っていないなんて、そんな間抜けなボディガードがいる？」

「おれに誰かを撃ってもらいたいのかな？」オヴァビイはそう問い返すと、ギャンブルが言い返す前にそばに寄っていって言った。「よく聞くんだ、アイオニ。あんたのしなくちゃならないことがある。あんたは――」

ギャンブルは彼の話の腰を折った。それは言葉によってではなく、ゆっくりと椅子に沈み込み、両手に顔をうずめるしぐさによってだった。つぶやくような調子で話しはじめたとき、その肩は小刻みに震えていた。舞台用のつぶやき、とオヴァビイは考えた。

「彼が振り向いたとき――拳銃を手にして――あれほど怖かったことは、これまで――」

動じることなく、オヴァビイはそれをさえぎった。

「あんたのすべきことはだな、アイオニ、二階に行き、一泊用のバッグに身のまわり品を詰める。五分とかからんはずだ。それから、このブースがハウイのスイートまで送ってく。あんたは今夜そこですごすことになる」

ギャンブルは彼をにらみ上げた。「わたしを厄介払いしようというわけ？」

「バッグを詰めてくるんだ、アイオニ」

その命令には従わず、ギャンブルは立ち上がると、ストーリングスのところに寄っていった。しばらく彼を観察してから、ほほ笑みかける。空約束に満ちた笑顔、と

デスに乗っていったほうがいいだろう」

ストーリングズは首を振って立ち上がった。「この午後、自分用に一台借りたよ

それは……

ストーリングズは数秒間ウーを見おろしていたが、やがて言った。「なぜおまえさんが行かんのだね、アーティ――アザガイでなく？」

「わたしは必要とされていないからだな」

「願わくは、ということだな」

「願わくは」ウーは同意した。

「オーケイ、いまいましい〝斥候に出ろ〟ということ以外で、アザガイに伝えることは？」

「あと始末をするように言ってくれ」

「何のあと始末を？」

「何であれ壊れたものを」アーティ・ウーは言った。

40

愛犬ムースを従えたアイオニ・ギャンブルは、階段をおりると、右に曲がって居間に入っていった。すると、腰をおろしたブース・ストーリングズが、右の尻ポケットからザウエル・セミオートマチックを抜きだし、立ったアザガイ・オヴァビイに銃口を向ける光景が目に飛び込んできた。

「まあ、なんてこと、お願いやめて！」ギャンブルは絶叫に近い声で叫んだ。

拳銃を手にしたまま、ストーリングズは立ち上がって振り返った。ゆっくりと体をめぐらせたのだが、ギャンブルを怯えさせるには充分な速さだった。彼女の目の大きさが二倍ほどになり、顎がだらりと下がって口が開いた。手のひらをみせてサッと両手を挙げたさまは、年配の暗殺者の銃弾をそれで阻止しようとでもいうかのよう

「まだいまのところ」
「あんたの時間が一時間ほしい」ウーは煙の輪を右手に吹きだした
「何をするのかね？」
ストーリングズはうなずいた。ウーはストンの右の尻ポケットに手を入れ、小型のセミオートマティックを取りだした。イタリア製のサウェル。七・六五ミリの弾丸九発を収める拳銃で、全長六・五インチ、重量は装弾時でも六百二十数グラムでしかない。ウーはそれをストーリングズのほうにすべらせた。ザウェルを取り上げたストーリングズは、慎重に調べてから、尻ポケットにしまった。「わたしに誰を撃ってもらいたいんだね？」
「それをアザガイに届けてもらいたい」
「いつ？」
「いますぐ」
「ほかには？」
「アザガイに、できるだけ早くカレンの宿に行くよう伝える」
「デュラントとジョージアが着く前に？」
「そう」
「なぜ？」
ウーは葉巻の煙を今度は左側に吐きだした。「戦争中、あんたは歩兵にいた？」
ストーリングズはうなずいた。
「小隊長？」
「そうだ」
「斥候を送りだしたことは？」
「もちろん送りだしたが、ときとして帰ってこなかった」
「それによって、前方で何か異常なことが持ち上がっているとわかった」
「誰ひとり斥候に出たがらない理由も。アザガイもやりたがらないだろう」
それでも、彼は引き受けるだろう。レウー
彼が守ることになっている、アイオー・キャンプルは
どうする？」
あんたがハロー・ヒルのところに送り届けて、すべて終わるまで彼と一緒にいるようにさせてほしい」
ウーはもうこのことを知っているのかね？
「これから連絡する」
ジョージアとデュラントにアザガイのことは話す？
「いや」ストーンのポケットに手を入れたウーは、車のキ

「そっちは誰を送ってくる？」ドラム缶が訊いた。
「なぜ？」
「なぜとはどういうことだ？　おれはただ、それが理由だ」
「名前を知りたいのか――それとも、人数を？」
「人数だ。それが誰だろうとかまやしない」
「二人」ウーは言った。「ひとりがもうひとりを見張る」
「一人だと？　ケイ、なら、おれもひとり連れてく」
「そうくるだろうと思っていた。では、九時に？」
「九時きっかり」そう言って、ドラム缶は電話を切った。

午後六時五十五分。ジョージア・ブルーが細長いテーブルの向こう側に横になってくると言った十分後、デュラントが立ち上がり、やはり休んでくると言った。テーブルにはウーとストーリングスが残った。二人の前には、口をつけていない三杯目のコーヒーが冷たくなって置かれていた。

葉巻に火をつけたウーは、天井に向かって煙を吹き上げてから、ストーリングスを見やった。いくぶん軽蔑に思えるかもしれないが、あんたにやってもらいたいことがある、ブース」

ストーリングスは黙ってうなずいた。

「ドラム缶が連れてくるのはひとりではないかもしれない、と考えているんだ」

「やつを責めるわけにはいかんな――とりわけ、ジョージアとデュラントが、何て名前だった――コリーン・カレンか　彼女に散弾銃を持たせて見張らせているのであれば」

ウーは葉巻を吹かし、灰に目を凝らしながら言った。

「今夜の九時以前に、ドラム缶がよりいい条件を持ってコリーン・カレンのところに行く　もしくは、彼女を始末してしまう――可能性がかなり高い」

ストーリングスはその点を考えてみた。「可能性、蓋然性？」

「可能性だ」とウー。「今晩の予定は？」

「遅くなるまではないが」

「そっちの調査は……進んでいる？」

「と言っていいだろう」

「しかし、それについて話すつもりはない？」

「そうだ」

「ヴェンチェア・フリーウェイに近いか？」

「遠くはない」

「すまんな」とウーは答え、そこでビールを飲んでから、続けた。「われわれの会う場所は、どのフリーウェイからも少なくとも十分は離れていなくてはならない。さもないと、襲って、強奪し、一〇一号線、もしくは四〇五号線をすっ飛んで逃げるという誘惑が、ま、抑えがたくなるかもしれない」

いったい誰と取り引きしてるんだ、とウーは思った。

「恐喝者」ウーは答えた。「しかし、よく考えてもらえばわかることだが、襲って、強奪し、逃げるという誘惑は、われわれにとっても同様に抑えがたいものであるわけだ」

「オーケイ。なら、そっちの考えてる場所を聞こう」

トバンカ・ヤオ・オン・ヴェンチェア・フリーウェイとハンティントン・ドライブの交差地点にある朝食つきの宿なら、客はいない。フライアーズと保証される。あんたが百万を数える場所も、われわれがテープを確かめるビデオデッキも提供してくれる」

「それに、車を停めさせて強奪するのにおあつらえ向きの、細く曲がりくねった道もあるわけだ」とドラム缶。

「あんたが売り手で、われわれは買い手だ」ウーは応じた。「しかも、そっちより、こっちの危険のほうがかなり高い」

「それをのむか、さもなければやめろ、といったふうに聞こえるが」

「理性的な解釈だ」と言って、ウーはピザの一片の残りを口に入れた。

ふたたび沈黙があってから、ドラム缶が言った。「オーケイ、そこにはどう行ったらいい？」

ウーはシャツの胸ポケットから三×五インチのカードを取りだすと、読み上げているようには聞こえない声で、〈カズン・コリーンの朝食つき宿〉への道順をゆっくりと読んでいった。ウーが伝え終わると、ドラム缶が道順をよどみなく正確に繰り返し、尋ねた。「時間は？」

「八時では？」とウー。

「早すぎる」

「十時」

「九時のほうがいい」

十二時まで、あんたの家を貸し切りにしてくれたら、もう千五百ドル出す」

カレンは眉をひそめた。「残りの二千五百は何のために？」

「保険料」

カレンはショージア・ブルーに顔を向けた。「この男はいったい何を言ってるんだい？」

「もし事がうまくいかなかったら」ブルーはゆっくりと言った。「あなたの手で取りつくろってほしいってことね」

コリーン・カレンは向き直り、散弾銃を丸テーブルに置くと、椅子を引きだして自分のグラスの前に坐った。グラスを手に取り、もうひと口飲むと、デュラントとブルーにも坐るよう手招きした。二人は坐った。ショージア・ブルーが彼女の右に、デュラントが左に。

「ヤクを買おうってんじゃないんだろうね、え？」コリーン・カレンが訊いた。

ショージア・ブルーは首を振った。

「恐喝の支払い？」

ブルーはうなずいた。

「あの薄気味悪いグディスン兄妹と関係がある？」

「いくぶん」とブルー。

カレンはゆっくりとうなずき、今度はデュラントのほうを向いた。「で、あたしにバックアップしてほしい？」

「そのとおり」

「どこで？」

「外で」

「そいつらがあんたら二人を殺し、金を奪って逃げるとする。そしたら、あたしにどうしてほしい？」

「そいつらを殺す」ジョージア・ブルーが言った。

「で、金は？」

「持っててくれ」とデュラント。

「全部かい？」

「全部だ」と彼は答えた。

ルのバスルームで撃ち殺された」

カレンの顔には明らかな驚きの表情が浮かんだが、散弾銃は微動だにしなかった。「それを聞いて一杯飲みたくなったよ」彼女は言った。「後ろの大きな丸テーブル、そこにウィスキーがある。あんたが注ぐんだ、ミスタ・陽焼け男。バーボンを三つ。水で割って、氷はなし」

デュラントは体をまわし、大きな丸テーブルのところ[illegible]スにたっぷりと注ぎ――ボトルは半分空になった――ガラスの水差しから水を加える。彼はそれをすべて右手だけでやり、左手は青いバッグをしっかりと握っていた。

水割りを作り終えると、デュラントは振り向いてコリン・[illegible]に向けられていた。「これからバッグを開いて、あるものをテーブルに置く」彼はカレンに言った。「そいつが気に入らなかったら、彼女を撃ったらいい」

同意を待たずに、デュラントはバッグのジッパーを開いた。一万ドルの札束を取りだし、テーブルの上に置く。そうしてグラスを手に取り、たっぷりとひと口飲んだ。

カレンは散弾銃を振り、ジョージア・ブルーをテーブルに向かわせた。テーブルに着くと、カレンは札束を手に取り、片手でパラパラやった。その目が札束からデュラントへ、次にブルーに向けられ、また札束に戻された。無関心な、軽蔑さえ感じられるしぐさ。それからデュラ[illegible]グラスのふちから二人の客をうかがっていた。

グラスを置くと、カレンはふたたび両手で散弾銃を握り直し、二歩後ろにさがって訊いた。「もしこの二つの引き金を引いたら、あたしはいまよりどれくらい金持ちになれる？」

「三十万ドル。ただし、わたしたちがあなたを殺すまでの一秒間だけ」ジョージア・ブルーが言った。

「あんたを先に撃ったら、腹せっぽち？」

「ミスタ・デュラントがあなたの左目を撃つ」

「あんたは右目を撃ち、この男は左目を撃つ。それに現[illegible]なんかないのかい？」

「金を手に取って数えたらいい」デュラントが言った。

「ふん、それなら数える必要ないさ。それがいくらかはわかってる。一万ドル。百ドル札で一万がどれくらいの厚さか、知らないとでも思ってるのかい？」

「こういう取り引きだ」とデュラント。「今夜七時から

「何の用があるにしろ、痩せっぽち、答えはノーだよ。ノー。ノーだ」

「今夜、この宿を借り切りたいのよ」ジョージア・ブルーが言った。

「満員さ。空き部屋なし。満室」

「金の話をしてやってくれ」デュラントはブルーにいった。

「ちぇ、なんだい」とカレン。「この男、口がきけるんなら、自分で口を開いて話したらいいじゃないか。誰だいこのミスタ・陽焼け男は、痩せっぽち?」

「わたしのハートサー」

「もーリースはどうしたんだい?」

「二人ともパートナーなのよ」

「金の話をしてやってくれ」デュラントは繰り返した。

「そのバッグの中身は、ミスタ・陽焼け男?」

「金だ」

「開けて見てみようじゃないか」

「ここではだめだ」

「あたしは二連の散弾銃を持ってる、その銃が開けろと言ってるんだよ」

「ミズ・ブルーの手はハンドバッグに入ってる」デュラントは言った。「その手には三八口径が握られてる。あんたが売ったものと聞いてるが。それがあんたの右目を狙ってる。散弾銃の引き金を引こうと考えるだけで、あんたは死んでることになる」

コリーン・カレンとデュラントはにらみ合っていた。誰も動かず、口も開かず、まばたきもしなかった。ようやくジョージア・ブルーが言った。「なかに入りましょう、コリーン。一杯飲みながら、お金の話をするのよ」

いぜんとしてデュラントをにらみながら、カレンが訊いた。「どれくらいの金額の話を?」

「充分な額 とブルー。「でも、なかでよ」

「オーケイ」デュラントの胸に散弾銃を向けたまま、カレンはすばやく二歩さがった。「けど、ミスタ・陽焼け男が先頭だよ。それからあんただ、痩せっぽち」

デュラントに続いて玄関ドアを入ると、ジョージア・ブルーは言った。「右に行って」

閉じられた引き戸のところに行くと、ブルーはまた指示した。「それを開けて」

デュラントは二枚の引き戸を壁のなかにすべりこませた。広い客間に入っていき、周囲をすばやく見まわすと、コリーン・カレンを振り返って言った。「ヒュー!スとボ

38

[illegible]

食つき宿〉の外見が気に入らなかった。彼がそう言うと、ジョージア・ブルーは、ここを初めて見るのが[illegible]だったら、もっと気に入らなかったはずだと答えた。

[illegible]

夜のそばに停めた。〈満室〉の赤いネオンが相変わらずまたたいている。ずっと奥にある巨大な古い家に目を凝らした[illegible]、アイ・ニー・[illegible]へ・[illegible]・ライマン[illegible]ここで[illegible]ら、[illegible]をふき[illegible]て、[illegible]たちを[illegible]だ、[illegible]。

デュラントは鼻を鳴らし、レンガ敷きの長いドライヴウェイに車を進めた。生い茂る木々や早咲きの派手な花々を見てとりながら、花にはもう少し水をやってもよさそうなものだと考える。扇形に広がった駐車場には、トヨタのピックアップ・トラックはあったが、年代物のMG・ロードスターの姿がないのにブルーは気づいた。

ピックアップ・トラックの隣にフォードを停めると、デュラントは言った。「その金はどうしておきたい？」

「トランクに入れる？」

「トランクは二秒ほどで開けられる」

「じゃあ、あなたが持っていて」とブルー。

フォードをおりると、デュラントはジョージア・ブルーのあとについていき、ポーチに続く九段の階段を登った。ドアベルのところに来たとき、ブルーは、前回アザガイ・オヴァビイが肘で割ったサクランボを盛ったボウルの描かれたステンドグラスが、紫色のブドウを盛ったボウルの絵に入れ換えられているのにも気づいた。

ブルーはベルを五秒鳴らし、待った。十秒後、重い玄関ドアがサッと開き、コリーン・カレンが姿を現わした。

[illegible]

を、デュラントは寒間的に見てとっていた。

「十万ドルほどだろう。しかし、もっかのわたしの関心は、その手の車がいくらで借りられるかということのほうにある。何にせよ決める前に、二、三日リスト走行してみようと考えたわけだ」

「相当な映画の取り引きにちがいないですね」

「さっき言ったように、大金がからんでいる。ほんものの大金が」

「ま、500SLのレンタル料は一日四百ドルですが、現金で保証金をお預かりしなくてはなりません」

「金額は？」

「五千ドル」

「いいとも。すぐに一台借りだせるかね？」

「調べてみます」受付嬢はコンピュータに向かい、しばらくキーをたたくと、画面を調べて言った。「運がいいですわね。わたくしどものところには一台しかないんですが、いま空いてます」

「ここには一台しかない？」

「とにかく高価なものですし、そうたびたび需要があるわけではありませんので」

「それは黒いやつかね？」

受付嬢はうなずいた。「黒では何か不都合でも？」

「いや。ちょっと考えたものでな、去年の大晦日に、わたしの友人が借りたのと同じものなのかと」

「それもお調べいたしましょうか？」

ストーリングズはこの上なくあたたかい笑顔を彼女に送った。「面倒をかけるのでないならば」

「カレンにだったら、とシェーンア・ブルーは、彼女をどこに置いとくのがいいと考えるか、教えて」

ノース・ストーリングスはハスてサンタモニカに出たあと、タクシーを拾い、ベヴァリーヒルズにある〈バジェット・レンタカー〉の営業所に向かった。高級外国車を専門に取り扱っている店である。カウンターには、ウーとデュラントが乗っているメルセデス560SELを借りたときと同じ受付嬢がいた。ストーリングズが入っていくと、受付嬢は顔を上げ、ほほ笑んで挨拶した。

こんにちは、ミスタ・ストーリングズ。あのメルセデスが盗まれたなんて言わないでくださいね?」

彼女の名前がグロリアだったことを思い出したストーリングズは、この若い女はいまだ人生の悲哀を体験していないにちがいないと考えた。彼は受付嬢にほほ笑み返し、「いや、まだ無事だよ」と言った。そこでひと呼吸おき、軽く眉をひそめる。「姓は何と言ったのだったかな?」

「言ってません。でも、最後に〝e〟のつくランサムが――ご用命をうけたまわります」

「では、最後に〝e〟のつくミズ・ランサム、もう一台車が必要になったのだよ」

「ビジネスが大忙しなんですね――あなたがたがマリブで何をなさってるのか知りませんが」

「映像作品の取り引き」とストーリングズ。「大金のからんだ」

「ご冗談でなく? 素敵ですこと。それで、どんなものをお考えなんです? いえ、これはお車の話ですが」

「きみがあと数年年をくっていたら、週末をタホー湖で一緒にすごす話でもするところだが」

「わたし、年配の男性がたと出かけたこ-あるんです」

「タホー湖に?」

「いえ。でも、何事にも初めてということがありますから」

「実はだね、グロリア」ストーリングズはカウンターに上体を乗りだした。「いまやっている映像作品の取り引きがすんだら、わたしは、タホー湖の週末と新車で息抜きをするつもりでいるんだ。おそらく、連れができることになると思うが」

「どういったお車で?」

「メルセデス500SLを考えている」

「すごい! あの手の車がいくらするかご存じなんですか?」

「あの映画スターとよろしくやってたときも？」

そう驚いた表情もみせずに、デュラントはチラッと彼女を見やった。「おれたちが？」

「あなたにその素振りはないにしても、彼女のほうは見え見えだった　でも、あなたはるかに長い経験を積んでるわけだから　アサガイ以外には気づいていないと思うけど、とにかく、彼女なかなか魅力があるわ　わたしも彼女が気に入ったと思うけど、それでも、あれほど有名になれた理由は理解できないわね」

「この四、五年のあいだに大スターになったんだ」

「すると、彼女の映画を何本か観にいってみる必要がありそうね」

「最近はもう観にいく必要はないさ」とデュラント。「二、三ドルでビデオが借りられる。それを自宅でビデオデッキにかければいい。電子レンジでポップコーンを作り、退屈な部分は早送りにして」

「それが、わたしの乗り遅れた主要な文化的進歩なのかしら？」

「ほかには思いつかない」

そのあと、二人は黙って車を走らせた。デュラントはロバートソン・ブルヴァールからサンタモニカ・フリーウェイに乗り入れ、パシフィック・コースト・ハイウェイを目ざして西進した。三分後、ジョージア・ブルーが沈黙を破った。「途中で――いえ、いいわ」

「途中で何をしたい？」デュラントが訊いた。

「マリブのアメリカ銀行に寄って、お金をおろしたほうがいいんじゃないかって言いかけたんだけど」ブルーは説明した。「でも、お金なら三十万持ってるって気づいたのよ」青いバックに手を置く。

「何のための金を？」

「アザガイが、コリーン・カレンとその朝食つき潜伏宿のことを話したのは覚えてるわね？」

デュラントはうなずいた。「トパンガ・キャニオン」

「あそこをひと晩借りにいったらどうかと考えてるのよ。宿をそっくり」

「いくらで？」

「おそらく一万ドル要求してくるわ。こっちは五千出すと言って、七千五百で話をつける」

「取り引きが始まったら、彼女はどこにいることになる？」

「あなた彼女に会ったことはない、そうね？」

「ない」

誰かと分けなくてはならなくなると」

[illegible]

ブローチも立ち上がった。「きみと一緒に誰を送るのかな？」

「デュラント。でも、彼とわたしは何ひとつ分け合ったりしないはずよ」

ジョージア・ブルーはくるりと体をまわすと、右手にバッグを持ち、大股にドアに向かった。そうして、ドアを開くと、振り返り、笑みをみせて出ていった。

今度もまた完璧な退場のしかただ、とジャック・ブローチは評価した。

ロバートソン・ブルヴァールの西側を南に向かって歩くジョージア・ブルーは、レンタルのフォードに着くまで大股ですばやい足の運びをゆるめなかった。金の入った青いバッグを左手に持ち、右手は、肩にかけたコーチ社製の新しいハンドバッグに深く突っ込まれていた。なかには、オヴァビイとともにコリーン・カレンから買った三八口径のリヴォルヴァーが入っていた。

フォードに着くと、彼女は縁石側のフロント・ドアを開き、金の入ったバッグを投げ入れた。そうしてすばやく乗り込み、ドアを閉めてロックした。デュラントがエンジンをかけ、左肩ごしに車道をうかがうと、メーターつきの駐車スペースからフォードを出した。「どうだったね？」

「問題なし」ブルーは答えた。「彼の言葉でいえば、〝手順〟と呼んでたものにずいぶん興味を示してたけど」

「言い換えると、つまりこういうことだな――きみはひとりで行くのか、それとも誰かが一緒なのか？」

「誰かが一緒に行くと、これを分けなくてはならないだろう、とも言ってた」ブルーは青いバッグをたたいてみせた。

「それに対してきみは？」

「デュラントが一緒に行くけど、彼とわたしは何ひとつ分け合ったりしないと」

デュラントはにやりとし、それから含み笑いを漏らした。

ブルーは軽く眉をひそめて言った。「あなたが口に出して笑ったのはこれが初めてにちがいないわね」

「これまで面白い部分がなかったからな」

えてるので」
「なるほど」
「彼が連絡してきたら――」
ふたたびブローチが言葉をはさんだ。「誰が電話を受ける？」
「アーティ・ウー。たぶん、わたしは子機で聞くことになるわ。クインシイ・デュラントも聞くかもしれない――あるいは、聞かないかも」
ブローチはうなずいた。満足したようだ。
「とにかく、電話してきたドラム缶は、お金が用意できたことを知らされる」
「百万？」
「百万。それから、わたしたちは取り引き場所を決めることになる。静かで、人気のない場所」
「どういった場所かな？」
「ドラム缶がひとりでお金を数えられ、わたしがテープをビデオデッキで確認できる場所」
「そういった場所に心あたりがある？」
「あるわ」
「どこかな？」
「申しわけないけど」
「もちろんだな」とブローチ。「安全保護」
「常識的なことね。場所の選定をめぐって、アーティとドラム缶のあいだに駆け引きが行なわれる。ドラム缶がわたしたちの最初の提案をこばみ、わたしたちが彼の対案を拒否する。そのあと、前々から考えていた場所をアーティが持ちだし、それで同意しなければ、取り引きはご破算だと言いわたす」
ブローチは顔をしかめた。「それは危険なようだが。最後通告を突きつけるのは」
「ドラム缶が売り手で、わたしたちが買うのだから、買い手の強みがあるのよ。最終的にドラム缶が折れたあと、時間に関しての綱引きが始まる。わたしたちが八時と提案すると、彼は九時か十時を持ちだしてくる。こちらはその要求をのむ。取り引き場所を偵察する時間を与えてやらないと、姿を現わさないかもしれないから。その点でドラム缶を責めるわけにはいかない、でしょう？」
「興味深い」とブローチ。「きみはひとりで行くのかな？」
「なぜ？」
「いや、ちょっと思ったものでね。ひとりで行かないと、きみはこれを――」バッグに手を触れてみせる。「――

37

午後二時四十二分　ヘヴァリーヒルズにあるシャノク・ブローチのオフィスで、ジョージア・ブルーは三十万ドルを数えはじめた。十八世紀にフランスで作られたデスクの上には、百ドル紙幣で一万ドルずつ束ねられた札束が三十積まれていた。ブルーは立ったまま、黙って数えていた。数え終わると、サヴォンのドラッグストアで八ドル九十五セント・プラス税金で買ってきておいた、ナイロン製の青い大型バッグに慎重に詰め込んでいった。

デスク・チェアに坐ったブローチは、彼女がバッグのジッパーを閉めるまで口を開かなかった。ジッパーが閉まると、彼はにやりとして言った。「間違いなく百万、いいかな？」

ジョージア・ブルーはデスクの前の椅子に腰をおろすと、一瞬彼を見据え、それから答えた。「間違いなく百万の領収書をもらえれば、いつか役に立つかもしれない」

「あなたに役立つのであって、わたしにではないわ」

「いちおう言ってみようと思ったのさ」

彼女は肩をすくめた。「ほかに何か？」

ブローチは彼女のほうに上体を乗りだしてきた。彫刻をほどこしたデスクの上板に両肘をつき、手入れの行きとどいた両手を組み合わせると、心底興味がありそうな、好奇心といってもいい表情を浮かべた。「どういう具合にことが運ぶのか知りたいのだが――その手順を」

「その詳細を」ブルーは言い直した。

彼はうなずいた。

「それがとうぜんね。たいていの人は、初めてこの種のゴタゴタに巻き込まれると、好奇心をいだくものだわ。誰が、いつ、どうする、といった質問をする――たぶん、大金がからんでいるために」

「実にもって好奇心を刺激する」とブローチ。

「オーケイ。こんな具合に運ぶはずよ。夕方、ドラム缶が連絡してきたら――」

「ドラム缶？」

「売り手にわたしたちが与えた名前。電子装置で声を変

「有名な人は？」

「イメルタ・マルコス。ミセス・ブッシュ――ブノシュが初めて副大統領になったときに。ほかにも何人か」

「すると、専門家なのね」

「だったのよ」

「では、わたしにボディガードが必要だとするなら、なぜあなたでなくて、オヴァビイなのかしら？」

「ミスタ・デュラントに訊いてみたほうがいいわ」ノョーンア・ブルーは言った。

キャンブルに目を向けられると、デュラントは説明した。「きみが命の危険にさらされてるかどうか、われわれにはわからない。しかし、その可能性もあると考え、予防措置としてアザガイをつけるわけだ、有能な人材でもあるし」

「ミズ・ブルーと同じくらい有能？」

「彼女には誰もかなわんさ」

ジョージア・ブルーはデュラントをにらんだが、またすぐに視線をそらした。

「で、あなたとミズ・ブルーが――」

「ジョージアと呼んでくれないかしら」

「で、あなたとジョージアが、わたしの百万ドルで恐喝者からテープを買うのね？」

「きみから話してやってくれ、ジョージア」デュラントが言った。

「すべてが終わったら」ジョージア・ブルーはゆっくりと言った。「わたしたちは、テープと百万ドル、それとおそらくは恐喝者も、あなたの手に渡すつもりでいるわ」

アイオニ・ギャンブルは木製の回転椅子のなかで身を縮めた。「おそらく？」ほとんどささやくようにその言葉を口にした。

「恐喝者が死んでる可能性もあるから」

アイオニ・ギャンブルは椅子の奥にさらに縮こまった。ブルーとデュラントからできるだけ離れたいとでもいうかのようだ。そうして、デスクの上に目を据え、安心できるものを求めるように耳の垂れた兎を撫でていたが、やがてオヴァビイに目を上げて言った。「ほんとうに、わたしもうこれ以上聞きたくないわ、アザガイ」

アイオニ・ギャンブルは、あざけるように目をぎょろつかせてオヴァビイの意見を片づけると、ふたたびジョ[illegible]た経験はずいぶんあるのかしら？」

「あるわ」

[illegible]んだ」オヴァビイが教えた。

「ほんとうに？」

ブルーはうなずいた。

「わたしはどうすべきだとお考え？」

「テープを取り戻す。ほかに選択肢はないわ」

「でも、わたしは催眠状態にあったので、証拠としては認められないと聞いているわ」

「もはや証拠かどうかの問題じゃなくて」とショーシア・ブルー。「映画スター、アイオニ・ギャンブルに関する問題なのよ。テープを取り戻さなければ、向こうはテレビの暴露番組や大衆ゴシップ紙に売りわたす。テープがテレビで流されたとき、あなたが何をしゃべってるかは神のみぞ知る　ビリー・ライスとの性生活を詳細に語ってるかもしれない。テレビで流された内容はすべて、いくつものゴシップ紙によって、三、四語の見出しに要約されてふたたび世に現われる。記事全体をセンセーショナルに叫びたてる見出しとなって」ひと呼吸おいてから、さらに続ける　「いいわ　あなたはタフで、これにも耐えられる　でも、公判のその宣伝効果たるや絶大なものがあるでしょうね――すべて悪いほうに」

「たぶん、公判にはならないだろうが」とオヴァビイ。

「たぶんショーシア・ブルーは同意した。

「あなたが言いたいのは、そのテープがわたしをガス室に送るのに役立つ可能性もあるということね」

「それはメロドラマチックね」とブルー。「わたしが言ってるのは、そのテープがあなたのためになる可能性はまったくなく、取り返しのつかない被害を与えるにちがいないということ」

ギャンブルはデュラントを見やった。「あなたの考えは？」

「ジョージアが正しいと考える」

ギャンブルの関心はまたブルーの経歴に引き戻されたようだ。「シークレット・サーヴィスでは、身辺警護の経験もずいぶん積んだにちがいないわね」

ジョージア・ブルーはうなずいた。

朝の十時四十五分ということで、誰もヒールを欲しがらなかった。エルサルヴァドル人の家政婦はみんなにコーヒーを出したが、キャンブルだけはダイエット・トクター・ペッパーに固執した。メンフィスの綿花商の作らせたデスクを前にした彼女は、耳の垂れた兎を膝にのせていた。

清涼飲料水をすすると、ギャンブルはデュラントを見て言った。「ハウイ・モットと話をしたわ。彼、四十五分前に電話してきて、恐喝者が、グティスンのテープと交換に百万ドル要求しているといった、どうすべきかしら、とわたしが尋ねると、ハウイは、どんな形であれ恐喝に金を出すのには反対だといった、でも、危機に瀕しているのはわたしの名声なのだから、選択権はわたしにあると」

「それでは答えになってないな」実用本位の肘掛け椅子に坐ったオヴァビイが言った。足元にはムースが体を丸めている。

「ええ、そうね」ギャンブルは続けた。「ハウイが言うには、どちらにするにせよ、まずジャック・ブローチに連絡して、きょうの午後五時までに現金百万ドルをそろえられるか訊いてみるべきだ。それが無理なら、支払いの問題は意味がなくなるって」そこでひと呼吸おく。

「法律家の言いぐさよね?」

「というか、的はずれ」ショーシア・ブルーが言った。インド更紗のカバーのかかったカウチに彼女と並んで坐っていたデュラントは、うなずいて同意した。

「で、ジャックに電話して、それは可能かと訊くと、なんとか、という答えだった。でも、株や公債の一部と各種の年金受給権をそっくり、損を承知で処分しなくてはならないって。そうしてちょうだい、とわたしは言った。もちろん彼は、百万ドルの現金をどうしたらいいのか知りたがったわ。わたしは、ミス・ショーシア・ブルーが受け取りにいくとハウイが言っていたと伝えた」

「ミスタ・ブローチは何て言って?」ブルーが尋ねた。

「ホッとしたような声で、あなたのことをとても有能な女性だと」

「きみが何かにサインする必要がある?」デュラントが訊いた。

ギャンブルは首を振った。「ジャックはわたしの代理委任状を持っているのよ」

「おれなら、自分の代理委任状を誰にも渡さんな」とオ

[illegible]

げで、誰にも怪我がなく、何も焼けなかったわ。でも、[illegible]

はみな彼を恋しがって――なかでもそのムースが――ろ[illegible]

にものを食べなくなってしまった。この人でなしは、彼らの愛情をすべて自分に向けさせてしまっていたのよ。それで、そのあと二カ月間、日曜ごとに彼を呼びよせては、彼らと二時間遊んでもらうだけのために五十ドル払わなくてはならなかったわ」

オヴァビイは肩をすくめた。「おれは動物に好かれるんだ」

「彼をボディガードにしたくないのであれば」デュラントが言った。「そう言ってもらいたい」

「ボディガードの必要な期間は？」

「せいぜい二、三日」

「三日以上いられたら、動物たちがまた彼を慕うようになってしまう。とはいっても、アザガイは卑劣でずる賢いから、ボディガードには申し分ないはずね。ということで、オフィスに行きましょう。ビールでもなんでもお好きなものをどうぞ」ギャンブルは階段の下を見おろして言った。「あなたもよ」

アイオニ・ギャンブルがオフィスの方向を指さした。デュラントはすでに知っている部屋へと、ジョージア・ブルートの先に立って向かった。オヴァビイがムースを引き連れて階段のてっぺんにやってくると、ギャンブルは左肩ごしに振り返り、デュラントとブルーがオフィスに入ったのを確認した。それから、オヴァビイを振り向いて言った。「わたしを抱きしめてくれるつもりはあるの、ないの？」

オヴァビイが軽く抱いて頬にキスすると、彼女は言った。「わたしを知っていると、なぜ彼らに言わなかったの？」

「それは大昔の話さ、アイオニ」

「あなたをちょっとからかってやれ、という気になったわけだけれど。うまくいった？」

オヴァビイはうなずいた。「いつものことながら」

「元気なの――ほんとうのところ？」

「これ以上はありえないってくらいに」

おそらく生まれて初めてアザガイ・オヴァビイが本当のことを言っている、とギャンブルの直観が告げた。

めているような表情で彼の顔を見上げた。

そのとき、アイオニ・ギャンブルが階段のてっぺんに姿を現わし、デュラントに吼いた。「何があったの？」

「きみの犬が新しいボディガードを選びだしたところだ」そう答えてから、デュラントは手短にギャンブルをジョージア・ブルーに紹介した。

紹介がすむと、ギャンブルはオヴァビイの後頭部を見おろして声をかけた。「たいじょうぶですか？」

ゆっくりと立ちあがったオヴァビイは、さらにゆっくりと体をまわし、ギャンブルを見上げて言った。「だいじょうぶさ」

「驚いた、なんてこと」とギャンブル。「アザガイ・オヴァビイじゃないの」

オヴァビイは階段の上の彼女に笑顔をみせて――いくぶん弱々しい笑みだ、とデュラントは思った――挨拶した。「どうしてる、アイオニ？」

「会ったことがあるのね」ショーンア・ブルーが言った。いまだオヴァビイをじっと見おろしながら、アイオニ・ギャンブルはうなずいた。彼の顔のかすかな笑みはすでに消えかけていた。「初めて会ったのは一九七四年」ギャンブルが言った。「わたしは十八歳で、アザガイは、いくつだったかしら――三十三？」

「三十だな」とオヴァビイ。

「嘘よ、彼は三十三で、わたしをスターにしようとしていた。ま、実際、わたしの初仕事を取ってくれたわ――中古車のコマーシャル、〝愛犬スポット〟編のひとつで、キャル・ワーシントンのところまで、イグアナをひもで引っぱっていく役」

「何かから始めなくちゃならなかったからな」オヴァビイが言った。

「次に会ったのは？」ショーンア・ブルーが吼いた。

「十年後」

「十一年だ」とオヴァビイ。「八五年」

「オーケイ。八五年。わたしがこの家を買ったばかりのころで、ロンドンで映画を撮らなくてはならなかった。留守番してくれる人を探していたら、ある女友だちが、〝申し分なく素晴らしい留守番役〟と呼ぶ人を推薦してくれたわ。それで、承知して、その人をよこしてもらった。すると、やってきたのは、誰あろうモーリス・オヴァビイ、〝スターの留守番役〟だったというわけ」

「この家を誰が救ったのか話してやれよ、アイオニ」オヴァビイがうながした。

いかな？」

「署名入りの告白というのでは？」

「そいつは素晴らしいことになる」アーティ・ウーは言った。

36

三人はエルサルウァドル人の家政婦一団の乗れた電についていて階段を登り、アイオニ・ギャンブルのオフィスに向かっていた。すると、七歳になるシェパードとラブラドルの雑種が突進してきた。

しんがりを務めていたアザガイ・オヴァビイが振り向いたとたん、八十ポンドの犬が飛びかかり、胸にぶつかってきた。次の瞬間、オヴァビイは階段の五段目に半り込んだ格好になった。シェパードとラブラドルの雑種は、彼の顔をなめまわしながら、キャンキャン、クンクンと歓喜の鳴き声を発していた。

ようやくにやにや笑いを浮かべたオヴァビイは、犬を一度乱暴に抱きしめると、押しやって声をかけた。「どうしてた、え、ムース？」犬は湿った舌でもう一度なめて応えると、オヴァビイの膝に頭をのせ、心の底から崇

ストーリングズはその質問を吟味した。「彼は気むずかしくなったし、月みたいに遠い存在になってしまった――といっても、昔から、わたしが笑いの缶詰と呼ぶ種類の人間では決してなかったが」

「ジョージアは？」

「遠い辺境の地に移住してしまったな」

「わたしのしたことは、ウーはゆっくりとうなずいた。「というか、したいと思っていることは、あの二人を一緒に治療の場に送るということなんだ」

「二人ともに殺される可能性のある治療の場だな。まっさきにたがいに殺し合わないとしても」

「しかし、興味深いことはたな、ファース、二人ともわたしの意図に気づいていながら、どちらも反対しないということだ」

「その治療はうまくいくかもしれんし、いかないかもしれん。しかし、わたしの理解するところでは、おまえさんはジョージアを罠にかけようとはしていない。わたしもつき合うことにするよ」

「わたしはジョージアがとても好きなんだ」とウー。

「それはあんたも知っているはずだ」

「彼女にのぼせたことは？」

「ない。しかし、あのころすでにアグネスが――そばにいた」

「テュラントは、かつて彼女にのぼせていた」

ウーはうなずいた。

「アザガイもだ」

かすかに肩をすくめたのがわかるくらいに、ウーの肩が動いた。

「で、いまはわたしが」とストーリングズ。

「あんたは運のいい男だよ、ファース」そこでひと呼吸おいてから、ウーは尋ねた。「さっきのあんたの話だが？」

「誰がライスを殺したのか？」

ウーはうなずいた。「それは直観なのかな？」

「直観より考えに近い」

「考えというのもいいものだ」ウーは分別くさく二、三度うなずいた。「何か必要なものは？」

「金。それは銀行で五千ドルの小切手を現金にするつもりだ」

「わたしに同行してほしい？」

ストーリングズは首を振り、立ち上がった。

「何を手に入れて戻ってくるつもりなのか、尋ねてもい

・キャンが首を?らし、?をうたて尋ねた。「ミン、
・ヴィンはどんな様子だった？」
[illegible]
むこともなしに、ファイナニを指揮なの表にだしたの。きのう
に三十歳?をはずと記録した。そうして、ロンジンに帰
んで帰っていった」

[illegible]

「わたしはほたことにすべてを書くと言ったはないんだ」そう
言って、キャンは書店を去った。

ファーは言葉を繰すと、そのまま書をしおのて言ったの
ていたが、ああてストーンンズを振り返った。「あな
たはどう考えている、プース？」

「おまえさんの書言人だちのぐラム言は、テープを含んだ
おおげてなく、ジェシン運転手のミスタ・エンディキン
を殺し、そのあと、あのオンスナーンのモーテシではは
イスン三族も若来し、おまえさんとわたしを殺そう
とした、というのがおわたしの考えだな」

「なんとも手際のいいことだ」とラー。

「そのおビリー・ライスを殺したのだとするなら、きのう
に手際がいいということになるだろう」

ただし、そのはライスを完きさせなかった」

「そのとおり」とストーンンズ。

「しかし、薬を使ったおあなたにはわかっている」
たあん」

その疑問を声をできるのえるかな？」
弁言になってでは」

「どんなで？」

ジョーシアの身に何が起こるかによる」ストーンン
ズは言った。

ファーティ・ナーは自分の手をもつなの、ストーンン
ズの主言のすぐ書後の前かを確認めるようとするような
表情を浮かべた。「わたしがジョーシアを、故郷の国で
はなく、家族の事に送りだしたとあなたは考えている、
違うかな？」

「おまえさんが書きしたのは、どう考えてもその国だ
た」

[illegible]
うろかな？」

「ここはあなたも言葉に言しむ」

「あなたの目にクインシイはどう映っている——三百言
と述べて？」

明の必要がないのをウーは喜んだ。「ビデオテープと録音テープをアイオニに売りたがっている。催眠状態の彼女が、ビリー・ライス殺しを告白しているやつだ。値段は百万ドル。男は、きょうの午後五時までに、イエスかノーかを知りたがっている――いや、要求しているといったほうがいいな」

「彼女にはそんなに急に百万ドルそろえられない、それはあんたも知ってるはずだ、アーティ。とすると、ほんとうのところ、なんで連絡してきているのかな？」

「ひとつ提案がある」

「わたしは返答しないほうがいいかもしれない」

「かもしれない。しかし、ジャック・アローに連絡して、アイオニがきょうの午後四時までに現金百万ドルを必要としていると伝え、理由も話してもらいたい。それて、彼が何と答えるかをただ聞いていてほしい」

非常に長い沈黙があってから、モットが尋ねた。「あんたの考えでは、ジャックが、〝不可能だ〟とは言わずに、〝オーケイ、わかった〟と答えるということかな？」

「彼がイエスと言うにせよ、〝オーケイ、わかった〟と言うにせよ、ジョージア・ブルーが金を受け取りに行くと伝えてくれ」

「彼女ひとりで？」とモットは言ったが、すぐにつけくわえた。「いやいい。わたしは知りたくない」

ウーは何も言わなかった。また長い沈黙が続いたが、モットが質問を発してそれを終わらせた。「何が起こっているんだ、アーティ？　具体的な点は抜きにして頼む」

「アイオニ・キャンブルの容疑を晴らすかもしれないこと」

「かもしれない？」

「わたしにしてもそれ以上具体的には言えない」とウー。「しかし、きみのすべきことがひとつある。それは、事態が進展しているという感じをアイオニに与えることだ。彼女に連絡して、テュラントとショーシアが立ち寄ってデートにお誘いし、新しいボディガードを紹介するとだけ伝えておいてくれ」

「誰かな？」

「まだはっきり決まっていない」

「そんなはずがあるものか」

「我慢して言うとおりにしてほしい、ハウイ」

またしても非常に長い沈黙が訪れた。やがてハワード

子の背にどさりともたれかかった。そうして、自分に向けられてくる目を残らずにらみ返した。新たな流れがおりはじめたが、ジョージア・ブルーの面白そうな笑いがそれを散った。

「何がそんなにおかしい？」オヴァビイは問いつめた。

[redacted]

子守がついてる。アーティはブースを見張る。クインシイはわたしを見張る。で、アイオニ・ギャンブルがあなたを見張る」

ウーはやさしい笑みを浮かべて彼女を見つめ、尋ねた。

[redacted]

ージア？」

[redacted]

「もちろん」

[redacted]

「わたしだろうな」笑みをみせたままウーは答えた。

「ほかに誰がいる？」

ハワード・モットの電話番号をたたいたあと、アーティ・ウーは呼び出し音に聞き入りながら、ブース・ストーリングズを見つめた。年代物の細長いテーブルに残っているのは彼ひとりになっていた。「ミーティングの席ではあまり口を開かなかったな、ブース」とウーは言った。

〝皆を取ってもらえんかな〟と言ったと思うが」

[redacted]

電話に出てきた。「何かな？」

「アーティ・ウーだが」

「起こされちまった。不機嫌な声を出してるとしたら、それは不機嫌だからだ」

「ゆうべ遅かった？」

「三時まで口述してた。三時半だったかもしれん」

「いくつか知らせがある」

「いいやつ、悪いやつ？」

「それはそっちの判断にまかせる」とウー。[redacted]連絡してきた」

「ああ」

[redacted]

ラム缶と呼んでいる」

「ドラム缶の底から話しているように暗くからだな」と

[redacted]

ンョーンア・ブルーを凝視し続けていた。

「昨晩」ウーは続けた。「エンノ・グリムがなかなか興味深い提案を持ちだした。われわれがこの一件を、事を荒立てることなく完全に解決し、彼と彼の会社を巻き込まないでおくなら――ということは、もちろん、ライスを殺したというアイオニ・ギャンブルの容疑を晴らすことだが――グリムはさらに五十万ドル払うつもりでいる。うまくやってのけられたら、その新たな金は五人で均等に分けるのがいい、とクインシイとわたしは考えている。ひとり十万。それなりの報酬金と考えるのがいいだろう」

「あるいは、抜け駆けしないための口止め料」いぜんとしてションア・ブルーを凝視しながら、デュラントが言った。

今度はオヴァビイが質問を発することで、ブルーの言い返す機会を取り上げた。「グリムはアイオニ・ギャンブルに対して、グディスン兄妹が引き起こす損失をすべて補償することに同意してたんじゃないのか？」

「そのとおり」とウー。

「としたら、グリムのしてることは、ドラム缶が要求してる百万を阻止するために、その半分もの金をおれたちに使うってことだ。それとも、おれの考えが間違ってるのかな？」

ウーは微笑した。「たしかに、そうした考えが彼の脳裏をよぎったかもしれない」

「おれたちがギャンブルの容疑を晴らしたとしても、彼女はグリム相手に多額の訴訟を起こせる」

「どういった理由で？」デュラントが訊いた。

「そんなこと、どうしておれにわかる？」とオヴァビイ。「それはハワード・モットの仕事さ。所得の損失。精神的苦痛。そのために弁護士を雇ってるわけだからな」

「実に興味深い見解だ、アザガイ」ウーが言った。「その点は、このあと、きみがミズ・ギャンブル本人に確かめてみたらいい」

たちまち警戒の色をみせて、オヴァビイは訊いた。

「つまり、どういうことかな？」

「つまり、きみは彼女の身辺警護に就くことになる」

「おれじゃないほうがいい」

「なぜ？」

「おれはガードマンじゃない」

「いまやそうなのさ」デュラントが言った。

オヴァビイはふたたび抗議しかけたが、思い直し、椅

つもりでいる？」
「そのようだ」
「ゴシップ紙のほうはどうなったっけ？」
「それはやっぱり最低保証金額であり、脅し文句でもある」
オヴァビイは同じプロとしてよくわかるというようにうなずいた。「つじつまが合う」
[illegible]
れわれの仲介役になる、ジョージア。クインシイがそのバックアップ。わたしはハワード・モットに電話して、恐喝者から連絡があったと伝えよう。テープと交換に百
[illegible]
「つまり、ジャック・ブローチを通して行なう」ジョージア・ブルーが確認した。
「そうだ」とウー。
「たぶん彼は、せいぜい二十万かき集めるのがやっとね」
「というきみの話だったな」
「彼はウインクしてうなずき、わたしに渡す――その三
[illegible]
「そのとおり」
「で、わたしはそれをドラム缶に渡す、あの男は数えたがるわね」
「きみとクインシイがそこまでさせるとは思わないが」ウーは言った。
短い沈黙があってから、デュラントが言った。「となると、得物が必要になる」
「あるさ」とオヴァビイ。尻ポケットに手を伸ばした彼
[illegible]
アーを取りだし、テーブルの向かいにすべらせた。
デュラントはそれを取り上げて調べると、上着の右ポケットにすべりこませた。「ジョージアの分はどうする？」
「彼女ならもう持ってるさ」オヴァビイが教えた。
デュラントが感想を述べる前に、ブルーが言った。
「あなたはわたしの背中を見張ってるだけでいいのよ、
[illegible]
「おれ自身の背中も」とデュラント。
言い争いがエスカレートしないうちに、アーティ・ウーが割って入り、全員に告げた。「金に関していい知らせがある」
一同の目が彼に向けられたが、デュラントだけは別で、

しかない。だが、そうすると、あんたはおれの持ってるものをそっくり手に入れることになるし、それを大金で売ることもできるわけだ」

ウーは溜め息をついた。「品物も見せずに売ろうとするものに、いくら要求する――十万ドルか？」

「ということなら、時間の無駄だな」とトラム缶一ロリタに電話一本入れれば、向こうの連中はこの午後にも男を送ってくる、二時にはここに着くはずだ。現金で三十万持って」

「その二ロリタの連中とは？」

「大衆ゴシップ紙のひとつ」

「では、そうしたらどうだ？」

「おれは手っ取り早くてかい取り引きがしたいって、キャンブル本人にすべて売っ払ったほうがいいと考えるわけだ」

「いくらで？」

「百万」

「無理だな」

「オーケイ。いまあんたはノーと言った、なら、おれはバイバイと言おう」

ウーは口早に訊いた。「時間はどれくらいもらえる？」

「セールは一日だけだ」

それだけの現金を、彼女が一日でかき集められるなどと期待しないほうがいい」

「なぜだ？　銀行は九時に開き、四時に閉まる――なかには五時、六時まで開いてるところもある。彼女には午後六時まで時間がある。おれたちはそれまでに合意に達するか、決裂するかだ」

「五時にまた連絡してくれ」

「同じ番号か？」

「同じ番号」

「オーケイ」とドラム缶。「だが、五時には商談成立か決裂だ。曖昧な返事は欲しくない」

「曖昧な返事はしない」ウーがそう約束するや、ドラム缶は電話を切った。受話器を置くと、ウーは電話を押しやり、テーブルに両肘をついてオヴァヒイを見やった。

「たしかにトラム缶だな、アサガイ」ウーは言った。

「アイオニ・ギャンブルは、この夕方までに百万ドルかき集めることになった」

オヴァヒイの口の両端がゆかんで下がり、不承不承敬意を表わした。「つまり、やつはいちかばちかに賭ける

35

翌朝七時五十九分、五人はふたたび食堂の細長いテー[illegible]は、アザガイ・オヴァビイによってきちんと積み重ねら[illegible]ードからコーヒー・ポットを取り上げ、オヴァビイとデ[illegible]ズは首を振って断わっていた。

[illegible]ーが席に戻って坐ったとき、長いテーブルに置か[illegible]ーが受話器を取り、ハローと応じた。

電子装置で変えられた声、オヴァビイがドラム缶と呼んだ男の声が言った。「ミスタ・Xとは違うようだな」

「わたしはミスタ・Z、決定権を持った男だ」ウーは言

[illegible]

言いがかりにもほどがある」

それなら、ビリー・ライスの浜辺の家の電話番号に出てきて、あんたいったい何をしてる？　答えてもらいたい」

ミスタ・Xもわたしも仲介役ということだ」

「おれと誰のあいだの？」とドラム缶。

「あんたと、誰であれあんたの売りたいものを買う人物との」

なるほど、そういうことか。おれが売りたいもののこ[illegible]

[illegible]度はわたしに話してもらいたい」

[illegible]

[illegible]ープがある。それがおれの商品だ」

[illegible]

「気が変わった。試写はなしだ」

「なぜ？」

[illegible]

[illegible]を観るには、おれがコピーを作って、誰かに届けさせる

「デュラントが嗅ぎつけたらどうなる？」
「嗅ぎつけないわ」
「それでも、ばれたら？」
ジョージア・ブルーは軽く肩をすくめると、グラスをナイト・テーブルに置き、レインコートのベルトをときはじめた。「デュラントは気にしやしない」
「わたしは彼を裏切りたくない」ストーリングズはいった。「アーティも」
「二人を裏切ることにはならないわ」彼女はレインコートのボタンをはずしながら言った。
「アザガイは？」
「アザガイも」
「すると、誰を裏切ることになる？」
「ジャック・ブローチ・エージェンシー」
「おいおい、〝死んだ恐喝者は恐喝できない〟という、例の売り込みにまた戻ろうというのではないだろうな、え？」
最後のボタンをはずすと、ジョージア・ブルーは立ち上がった。レインコートが床にすべり落ちる。「あなた、またよくわかっていないのね？」
ストーリングズはその質問を聞き流した。完璧な体に目を据えながら、記憶をよみがえらせ、再発見していた。ほとんど青年のような性衝動の高まりを分析することは拒んで、グラスを置き、彼女のそばに急いで寄っていった。ちょっと見つめ合い、たがいの都合だか了解だかを確認してから、キスが始まった。長々と続く野蛮なまでのキスで、カチカチと歯がぶつかり、舌の決闘――とストーリングズは考えた――が果てしなく続いた。
ようやくキスが終わると、二人とも息をあえがせていたが、ジョージア・ブルーがなんとか質問を口にした。
「で、どう？」
「何が？」
「本物のデートみたい？」
「まさしく」ブース・ストーリングズは答えた。

は、戦ったりしない」

「四五年以来、白色人種と戦ってはおらんよ」

「このあと起こることは？」

「ギャンブル事件？」

彼女はうなずいた。「それが終わったら」

「われわれは、それぞれまた好きな方向に向かうだろう」

「ウーとデュラント、あなたとアザガイ？」

ストーリングズはかすかに首を振り、思い出をなつかしむようにほほ笑んだ。「五年もたったことだし、アザガイは古い会社を解消する心づもりでいると思う。わたしはそのつもりだよ」

「彼はあなたが好きよ」

「アザガイはわたしにとって――」ストーリングズは言葉を切り、

得後の教育課程だった、いや、いまだにそうだが」

「あなたはどうするの？」

彼は、冷静に審査するような表情でジョージア・ブルーを見つめた。「あんたにいい考えは？」

「わたしたちでチームを作ることもできる」とブルー。

まねた詐欺でもする？」

「長期的な話じゃなくて。わたしの言うのは、半年――長くても一年――の話」

「高級ホテルで暮らし、上等のワインを飲む？」

「いけない？」

ストーリングズは化粧台に立っていき、スコッチを注ぎ足した。その場でひと口飲み、振り返って尋ねた。

「わたしは何をする必要がある？」

「しかし、おそらく何かすることになる」

「おそらく」

「あんたにのぼせているからといってだな、ジョージア、わたしは単純な男というわけではないんだ」

「わかってるわ」

マチノクを使ったのは、主役を演じたジェリー・ティンダーだけとのこと（ニューヨーク警察署によれば、ティンダーは、八八年三月十五日、ニューヨークにてエイズで死去。クイルの話では、リチャード・クリーヴァンドは親しい友人ではないが、マリブのヘヒューズ・スーパーマーケット でときおり顔を合わせ、短い挨拶をかわすという。クイルはマリブの認可された不動産業者ウィリアム・A・C・ライス四世と面識はなかったが、ライスの弁護団が、遺言の検認が完了するまで、彼の不動産会社にマリブのライス邸の管理を委託しているとのこと〟

ストーリングズが報告書をマニラ紙の封筒に戻し、ナイト・テーブルの引き出しにしまったとき、ドアに軽いノックの音がした。腕時計に目を落とすと、十二時四十三分。ベッドから立っていき、ドアを開く。ジョージア・ブルーが入ってきた。バスローブ代わりに着ていたレインコートを着て、グラス二個とJ&Bのボトルを持っている。

「ナイトキャップを一緒にと思って」と言って、彼女はグラスとボトルを化粧台に置いた。「水は？」

「バスルーム」

二つのグラスにスコッチをたっぷり注ぐと、ブルーはバスルームに入っていった。冷水を少し加え、寝室に戻ってきて、グラスの一方をストーリングズに渡す。彼はベッドに腰かけた。その隣に腰をおろすと、彼女がいった。「始まったわよ」

「何が？」

「地上戦」

「ほう」

「驚いてないみたいね」

「ま、そのために兵力を送り込んでいたわけだし、どれくらい前からだ――半年か――イラクが糞を漏らすほど爆撃もしてきた。兵員、戦車、航空機、火砲、船舶とすべて動員している。おそらく、かなり早く終結するだろう――前にも言ったことだが」

「たいして興味はないようね」

「負ける危険がいくらかでもあれば、興味も湧くかもしれんが。わたしにとっては、これもまたばかばかしい戦争のひとつということだな。志願兵と呼ばれる若い傭兵や職業軍人によって戦われる、前もって結果のわかっている戦争。この国は、もはや二度と通常戦争に負けることはないだろう。負けるかもしれないということであれ

ーチ。アルファベット順なのか、業界内での地位の高さ

[illegible]

ーヴランドの仕事もクイルの仕事も代行していない〟と報告書にはあった。〝ブローチの話では、テレビ映画の

[illegible]

とクリーヴランドが友人かどうか知らないが、年齢差からみて、友人とは思えないとのこと。現在の依頼人、アイオニ・ギャンブルが凶器をどのように入手したかはまったく知らないと主張〟

彼はチャールド・クリーヴランド　ストーリングスに自己紹介したときの名前で言えば、リック。〝クリーヴランドは七十五歳だという〟と報告書にあった。〝飲酒運転で逮捕、七二年三月五日、八四年八月二日、ほかに前科なし。九一年一月三日および九一年二月九日の事情聴取の際にも、息が酒臭かったとの報告。クリーヴランドの話では、テレビ映画の見本ビデオ　監視者たち〟においては、老いぼれ司祭役を演じたので、手にしていたのは十字架であり、拳銃ではないとのこと。フィル・クイルを知っていると認め、彼は俳優というより有能な

[illegible]

クリーヴランドは、九一年一月三日、マリブの保安官事務所支所に連絡を入れ、アイオニ・ギャンブルの黒いメ

[illegible]

頃と九一年一月一日午前五時十三分頃の二回、ウィリアム・ライス邸のドライヴウェイに駐車しているのを目撃したと報告した。クリーヴランドは、ライス邸が彼の〈クリーヴランドの〉身体風景をさえぎったことで告訴した事実を認める。ライスとは一度だけ会ったことがあるが、好きになれなかったし、死んでも気の毒とは思わないとのこと。飲酒に関して質問されると、自分は禁酒会マリブ支所創立委員のひとりだと言い、キャンブルがライスを殺したのは、彼に捨てられたためだろうとの意見を質問されずに述べた。ギャンブルは女優としては素晴らしいが、監督としては凡庸だという意見も訊かれずに開陳〟

フィル・クイルに割かれたスペースはもっと少なかった。〝クイルは、テレビ映画の見本ビデオ《監視者たち》で重要な役を演じたと言っている〟と報告書にあった。〝彼の話では、九ミリ口径のベレッタ・セミオート

34

真夜中をちょっとまわったころ、ブース・ストーリングズはベッドに横たわって肘をつき、記録書類のコピーを読んでいた。前日の午後、ハリード・セットのブルネットの秘書、メアリ・ショーなんとかから預かってきたコピーである。

最初に読んだのは、九ミリ口径のベレッタ・セミオートマチックに関するロサンジェルス警察署の報告書だった。その拳銃は、一九八二年二月二日、パラマウントのスタジオで、テレビ映画の見本ビデオ《監視者たち》の撮影中に盗まれていた。

標準的な婦人警官によって書かれたとストーリングスが判断した報告書によると、その日の撮影終了直後、監督に呼ばれた小道具係がベレッタをセットのどこかに置いた。小道具係が探しに戻ってきたときにはすでに消えていて、出演者もスタッフもいなくなっていた。盗難はただちに報告され、捜査が行なわれたが、結局忘れ去られた。そのベレッタが、ウィリアム・A・C・ライス四世殺しの拳銃として再浮上してきたのである。

次にストーリングズが読んだのは、出演者とスタッフの一覧表だった。スタッフの名前はひとつとして目を捉えなかったが、別の欄にある三つの名前が目に飛び込んできた。最初に飛び込んできた二つは、リック・クリーヴランドとフィル・クイル。ちょい役で〝風と共に去りぬ〟に出演した老俳優クリーヴランドは、〝監視者たち〟の見本ビデオでは、〝ティム・マレー神父、老司祭〟を演じていた。マリブの不動産屋でアーカンソー大学の元クォーターバックのフィル・クイルは、〝ショー・ランバート、強迫神経症のギャンブラー〟役。当時から二人ともマリブに住んでいて、どちらのエージェントもシャノック・フローチ・エージェンシーと記載されていた。ストーリングズの目を捉えた三番目の名前がそれだった。

ロサンジェルス郡保安官事務所の捜査官たちは、ライスの死後、三人に話を聞いていた。その内容は、誰だかの手によって三つの段落に要約されていた。まずはブロ

話に割り込んだ。「ジョージアが最高の人材だという点では、わたしもクインシーと同意見ですな。彼女を加わらせたのはわたしの判断だった、ということも強調しておきたい。となれば、彼女の行動にはわたしにも等しく責任があるということです」

「ただし、お二人とも心の隅では彼女を信用していない、違いますかな？」そう言って、グリムはクックッ笑った。

初めてロントンのウーデュー有限会社を訪れてきたときも、グリムがクックッ笑いを漏らしそうになったのをデュラントは覚えていた。そのとき、その笑いはどんなふうに響くのかと考え、乾いた引っかくような音だろうと思ったのだった。残忍な小動物がボール紙の箱から出ようとして、爪を立てたり齧ったりしている音。いま彼は、自分の想像が正しかったことを知った。

クックッ笑いが収まると、グリムは言った。「心配はご無用。わたしはこれまで、その人間が最高の人材だから雇ってきた――たとえ、その者を信用できるとの確信はなくとも。だからこそ、お二人を雇ったのでしょうな」

「痛み入ります」アーティ・ウーが応じた。

「契約成立ですな？」すでに答えはわかっているといった調子でグリムは言った。

まずデュラントがうなずいた。一瞬遅れてウーも。満足した様子で、グリムはアーリスに向かってうなずいた。「ロントンに、わたしたちはチェックアウトするから、リムシンを呼んでくれと連絡してくれんか」

ウーとデュラントに向き直ると、グリムは二人をまじまじと見つめた。二十秒近くそうしてから、立ち上がり、うなずいて別れを告げると、最後の命令を伝えた。「うまく処理していただきたい」そうして、エンノ・グリムは隣の寝室に姿を消した。

デュラントは立ち上がると、ちょうど受話器をおろしたジェニー・アーリスのところへ行き、手を差しだした。

「速記帳はおれが処分しよう」

ノートを手わたしてから、彼女は尋ねた。「あなた、誰も本気で信用しない、違う？」

「そうたびたびは」

「でしょうね」アーリスは言った。

「われわれはそう考えている」デュラントが答えた。

両手を見つめるのをやめると、グリムはふたたび窓辺に立っていき、またカーテンのすき間からサンタモニカの街明かりをのぞいた。そのまま一分近く眺めていたが、振り返ると、まずウーを見つめ、次にデュラントを見て尋ねた。「お二人はもう少し金を稼ぎたいですかな？」

「どれくらい？」とデュラント。

「USドルでさらに五十万」

興味ありますね、ウーがいった。

「オーケイ。わたしたちがすでに合意している金額に加えて、さらに五十万ドルお支払いするが、それには二つのことをしていただきたい。ひとつは、わたしをこの件に引き入れないこと。いまではそれは、たんにわたしが無傷ですむということではなく、まったく何の関係も持たないということです。もうひとつは、アイオニ・キャンブルを苦境から救いだす。彼女が、何という名前だったか、そう、ライスを殺していないと証明する」そこで、グリムはジェニー・アーリスを見やった。「そのノートはすべて引き裂き、燃やしてしまえ」

アーリスはうなずいた。ノートを閉じた彼女は、ボールペンをしまうと、デュラントを見て言った。「ショーンア・ブルーについてもう少し聞かせてもらうべきだと思うわ。あなたの話では、彼女が環の弱い部分のように思えるから」

「彼女はおれが責任を持つ」デュラントは答えた。

アーティ・ウーはかすかに微笑すると、数度うなずいた。ショックを受けるか驚いたときによくみせるしぐさだ。それに気づいたのはデュラントひとりだったようだ。

「お二人の話では」グリムがいった。「ミズ・ブルーが仕事を狂わせる可能性もありそうですな」

「彼女は最高の人材なんだ」とデュラント。「それなりに危険も大きい」

「女として最高、ということかしら？」ジェニー・アーリスが訊いた。

「誰と比べても」

「彼女と知り合ってどれくらいたつの？」

「十七、八年」

「彼女の年は？」

「三十六、七」

アーリスの眉があがった。「十代のガールフレント？」

デュラントが答える前に、アーティ・ウーが二人の会

トに速記でメモしていた。一二一句書き留めているようだ、とデュラントは思った。

ウーとデュラントの話が終わると、長い沈黙があった。エンノ・グリムが尋ねた。「いくらです？」

「何がいくら？」デュラントが問い返した。

「グディスン兄妹が作ったテープを盗んだ恐喝者が要求してくる金額は？」

[redacted]

としてはそれが標準的だといえるし、妥当な線だ。分割もしやすい。それに、これで問題がすべて片づく、と関係者に信じ込ませるに足る金額でもある――もっとも、七三年には、そうした額は三十万にすぎなかったが」

グリムはドイツ語で何ごとかうめいた。悪態のようだったが、すぐに英語に戻って言った。「ギャンブルは殺[redacted]

ビリー・ライスを？」

「われわれは彼女が殺ったとは考えていない」デュラントは答えた。

「しかし、グディスンのテープは彼女が殺ったと言っている」

「考えている？」

「疑っている」デュラントは言い直した。

「いまいましいことだが、捏造されたのだとしても、あなたがたとハワード・モットにそれは証明できない？」

「手に入れないかぎり無理ですな」ウーが言った。「それに、アイオニ・ギャンブルが買わなければ、おそらく[redacted]

なるか放送されれば――恐喝者は録音テープとビデオテープの両方があると主張している――テープの真偽にも、証拠としては認められないといった事実にも関係なく、[redacted]

い」

「彼女は百万ドル払うつもりでいる？」

「それだけ都合できれば」とデュラント。

グリムは右の手を見つめながら、二人に対してというより、みずから納得したようにうなずいた。そうして、今後は左の手に目を移して、質問した。「しかし、その男、ジャック・ブローチは、彼女の金も自分の金もすべて[redacted]

[illegible]

ントは対になった肘掛け椅子に腰をおろした。

全員が坐ったところで、グリムが言った。「ここにはレストランがないのですな」

「ピザを取りよせることができる」とデュラント。

グリムはその提案を聞き流した。「オーケイ。うかがいましょう。これまでにしたことは？」

「これまでに」ウーが言った。「われわれはヒューズとボーリン・グディスンの他殺体を発見した――というわけで、あなたに課せられた任務は完了した。〝グディスン兄妹を捜しだす〟、というのがその要点ですからな」

[illegible]

グリムの反応は、窓辺に立っていき、数マイル先のサンタモニカの街明かりがのぞけるすき間をカーテンにあけたことだった。夜景を見つめながら、彼は言った。一昼間ここから見える景色は素晴らしいという話でした。それを見られないのは、なんとも残念だ」そうしてカーテンを手ばなすと、アーリスを振り返って言った。「ニューヨークに飛ぶ次の便を取ってくれんか」

「まず、残りの話を聞いてからにすべきだと思いますが」アーリスが答えた。

[illegible]

いて目をデュラントに向けた。「オーケイ。話をうかがいましょう」

二人が話し終えるまで三十六分かかった。最初の七分間、ジェニー・アーリスは部屋の電話に向かって静かに話していたが、そこでウーの話をさえぎり、午前一時の

[illegible]

が正午であることを伝えた。グリムは黙ってうなずくと、ウーに話の続きをうながした。

ウーの話はアイオニ・ギャンブルに催眠術をかけたと

[illegible]

質問もしなかった。デュラントが、リムジン運転手カルロス・サンティヤンの他殺体を発見したことを話したと

[illegible]

が破産している可能性があることを伝えたときも、このスイート・ルームに着く十分足らず前、ウーとデュラントが四人の男を撃退したことを話したときにも口を開かなかった。

[illegible]

のぞいて、すべてジェニー・アーリスが螺旋綴じのノー

「ゴ・ムまで、それでこそエイテ。あしたの朝、またこの
ここまで来て」要するに、見送りして、言っていたとおりの

「ーは青写真を出すように、見返しいモディスのほうに向きなおって言った。「来たか」「さあどうぞ」と言った。会議その場所の夏……
「来ました」

「そう、そいつは重ねなおした」とティエランが言った。「二十、は、言い、モダン会議日からの夕、イト……いくのを見つめていた。
「きょうの午後、イギリス、イスンロ語を救し、ディスとわたしを藤を夏至にしたのと同じ男だ」ウーは顔をめぐら……
……た。
「皇帝陛下の額は見なおったはずだが」と、調子を合わせながらティエランが言った。
「そう。しかし、あなたは同じ童だった——童顔、年式、全、すべてにわたって——そこで、言葉は言葉をつきさしたわけだ」

……

イギリス・モディスをG14に告げ言したと言っている……
「それなら記録はとれるかい、わかるか」
……し、残して来た……警官隊のディシー、皇帝陛下、そのい皇帝陛下をすでに長年に耳にすべてに残すされている、す[illegible]スナ・シデランバ、を出てそなえたのか残されたい
「なぜ残念なんだね」
「サンパ・おわるってたが、同じ言だと確認できた」
「そう、……」
「しかたくとも、あなたの簡単な説明をするということになる」
「わたしは完全な証明するかもしれない、と言うが」と言って、アーは思考を定めた。

……
皇帝はアロハ・シャツを着ていることだけだった。その服を、青いジンズ・ライブのスーツの上のこと言わたるズボンの上に置かれている。マップ・ビーチ・インの三階にあるスイート・ルームの部屋で、アーは皇帝陛下に言っていた。その日の午後のホテルにいるジョニー・アディス……

[illegible]

カタカタと落ちた。男は、ナイフの刃がほんとうに心臓に刺さってないのを確認するように目を落とした。その目がふたたび上がる前に、デュラントは左右の手のひらを丸くして男の両耳を強打した。口を開き、自分には聞こえない悲鳴を上げながら、男は膝を折って歩道上にうずくまった。そうして、両耳を手で押さえ、シクシクと泣きはじめた。

デュラントがくるりと体をめぐらすと、ウーを最初に攻撃するはずだった男はまだ銃を押さえて体をねじりながら、ひとりうめいていた。もうひとりは息をしようと必死になっている。背後から丸太のような腕で首を絞め上げられているのだ。

「話すなら、息をさせてやる」そう言って、ウーはいくぶん緩めの力をゆるめた。

男は二度息をあえがせてから、ある男にひとり五百ドルで雇われたと言った。浜辺の家の外に車を停めて、色黒く陽焼けした背の高い男と、太った大男の中国人が出てくるのを待てという指示だったと。

ふたたび男の首を絞め上げながら、ウーは訊いた。

[illegible]

男はまた空気を吸い込み、その息を[illegible]

「あんたらが車で出かけたら、あとをつけ、引きずりだして、ま、ちょっと焼きを入れてやる」

[illegible]

「ま、ちょっとよりはもうちょっと」

「そいつは誰だ――おまえたちを雇った男は？」

知らない、と男は言った。神に誓って知らないのだと。

ウーは腕に力をこめ、ゆるめてから訊いた。「どうやっておまえたちに金を払う？」

「金は車のグローヴボックスに入ってると言った。車は[illegible]と　ラブレアとナンタモニカの角の、十代のホモ連中がうろついてるとこだ」

そいつはどうやって話を伝えた？」

電話さ、ほかにあるか？　車は盗難車で、そのあとおれらが拾ってようと、捨てようと、好きにしろと言ってた」

「いつ連絡があった？」

「きょうの夕方遅く――六時ごろ」

「あの家の外でどれくらい待つことになってた？」

33

ライス家からエンノ・グリムの待つマリブ・ビーチ・インまでの四分の三マイルかそこら、二人は歩いていくことにした。そうすれば中華料理のカロリーの大半が消費されることになる、とウーが主張したからだ。そのあと彼は、グリムとのミーティングが終わったら、ビッグ・[illegible]費分を補給するつもりであることも打ち明けた。

デュラントはダイエットに関するウーの考察を聞き流していたが、そのとき、ライス家から百フィートほど離れたところに、黒いセダンが停まっているのに気づいた。[illegible]駐車中の車に大の男が四人坐っているとしたら、その意[illegible]

とはるか以前に決めていたのだ。

二人が車の左前のフェンダーまで十フィートのところに来たとき、セダンの四つのドアがいっせいに開き、黒ずくめの白人の男が四人おりてきた。全員が二十歳以下、似たような黒スポンに黒いスエットシャツ、黒いランニ[illegible]

ウーとデュラントが車のそばに来ると、縁石側におりていた二人がデュラントの左手に位置を占めた。車道側に飛びだしていた二人は急いで車の前部をまわりこみ、[illegible]は笑顔をみせて挨拶した。「こんばんは、諸君」先に立っていた男がためらった。その一瞬の壺をつき、ウーは男の喜丸を蹴り上げた。男はシューと息を漏らし、体を折ってうずくまった。

自分のほうの二人に目を据えていたデュラントは、突きだされたナイフに対して体を下行にするや、ナイフを持った手首をつかみ、親指で神経のつぼを探ってギュッと締めつけた。男は悲鳴を上げてナイフを取り落とし、膝からくずおれていった。デュラントは握っていた手首をはなし、男の頭に蹴りを入れると、飛び出しナイフを拾い上げ、右の尻ポケットから何か取りだそうとしてい

みは彼に何と言ったんだ、ジョージア？　もう台詞を稽古しなおしたことと思うが」

「彼の台詞はこうだったわ。〝わたしは刑事弁護士ではないが、優秀な刑事弁護士たちの話では、恐喝者というのは決して手を引かないということだ〟わたしが言ったのは、〝死んでしまえば手を引くわ〟ということだけ。そこで、昼食が不意に終わったわけね」

「完璧だ。まったく申し分ない」と言って、ウーは腕時計に目を落とした。「ケースとわたしは、あすの朝、その倫理的側面について話し合えるだろう。もう時間も遅くなってきたし、クインシイとわたしは、またこれからエンノ・グリムとミズ・アーリスに会わなくてはならない。明朝八時には、恐喝者と目されるトラム氏が連絡してくることになっている。われわれは一堂に会していたほうがいいだろう、そうだな、七時に朝食の席に」そこでストーリングズを見やった。「朝食には何が期待できるのかな、ブース？」

「コーヒー、ジュース、マクトナルトのエッグ・マフィン」

「素晴らしい」ウーは立ちあがりながら言った。「出かける前に」デュラントがいった。「ジョージアに二つ質問がある」

ジョージア・ブルーはためらいをみせたが、すぐに肩をすくめた。

デュラントが質問した。「ジャック・ブローチが破産、もしくはそれに近い状態にあると疑った理由は？」

「彼のオフィスに掛かってる三枚のドーミエが贋作だと見抜いたのよ」

デュラントは思案顔でうなずいた。「それはいい答えだ。もうひとつの質問だが、彼にした提案のことをわれわれに話した理由は？　話さなければ、非課税の三十万ドルを持ち逃げできたかもしれない」

「わたしか何と答えようと、クインシイ、あなたが信じるはずもないわ」

「それもまた非常にいい答えだ」デュラントは言った。

「あんただかクインシイが言ってたが、ブローチはギャンブルの金をすべて処理してる、そうだな？　つまり、

ローン、光熱費、とにかくあらゆるものを――たぶん、

てるだろう。実際、ギャンブルは金のことなど考える必

百万か五百万かってことだけだ。いいかな？」

ウーはうなずいた。

いものに投資しちまったと仮定しよう。たとえば、株を

産に手をつけちまったのかもしれない。しかし、何も心

長者プロデューサーと結婚することになってる。今後も

に金をせっついてない人間は、ギャンブル本人だけなわけだ。そこでジョージアが、危険のないおそろしく上品な計画を持ちだしたとき、彼がギャンブルから借りたーオーケイ、盗んだ――金のうち、七十万を帳消しにできる可能性を提案したとき、ブローチとしては、もちろん二つ返事で承知するわけにはいかない、考えておこうとも言えない、だが、断わるなんてことは絶対にできっこない」

眉根を寄せてジョージア・ブルーを見つめながら、ブース・ストーリングスがいった。「あんたの提案に対するブローチの反応には実に興味があるんだが、彼はそれをどう受け取ったのかね？　急成長しつつある全国的経済教済サーヴィスの有力会員からの、申し出のひとつにすぎないとでもいったふうに？」

アーティ・ウーが苦笑いして言った。「正確には、き

無視し、直接ウーに向かって言った。「小切手にサインし、二十パーセントのチップを加え、笑顔をみせてこう言っただけね。〝また近いうちにこうした機会を持ちたい〟」

「昼食が始まった時間と、終わった時間は？」ウーは尋ねた。

「わたしが遅れたので、一時十五分にならないと始まらなかった。終わったのは二時」

「そのあと、きみはどこへ？」デュラントが訊いた。

「ショッピング。〈サックス〉で細かいものを、〈ギャップ〉でジーンズとスエットシャツを買ったわ。サンタモニカのある店にも立ち寄り、ケッズの紺の靴を買った。それから車で帰ってきて、ここに着いたのが四時四十五分か五十分。アザカイはもういたわね」

「ジャック・ブローチのことを彼に話した？」デュラントが重ねて訊いた。

「ひと言も」とオウィビイ

そこで、いぜんとして眉根を寄せてジョージア・ブルーを見つめていたストーリングズが口を開いた。「わたしの聞き違いでなければ、あんたは、恐喝者を――ひとりでも複数でも――殺して、ギャンブルをゆすっている材料を取り戻してやるともちかけた。その二つのことを三十万ドルの均一料金でやってやると、そういうことかね？」

違うわ」とブルー。

「わたしに説明させてくれ、ジョージア」ウーが言った。「彼女のしたことはだな、ブース、わたしがしてくれと頼んだとおりのことなんだ　ジャック・ブローチをとことん調べ上げる。そうして彼女は、ブローチとそのエージェンシーが経済的にボロボロなのを突きとめた。どれくらいボロボロなのかは、ジョージアの興味深い提案に対する反応――というか、反応の欠如――から判断できるわけだ。彼はその提案をはねつけなかった。憤慨もしなかった。弁護士のひとりとして、自分は法の番人であると彼女に釘を刺すことさえしなかった――警察を持ちだして脅すこともなかった。わたしにとっては、彼の沈黙は関心の深さを物語っている、というか、叫び立てさえいる。もっとも、用心しながらの関心の示し方になったのは納得できる。何かたくらみか罠があるのではないかと疑ったことだろうし、あるいは、ジョージアが盗聴装置をつけている可能性まで考えたかもしれないからな」

てくれと言ったらどうなるか、と尋ねてみた。あなたに［illegible］彼は何も言わなかった、ひと言も。それはそう意外じゃなかった。そこでわたしは提案した、オーケイ、百万はお出しするから、十万なら集められるね？　イエスなら、ミスター・ブルーは、仲介役に――つまりわたしに――現金百万ドルを用意できたと言えばいい。その三十万と引き換えに、わたしは、有罪に結びつくかもしれないゆすりの材料と、恐喝者か――ひとりであれ複数であれ――今後二度とギャンブルをわずらわせないという個人的な保証を渡すことにする。恐喝者は決して手を引かないという点だから、そんな保証にはたいして信頼が置けない、とブローチは言った。死んでしまえば手を引くわ、とわたしは答えた」

長い沈黙が訪れた。その間、アザガイ・オヴァビイの顔に浮かんだかすかな笑みが広がり、例の堅く邪気のない笑みになった。クインシイ・デュラントは無表情で――堅く結んだ唇が細い線になってはいたが――じっと彼女に目を据えていた。アーティ・ウーは、自分に向かってうなずくように、数度うなずいた。ブース・ストーリングズは生ぬるくなったお茶をカップに注ぎ、砂糖を入れて飲み干すと、カップのへりごしにブルーを見つめていた。

みんな四人を無視して、ジョージア・ブルーは淫を手に取ると、最後の点心を口に運んだ。考え込んでいるかのようにゆっくりと噛み、飲み込むと、箸を置き、リネンで口の両端を軽くたたいた。そうして、椅子の背にもたれかかった彼女は、品よくほほ笑み、ちょっと会話がとぎれたとでもいうかのようだ――誰かが何か気のきいたことを言うのを待っていた。

アーティ・ウーが質問を発し、長い沈黙を終わらせた。

「ミスタ・ブローチの反応は？」

「この時間には、もうアイオニ・キャンプルに連絡するものと思ってたけど」とブルー。「じゃなかったら、彼女の弁護士、ハワード・モットに。あるいは、あなたにかもしれないけど。まだ連絡してないみたいね」

「おいおい、ショーシア」デュラントが言った。「彼の答えは、〝そいつはいい考えだ、ミズ・ブルー〟だったのか――〝いったい何の話なのかわからないし、知りたくもない〟だったのか――あるいはまた、〝口は災いのもとですぞ、お嬢さん〟だったのか？」

「彼がしたことは」ジョージア・ブルーはデュラントを

[illegible]

時間を整理することにしよう」とウーは言い、ふたたびデュラントに尋ねた。「きみがギャンブルを乗せてい[illegible]」

[illegible]方の二度ビリー・ライス邸に行ったのかと。また、彼を撃ったのかとも。どの質問にも答えはノーだった」

「グディスンがアイオニ・ギャンブルに電話してきたの[illegible]」

[illegible]

ウーは天井に目を据えた。「グディスンは三時十三分にギャンブルに電話し、四時十三分には死んでいる」視線がおりてきた。「その事実から何か引きだせる者は？」

[illegible]に目を向けて言った。

「次はきみだ、ジョージア」

ジョージア・ブルーは無表情のまま、感情のまじらない声で言った。「[illegible]ジャック・ブローチの会社はほとんど破産してるわ」

テーブルの上座に坐ったアーティ・ウーは、椅子の背にもたれかかり、頭の上で両手を組んだ。そうして満足そうな[illegible]口を動かした。「きっとその先があるのだと思うが」

「あるわ」とブルー。「まずブローチの銀行を調べてみたら、[illegible]満足して[illegible]そのあと、ベヴァリーヒルズでブローチと昼食をとった。その[illegible]理由を話し、コーヒーが来たあと、ひとつ提案を持ちだしてみたわ」

「きみならとうぜんだな」デュラントが言った。

「最後まで聞こうぜ」とオヴァビイ。

デュラントが肩をすくめると、ジョージア・ブルーは彼をまっすぐ見据えて言った。「ブローチが破産していると考えた理由を話したあと、もしアイオニ・ギャンブ[illegible]

カプリスの黒いセダンが二人を轢き殺そうとした個所に
[illegible]
やめた。
[illegible]
でヒューズとボーリン・グディスンの射殺体を発見し
[illegible]
[illegible]
けが食べ続け、最後の小エビをロブスター・ソースとと
もにスプーンですくい上げていた。
性急な鋭い質問にいくつか答えたあと、ウーは、スト
ーンクスとともに[illegible]ユー・ストア[illegible]に行ったが、何も
発見できなかったことを話した。さらにいくつもの質問
が発せられた。それらに辛抱づよく答えると、ウーは、
同を見まわして尋ねた。「オーケイ。次は誰が報告する
？」
「おれ、だろうな」オヴァヒイが応じて、ドラム缶から
の電話を――電子的に声を変えた男が、ビリー・ライス
殺しを告白しているアイオニ・ギャンブルのビデオテー
プを売りたいと言ってきた話を――ほとんど一言一句た
がわずに報告した。
オヴァヒイが話し終えると、ウ[illegible]が尋ねた。「きみの
お友だちのドラム缶は、あすの朝また連絡すると言った
？」
「八時きっかり」
デュラントがウーを見て言った。「あんたとブースが、
グディスン兄妹を発見したのは何時だった？」
「四時十五分ごろ、じゃなかったかな、ブース？」
「それより[illegible]分早かったかもしれんな」
「たぶん、四時十三分ちょうどとでは？」デュラントが
いった
「たぶん」とストーリングズ。「なぜだね？」
「何か尋常でないこと、特異なことを探してるんだが、
それが見つからないからだな。そのちょうど一時間前の
三時十三分、ヒューズ・グディスンからアイオニ・ギャ
ンブルに連絡が入り、アザガイの新しい電話友だち、ト
ラム缶が売りたがってるのとほぼまったく同じ内容のも
のを売りたいと言ってきた」
「すると、きみはギャンブルとグディスンが交わした会
話を聞いた？」ウーが尋ねた。
「親子電話で」
「彼女は支払いに同意した、のだといいが？」
「彼女は金を都合するのに時間が必要だと言い、グディ

「ちがう」
それなら、なんなんだ？　ぼくはつづけていた。
十分ほどして、ようやくキスは軽快な明るさ、仕方なさ、ゲームのようなキスに変わった。
長いキスが終わると、彼女が言った。
「あれはそういうキスなの？」
「いや、ちがうと思うけど」
「まあ、いい友だちのあいだでは」
「ああ、そうかもしれない」
したり、もうかなりいい友だちになったと思うけれど」

32

閉館四日前の九月の午後、ぼくは、ロビーで、ティートのどっしりしたテーブル。かつて、故ビリー・ライスの指令室だった、広告の出ていない、いくつかある、静かな場所のひとつだ。ぼくは、ある中華料理店〈マンダリン〉風の八十二ドル五十六セントの夕食を囲んで、いた。周囲は、ほとんどいない。中華料理は、ブース・ストーリングズが〈チャイナ・デン〉に注文しておいたものだった。オヴァビイによれば、持ち帰りの中華料理は、

おこう、おれ自身、他人から批判されるのは嫌いだからな」
[illegible]
[illegible]・ヴ[illegible]は[illegible]をすくめた
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
たら、ヴェロントのことをふれるなってことだ」
[illegible]
[illegible]
[illegible]
葉を切った。ウーはボウッと居間を見まわして尋ねた。
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
「わかった」ヴェロントは裸で起き上がると、ベッドを
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
考え、そのうち訊いてみようと心を決めた。
[illegible]
こだ」
[illegible]

見事なやり口。ま、両手に花というやつさ」

「ドラム缶は、恐喝とビデオテープの売りわたしの両方をするだろうということ？」

「間違いない」

「すると、グディスン兄妹の手には一セントも入らない、そうね？」

「もちろん」とオヴァビイ。「あの二人は素人だし、手にあまる大金がからんできてる。二人がやるべきだったのは、仕事をして、十万ドルもらってさっさと帰ることだった。そうしてれば、いまごろどこかで優雅にその金を使っていられたわけだ」

「あのテープのことはどう思った？」

問題にならない、といったようにオヴァビイは頭を振った。「あれは、ろくにやり方も知らない人間の手でつぎはぎされてた。ライスに捨てられてどう感じたか、とグディスンが質問し、殺してやりたかった、とギャンブルが答えるわけだな。次に、グディスンが〝そうしてやった？〟と尋ね、彼女が〝ええ〟と言う。あれはすべて、誰かが大急ぎで接合したのさ」

「連中が有望だと思ってる個所がほかにもあるはずよ」

「もちろんあるだろう。連中はビデオテープを持ってる。録音テープの細工は簡単で、やり方さえ心得てれば、はとんどどんなことでも言わせることができる。しかし、ビデオとなると話は別だ。画面と音声が一致してるわけだし、表情やら目の動き、ボディ・ランゲージやら何やかやがある。それても、腕のいいフィルム編集者の資質があって、最高の仕事をすれば、ビデオテープにも実にいろいろと細工できるものさ」

ジョージア・ブルーは彼をまじまじと見つめた。「あなた、そうした計画をもうすっかり立ててたのね、違う？」

「何を？」

「アザカイの個人フレイ」

オヴァビイは彼女の表情を探っていたが、やがて首を振った。「今回は違うな、ジョージア」

「嘘にきまってる」

椅子のなかで姿勢を変えたオヴァビイは、さらにしばらく彼女を観察してから口を開いた。「おれたちは知り合ってどれくらいになる？」

「わたしの人生の半分」

頭のなかで年月を思い起こし、計算すると、オヴァビイはうなずいて同意した。「あんたにちょっと忠告して

「また連絡する」とドラム缶。

「あすの朝八時。それまでに、試写の段取りを考えとこう。それまでに、あんたに連絡を取る必要がある場合はどうする――緊急事態が生じたときは？」

ドラム缶はふたたび含み笑いを漏らし、「うまい手だ」と言って電話を切った。

オヴァビイが受話器を戻すのを待ってから、ジョージア・ブルーはキッチンの壁の電話に受話器を掛け、居間に戻ってきた。彼女の着ているジーンズと白いスエットシャツは、その日の午後、サンタモニカのウィルシア・ブルヴァールにある〈ギャップ〉で、七分間のショッピング熱に浮かされて買ったものだった。素足にはいているケッズの紺色のスニーカーも新品だった。

オヴァビイは顔をしかめて電話コンソールをにらんでいた。床にあぐらをかいて坐り込んだブルーは、彼を見上げて言った。「どうやってのけるつもり？」

「何だって？」

「あの男をぎゃふんと言わせる話よ」

「簡単にはいかんだろう。あのドラム缶おやじでは」

「ドラム缶ね」とブルー。「気に入ったわ。なぜ出資を変えてたと思う？　録音されるかもしれないと考えたから？」

「もしくは、声のトを感づかれると考えたか」

「気づいたの？」

「いや。あんたは？」

「いいえ。でも、ギャンブルに質問してたのはヒューズ・グディスンの声にちがいないわ。ということは、あのテープは売られたか盗まれた、あるいは、グディスン兄妹が新たなパートナーを引き込んだのかもしれない」

オヴァビイは顔をしかめた。「やつは恐喝の話を出さなかったな？　ドラム缶のことだが」

「出さなかったわ」

オヴァビイの顔が再度しかめられた。見るからに集中して考え込んでいたが、やがてしかめ面が消え、いつもの堅く邪気のない笑みに取って代わられた。「おれが連中、グディスン兄妹だとしたら、どうするかはわかってる。アイオニ・ギャンブルから絞れるだけ絞り上げて、それから誰かを使い――ドラム缶みたいなやつをだな――最高の競り値をつける者にビデオテープを売りわたす」その計画に満足したようにうなずく。「所得倍増、

低い声が言った。「ま、いいだろう。あんたは用心深いってことだ」

オヴァビイは何も答えず、沈黙がつのるにまかせた。そうして待ちながら、電子装置でひずんだ男の声は、まるでドラム缶の底から響いてくるように聞こえる、と考えていた。男は沈黙を急いで終わらせようとはしなかった。長い長い沈黙が続いたあと、ようやく反響する声が言った。「あんたはビデオテープに興味があると聞いたが」

「ものによる」オヴァビイは答えた。

「どういった？」

「品質」

「質のいいものの最高市場価格は？」

「一級品なら、最高十万ポンドまで――USドルでおよそ十七万五千か十八万」

「聞いてくれ」ひずんだ声がいった。

まず、かすかにカチリという、水銀灯のスイッチが入ったような音がした。続いて、イギリス訛りの強い男の声が言った。「名前を教えてください」

眠そうにも疲れているようにも聞こえる女の声が答えた。「アイオニ・ギャンブル」

長すぎる間があってから　テープの接合がへたなせいだ、とオヴァビイは考えた――イギリス訛りの男の声が尋ねた。「ビリー・ライスはあなたと結婚するつもりがなく、『悪徳インディアンの死』の映画化にあたって、あなたを主演にも監督にも起用しないと知ったとき、どういった感情をいだきました？」

今度の間は短く、女の声が答えた。「彼を殺してやりたかった」

「そうしてやった？」と男の声。

「ええ」アイオニ・ギャンブルと名のる女が言った。最後に軽いカチリという音がして、ふたたびドラム缶の底から響くような声が聞こえた。「品質は気に入ったか？」

「ちょっと短いようだが」

「これはほんのさわりにすぎん」とドラム缶。いまやオヴァビイは男にそうあだ名をつけていた。「おれの手元には、同様においしい四十九分三十秒のテープがある。たぶんもっとずっとおいしいだろう。興味は？」

「あるかもしれん」オヴァビイは答えた。「それがただの録音テープでなく、ほんとにビデオで、まず観ることができるなら」

しない声で言った。「あたしにもちょうどあんなふうな

コンテナを出ると、ストーリングズが尋ねた。「さて、どんなふうにお考えですかね、チャン師？」

「二つのことを」とウーは答えた。「ひとつは、誰かは

近アイオニ・ギャンブルに連絡が入るだろうということ。もうひとつは、あんたズボンのジッパーを上げたほうがいいな」

31

取った。ハローと応じると、電子装置でひずんだ男の声が聞こえてきた。「ミスタ・Xをお願いする」

な革張り椅子に坐ったアザガイ・オヴァビイは、三度目の呼び出し音が鳴る寸前に電話

「男の電話を取ることにする」オヴァビイはそう言うと、ショーンア・フォーに目配せし、うなずいてみせた。居間の長いカウチから立ち上がった彼女はキッチンに急いだ。オヴァビイは腕時計に目を落とし、午後五時三分ちょうどであることを確認した。キッチンの壁掛け電話の受話器がカチッとはずされると、彼は言った。「このほうがいい」すると、疲れた雷鳴のような低音の含み笑いを浴びせかけられた。

「誰かに子機を取らせたということか、え？」ひずんだ

あった。「こちらのコンテナには番号がついていると思いますが？」

「ええ、ついてます。それで？」

「ミスタ・ジェファーズの希望は、中学校時代のダイヤル錠の数字と同じ番号なのです」

「右に三、左に四十七、右に二」ストーリングズが歌うように言った。「右に三、左に四十七、右に――」

「頼むよ、フランク」とウーがいうと、ストーリングズはにやりとくんで頭を垂れ、自分の靴をじっと見つめた。

「ミスタ・ジェファーズの希望の番号は――もし空いているならですがね――三四七二なのです　そんなわけまを叶えていただけたら、と切に願っているのですが」

「ご利用期間はどれくらいに？」受付嬢が訊いた。

「二六年までじゃな」とストーリングズ。「その年、わしは百歳になる」

「半年です」ウーは言った。

受付嬢はコンピュータに向かい、数字をたたいた。画面をチラッと確認すると、ウーを振り向き、冷たい笑みを浮かべて言った。「運がよろしいですね。三四七二はこの午後に空いたばかりです」

ウーは満面の笑みをたたえてストーリングズを振り返った。「聞いたかね、フランク？　空いているそうだ。昔なじみの右に三、左に四十七、右に二が」

ストーリングズはおどけた表情を返した。「早く見てみたい。すべてまったく申し分ないか確かめたい」

「ジッパーを上げろよ、フランク」そう言って、ウーは受付嬢に向き直ってささやいた。「半年でいかはどです？」彼が唇に指をあてると、受付嬢はうなずき、メモ帳に数字を書いた。そうして、ウーが読めるようにメモ帳をくるりとまわした。ひと月百ドル・プラス税金とある。

ジッパーを上げ下げするのに夢中になっているストーリングズにちらりと目をやってから、ウーは尻ポケットに手を入れ、くしゃくしゃになった札を取りだすと、赤毛の若い女に七百ドル渡した。

ウーは小声でいった。「釣りはあとでもらいにきます」

受付嬢もささやき声で訊いた。「どこがお悪いんです？」

悲しそうな笑みをみせ、ウーはささやいた。「年でしてね」

鍵にそえてコンテナの位置を示す地図のコピーを手わたしながら、受付嬢はもはやストーリングズの耳を意識

インチール・デスクの向こうから、赤毛の若い女が顔を上げて二人を見つめた。ウーは安心させるように受付嬢にはほえみかけ、ストーリングズの手をはなし、振り向いて[illegible]受付嬢にも聞こえるくらいの声で――注意した。「フランク、ジッパーを締め忘れてるぞ」

ストーリングズは忍び笑いを漏らして見おろし、ズボンのジッパーを上げたが、ウーがすまなそうな笑顔をみせて受付嬢のほうに向き直ると、また引きおろした。受付嬢は気づかないふりをした。

ウーは笑みを浮かべたまま言った。「こんにちは」

受付嬢は笑顔を返さなかった。「ご用件は？」

「わたしはラウンドヒル・メソジスト教会のダドリー・チャンドという者ですが、わたしの信徒会員のひとりのために、保管庫を借りたいと思っているのですよ。しばらくのあいだ――その――休養に出られるわけですが、このミスタ・ジェファーズがその人でしてね。ミスタ・フランク・ジェファーズ。自分が――いないあいだ、身のまわりのものを保管しておきたいということで」

「防水じゃ」ストーリングズが言った。「防水でなくちゃならん。ネズミも入れん場所じゃ。戻ってきたとき、何もかもネズミの糞だらけなんてのはごめんだからな」

[illegible]ている保管庫はありますかね？」当惑の笑みをすかにみせてウーは尋ねた。

「それくらいの広さがご入用なのかによりますが」と受付嬢。「あたくしどもではコンテナ一台ごとにお貸ししてます。それぞれが八・八・四十フィート、二千五百六十立方フィートです。物がたくさんおありなら、便利だと思います」

「いまいましいことに六十五年分の物があるんじゃよ、嬢ちゃん」とストーリングズ。

「コンテナ一台を利用するということで結構です」ウーは言った。「しかし、小さな問題がありましてね」

「小さな、と申しますと？」

「ミスタ・ジェファーズは数字を信じておられる」

「ええと、どういうことでしょう」

「数字じゃよ、嬢ちゃん」ストーリングズが説明した。「数字がわしらの人生を支配し、運命を導き、未来を決めるのじゃ。正しい数字を使えば、運が開ける。生まれしは数字を頼りにしてきたし、いまだ一度として裏切られてはおらんのだよ」

今度のウーの笑顔には心底申しわけなさそうな様子が

「悪の社会にもぐりこんだ覆面警官というのは？」ストーリングズは希望をたくすように言った。

「オーケイ。われわれは覆面警官だ。あんたは好色爺さんに、わたしは太った中国人のポン引きになりすまし、十二歳の半処女二人との午後の官能的な喜びへとあんたを案内している。あの黒いンボレーに乗っていたのが誰であれ、われわれのことをそう考えたのであれば、素通りしていくはずだ。しかし、そうはしなかった。すると、その意味するところは？」

「彼がこっちを知っていただけでなく、こっちもまた彼を知っていた。少なくとも、われわれのどちらかが」

「もしくは、彼女を」とウー。

「どうもご婦人のことは念頭から抜けてしまうが、なるほど、モーテルの二人のあの銃創は小さかった。たしかに、女性専用主義者か〝婦人用拳銃〟と呼んでいるものを連想させはする」

「おそらく、ここから五口径の〝ヴォルヴァー〟それはまた、プロの殺し屋が愛用する拳銃でもあるが」

「なぜ小型のセミオートマチックではない？」

「薬莢がなかった。探してみたが」

「彼もしくは彼女が拾っていったのかもしれん」とストーリングズ。「二個だけでいいわけだからな」

ウーは溜め息をついた。「かもしれん」

助手席の窓からストーリングズは外に目をやり、機械工場についていた通りの番地を見て言った。「二ブロック先の右側のはずだ」

「よし」

「どう演ることにする？」

「わたしに合わせてくれればいい」ウーは言った。

メルセデスからおりる前に、ウーはストーリングズのネクタイを借りてつけた。ストーリングズは、ウーの勧めに従って、シャツの第一ボタンを掛けたままにしておき、これもやはりウーの勧めで、ズボンのシッパーをおろした。

ユー・ストアンの事務所は小型の移動住宅のなかにあった。保管庫のほうは船用の金属コンテナで、有蓋貨車ほどの大きさのものが、赤、青、緑、黄の派手な色に塗られて並んでいた。ウーの目算では、少なくとも二ダースのコンテナが専有していた。

ストーリングズの左手を取って引きながら、ウーは階段を三段登って移動住宅の事務所に入っていった。灰色

が訊いた。
「おそらく」
「テープはまだそこにある？」
「おそらくないだろう」
「なぜそう考える？」
「あんたと同じ道筋をたどってさ、ブース。犯人は二人のどちらかを撃ち殺した。そうして、残ったほうに、テープの隠し場所を教えれば撃たないと約束した。生き残っていた彼または彼女は、すっかり話して、撃ち殺された」
「すると、あとで死んだほうの最期の言葉は、言葉ではなく、番号だったわけだな」
「そうではないだろう」とウー。「たぶん最期の言葉は、〝お願い、撃たないで〟、〝お願い、殺さないで〟、あるいはたんに〝お願い〟だったかもしれん」そこで部屋のドアに向き直った。「行こう」
「死んだ二人はどうする？」
「事務所に寄って、ディースンに五百ドル払って言えばいい、グディスン兄妹は――ここでは何て名前だったかな？」
「……」
ウーはうなずいた。「カーター夫妻は外出したらしいと。夫妻が戻ったら連絡してもらいたいと言って、名前の偽電話番号を教えておく」
「二人を撃った男が、あの若いリムジン運転手も殺したわけだな？　グディスン兄妹をどこに送っていったか言わせて、それから喉を掻っ切った」
「犯人が男だと、なんでそう確信が持てるのかな？」ウーは言った。
「……」
ズが覗きだした方角を頼りに、〈ユー・ストア〉に向けてオクスナードを突進していたとき、二人の頭に同時に同じ考えが浮かんだ。
「あの黒い車の運転手は――」まずストーリングズが考えを口に出した。
「われわれを知っていた」ウーがあとを引き取った。
「少なくとも、われわれの一方を」
「われわれを警官と思ったのでなければ」
「警官には見えんさ。あんたは年を取りすぎてるし、わたしは、ま、あまりに風変わりだ――とりわけ、靖の近くまでシャツをはだけているわけだから」

「なら、ここにいたらいい、わたしがのぞいてくる」ウーが言った。

「死と俯瞰と糞のにおいは気にならんのか、アーティ？」

「あんたのおしゃべりほどには」

「神経がたかぶると、口が勝手に動くもんでな。仏さもやいない、神経がたかぶってるだけだ、仏さると、黙りこくることになる」

「ここにいてくれ」ウーは部屋を横切っていった。バスルームのドアをあけ、なかをのぞくと、振り返って言った。「見にきたほうがいいな」

まず女の姿がストーリングズの目に入った。シャワー室の向こうの隅に、両膝を立てて胸に引きよせ、うずくまっていた。白いブラウスに黒いジーンズ、素足に黄褐色のサンダル。鼻梁のすぐ下に小さな丸い穴があいていた目は開かれたままだ。

男のほうは洗面台と便器のあいだの壁にもたれてしゃがんでいた。両手を膝にのせ、顔は天井に向けられている。左のこめかみに丸い穴があき、目はやはり開かれていた。こちらは口も開いている。

「ほんとによく似てるな、え？」ストーリングズから言った。

「瓜ふたつだ」

それまで息を詰めていたストーリングズは、鼻を二度クンクンいわせると、口で呼吸しはじめた。「まったく、嫌なにおいだ」

「指紋を残すなよ」ウーが注意した。

そんなつもりはないとも と答えて、ストーリングズは尋ねた。「われわれは二人を見つけたわけだが、さてこのあとどうする？」

ほかに何か見つかるか調べてみよう」

二分後、ストーリングズは、くず籠に入ったダイエット・コークの空き缶四個のトに、コンピュータで打ちだされた領収書がくしゃくしゃになっているのを見つけた。ハンカチを使って空き缶を取りだすと、領収書を指でつまみ上げ、皺を伸ばして読んでからウーに渡した。それは、〈ユー・ストア〉というオクスナードの会社が発行した領収書だった。領収書を判読したウーは、グディスン兄妹は鍵つき保管庫を百六ドル五十セントでひと月借りたようだ、と言った。現金払い。保管庫の番号は三四七二。

「そこにテープを隠したと思うかね？」ストーリングス

はたいして気にしていなかった。突進速度は、ウーによれば時速三十マイル、ストーリングズによれば時速五十マイル。

二人が左手に激突すると、黒いカプリスもそちらに向かってきた。まず、ストーリングズが駐車していた二台の車のあいだに跳び込み、よろめいて、四つん這いになって倒れ込んだ。ウーも左手に大きく跳んで、ストーリングズにつまずいて倒れたが、すぐにまた跳び起きて、二台の車のあいだを急いですり抜けていった。そうして、右折して通りに姿を消していく黒いカプリスをちらりと目に捉えたのだった。

ストーリングズのもとに駆け戻ってきたウーは、手を貸して立ち上がらせた。「骨折してないか？」

「自尊心を少々傷つけられた。ナンバーは見たのか？」

「いや」

「違中だと思うか――グディスン兄妹だと？」

ウーは肩をすくめた。「調べにいこう」

モーテルのU字形の窓に向かって歩きながら、ストーリングズはアスファルトですりむいた左手にハンカチを巻きつけた。四二四号室に着いてみると、黒いセダンは

[illegible]

がわかったが、二人とも驚かなかった。

ウーは部屋の鍵を手にしていたが、「まずノックしてみよう」と言った。

「何のために？」

「礼儀に反しはしないさ」

ストーリングズが傷ついていない右手で黄緑色のドアをノックした。応答がないので、一歩しりぞき、ウーに鍵であけさせる。まずウーが入った。続いて入ったストーリングズは、後ろ手にドアをしめ、部屋の空気を嗅いだ。

「においか？」

ウーは黙ってうなずいた。

「硝煙のにおい」ストーリングズは言った。「ということは、誰かが銃の引き金を引き、誰かを撃ったということだ。で、もし誰かが撃ち殺されたとするなら、次に嗅ぐにおいは、漏れでた糞尿のにおいということだな。戦争以来、硝煙のにおいを嗅ぐと、いつでも次に糞のにおいを待ち構えるようになってしまった。なぜか知らんが、[illegible]と糞のまざったにおいを――また嗅ぐことになるとわかっている」

そうだな？」

「とくにテレビは」とディースン。

「心配するなって」ウーはドアに向かって頭をしゃくり、

こうぜ」

30

アーティ・ウーがのちに語ったところによると、その車はシボレー・カプリスの黒いセダンだった。ブース・ストーリングズの話は、一九三二年から四二年のあいだに製造されたアメリカ車ならすべて車種がわかるが、最後の車はもう区別つかないということだった。しかし、その黒い車がセダンだった点と、時刻は午後四時十二分、西空に傾いた二月の陽光がフロントガラスにまぶしく反

顔を確認することができなかった、という点ではウーと同意見だった。

黒いセダンは、ウーとストーリングズが四二四号室に

いちばん奥まった場所からバックで出てきた。その車がスピードを上げ、役らのほうに向きを変えるまで、二人

「わしとここにいるわしの共同経営者ミスタ・チャンが、[illegible]それから、宿の主人――あんたのことだな――そちらの請求書もきちんと払わせるようにする。そのあと、外に停まっているあの黒いメルセデスに二人を乗せ、警察署[illegible]心を決める過程の一部なのだろう、とアーティ・ウーは見てとった。

四二四号室、ディースンが言った。先週の金曜からいる、イギリスのマンチェスターから来たレジナルト・カーター夫妻、と宿帳にはある。どうやって来たのかは知らんが、車は持ってなかった。そんなふうな客はどうにも気に入らんよ。大きなスーツケース一個とキャンバス地の小型バッグを二個。ほかには何もなし。しかし、いいかね、おれは損をするのはごめんだ。連中は現金で三日分前払いした。おれが欲しいのは残りの宿賃と、あ[illegible]ら、あとはどうとでも好きにしてくれ」

「誰もがあんたみたいに公共心に富んでいるといいのだが、ミスタ・ディースン」そう言って、ストーリングズはウーを振り返った。「ご主人に謝礼を差し上げてくれんか、ミスタ・チャン」

ウーは仏頂面になった。二人がほんとに関係があるか、見てからにしたほうがいいと思うがね。鍵をもらったほうがいいだろう。二人の不意をついたほうがいいと思う。で、間違いないとなってから、五百ドル渡したほうがいいと思うがね」

ストーリングズはもっともだというようにうなずいた。

「このミスタ・チャンは、この種の経験を豊富に積んでいるもんでな。ということだから、ミスタ・チャンの言うように、四二四の鍵を彼に渡してもらったほうがいいようだが」

ディースンは返事をしなかった。ふたたび下の歯の前に舌を走らせると、半分体をまわし、区分された棚のひとつから鍵を取りだした。それをカウンターに置くと、すばやく後ずさって言った。「何であれ壊されては困る、いいかね？」

ルに――あんたのとこではないんだが――チェックインする直前、うちの協会員に二十ドル渡して、ウィスキーを一本買ってきてくれと頼んだのだな」

「で？」

「で、うちの好青年は気持ちよく使いを引き受け、もよりの酒屋に向かった。ところが、酒瓶を持って戻ってくると、夫婦者は姿をくらませていた。チェックインもしていない。というわけで、うちの好青年は二百三十五ドル焦げつかせてしまった。二人をロスじゅう乗せて、ここまで送ってきた料金だな」

「そいつは気の毒な話だ」

「問題はだな、ミスタ――？」

「ディースン」

「問題はだな、ミスタ・ディースン、わしらの組織の役割は、その種の出来事が絶対に起きないようにすることにある点なんだ。わしらはその二人の盗っ人を――どう考えても盗っ人なわけだ――告訴して、できるだけ重い刑を与えてやりたい。しかし、メキシコ系のリムジン運転手が二百ドルばかり乗り逃げされたくらいでは、警察も熱を入れてはくれんのだよ。そこで、わしら独立リムジン運転手協会では、その泥棒夫婦に関するどんな情報にも、現金五百ドルの謝礼を出すことにした。二人の逮捕や有罪に結びつかなくとも結構、現在どこにいるかという情報だけでかまわんのだが」

「二人の名前はわかってるのかね？」ディースンが尋ねた。

「わかっているとも、ご主人。本名はヒューズとポーリン・グディスン」

ディースンはカウンターの宿帳に目を落としたが、ストーリングズに目を戻し、残念そうに首を振った。「その名前の客はいないな」

「二十代後半から三十代前半なんだがね」ストーリングズは説明した。「二人ともブロンド、実のところは兄と妹なので、そっくりなんだが、夫婦で通している。言葉に強いイギリス訛りがあるんだが？」

ディースンの表情に変化が生じた。まぶたが垂れ、すぼまった唇にずるそうな笑みが浮かんだ。「イギリス訛り、と言ったかね？」

「イギリス英語」

「二人とも背が高く、痩せていて、ブロンド？」

「まさしく」

「彼らをどうするつもりなんだね？」

白いシャツのボタンをなかほどまではずして胸をはだけ、

にかけ

ウーの答えだった。ストーリングズのほうは灰色のスーツに白いシャツを着て、えび茶色の水玉模様の入ったダークグレイのネクタイを締めていた。

九軒目のモーテルでレンタルのメルセデスからおりる

名刺を渡

てきた」

「ここで幸運にめぐり会えるかもしれんさ」と言って、ウーはモーテルの事務所に続く道をたどっていった。

ウ・ウ・ハス・イン　とだけ書かれた名刺の重なった個人経営のモーテルはかなり寂しく、小さなカフェがあり、同じようにちっぽけなプールをもつ、ていた。ウーの見たところ客室数は二十数室　受付カウンターには五十代後半のずんぐりした男がいた　細くて細い灰色の髪、二重焦点レンズの眼鏡。疑い深そうにすぼまった唇は、モーテルの所有者兼経営者の多くが、仕事を始めてほんの一年かそこらで身につける特徴のようだ。男はちょっとウーを見つめたが、宿泊の可能性はないと判断し、カウンター

ご用は？」男は鼻にかかった声で言った。何か売りつけられるものなら売りつけてみろといった調子だ。

「少々」とストーリングズは答え、残り少ない名刺を一枚渡した。自称ヘジェローム・K・ウォルターズ／独立

ムシン連転手協会・

の名刺だ

男は名刺に目を落とすと、彼に返して言った。「うちではリムジンを呼ぶことはめったにないね」

ストーリングズは上体を起こし、事務所内を見まわすと、納得したようにうなずいて言った。「あんたが呼ぶとは考えてなかったさ。わしらが来た理由は別のところにある」ふたたび室内を見まわしてから、灰色の髪の男のほうに身を乗りだし、そっと秘密を打ち明けるような調子で言った。「わしらはここに、調・査に来ているのだ」その響きがたまらないとでもいうかのように、〝調査〟という言葉をゆっくりといとおしそうに発音する。

男はカウンターの彼ろで顔をしかめた　一何の調査に？」

ーリムシン所有者兼連転手の協会員のひとりが　メキシコ系の好青年なんだがね　ある夫婦者をロサンジェルスからここまで送ってきた。その夫婦が、あるモーテ

29

十三年ほど前のアーティ・ウーの記憶だと、オクスナードは農業に依存した小さな町で、メキシコ色が強く、市長は日系人だった。しかし、二十四軒あるモーテルのうち四軒をブース・ストーリングズとともにぶっきらぼうに訪問してから、観光案内書を読んでみると、オクスナードはさまざまなビジネスの拠点に変貌していることがわかった。案内書には、いくつもの工業団地、五〇年代、六〇年代のスポーツカーを集めた新しい博物館、比較的新しい旅客列車の駅――ストーリングズの主張するところでは、一九四〇年以降、合衆国で造られた唯一の旅客列車の駅　といったものが誇らしそうに記載されていた。

二人が九軒目のモーテルに着いたのは午後四時近かった。ウーのいでたちは青いブレザーにカーキ色のズボン、

工面できたら？」

「また気くなったみたいだね、アイオニ」

「オーケイ。そっちが連絡してくる。でも、はっきりさせておきたいことがあるの、ヒューズ。あんたはクズ野郎だし、あんたの妹は保証書つきの変態だから、どちらもそばに近よってもらいたくない。だから、もしお金が工面できたら、誰かに届けてもらうことにするわ。その［illegible］ずよ」

「誰だい、その男は？」グディスンが訊いた。〝男〟というところで声が割れかけた。

「誰が男の人だと言った？」そう言って、アイオニ・ギャンブルは電話を切った。

デュラントがキッチンに戻ってくると、ギャンブルはもとの椅子に坐っていた。頭を垂れ、テーブルの上で両［illegible］

「よくやった」と言うと、デュラントは坐り、スプーンを［illegible］

彼女の顔が上がった。「ほんとに？」

「まったく申し分ない」

ギャンブルは妙な目つきでキッチンを見まわした。これで見納め、とでもいうかのようだ。「これを売らなくちゃならない」

「何を？」

「この家」

「なぜ？」

「聞いたでしょう。わたしが買わなければ、ミスタ・XだかYだかZだか知らないけれど、そっちに売るって。ゴシップ屋たちに。この家を売らないかぎり、現金で百万ドルなんてそろえられやしない」

さらにスープをふた口飲み、その味に感心するようにうなずいてから、デュラントは言った。「グディスン兄妹がほかの人間にテープを売ることはないし、きみは一セントも支払うことはない」

アイオニ・ギャンブルは乾いた目で疑わしそうにデュラントを凝視していたが、やがてスープ皿を引き戻して、飢えたように飲みはじめた。しばらくして、顔を上げて［illegible］

っておいてもらいたいんだ」

「つまり、何本コピーしてあるかしれたもんじゃないテープの一本を、わたしに売りたいというわけね」

「とんでもない。ポーリーとぼくは危険を避けるタイプなんだ。危険を冒す人間じゃない。誰であれ、ぼくたちの高い値を出す人間は、オリジナルを買うことになる。コピーはないんだ。一本も」

「でたらめよ」

グディスンはクスクス笑った。「何を信じようとあなたの勝手さ。でも、もう一度言うけど、テープはこれ一本しかない。たった一本だけ」

「いくらなの？」ギャンブルが訊いた。

「百万――ドルだよ、もちろん。現金で」

「わたしには買えないか、買うのを拒否したら、どうなるの？」

「そのときは、いちばん高い競り値をつけた人間に売ることになるな。きょう耳に入ったばかりの話だけど、ミスタ・Xなる謎の人物がこの町に来ていて、ま、いけないことをした人間が、罪を告白してるようなビデオテープを探してるってことなんだ――まさしく、ぼくたちが売ろうとしてるようなやつさ」

「テープは一本しかないって言ったわね」

「録音テープが一本――それとビデオテープが一本。あのビデオカメラってのは素晴らしい発明品だね。でも、あなたはそれを二本とも、さっき言った超特価で手に入れられるわけさ」

「二十五万ドルなら買うわ」

「鈍いんだね、アイオニ」

「五十万」

「悪いけど」

「オーケイ」長い溜め息をつきながらギャンブルは言った。「百万――でも、それだけの現金をそろえるには時間がいるわ」

「四日あげるよ。それ以上はだめだ」

「四日でそろえられなかったら？」

「あなたにはできるってわかってるんだ」とグディスン。

「でも、その気がないというのであれば、ミスタ・Xに連絡を取らざるをえないな。すると、世界中の人たちが、それぞれお気に入りの椅子に坐って、映画スターのアイオニ・ギャンブルが、哀れなビリー・ライスを殺したと告白する場面を見守ることになるわけさ」

「どこに連絡したらいいの、それだけのお金をなんとか

「名前を押しあて、アロ、と呼ぶ」エルサルヴァドル人の家政婦を完璧にまねたものにちがいない、とデュラントは思った。

その後十五秒近く受話器に耳を傾けてから、キャンベルは言った。「少々お待ちください」今度もアクセントは完璧だった。

彼女は右手で電話を指さしてから、同じ手で居間に続く廊下を指さした。デュラントはうなずいて立ち上がり、急いで居間に入っていくと、親子電話の受話器を右手で取りながら、腕時計に目を落とした。午後三時十三分。受話器を右耳に押しあてたとき、「どなた?」というアイオニ・ギャンブルの声が聞こえてきた。

「この声に聞き覚えあるんじゃないかな、ダーリン?」イギリス人のテノールが響いた。

「ヒューズね、ろくでなしが。いったい何があったっていうの?」

「ポーリーとぼくは身を隠したんだ――選択肢を検討するためにね」ヒューズ・グディスンが言った。

「なぜわたしに電話を?」

「あなたが最良の選択肢だとの結論が出たからだよ――もっとも、ほかにもまだいくつかの選択肢があるんだけどね」

「何を言っているのかわからないわ」

「そんなはずないさ、ダーリン。それに、これから流すテープを聞けば、完璧に理解してもらえると思うよ。深い催眠状態におちいっているあなたが、ポーリーとぼくに話した内容をね。もっとずっと長いテープのほんの一部なんだけど、それでも、見本としたらかなりのものだよ」

続いて聞こえてきたのはギャンブルの声だったが、テープと電話を通してなのでくぐもっていた。ふだんより低い、ほとんど抑揚のない声で、「わたし、彼を殺してやりたかった」と彼女は言った。

次に、やはりくぐもったヒューズ・グディスンの声が問いかけた。「ビリー・ライスを?」

「ええ」

「そうしてやった?」グディスンの声が尋ねた。

長い沈黙。やがてギャンブルの抑揚のない声が答えた。

「ええ」

「というわけさ、アイオニ」グディスンの生の声がした。「いま聞いたテープ、四十九分三十秒のテープをそっくり、喜んで、あなたにお譲りするつもりでいることを知

心ひかれるメニューだ、とデュラントは答えた。

スコッチのオンザロックを片手に、キッチン・テーブルを前にして坐ったデュラントは、アイオニ・ギャンブルがグレート・ノーザン印の大きな豆の缶詰をあけるのを見つめていた。彼女は缶詰の中身を鍋にあけると、弱火でレンジにかけた。ニンニクをいくつか取りだし、続いて大きなタマネギを一個見つけだすと、半分に割って外皮を取り除いた。ニンニクの外皮のほうは気にしない。小さなフライパンでバターを溶かしたあと、ニンニクとタマネギをクインナート社製の小型フード・プロセッサーにほうりこんで二度作動させた。さらにもう一度作動させてから、みじん切りにされた中身を、シューシューいいはじめているバターのなかに落とす。ニンニクとタマネギがきつね色になったところで、バターも含めてすべてスプーンですくい上げ、グツグツ煮えている豆のなかに入れる。そうしてから混ぜながら、塩と少量の水を加え、コショウをたっぷり振りかけ、タバスコを一、二滴落とす。ローリエを入れ忘れるところだったが、最後の瞬間に投げ入れた。香りをつけるというよりレシピを完成させたという感じだ。

スープ皿、ナプキン、スープ・スプーンをそれぞれ二つと、パン屋でスライスしてもらったライ麦パンの黒い塊りを取りだす。そうして、スコッチのほかに何か飲みたいかとデュラントに尋ねた。いや、結構、と彼は答えた。

スープを出して腰を落ち着けると、ギャンブルはスプーンを手に取って言った。「このレシピは、昔、とても若くしてロサンジェルスから一期だけ下院議員に選出された人に教わったものなの。その人、最後に聞いた噂だと、リスボン郊外で半永久的な亡命生活を送っているという話だけれど」

「チャフ・タンシー」そう言って、デュラントはスープを味わった。

彼女は口から数インチのところでスプーンを止めた。目が大きく見開かれる。「彼を知っているの？」

「何年も前に、アーティとおれはメキシコで偶然彼と出会った。たしかに、チャブは心得てたな……いろいろ手際のいいやり方を」

「あなたたちいったい何を――」

キッチンの壁にかかった電話が鳴り、その質問は中断された。ギャンブルは電話のところに立っていくと、受

ルセデスを進めながら、デュラントは、二十代前半の健康そうな男女が六、七人かたまっているのに気づいた。

・シューズ姿で、しかも汗をかいている。

ュラントが訊いた。

「昼夜をとわず」とギャンブル。「峡谷の底から百八十

いるし、一度に二段ずつ登り降りする人さえいるわ」

〝若さとはうらやましい〟ということ以外言葉が見つか

ると、わたしも同じ気持ちになるわ。しかも、あなたはわたしより十歳上だし」

「十五といったところだろう」デュラントは言った。

そのあと一ブロックほど二人は黙っていた。ギャンブル邸のドライヴウェイに折れて入り、車が停まったところで、彼女が尋ねた。「ベントタールというのは阿片みたいなものかしら？」

「なぜ？」

「もしそうなら、イギリスが中国相手に阿片戦争を起こした理由がようやくわかった気がする」

「多幸症の市場を独占するためかな？」

「もちろんそうだけれど、わたしが歯医者さんで感じた

感じたのは、そうね、完璧な陶酔」

よう」とデュラントは言い、エンジンを切って、キーを

は？」

ギャンブルは首を振った。「ときどき軽いうずきがあるだけ――でも、わざわざ起きだしていって、アスピリンを二錠飲むほどのことはないし、と考えてしまう程度のものね」助手席のドアを開けた彼女は、そこで手をとめて言った。「なかに入って一杯どうかしら。それと、上院のレストランのをまねたほとんど即席の豆スープは？」

28

そのとき、歯科技工士が不意に入ってきて尋ねた。

「意識が戻ってきてます？」

「そうらしい」とデュラントは答えた。

「ちょっと見てみましょう」彼女はギャンブルの上に身

た。「ミス・ギャンブル？　聞こえますか？」

まったく順調に」

「驚いた、あのベントヤールについてのはすごい薬ね」

そのあたりの通りは、右側に立ち並ぶ家屋の住人たち

まで行った。急カーブを、逆方向に折れたあと、アデレー

えど車通なまになっていて、緑合、山歩、太平洋が一望

のあとに見はるかせた。

一方通行の区間が終わるところに白塗りの鉄柵が

「あの日、きみはビリー・ライスの家に二度行ったのかな」

「二度目は夕方お夜に、二度目は深夜一人に」

「いいえ」

「十五年目に話かけきみの車を借りたかい」

「ええ」

「ああ、思い出した、君は開いたままだ」

「ああ、二度目、ビリー・ライスの家に行ったのかな」

「二度目は夕方お夜に、二度目は深夜一人に」

「いいえ」

「十五年目に話かけきみの車を借りたかい」

「ええ」

「ああ、思い出した、君は開いたままだ」

レーキ・ペダルを踏んだまま、デュラントはギアをローに入れると、ふたたびエンジンをふかし、ブレーキから足を離した。

太いリア・タイヤでアスファルトを噛みしめながら、メルセデスはすさまじい勢いで飛びだした。急加速の反動でデュラントとギャンブルはシートに釘づけになった。500SLはゼロ発進七秒弱で時速六十マイルに到達できる、とデュラントはどこかで読んだ覚えがあった。正当な宣伝文句のようだ。

カメラマンの列がゆらぎ、不意に大部分が右側に――助手席側に――飛びのいた。アッという間に走り抜けていったロードスターを狙ってシャッターを切る時間は、一秒となかった。ギャンブルはまっすぐ前方を凝視していた。カメラマンたちがヴァンや車に駆けよったころには、メルセデスは角を曲がって消え、セヴンス・ストリートを南に疾走していた。

アイオニ・ギャンブルの目的地は、ウィルシア・ブルヴァールとサンヴィセンテ・ブルヴァールの南西角の診療所だった。デュラントは、サンヴィセンテを東進するという最短距離をとらずに、三車線の脇道を走り、ほとんどの交差点ごとに南か北に折れながらも、つねに東に向かい続けていた。

ようやくアイオニ・ギャンブルが口を開いた。「道を知っているみたいね――かなりよく」

「ウー夫妻が昔サンタモニカに住んでいたんだ」

「あなたは？」

「マリブに――パラダイス・コーヴ」

「お酒の密輸船が荷をおろした場所ね。禁酒法の時代に」

「それで儲けるには、生まれるのが五十年ほど遅かった」

「すると、七〇年代にいたわけ？」

「七〇年代後半。ほんのしばらくだったが」

「ロントンにはどれくらい？」

「五年近く」

「気に入っている？」

「まだ結論は出てないな」

「ねえ、歯医者さんがどんなに文句を言おうとも、向こうにいるあいだ、片時もそばを離れないでいてほしいの」

「何もしゃべりはしないさ」

「どうしてわかる？」

ストーンランドだ。

秘書のメアリ・ジョーに言ってください」モットは言った。

「ブロンドさんね？」

「ルネットのほう」

ウーが立ち上がった。「ほかに何か？」

モットはうなずいた。

連絡してきたら？」デュラントが訊いた。

ジェニー・アトリスが。彼女と

二人を逃えにいく必要はない。リムジンが手配してあって

のほうが関係者全員にとって都合がいいだろう、というのが彼女の考えだ」

「彼女は、二人の夫る言葉を言っていた？」とデュラン

モットはうなずいた。「グリムは、あんたたちが彼の金をどう使っているのか知りたいらしい」

ていた。二台のヴァンと五台の車でやってきた彼らは、アイオニ・ギャンブル宅からブロックと離れていない

に陣どっていた。彼女言にギャンブルを乗せたデュラントは、黒言言然のメルセデス500SL・ロードマスターをバックでドライヴウェイから出し、カメラマンたちの待ち構える台に向けて進めていった。敵ではないにせよ、一五言者とみなす連中の数を彼は自動的に数えていった。十七人、なかの五人は女。ビデオカメラで武装した人が六人、残りは三十三ミリ・カメラを一台以上持っている。みな一様に若く、みすぼらしい。カモメのようにほとんど見分けのつかない連中だ、とデュラントは結論を下した。

「わたしどうすべきかしら　下に隠れる？」ギャンブルが言った。

「無視すればいい」

デュラントは逆りの真ん中でメルセデスを止めると、ギアをニュートラルに入れ、エンジンを毎分三千回転までふかせた。十数ヤード言方では、フリーのカメラマンたちが騒ぐことなく路上に出てきて、ゆっくりした一列になって道幅いっぱいに広がった。古足でしっかりブ

た。「まず誰が報告を？」

「あんたでは？」全員が腰をおろしたところで、デュラントが言った。モットはソインベットの片方を取り払った空間に置かれたデスクの椅子に、ウーはストーリングズと並んでベッドに坐った。デュラントは窓の下敷居に軽く尻をのせた。

モットは、喉がカラカラだといわんばかりに、にールなコークとボトルから飲んでから言った。「問題がひとつある。低俗なメディアがアイオニの家を見張っているんだが、彼女は歯医者に行かなくてはならない」

「シャック・ブローチの仕事のように思えるが、スーパー・エージェントの」とデュラント。

「彼は、あんたたちのミズ・ブルーと長い昼食の最中なんだ。少なくとも、彼の秘書はそう言っている」

「半年ごとの定期検診ではないということかな？」ウーが確認した。

「膿瘍ができるまに、埋伏している親知らずを抜かなくてはならない」モットは説明した。「自分で運転していくこともできるが、麻酔薬ペントタール・ナトリウムで眠らせることになるらしい。歯医者は帰りの運転をする者がどうしても必要だと言っているし、アイオニも、誰か信頼できる者がそばにいて、彼女が言うところの〝自白剤〟の影響下で口走ることを聞いていてほしいと言い張っている」

「約束の時間は？」デュラントが訊いた。

「二時」

「おれが乗せていこう。彼女の車が押収されていなければ」

「いない」とモット。

「ほかに何か、ハウイ？」デュラントは訊いた。

「警察か囚器の――例のヘレッタ・セミオートマチックの――前所有者を突きとめた。パラマウント・スタンオたということだ。九年前、ある映画のセットから盗まれた。幸いなことに、その年、アイオニはパラマウントでは何もしていない」

「どんな映画だね？」ストーリングズが尋ねた。

「ヘレヒ映画の見本ビデオだったが、どのネットワークでも採用されなかった。題名は――とかいった。台本のコピーと出演者およびスタッフ全員の名前は手元にある。見本ビデオそのものも手に入ったが、関係者のうち存命中の者は全員、保安官の事情聴取を受けたという話だった」

ウーとデュラントが答える前に、モットが言った。
「二人はビールのほうがいいのでは？」
「面倒でなければ」デュラントが答えた。
「分かりました。ご面倒なことになるかもしれないが」そう言い残して寝室を出たモットは、ドアをそっと後ろ手に閉めた。
ハワイは、聞くべきでないかもしれないことは聞きたくないんだろう、ストーリングスがいった。
「それはどんなことかな、ブース？」ウーが訊いた。
「おまえさんたちには新しい車を借りた――黒のメルセデスのセダン、560。電話までついてるやつだ。ローザ・アリシア・チャヴェスには、独立リムジン運転手協会の哀悼の意とともに、二千ドルの支払い保証小切手を渡した。大いに感謝してくれたし、未来の夫を殺した二人組のことは決して許さないと話してくれたよ。とりわけ、太った大男、彼女の言葉を借りれば、〝大きな中国人〟のことは忘れやしないと」
「おれの人相はどんなふうに言ってた？」とデュラント。
「背が高く、色の浅黒い、怖い顔の男」
「グディスン兄妹のことは？」ウーが尋ねた。
「死んだ婚約者から彼女が聞いた話は、グディスンはどちらも撮られたがっていたということ、おおいに決めかねていた日時に、トハンカ・キャニオンの例の朝食つき宿に二人を迎えにいき、オクスナードのモーテルまで乗せていったということだけだった。モーテルの名前は聞いてなかったので教えられなかった。オクスナードを地図で調べてみたら、マリブから海岸道路を三十マイルほど北に行ったところだな。町の観光協会に電話してみたら、モーテルは二十四軒あるということだった」
「アザガイのほうは？」デュラントが訊いた。
「最後に入った連絡では、人道にはずれたことをしてる連中を映したホームビデオを求める、景気のいいマーケットがあるという噂を広めているそうだ。ガーデーナのポーカー場から始めて、あちこち寄りながらこっちに戻りつつあるということだった」
「オクスナードか」ウーはストーリングズに言った。
「この午後、あんたとわたしで行ってみて、モーテルを何軒か調べてみてはどうかな？」
ストーリングズがうなずき、何か言おうとしたとき、ドアが開いて、ハワード・モットが栓を抜いたメキシコ・ビールを三本手にして入ってきた。一本を手元に残し、あとの二本をウーとデュラントに手わたすと、彼は訊い

た。「まず誰が報告を？」

「あんたでは？」全員が腰をおろしたところで、デュラントが言った。モットはツインベッドの片方を取り払った空間に置かれたデスクの椅子に、ウーはストーリングズと並んでベッドに坐った。デュラントは窓の下敷居に軽く尻をのせた。

モットは、喉がカラカラだといわんばかりに、ビールをゴクゴクとボトルから飲んでから言った。「問題がひとつある、低俗なメディアがアイオニの家を見張っているんだが、彼女は歯医者に行かなくてはならない」

「ジャック・ブローチの仕事のように思えるが、スーパー・エージェントの」とデュラント。

「彼は、あんたたちのミズ・ブルーと長い昼食の最中なんだ。少なくとも、彼の秘書はそう言っている」

「半年ごとの定期検診ではないということかな？」ウーが確認した。

「膿瘍ができる前に、埋伏している親知らずを抜かなくてはならない」モットは説明した。「自分で運転していくこともできるが、麻酔薬ペントタール・ナトリウムで眠らせることになるらしい。歯医者は帰りの運転をする者がどうしても必要だと言っているし、アイオニも、誰か信頼できる者がそばにいて、彼女が言うところの〝自白剤〟の影響下では走ることを聞いていてはしいと言い張っている」

「約束の時間は？」デュラントが訊いた。

「二時」

「おれが乗せていこう。彼女の車が押収されていなければ」

いない、とモット。

ほかに何か、ハウイ？」デュラントは訊いた。

「警察か凶器の　例のヘレッタ・セミオートマチックの　前所有者を突きとめた。パラマウント・スタジオだということだ。九年前、ある映画のセットから盗まれた。幸いなことに、その年、アイオニはパラマウントでは何もしていない」

「どんな映画だね？」ストーリングズが尋ねた。

「テレビ映画の見本ビデオだったが、どのネットワークでも採用されなかった。題名は　監視者たち　とかいった。台本のコピーと出演者およびスタッフ全員の名前は手元にある。見本ビデオそのものも手に入ったが、関係者のうち存命中の者は全員、保安官の事情聴取を受けたという話だった」

ウーとデュラントが答える前に、モットが言った。
「二人はビールのほうがいいのではないか？」
「当然でなければ」デュラントが答えた。
[illegible]
が一そう言い残して寝室をはいたモットは、ドアをそっと後ろ手に閉めた。
「ハウイは、聞くべきでないかもしれないことは聞きこ[illegible]
「それはどんなことかな、ブース？」ウーが訊いた。
「おまえさんたちには新しい車を借りた――黒のメルセ[illegible]
ディ・アリシア・チャヴェスには、独立リムジン運転手協会の哀悼の意とともに、二千ドルの支払い保証小切手を渡した。大いに感激してくれたし、未来の夫を殺した二人組のことは決して許さないと話してくれたよ。とりわけ[illegible]人"のことは忘れやしないと」
「おれの人相はどんなふうに言ってた？」とデュラント。
「背が高く、色の浅黒い、怖い顔の男」
「[illegible]から彼女が聞いた話は、グディスンはどちらも訪ねられているということと、あらかじめ決められていた日時に、トパンガ・キャニオンの例の喫茶つき宿に二人を迎えにいき、オクスナードのモーテルまで乗せていったということだけだった。モーテルの名前は聞いてなかったので教えられなかった。オクスナードをぬけて調べてみたら、マリブから海岸道路を三十マイルほどさきに行ったところだな。町の観光協会に電話してみたら、モーテルは二十三軒あるということだった」
「アザガイのほうは？」デュラントが訊いた。
「最後に入った連絡では、人違いにはずれたことをしてる真中を狭したホームビデオを求める、景気のいいマーケ[illegible]ポーカー場から始めて、あちこち寄りながらこっちに戻りつつあるということだった」
「オクスナードか」ウーはストーリングズに言った。「この午後、あんたとわたしで行ってみて、モーテルを何軒か調べてみてはどうかな？」
ストーリングズがうなずき、何か言おうとしたとき、ドアが開いて、ハワード・モットが栓を抜いたメキシコ・ビールを三本手にして入ってきた。一本を手元に残し、あとの二本をウーとデュラントに手わたすと、彼は訊い

彼の左目を凝視しながら、ジョージア・ブルーは言った。「わたしの推測では百万」

「それで、わたしの銀行を訪れたのかね？」

今度は右目をしげしげと見つめながら答える。「わたしたちとしては、要求に応じられる金額があるのかどうか知っておく必要がある」

「それだけの額があった？」

「ミスタ・デイヴィッドソンは実に用心深かったわ」

「きみは、それだけの額があると考えている？」

「いいえ」

「なぜかね？」

ブローチの目の検査を終えた彼女は、残っていたワインを飲み干すと、ほほ笑みかけて言った。「あのドーミエね。あなたのオフィスの。つまり、あの贋作のドーミエ。それに気づいたとき、ジャック・ブローチともあろう男がなぜ贋のドーミエを壁に飾っておくのか、と考えたわ。答えは、ハリウッドが不景気なもので、本物は売らなくてはならなかった」そこでテーブルに両肘をつき、打ち明け話をするように顔を数インチ近づけると、ふたたびほほ笑んだ。「あなたは破産している、そうじゃない、ジャック？」

「わたしが？」

ジョージア・ブルーは上体を起こすと、肩をすくめ、彼の右肩ごしに何かを見やった。店内を横切りつつあるものに視線を向けたようだ。「もう少し嗅ぎまわることもできるのよ。時間を節約するのであれば、ハワード・モットに言って、資産と負債、それに手持ちの現金といった財務諸表が必要だとアイオニ・ギャンブルに伝えさせてもいい」

長い沈黙があってから、ジャック・ブローチが訊いた。

「なぜそうした警告を？」

ジョージア・ブルーはまったく無関心といった目で彼を見つめた。「私利の追求」

「続けてくれ」

「最悪の場合のシナリオを考えてみましょうか」ブルーは言った。「恐喝者が――ひとりであれ複数であれ――百万ドル要求したとする。アイオニ・ギャンブルが支払いに応じ、あなたにお金の用意を頼む――というか、さらに正確に言えば、あなたに預けておいたお金を用意してくれと言う。すると、どうなるかしら？」

「きみのシナリオだ」

「あなたは、百万そろえるには、すべて売り払うか抵当

「もちろん、わたしとしてはそう願っているが」
「としたら、わたしが彼女の仲介役になることを知っておいてもらうべきね」
「何あるいは誰との仲介役に？」
「彼女と、それが誰であれ彼女を恐喝しようとする人間」
ブローチは椅子の背にもたれかかり、ジョージア・ブルーをまじまじと見ていたが、ようやく言った。
「恐喝がこころみられているなら、アイオニは間違いなくわたしに話していただろう」
「彼女はまだそれを知らないのよ」
「誰が恐喝すると考えている、もしくは疑っている？」
「ヒュースとホーリン・グディスン」
「アイオニの仲介役として、きみは具体的にどういったことをするのだろうか？」
「彼女の評判を台無しにし、経歴を破壊する可能性のあるものを買い戻す」
「ということなら、わたしとしても大歓迎だ」
「よかった。これでお金の話ができるわけね」
「恐喝者に支払う金」
「そう、そのお金」
もしくはグディスン兄妹が恐喝者ではないかと疑ってるだけなの。あの二人がそうでないとしたら？　まったく無実だとしたらどうかしら？」
「だとしたら、なぜ姿をくらませたのだろう？」
ジョージア・ブルーは眉をすくめた。「何かが、もしくは誰かが、二人の失踪の原因となったのかもしれない。グディスン兄妹が恐喝者だとはっきりするまでは、ミスタ・グリムがお金を出すとは思えないわ」
「ということは、アイオニ自身が金を都合しなくてはならなくなる」
ジョージア・ブルーはうなずいた。
ジャック・ブローチは初めて飲み物に口をつけた。そうして、もう二度と飲まないとでもいうかのように、グラスをわきのほうに置いた。「どれくらいの額の話をしているのだろうか？」
相手を間違っていることになる。エンノ・グリムに話すべきだろう」
グディスン兄妹が原因となる損害や損失に対して賠償すると保証しているから？」
「契約にはそう謳ってある」
「でも、わたしたちは、グディスン兄妹が恐喝者ではないかと疑ってるだけなの。あの二人がそうでないとしたら？　まったく無実だとしたらどうかしら？」
「だとしたら、なぜ姿をくらませたのだろう？」
ジョージア・ブルーは眉をすくめた。「何かが、もしくは誰かが、二人の失踪の原因となったのかもしれない。グディスン兄妹が恐喝者だとはっきりするまでは、ミスタ・グリムがお金を出すとは思えないわ」
「ということは、アイオニ自身が金を都合しなくてはならなくなる」
ジョージア・ブルーはうなずいた。
ジャック・ブローチは初めて飲み物に口をつけた。そうして、もう二度と飲まないとでもいうかのように、グラスをわきのほうに置いた。「どれくらいの額の話をしているのだろうか？」

た。男性客の大半は彼女の顔に、女性客の大半は服装に視線をそそいだ。そうして、彼らの全員が――ほとんど全員が――彼女の髪に白髪の太い筋が入っていること、自信に満ちた大股な足運び、周囲の好奇の目への明らかな無関心ぶりに気づくことになった。

彼女がブローチのテーブルに着いたときにも、まだ客たちの目はそそがれていた。そうした注視と憶測は、この八カ月間仕事のない不機嫌な俳優から得られたかもしれない手数料よりはるかに価値がある、とブローチは結論を下していた。

ジョーンア・ブルーは遅れたことを詫びなかった。彼女が腰をおろすと、ブローチが飲み物を尋ねた。もしあるなら、ハウス・ワインの赤を一杯もらいたい、とブルーは頼んだ。二人の飲み物がやってくると、彼女はメニューに目を落とし、おすすめ品のカッスーレ（豚肉と白インゲンのシチュー）を注文した。少なくとも三千カロリーはあるだろう、とブローチは推測した。彼はスープとサラダを頼んだ。

ウェイターがトがっていくと、ジョーンア・ブルーはワインをひと口飲み、ブローチに笑いかけて言った。

「セキュリティ・パシフィックのあの素敵なミスタ・デイヴィッドソンから電話はあったのかしら？」

ブローチはうなずいた。

「するだろうと思ってたわ」

〝なぜ〟と尋ねることを期待されているのだろうと思ったが、ブローチは理由を訊かないことにして、沈黙によって詳しい話が引きだせるかどうかみてみようと判断した。思惑ははずれた。ワインをもうひと口飲んだジョーンア・ブルーは、店内を見まわしてこう言ったのだ。

「見馴れた顔もいくつか見えるようね。そうなんでしょう？」

「数人は」

「この五年間、一本も映画を観なかったわ。ずいぶん見のがしたかしら？」

「どんな映画が好きかによるが」

「台詞の多い皮肉な作品」

「それなら、一本も見のがしてはいない」

「ご自分の仕事のどこが気に入っていて、ミスタ・ブローチ？」

「金。交渉。人間と作品ということもときには」

「いまだにアイオニ・ギャンブルの最良の友だと考えていいのかしら？」

リプのライス氏の番号が目に入った。

「連絡相手はミスタ・X」バーテン兼店長は言った。「ときに、わたしがまだ映画俳優組合に属してるってことをだれないでくれよ」

オヴァビイはコースターを上着のポケットに突っ込んだ。「最近、何かやったかい？」

「来週、コマーシャルを一本撮ることになってる」

「そのうち連絡するかもしれない」オヴァビイはマティーニを飲み干すと、カウンターに二十ドル札を置いて店を出た。

26

[illegible]・ブローチに電話して、お昼を一緒にどうかと誘っていた。[illegible]ト・プルヴァールにある、もっか評判のアルザス料理のレストランを推奨した。午後一時に会うことで話がまとまると、[illegible]人となったかもしれないその不機嫌な俳優は、ブローチ[illegible]め、電話を切った。

くると、女房と義母が自宅で首をちょん切られてた」

女は目を丸くした。「それが全部テープに撮られてるのかい？」

オヴァビイは溜め息をつき、また肩ごしに振り返ってから言った。「もちろん、それを撮ったテープは手に入ってないさ。手に入ったのは、殺人犯が罪を告白してから、ガスを出し、オーヴンに頭を突っ込むのを映したホームビデオのテープだ。おれたちは、告白の部分はほぼそのままにしといたが、オーヴンの場面は六、七秒に短く編集した――衝撃を与えるには充分な長さにたな」

「誰だったんだい？」

「何が誰だった？」

「殺人犯は？」

「ああ、そう、犯人は旦那だった。ワシントンDCに出張した旦那は、アメリカ人のパスポートを買うか盗むかした。往復にコンコルドを使い、斧で女房と義母の首をちょん切り、いなくなったのが気つかれないうちにワシントンに戻った。で、三十六時間後、今度はエコノミー・クラスでロンドンに戻り、死体を発見して、警察を呼んだ。完全犯罪、完璧なアリバイ」

「どうして二人を殺したんだい？」とシェーン・グレイス。

ありふれた動機に持っていくことにする。「金さ、ほかに何がある？　男の義母がある程度の金持ちで、相続人は女房だけだった。で、旦那はまず義母を殺し、女房に食い物を用意させて二人で食い、一時間後に女房を殺した。検死解剖で、義母が先に死んだことが証明された。ということは、その娘がすべて相続するってことになる。て、死んだ女房から旦那がすべて相続する。義母は、トーキーの海辺にある小ぢんまりした快適な家を残した。その家で、旦那は自分の告白をビデオに撮り、それから、オーヴンに頭を突っ込んだわけだ」

「その男の相続額は？」

「約四十万ポンド」百万以下にしようと決めてから、オヴァビイはそう言った。

「告白テープは誰から買ったんだい？」

オヴァビイはにやりと笑った。記憶にあるかぎり、この三時間で初めての笑いだ。「そいつは秘密さ」

シェーン・グレイスはもっともだというようにうなずいた。「赤ん坊を溺れさせてるってビデオ。あれはあたしの作り話なんだ」

「おいおい」

月のわが子を溺れさせてる夫婦のビデオはどうだい？」

オヴァビイの険しい視線が考え込むような目つきに変わった。「コーヒーでもどうかな？」

「もちろんさ」と女は答え、ポーカー・チップをかき集

女はシェーン・グレイスと名のった。Cheyne という

いは昔の探偵のシェーンのように発音するのだと言った。

「昔の探偵ってのは？」オヴァビイは訊いた。

「私立探偵マイケル・シェーンさ。何とかいう俳優が――

やってたよ」

オヴァビイは十五秒ほどコーヒーをかきまわしていたが、そこでまた左肩ごしに振り返ってみてから、シェーン・グレイスに言った。「赤ん坊の溺れてるビデオのことを話してくれ」

「あたしの知ってる男が、それを観た話だったのを知ってるって言ってる」

「その男と話してみたほうがいいな――あんたの知ってる

「みたいなもの？」

「オーケイ、エージェントさ。彼と話したいんなら、まずあたしと話をする」

オヴァビイはうなずいた。また肩ごしに振り返ってから、女に上体を寄せ、声を低めて言った。「オーケイ。こういうことなんだ。おれはある男の――ミスタ・Zと呼ぶことにするが――代理人になってる、オーケイ？ミスタ・Zはロンドンから――もちろんイギリスのだ――やって来てて、世界中に配給されるあるテレビ・ショーを編集してる。俳優はまったく必要ないし、ナレーションもほとんどいらない。すべて映像自体が説明するわけだからな。というわけで、すべてほんとうにショッキングなホームビデオで作られることになる」

「どんなビデオでだい？」

「ミスタ・Zが十万ポンド払ったようなやつで」

「ドルでいうといくらになる？」

「およそ十八万」また背後をうかがってから、打ち明け話をするように声をひそめる。女が身を乗りだしてきた。

「二年前、ロンドンで起こった殺人事件があった」オヴァビイは言った。「ある男が合衆国への出張から戻って

25

ガーデーナにあるドロー・ポーカーのクラブで、アザイ・オヴァヒイは三十分とたたないうちに五百ドル近く勝っていた。〝三枚〟とか〝おりる〟とか〝レイズ、十〟とか〝コール〟以外にはひとことももしゃべらない、〝むっつり型〟と彼の呼んでいるスタイルで勝ち続けながら、たえず左肩ごしに後ろを振り返ってもいた。

彼の右側でプレイしているのは、三十歳の体を持った五十がらみの女だった。陽に焼きすぎた顔には、金線細工のような微細な皺が走っている。青いタンクトップ姿で、ドジャースの野球帽をつばを左に向けてかぶっていた。オヴァヒイがまた肩ごしに振り返ると――それで十六度目だったにちがいない――女が言った。「援軍でも待ってるのかい？」

「ある男とここで会うことになってるんだ」

「そんなにそわそわしてるってことは、その男に大金を貸してるにちがいないね」

「集金じゃなくて、おれのほうが払うのさ――やつがやってくればの話だが」

女が上体を寄せかけ、声を低めて言った。「どうにも苦しいってんなら、あたしが番号を教えてやれるよ」

オヴァヒイは女をにらみつけた。「おれがヤク中に見えるか？」

「誰がヤクの話をしたってんだい？　でも、そう言われてみれば、あたしがこれまでに会った麻薬捜査官はみんなあんたみたいな顔してたね」

オヴァヒイは険しい顔を引っ込めた。「おれはホームビデオを買うのさ」

さらにふた勝負してから、女が吼いた。「どんなホームビデオだい？」

「やるべきでないことをしてる連中の」

「セックス物ってことかい？」

オヴァヒイはふたたび女をにらんだ。「どういうつもりなんだ、おばさん？　まずおれはヤク中。次に麻薬捜査官。今度はポルノ業界の人間ってわけか」

女はさらに体を寄せてきて、ささやいた。「生後四カ

が」

なのね？」

「そんなことはしません」

小切手をちょっと振ってみせた。「いい、もしこれが何

と思う」

「それはペテンでもジョークでもなく、わたくしどもの

ち上がった。

ローザ・アリシア・チャヴェスは彼を見上げると、か

しこまって言った。「ご弔問と保険金にお礼申しあげま

彼女は重々しくうなずいた。「それくらいにちがいな

運転手協会のおもな存在意義のひとつは、たがいに注意し合って、このような恐ろしいことが起こるのを防ごうということなのです」

彼女はうなずくと、ふたたび小切手を見つめた。「あたしにいくつか質問をしたい、そうなのね？」

「あまりにつらすぎるということでなければ」

彼女は目をあげた。「もう警察に話したことなら話せるけど」

「それで結構です」

ローザ・アリンア・チャヴェスは、五分近くかけて、カルロスの家からリンカーン・タウンカーが猛スピードで走り去るのを目撃したときのことを話した。車の年式、色、おおよその中古車価格、ナンバーも覚えていた。それから、彼女が〝大きな中国人〟と呼んだ男と、もうひとりのすごく背が高くて色の浅黒い、怖い顔をした男について話した。その二人がカルロスの家から急ぎ足で出てきたこと、リンカーンに飛び乗って走り去ったこと、自分がその二人を――とりわけ〝大きな中国人〟を――どうしてやりたいかを詳細に語った。ストーリングズはノモを取った。

ようやく彼女の話が終わると、ストーリングズは言った。「最近カルロスは、妙な客とか気むずかしい客の話をしていましたか？」

彼女は首を振った。「イングレスだけね」

「イギリス人？」

うなずいたチャヴェスの顔には、嫌悪と魅惑のまじった奇妙な表情が浮かんでいた。「男の人と女の人。カルロスには夫婦だと言ったらしいけど、双子みたいに似てたって話してくれたわ」

「兄と妹ということですか？」

「そう、兄と妹」そう言って、彼女はわずかに身震いした。

「その二人の名前を言ってましたか？」

「いいえ、トパンガ・キャニオンのある場所まで送っていき、一週間後だったと思うけど、また迎えにいって、どこか別の場所まで送っていったってことだけ」

「どこだと言ってました？」

「どこかのモーテル」

「ロサンジェルスの？」

「オクスナードの」

「モーテルの名前は？」

彼女はまた小切手を見つめていたが、やがて顔を上げ

[illegible]「入ってもらえばよかった」

なかに入ったストーリングズは、一九六〇年代初頭にロードアイランドのニューポートで買ったものと同じだった。白、赤、茶、黒を織りまぜたその絨毯は、彼と亡くなった妻が、一九六一年、ノンノーンDのオークト商会で買ったものと同じだった。

クロムの脚のついたツイード張りのカウチと、緑色の粗織りの布を張った耳つき椅子もあった。コーヒー・テーブルは油脂加工のほどこされたチーク材で、その弟分のサイドテーブルが緑色の椅子の隣に置かれている。三十年ほど新しい北欧調のモダンな家具だ、とストーリングズは考えながら、勧められるのを待たずに耳つき椅子に腰をおろした。

ツイード張りのカウチにいた若い女は、飾り気のない黒のTシャツに黒のジーンズ姿だった。両膝を堅く合わせて坐り、片手に丸めたハンカチを握っている。卵形のきれいな顔立ちだが、目は腫れ上がり、鼻は赤くなっていた。化粧はまったくしていない。二十三、四歳だろう、とストーリングズは推測した。女は彼を見つめると、鼻をすすりあげて尋ねた。「ルロスを知っていたのか？」

ストーリングズは名刺を差しだした。それを注意深く読んでから、彼女は顔を向けてきた。「彼、どこかに所属してるなんてこと、あたしに言わなかったけど」

「先月入会したばかりでしてね。年のはじめごろに」

「それで、お悔やみにきてくださったのね。ご親切に、どうもありがとう」

「死亡保険金のこともお伝えにきたのです」ストーリングズはそう言って、いまだにうろうろしている隣家のヘレンに、席をはずせといった視線を投げかけた。

ヘレンが言った。「少ししたら戻ってくるからね、ローザ」

彼女が出ていくと、ストーリングズは支払い保証小切手を取りだした。立ち上がり、いくぶん形式ばった態度でローザ・アリシア・チャヴェスに差しだす。

「二千ドル？」信じられないといった声が上がった。

残念そうに頭を振りながら、ストーリングズはまた椅子に坐った。「ほんの小額で申しわけありませんが、なにぶん、彼は会員になって日が浅いものでして」

「こんなに」とチャヴェス。

「心痛はお察ししますが、ミス・チャヴェス、リムジン

「どうでした……彼の様子は？」

ジョージア・ブルーは副支店長を数秒間じっと見つめた。「ご質問の意味が理解できませんね。彼の健康状態に関してお尋ねなら、元気そうでした。ですが、それをお尋ねになっているのではない、違いますね？」

「ジャック・ブローチは古くからの大事なお客さまです」デイヴィッドソンは言った。「しかし、エンノ・グリムの名前をうかがったときにわたしが思ったのは、あなたがたはブローチ・エージェンシーを査定しているのかもしれないということでした。その株の買い占めだか吸収合併、もしくは資本投下が可能かということで」

「エンノ・グリムはブローチ・エージェンシーに関心はありません」

デイヴィッドソンの口の両端がほぼ平らになった。

「なるほど」

「うちは小さな会社です、ミスタ・デイヴィッドソン。ですが、わたくしどもと取り引きをお望みでしたら、隠さずに話していただきたいものです。ジャック・ブローチ・エージェンシーは破産している？　それとも、一時的な資金難におちいっているだけですか？」

デイヴィッドソンは眉根を寄せた。何か言いかけたが、気が変わったらしい。それから、さらにまた決心をひるがえして言った。「すでにお話しした以上のことは、ほんとうに何も言えないのです」

ジョージア・ブルーは席を立った。「ということでしたら、結局、わたくしどもの取り引きは成立しないことになりそうです」

彼女は帽子掛けに行ってコートをはずすと、左腕に掛け、デイヴィッドソンを振り返った。副支店長は椅子から立ちにかりながら、「ご気分を害されたようで、残念です」と言った。

ジョージア・ブルーはデイヴィッドソンに目を据えて言った。「ジャック・ブローチ・エージェンシーは破産している、そうでしょう？」副支店長がそれには答えず、腕時計に目を落としたのを見て、彼女は言った。「そんなことだろうと思っていたわ」

ジョージア・ブルーが背を向けて出ていくと、デイヴィッドソンは電話に手を伸ばした。受話器を取って番号を押してから、ブルーの背中に視線を戻す。彼女が銀行の玄関ドアを出ていったとき、陽気な声が、「ジャック・ブローチ・エージェンシーです」と応えた。副支店長は名前を告げ、ミスタ・ブローチと話がしたいと言った。

[illegible]

「あなたは、ミスタ・ブローチのお仕事をまだなさっていらっしゃるのですか？」

「ええ、まあ、そんなところです。もうオフィスは借りていないのですが」

「ええ、まあ、そんなところです。おそらく、オフィスのほうも彼が見つけてくれるでしょう」

クイルね、とデイヴィッドソン。「フィル・クイル。どうもピンと来るものがありそうな気がする」

「アーカンソー大学でフットボールをしていたということですけど」

「全米代表の一員として？」

「フットボールにはうといもので」

デイヴィッドソンは物わかりよくうなずいた。「ジャック・ブローチがわたくしどもを推薦したというお話でしたが」

「こちらの名前を出したと言ったのです」

「彼はあなたがたの依頼人ですか？」

「いいえ。ですが、間接的に、わたくしどもは彼の依頼人――アイオニ・ギャンブル――のためにある仕事をしています。ミスタ・ブローチもミズ・ギャンブルもわたくしどもの依頼人ではない、という点を強調しておきたいですね。もっかのところ、わたくしどもの依頼人はエンノ・グリムひとりだけです」

デイヴィッドソンは感銘していた。「あの同志！　のグリム？」

ジョーシア・ブルーはうなずいた。

デイヴィッドソンはペンを手に取り、メモ帳を引きよせた。「それで、わたくしどものどういったサーヴィス業務が必要でしょう、ミズ・ブルー？」

「通常の。絶えず人数の変わる、十人から七十人の給料の支払いをおもに処理していただきたいのです。半月ごとに小切手を振りだし、州税と国税の源泉徴収、それにFICA、SDIといったふつうの社会保険関連のこと。すべてお決まりの業務になるでしょうが、ただ、ときとしてわたくしどもは、かなりの額の現金を緊急に必要とすることがあると思います」

現金の話が出ると、デイヴィッドソンはペンを置いて言った。「失礼ですが、ミスタ・ブローチを個人的にご存じなのですか？」

「彼とわたしはきのうミーティングを持ちました」

「いまごろ警察が探していると思う」
「進展があったようね」
「ああ、そうとも」ストーリングズは言った。

ジョージア・ブルーは高級車を貸す〈バジェット〉の営業所で彼をおろした。ミアタからランボルギーニまであらゆる車種がそろっているようだ。十分後、〈ニーマン・マーカス百貨店〉にふたたび入っていった彼女は、青みがかったグレイのシルクとウールのスーツと、アクアスキュータムのパール・グレイのレインコートを買った。アン・クラインのドレスを買ったときと同じ女店員が、モデルをしていたことがあるのかと訊いた。ブルーが、ない、と答えると、女店員は、それは残念だ、一流モデルになれたはずなのにと言った。「ほんと、超一流のモデルに」

午前十一時二十八分、ジョージア・ブルーはセキュリティ・パシフィック銀行に入っていった。三分後、彼女はハロルド・デイヴィッドソンのデスクのわきに坐っていた。副支店長だと自己紹介したデイヴィッドソンは、大きな長い顎をした茶色い顔の男だった。明敏そうな黒い目。口の両端が持ち上がっているので、決して消えない笑顔がはりついているように見える。まだ四十前だが、髪の毛はたいしてない。それでも、プロになるにはスピードも背も足りない、カレッジのバスケット選手のような体格好な胴は保たれていた。デイヴィッドソンは、ジョージア・ブルーがレインコートを脱ぐのに手を貸し、帽子掛けにていねいに掛けた。帽子はひとつも掛けてない。これまでそこに帽子が掛かったことは一度もないのでは、とブルーは思った。

「ロンドンでしたね」彼女が腰をおろし、自分も六フィート二インチの体を椅子に沈めてから、副支店長は言った。

「ロンドン」ジョージア・ブルーは同意した。

「きょうの外はロンドンのようではないですか？　雨で」

「さあ、どうでしょう」とブルーは応じた。「この五年、ウーデュー社の常駐代理人として、マニラにいたものですから」

「フィリピンに」デイヴィッドソンは頭を左に傾け、笑みをいくぶん広げて尋ねた。「ひょっとして、ウーデュー社は、マルコスの紛失した数十億ドルを探しに行った

「それはよかったわね。原因は何なの？」

ストーリングズは彼女を見やった。本心から知りたがっているようだ。「石油という連中もいれば、露骨な侵略をやめさせ、クウェートに民主主義を取り戻させるのだという連中もいる」

「クウェートはいつから民主主義だったの？」

「戦争が勃発してから」

「あとどれくらい続く？」

「三月の第一週か二週までだな。この国は、アメリカの若者が大勢死ぬ長期戦には耐えられない。そこで、戦争を切り上げ、荷物をまとめて、帰国してくるだろう。われわれは気分のいい愛国的な熱狂に駆られ、中東は以前とさほど変わらない状態に残されることになる――イラク人の死体が山をなすほかは」

ジョージア・ブルーは戦争の話にあきたようで、居間をチラッと見まわして尋ねた。「みんなはどこに？」

「ウーとデュラントは例のリムジン運転手の追跡調査。アザガイはアザガイの仕事に出かけた」

「あなたは？」

「予備軍」

「もう少しお金がいるの」

ストーリングズはうなずいた。「どれくらいいる？」

「二千ドル。ドレスと靴を買ったら、ふところが冷えきってしまって」

ストーリングズはズボンのポケットに手を入れ、分厚く巻かれた百ドル紙幣を取りだした。「用途は訊かなかった。金額を訊いたんだ」百ドル札を二十枚数えると、そこで手をとめたが、さらに五枚数えて彼女に渡した。

「やさしい人ね」とジョージア・ブルー。

「わたしに選択権があるなら、やさしいでなく、セクシーと言ってもらいたいな」

「セクシーかどうかは今夜確かめましょう」

「本物のデートの約束のように聞こえるが」

「そのつもりよ」

ストーリングズは立ち上がった。「ベヴァリーヒルズへ行くのかね？」

「乗せていってほしいの？」

「サンタモニカ・ブルヴァールとウィルシアの交差点まで。そこのヘベジェット〉で高級車を貸してくれる」

「何を借りるつもり？」

「ウーとデュラントの乗るメルセデス」

「リンカーンはどうなったの？」

にまわされ、どんなお役に立てますかとの応答があった。

「ジョージア・ブルーという名で、ウーデュー有限会社の副社長をしております。アメリカ人所有の、ロンドンに本拠地を置くコンサルタント会社でしてね。もっかロサンジェルスに支社を開く準備中で、銀行を探しています。おたくの顧客のひとりがそちらの名前を出したものですから」

「どなたですか？」

「ジャック・ブローチ」

わずかに躊躇してから、デイヴィッドソンは言った。

「なるほど。あなたがたの会社も娯楽産業にたずさわっているのですか、ミズ・ブルー？」

「いえ、とんでもない。わたくしどもは保安管理のコンサルタントでして、チェーンストアの万引きをなくすといったようなことに実に長けているのです。ですが、真の専門分野は、産業スパイを防止する保安プログラムの企画でしてね」

「ウーデューというのはどう綴ります？」

綴りを教えてから、ジョージア・ブルーはつけくわえた。「住所はロンドン西一区バークリー広場ブルートン通り八番地。取り引き銀行はウェストミンスターとバークレイズ。おたくへの最初の預け入れは二十五万になるはずです。失礼、ドルではなく、ポンドで」

デイヴィッドソンの口調にあたたかい味が増した。「わたくしどものサーヴィスにはかならずやご満足いただけるはずです。この午後にでもお立ち寄りいただけますか？」

「午前中のほうがいいのですが」

「何時に？」

ジョージア・ブルーは三十六ドルの腕時計を見やった。九時二十二分。「十一時半では？」

「ではそのときに」デイヴィッドソンは言った。

七分後、ジョージア・ブルーが居間に入っていくと、そこにはブース・ストーリングズしかいなかった。《ロサンジェルス・タイムズ》の社説を読んでいた彼は、目を上げ、政治経済面を彼女に差しだした。

ブルーは首を振って言った。「もう登場人物を知らないわ」

「昔ながらの連中さ」

「湾岸戦争の状況は？」

「われわれは勇敢、相手は逃げ腰」

かった。コーヒーを一杯飲んだ彼女は、シャワーを浴び、[illegible]った。アン・クラインのドレスとジョーン&デイヴィッドの靴をふたたび身につける。そうして、電話に近いベッドに腰をかけ、二杯目のコーヒーを注ぐと、受話器を取り、前夜メモしておいた番号をたたいた。

[illegible]声が応えると、ジョージア・ブルーは言った。「わたくしはマ[illegible]ス・スペンサーと申しまして、ヘヴァー・ヒルスにあるノ銀行の副支店長をしております、お電話を差し上げましたのは、ミスタ・ジャック・ブローチのビジネスの一部に、わたくしどもをご利用いただけないものかと思いまして」

「経理部長のミスタ・コーリガンとお話しになったほうがよろしいですね」

「いらっしゃいます?」

「たいてい九時半ごろ出てまいります」

「ひとつそっとお教え願えませんでしょうか。ミスタ・コリガンは、現在の銀行に満足しておいでですか?」

「と思いますけど。ええ、間違いなく」

「アメリカ銀行でしたね?」

[illegible]

「ウィルシア・ブルヴァールにある、ドヒニーの少し先の?」

「ラシエネガの少し先ですね」

「[illegible]ごご[illegible]したのち[illegible]はどミスタ・コ[illegible]に連絡してみることにします」

GTE([illegible])の情報案内を利用して、ジョージア・[illegible]はセキュリティ・パシフィック銀行の支店の電話番号を手に入れた。かけてみると、録音された伴奏のような曲が、当座預金の残高を知りたいのなら何番にかければいいかを指示しはじめた。彼女は通話を切り、ふたたびGTEの情報案内を呼びだした。シークレット・サーヴィスの冷たい声を凍りつくほどまでに低めてから、案内嬢に、セキュリティ・パシフィックの支店にかけて、録音された声ではなく、生身の人間の声と話をしたいのだと告げた。案内嬢は別の番号を教えた。

生身の女性の声が応じたところで、ジョージア・ブルーは言った。「六桁のなかほどの数字で営業用口座を開く件に関して、担当重役のひとりとお話ししたいのですが」

電話はすぐにミスタ・デイヴィッドソンなる男のもと

遅れな仲間同士だと考えてるからなんだ」
「そんなはずはあるまい」ウーは言った。「きみは自分のことを時代遅れな人間だと考えているのか？」
「いや、しかし、そのうちいつか、古くさい人間だときっと感じることになる」
「なるほど、ま、そのうちということなら、わたしにしても同じだな」

23

その同じ日の朝、ジョーンア・ブルーがまっさきにしたことは、コーヒーも飲まないうちに、自動車局に電話を入れたことだった。そして、冷たく堅い口調とシークレット・サーヴィスの特殊な用語をもちいて、〈LUX RY3〉のナンバープレートを所有している者の名前と住所を尋ね、答えを引きだしたのだ。

彼女はその情報をデュラントに渡した。故ウィリアム・ライス邸の完備したキッチンで——広さはホテルの小さな部屋ほどある——デュラントはその日はじめてのコーヒーを注いだところだった。メモに目をやった彼は、礼をつぶやくと、テラスに出ていった。そこでなら、誰とも話をせずにひとりコーヒーが飲めるのだ。

ブルーはキッチンの食器棚に魔法瓶を見つけると、二杯分のコーヒーを入れ、カップと一緒に持って寝室に向

った」

「あの男はすべて書き留めてる？」

「彼の家と車はオールステイト保険に入っている。銀行はセキュリティ・パシフィック。サモハイの一九七八年度卒業生」

デュラントは眉を寄せたが、すぐにうなずいた。「サ[illegible]」

「身長五フィート十一インチ」ウーは続けた。「体重百[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]去してもらう予定だった」

「実際すべて書き留めてたわけだ」

「あらゆることを。彼は一週間前のきょう、ミスタ&ミセス・グティエレスを、[illegible]・ニューヨークの[illegible]・コーンの朝食つき宿に迎えにいく約束をしていた。手帳には、二人をどこへ連れていくことになっていたかは書かれていない。彼も知らなかったのだろう」

「二人のことを誰かに話してるかもしれないな」デュラントは言った。「なにしろ妙な夫婦のわけだから」

「誰かというのは、ローザ・マリシア・エヴェスのことだな」

デュラントはうなずいた。

[illegible]

と思うが」

「手帳には、所属してた組織の記述はない？　組合、仕事仲間の協会、友愛組合かもしれないが？」

「つまり、そうした組織のひとつが、遺族もしくは相続[illegible]

「たとえば、二千ドルほど」

[illegible]

[illegible]

「誰を考えてる――アザガイ？」

「アザガイならうまいことやれるだろう。しかし、ブースのほうがさらにうまくいくと思う。年をくっているわけだし、き、お祖父さんといった感じで接近できるしっとも、本人はこうした表現を喜ばないと思うが」

「いや、喜ぶさ」とデュラント。「ブースは最年長であることが気に入ってる。おれたちとアザガイより十五か二十年上だし、ジョージアよりはもっとずっと上だ。集団の長老という役割を楽しんでるわけだが、おれたちと一緒にうろうろするのが好きな真の理由は、みんな時代

「うまいコーヒーだ」

デュラントは立ち上がった。「ブースに連絡してくる」

手帳に全神経を集中しながら、ウーはうなずいた。デュランドはようやく公衆電話の並んだ場所を見つけたが、一通話いくらだったかもう覚えていないことに気づいた。二十五セントだったか、三十五セントだったか？　二十五セント貨を一枚投入し、市外局番四五六と、もう一つ、ライス風の番号をまわした。四回の呼び出し音のあと、ストーリングスが応答した。デュランドは名のりもせずに話した。「あのリンカーンを手ばなす必要がある」

「わたしにはうしてはしいのかね？」

「レンタカー会社に連絡して――どの社だった？」

「ベバジェット〉」

「ゆうべ盗まれたと話す。失くなってるのにいま気づいたとでもな。どこで手ばなすつもりだ――たんなる好奇心から訊くんだが」

「サンタモニカ・プレイス・モールの四階。窓を閉め、ドアもロックしてある」

「すると、この午後には見つかるわけだな。別の車を借りてほしいのかね？」

「もっと堂々としたやつを借りてくれ――アーティには謎のミスタ・Xといった外見を身につけさせないとな」

「ミスタ・Xはわたしさ」とストーリングズ。「彼はミスタ・Zだ。メルセデスでどうだろう――でかいやつを？」

「申し分ない」

ウーはうなずいた。あの男の名前はカルロス・リンティヤン。五月には三十一になるはずだった。自宅に七万六千、あの古いキャデラックに千六百ドルほどの借金があり、毎月の返済額が合わせて九百ドル少々。独身か、事故もしくは死亡した際の連絡相手は、ローザ・アリシア・チャヴェス、住所は、彼の家から通りをはさんではんの四軒先。何か起きたのか見に走りたしてきたあの女にちがいない。ミス・チャヴェスは二十六歳」

なにもわかった？」

「彼女の住所と電話番号のすぐ下に生年月日が書いてあ

うして立ち上がり、急ぎ足で玄関ドアを抜けた。あとに[illegible]通りの向かいし
の四、五軒先の家から、黒っぽい髪の女が飛びだしてく[illegible]
ー・リムジン〉の本部となっている黄色い家と瓜二つだった。女はジーンズに白いTシャツ、白いスニーカー姿。離れたところからでは二十歳にも三十歳にも見えたが、その動きは二十歳といったところだ。

ウーとデュラントが急いでリンカーンに乗ると、女は黄色い家に向かって駆けだしてきた。リンカーンが発進した瞬間、巨大なフーゲンヴィリアのもとに達した女は足を止め、加速していく車をじっと見つめていた。バックミラーに映った女の唇が動くのを確認したアーティ・ウーは、リンカーンのナンバーを暗記しているのだろうと推測した。

「この車は誰が借りた？」彼はデュラントに尋ねた。

「ブース」

「彼に連絡して、これが盗まれたと届けてもらおう」

「どこで盗まれるのがいい――ショッピング・センター？」

「とうぜんだな」

サード・ストリートとブロードウェイの角、ほんの少し歩けば海べりに出るサンタモニカ・プレイス・モールの四階に駐車スペースが見つかった。二人はエスカレーターに乗ってあちこちまわり、エスプレッソ専門のカウンターが立ち並ぶフロアを見つけた。そこでウーはエスプレッソを二杯買い、デュラントが取っておいたテーブルに運んでいった。

腰をおろすと、ウーはハンカチにくるんだ手帳を取りだした。黒い革表紙には〈一九九一〉と金文字で刻印されている。ハンカチにはぐっしょりと血がにじんでいた。手帳に残っていた血を紙ナプキンで拭きとる。そのナプキンにハンカチをくるみこみ、それをさらにもう一枚のナプキンにくるみこむと、近くのごみ箱に立っていって捨てた。

戻ってきて腰をおろすと、ウーは手帳を開き、ページを繰りはじめた。エスプレッソを飲んだデュラントは、薄すぎると判断した。ウーが自分のカップに手を伸ばし、ひと口すると、また手帳に戻りながらつぶやいた。

としているように見えた。

屋根の大半はブーゲンヴィリアが隠していたが、まだ見えている部分は色あせた緑色の古いこけら板が貼りあわせてあった。家の残りの部分は、わりと最近、二色の黄色いペンキで塗り直されている。外壁の羽目板はごく淡い黄色、窓やドアの枠はもっとずっと濃い黄色。居心地よさそうにも不快にも見える家だ、とデュラントは思った。

リンカーン・タウンカーの助手席からデュラントが、運転席からはウーがおりた。二人がポーチに着くと、家のなかで電話の鳴りはじめるのが聞こえた。デュラントがノックした。誰も出てこない。電話のベルは九度目が鳴っていた。たいして期待せずに、デュラントがドアノブをまわしてみると、驚いたことに鍵が掛かっていなかった。

ドアを開くとすぐ居間になっていた。電話は、部屋の奥、入隅に置かれた灰色の小型スチール・デスクの上で鳴っていた。玄関ドアとデスクのあいだには紺を基色を基調に編んだ楕円形の絨毯が敷かれ、その一に、二十代後半から三十代前半のラテン系の男が喉を切り裂かれて倒れていた。デュラントは男をまたいでデスクに行くと、ハンカチを取りだし、鳴り続けている電話の受話器にかぶせて取った。

「ヘラクシャリー・リムジン〉」とデュラントは応じた。

沈黙があってから、女の声が尋ねた。「カルロスは？」

「いまちょっと出られない」錆びついたスペイン語を思い出しながら、デュラントは言った。「伝言は？」

女は電話を切った。

アーティ・ウーはデスクの向こうにまわりこみ、ボールペンの先を使って、黒い装丁の台帳のページを繰っていた。「業務日誌だ」と目を上げずに言う。「二月の分がすべてなくなっている」

「ずらかろう」とデュラント。

ウーはうなずき、ボールペンで台帳を閉じた。

デュラントはふたたび死んだ男をまたぎこしたが、ウーはそのかたわらに膝をついた。男は紺色のスポン、よく磨かれた黒のローファー、白いシャツにクリップ留めの蝶ネクタイといった格好だった。蝶ネクタイもシャツも血まみれ。シャツの胸ポケットから革装の小さな手帳だか日記帳がのぞいていた。ウーはそれを抜き取ると、ハンカチにくるみ、自分の尻ポケットに突っ込んだ。そ

22

よりも長そうなリムジンのナンバープレートには〈LUXRY3〉とあった。リムジン艦隊の一台ということの

認された。看板には、〈ラクシャリー・リムジン〉と謳

かの宣伝係としては、アリガイ以上の適任者を思いつけないのだが、反対意見は？」

オヴァイはぐるりと一回を睨めつけたが、抵抗には出合わなかった。にこにこ顔はすぐに消え、いつもの堅く邪気のない皆なに取って代わられた。

「しかし、これだけは忘れないでほしい」ウーが続けた。「われわれは男性としてアヴィス、兄妹を捜しているのだ、ということは明らかに見つかりたくないと思っているのだ。ナカヤの描画が正しいとすれば、彼女は明らかに危険な状況にある。ナカヤの描画は正しいと考えている。ヴァイス兄妹はアイオ・キャンプルの仲介役になる。しかし、その役柄が必要となるまでは、引き続きヤンク・アロイの大生な指、ていてくれ、アリガイは今後われわれの宣伝係となり、何であれヴァイス兄妹が売ろうとするものの買い手と目されるべき人物になる。クライシスは、のことからも明らかだ。ここには、兄妹を事件とリンクさせるものすべてが含まれる」

あとはナカヤが残っていた。スーリンクスが言った。

ウーは本物のやさしい笑みを向けた。あんたはわれわれのスタッフ・メンバーだ、スーリンクス、ウーが自信を、社会的地位のある人物だと。

「それは留守番電話がやってくれる」ウーは言った。

われわれに必要なのは、昼夜日本のカメラに対して即座に署名のはいる、一人の役者でもいる大間、あんたが適任だ。署名は？」

戦闘配置が整った、とストーリングズは報告した。日を開くと、ウーはスーリンクス・ブルーを見やった。「さっきも言ったように、ンーリンクス、きみがアイオ・キャンプルの仲介役になる。しかし、その役柄が必要となるまでは、引き続きヤンク・アロイの大生な指、ていてくれ、アリガイは今後われわれの宣伝係となり、何であれヴァイス兄妹が売ろうとするものの買い手と目されるべき人物になる。クライシスは、のことからも明らかだ。ここには、兄妹を事件とリンクさせるものすべてが含まれる」

あとはナカヤが残っていた。スーリンクスが言った。

ウーは本物のやさしい笑みを向けた。あんたはわれわれのスタッフ・メンバーだ、スーリンクス、ウーが自信を、社会的地位のある人物だと。

「それは留守番電話がやってくれる」ウーは言った。

われわれに必要なのは、昼夜日本のカメラに対して即座に署名のはいる、一人の役者でもいる大間、あんたが適任だ。署名は？」

「われわれとしては、ジョージアとアザガイの推測の大[illegible]て、小賢しい聖人のなかにはそれをうらやむ者がいるか[illegible]オヴァビイがそれに返した笑みには、わけ知り顔の部分が三分の二、よこしまな部分が三分の一見てとれた。

「みんなまだよくわかってないな、アーティ」

「ジョージアはわかっていると思う――違うかね、ジョージア？」

もちろんよ

クインシイ？

デュラントは黙ってうなずいた。

ソース？

「見当もつかんな」

「グディスン兄妹がアイオニ・ギャンブルを恐喝しようとするとき」ウーはいった。「いまやかならずそうするとわたしは考えているが、まず彼女に必要なものは？」

「金か？」とストーリングズ。

「仲介役も必要となる」ウーが補足した。

ストーリングズはうなずいた。「橋渡し」

「誰を考えてるんだ？」デュラントが訊いた。

ジョージアだな、もちろん」とウーは答えたが、異議が出ないのに驚いているようだった。

「もちろん」感情のない平板な声でデュラントが言った。「おいしい話に取りかかろうか、アーティ」とオヴァビイ。「金の話」

「わたしの思いついた手は」ウーは説明しはじめた。「ロンドンはパークレー広場のウーティー有限会社が、一時的にマリブに進出してきていて、多言語放送で世界中に流される暴露タイプのあるテレビ・ショーのために、刺激的、衝撃的、猥褻でさえあるような生録テープを――ビデオテープが望ましいが、やむをえなければ録音テープも可能――手に入れようとやっきになっている、といった噂を流す。こちらの希望にかなったテープには、謝礼の用意あり、いくらにする？　十万ドルまで？」

「なぜポンドにしない？」デュラントが言った。

「そのほうがいいな」

「どういうふうにやるつもりだ、ハリウット・リポーター》に広告でも出すのかね？」ストーリングズが訊いた。

「口コミだけにすべきだと思う」ウーは言った。「街な

ジョージア・ブルーはうなずいた。「ビデオテープかもしれないし」

デュラントはウーのほうを向いた。「どう思う?」

アーティ・ウーは居間の高い天井を長いこと見つめていた。「アイオニは驚くほど催眠術にかかりやすい。二人がテープにとったということに関しては――」そこで言葉を切ると、視線を下げ、デュラントを見やった。

「しかし、きみの話はそうではないわけだな?」

「違う」とデュラント。「彼女を催眠術にかけたなら、テープにとってるに決まってる」

「テープにとったとしても、ジョージア・ブルーから言った。「グディスン兄妹が恐喝してくる、と考えたほうがいいわね」

「恐喝は最初のひと噛みにすぎんさ」オヴァビイが言った。「おそらく二人は、テープの部分的なコピーをギャンブルに送りつけてくるだろう。何も確定的なことは話してないが、絵を撃ち、ライスが死んでるのを発見したって部分を。それでじゅうぶんだ。それから、彼女かにリー・ライスを吹っ飛ばすとこを語ってる部分が送られてくる。オーケイ、証拠としては認められないだが、警察が忙しく動きはじめるのはたしかだ。そこで、ギャンブルは支払いに同意する。すると、グディスン兄妹は、最後の一セントまで、彼女の家も含めて巻き上げてしまう」

「しかし、二人はそこで止まらない、そうだな、アザガイ?」デュラントが言った。

「もちろんさ。恐喝者ってのはみな貪欲な変態だ。手を引くべき潮時ってのを知らない。それは、すべてが実に容易で、何の……苦労もないからだ。ギャンブルからすっかり搾り取ってしまうと、二人は、大衆ゴシップ紙にテープを売ろうとするだろう。ジョージアが言うように、ビデオテープにも撮ってれば――ビデオカメラでだな――きわどいテレビ・ショーにも売り込めるし、去年の大晦日の晩、アイオニ・ギャンブルが億万長者の元婚約者を撃ち殺したときの模様を語るのを、何百万もの人間が見守るってことになる。そのころには、兄妹はかなりの金持ちになってるはずだな」

「あんたならそういうふうにやるわけだな、アザガイ?」デュラントが訊いた。

オヴァビイは用心深い冷たい目でデュラントを見つめた。「あんたやおれのような男になら、そういうふうになるだろうとわかってるってことさ」

ウーは彼女を[illegible]、それから[illegible]
その先があるのかな、ライアン」
「紙ナプキンで軽く口をふいてから、彼女はつづけた。
「たんなる憶測なら」
ライアンは眉をひそめた。「たんなる憶測でもなんでも、同じじゃないか」
オーケイ。アイオー・ギャンブルは、グディスン兄妹に催眠術をかけられなかったと言った、そうね？」
ウーはうなずいた。
「彼女を深い催眠状態に導くのはむずかしかった？」
いいや。
「グディスン兄妹もあなたと同じくらい催眠術がうまいとしましょうか」
「二人のほうがうまいとしよう」
「その場合、グディスン兄妹は、二度目にギャンブルと会ったとき――ほかには誰もいなかったときね――彼女に悟られることなく、その記憶にも残さずに、催眠術をかけたかもしれないと想像することはできるわけね？」
ウーは黙ってうなずいた。
「すると、深い催眠状態におちいってる間に、彼女は、ライス邸に二度行ったことを二人に話したかもしれない――もちろん、ほんとうに二度行ったとしての話だけど」
「二度行ったことにしよう」デュラントが提案した。
ジョーンア・ブルーはうなずいて同意した。「オーケイ。一度目に行ったとき、彼女はすでに酔っていた。口論のあとライスを撃って、自宅に戻り、さらに飲んで酔いつぶれた。目が覚めると、記憶に欠落があって何も思い出せない――いまだにヒリー・ライスに対して激しい怒りを覚えているということ以外」彼女はふたたびウーを見やった。「それは可能かしら？」
「なんとか」
「としたら、こういったこともなんとか可能なわけね。つまり、ライスに対する激しい怒りがよみがえってきたギャンブルは、またこの家に戻ってきて、ライスではなくシャガールの絵を撃ち、彼の死体を発見するけど、前に自分が撃ったことはいぜんとして思い出せない。で、九一一番に連絡し、最終的に意識を失い、目覚めても何ひとつ覚えていない」
「きみの推測では」デュラントが言った。「グディスン兄妹が、二度目の催眠術のとき、それをひとこと残さずテープに録音した？」

ガイ・オヴァビイが、それぞれエージェントのジャック・ブローチ、ポルノ映画製作者のリチャード・ブラッキーンと会ったときのことを報告した。さらに続いて、二人で行った朝食つき潜伏宿で、コリーン・カレンと出くわしたときの模様を補い合いながら細かく語った。

最後にストーリングズが報告した。それが引き起こした効果ににんまりしながら、チキン・バケットに手を突っ込んだ彼は、下腿肉を一本取りだすと、誰が最初に反応をおこすかうかがいながらかじりついた。

結局、それはアーティ・ウーだった。ワインレッドの帯なし麻の上着を着た彼は、長く黙していてから尋ねた。「ミスタ・クリーヴランドは俳優だと言ったかな?」

ドラムスティックがまだ口に詰まっていたので、ストーリングズは黙ってうなずくだけにした。

「年齢は?」

ストーリングズはさらに何度か頷き、飲み込んでから答えた。「わたしより十歳ほど上だな。ということは、まさに老齢の戸口に足を踏み入れたということだ」

郡保安官事務所の連中は、ミスタ・クリーヴランドの証言そのものよりも、彼がどれくらい飲んでいたかのほうに興味を示した?」

「あの男は、毎日着実に一定量を飲むタイプだな、アーティ。アイオニ・ギャンブルの車を二度目撃した晩――ま、見たとしてだが――ほかの晩よりそうよけいに飲んでいたとは思えない」

「すると、記憶が損なわれているわけではない?」

「その点は断言できない。《風と共に去りぬ》で、ヴィヴィアン・リーに言った台詞を正確には思い出せないことは認めている。しかし、この家の高さを寸分たがわずに言ったし、その件で、ライスを告訴してかかった金額も端数まで言えたよ」

巨大な窓辺に立ち、サンタモニカの町の灯を見やっていたデュラントが振り返り、チキンの骨を空の〈KFC〉バケットに捨てて言った。「あんたは、アイオニ・ギャンブルの記憶を充分さかのぼらせなかったのかもしれない、アーティ」

「かもしれない」とウー。

「でも、クリティスン兄妹はそれをしたかもしれない」

エーリア・ノルーから電話があった。彼女は今回も長いカウチにストーリングズと坐り、二人のあいだにチキン・バケットが置いてあった。

な。そろそろまた禁酒会に通いはじめたほうがいいのではないか、などとぬかしおった」

「一度目は誰か別人だったという可能性は？」ストーリングズは訊いた。「つまり、誰か別人が彼女の車に似た車に乗っていたということは？」

クリーヴランドは肩をすくめた。「警察もそれとまったく同じことを言ってやった答えを言えばだ、そうでないほうに百対一で賭けるということじゃな」

沈黙がおりた。ようやく、ストーリングズが沈黙を破って最後の質問をした。「で、あんたは、彼女がどうなると考えている？」

「わしの考えかね、願いかね？」

「どちらでも」

「あの女が勲章をもらえるよう願っておるよ」とリノク・クリーヴランド。「しかし、そういったことになるとは考えておらんが」

21

のちにヘカーネル・サンダース・セミナーへとジョージア・ブルーが命名するミーティングの席で、アイオニ・ギャンブルのメルセデスを二度目撃した老俳優に関するブース・ストーリングズの報告は、唖然とした沈黙と呼ぶにふさわしい状態を生みだした。広大な居間の真下で砕け散る重い波の音がなかったならば、たしかにそういえただろう。居間に集ったウー、デュラント、オヴァヒイ、ブルー、ストーリングズの五人は、七十三ドル相当のケンタッキー・フライドチキンを夕食にしていた。

兵站（へいたん）係に任命されているブース・ストーリングズは、地元のチェーン店でフライドチキンを買ってきていて、ウーとデュラントがアイオニ・ギャンブルの催眠術のいきさつを報告する直前、何も弁解せずにそのお手軽な夕食を出したのだった。次に、ジョージア・ブルーとアザ

えらく時間がかかるのでな　窓から海を見るのが好きなんじゃよ。自分のしてること、あるいはしようと骨を折ってることを見るよりは、そのほうが面白いわけだ、な？」

ストーリングズは同情してうなずいた。

「大晦日の晩、十一時半ごろ小便しとると、ライスの家の中庭に彼女の車が停まっとるのが目に入った。あの女、しゃれたメルセデスのロードスターを持っておってな、一台十万ドル近くしそうな新車じゃよ。しかし、そのときはそんなことは考えず、わしは寝室に戻り、大晦日恒例の儀式に取りかかった。つまり、ひと瓶抱えてベッドにもぐりこみ、テレビで名も知らぬ連中がばかなまねをするのを観るわけだ。そうして、十二時半ごろ、間違いなくもう新年になったと思われたころ、また小便しにいかねばならなくなった。で、そのとき気づいたわけじゃな」

「どんなことに？」

「あの女の、アイオニ・ギャンブルの車がなくなっとると」

「それで？」

「それで、わしは考えた。大晦日の晩にゆっくりしていかんのは、あるいは、ゆっくりしていたにせよ、元婚約者と新年を三十分しかすごさんのは少々おかしなことだと。しかし、それがどうした。わしの知ったこっちゃないからな。で、わしはベッドに戻った。そのあと、朝の五時ごろ、また小便しにいった。すると、あの女の車が戻ってきていて、クラクションを続けざまに鳴らしておった。そのうちに、彼女が車から出てきて、何か叫びはじめた。何を言っとるのかはわからなかったが。そうして家のなかに入っていったが、あのとき、ライスを撃つか、ほんとに死んでいるのか確かめたのじゃろう」

「これは驚いた」ストーリングズは言った。「夜なのに、どうしてそんなによく見えたのだろう？　一種の泥棒対策として――わたしはそうしているが――ライスも戸外の明かりをつけておいた？」

「玄関灯だけでなく、クリスマスの照明をすっかりつけておったんじゃよ」

「警察は何と言っていた？」

「いつ？」

「いまわたしに教えてくれたことを話したとき」

「何も。連中はいまの話をすっかり書き留めたあと、大晦日の晩、わしがどれくらい飲んどったか知りたがって

「ま、パーティなら、あの男はしょっちゅう開いておったよ」とクリーヴランド。「ちょっと見にはわからなかったがな。パーティはいつも浜辺側で開かれとったので、とりたてて騒音はなかった。毎回駐車係を雇い、客の車をどこかにまわして隠しといたから、駐め置かれた車やら渋滞で文句をつけることもできんわけだ。しかし、あの女の車が中庭に駐められとるのはよく目にしたものだ。ひと晩中置かれとったこともたびたびじゃった」

「誰の車が？」

「アイオニ・ギャンブル――あの男を撃った女、彼女に神のご加護を」

「ほんとうに彼女がライスを殺したと考えている？」

「機会があったのはたしかじゃな。実際、二度ほど」

「なぜ二度？」

「わしはもう熟睡できんのでな」クリーヴランドはヴァット69に手を伸ばし、自分のグラスに注ぎ足した。少なくとも一オンス半ほど注いでから、ボトルを大理石の板の上に戻す。「たとえよく眠れても、二、三時間ごとに小便しに起きなくてはならん。いまいましい前立腺のせいでな。で、二階の便所に立っておるとき――なにしろ

ほかにも角度を見るにも角度を使っておったで、十億トルクーにあるものなかでも人間を殺すのは人はか者だけだ、とたちまち思い知らされたわけじゃ」

もちろん、あんたたちは仲がいいわけではなかった」

「あいつがあのいまいましい家をどれくらい高くするつもりなのか知ったとき、わしはセンチュリー・シティのオフィスに会いにいった。あの若造、弁護士たちと話してくれとぬかしおってな。わしらが話をしたのは、それが最初で最後じゃった」

ストーンクズは肩ごしにライス邸をちらりと見やった。「なかに入ったことは？」

「いいや」

「わたしがこれまで滞在したなかで最高の居心地とはいえないが」

「なら、どうして借りたのかね？」

「わたしの勤めている会社はロンドンにあるんだが、ロサンジェルスに進出しようと考えていてね。二人の共同経営者が、ちょっと気晴らしの必要があると考えていた。それで、ライス邸を二カ月貸すという話にわたしが飛びついたわけなんだ。なにしろ、果てしないパーティのために設計されているように見えたものでね」

軽くうなずき、ホッとした笑顔をみせると、クリーヴランドは居間へと案内していった。「ああ、しかし、この二年ほどたいして仕事をしてはおらんのだよ」

この二年というより十年といったところだろうと思いながら、ストーリングズは訊いた。「マリブにはもう長いこと？」

「五一年から、ロスには三七年からだが」とクリーヴランドは答えて、大理石の上板をのせたテーブルから、半分空になったヴァット69のボトルを取りあげた。「スコッチ、オーケイ？」

「ありがたい」

「水は？」

「少々」

「氷は必要かね？」

氷入れが見あたらなかったので、ストーリングズはいった。「その習慣は失くしてね」

グラスを手わたされると、ストーリングズは大きな窓のほうを振り返ってみた。ハンティング・コースト・ハイウェイとビリー・ライス邸が見えていて、つま先立つと、太平洋の小さな断片が望めた。

「眺めは二階のほうがいい」そう言って、クリーヴランドは灰色のクラブ・チェアにゆっくりと腰をおろした。

ストーリングズは窓の前に置かれた水色の低いカウチを選ぶと、スコッチを味わい、主人役に隣人の笑顔を向けた。「世の中の移り変わりを目にしてきたにちがいないですな」

「そうとも、だからこそ、《大洪水》のころに戻っていくわけじゃな――あるいは、ま、《風と共に去りぬ》に。南部の若い連中がスカーレットのまわりをうろつく、最初の数シーンを覚えとるかね？　ま、わしもそのひとりで、〝よくいらっしゃいました、ミス・オハラ〟という台詞をいわねばならなかった。〝よくいらっしゃいました、ミス・スカーレット〟だったかもしれんが。もうどっちだったか覚えとらんよ。だが、そんな台詞など気にするやつもおらんしな」

「映画狂が気にするのでは？」

「くそくらえじゃな」

礼儀上もうひと口飲んでから、ストーリングズは尋ねた。「亡くなった隣人とはよく会っていた？」

クリーヴランドはタバコをもみ消し、新しいのに火をつけてから答えた。「わしの家の眺望を台無しにしたことで、あの若造を告訴してやった。ところが、あいつは

ストーリングズに打ち明け話をしようとはしなかった。最後に彼は、ライス邸からハイウェイをまっすぐ横切ったところにある、二階建ての家のベルを鳴らした。

[illegible]

歳にはなっているようにみえた。緑色のパイル地の短いバスローブ姿で裸足、タバコとメタル・フレームの軽い

[illegible]

は何も身につけていないようだ。それでも、苦虫を噛みつぶしたような大きな口の左端にタバコをくわえた、そのいかつい顔にはおぼろげながら見覚えがある、とスト

[illegible]

ストーリングズが挨拶する前に、老人がタバコをひょこひょこさせながら言った。「遠中が二週間ハワイに行

[illegible]

「誰が？」

[illegible]

[illegible]

よ」

[illegible]

[illegible]

ている笑顔をみせて、ストーリングズは言った。「名前はブース・ストーリングズ。おたくたちの隣人になったばかりなので、ちょっと挨拶まわりをしているところでね」

「どの家に？」

「哀れなミスタ・ライスの持ち物だった、その通り向かいの家」

老人はうなずいた。タバコを口からはずし、反射的に

[illegible]

込んで言った。「ビリー・ライスにはいろんな面があったが、貧乏とだけは間違いなく縁がなかった」

「彼をかなりよく知っていたのでは？」

[illegible]

「実をいうとそうなんだ」

「なら、入ってくれ。一緒に一杯やって、あんたがお近づきになれるのは、隣人のなかでもいちばんつき合いのいい隣人、リック・クリーヴランドじゃよ」

短いが、それに気づくには充分の間があってから、クリーヴランドは右手を差しだした。相手が名前と顔を一致させるのを望んでいるといった間の取り方。

差しだされた手を握ってから、ストーリングズは出ま

[illegible]

つとも引き起こした。

五分後、コリーン・カレンがスミス&ウェッスンの三八口径を二挺、左右の手に下げて戻ってきた。どちらのリヴォルヴァーも用心金に人差し指をかけてぶら下げている。彼女は、はたと足を止め、ジョージア・ブルーが向けている散弾銃を見つめた。

「あたしを撃つつもりかい、痩せっぽち?」

「まだわからないわね」

ジョージア・ブルーから目を離さずに、カレンはゆっくりとテーブルに寄ってきて、片方の拳銃を用心深く置いた。オヴァビイがそれを手に取った。もう一挺をテーブルに置いたカレンは、ふたたびブルーを見つめて訊いた。「これでどうする?」

「リムジンのナンバー」とジョージア・ブルー。

コリーン・カレンがナンバーを口にすると、ジョージア・ブルーは散弾銃の撃鉄をおろした。そうして、薬室を折ってあけ、弾丸を取りだすと、散弾銃をテーブルに置いて言った。「払ってやって、オヴァビイ」

20

同じ日の午後から夕方にかけての二時間近く、ブース・ストーリングズはマリブの新参者という役柄を演じるべく、いくぶん唖然とした隣人たちや、完全に唖然としたラテン系のメイドたちに自己紹介してまわっていた。家のなかに招き入れられたのが二度、追い返されたのが二度、鼻先でドアを乱暴に閉められたのが二度、玄関口で冷淡な短いおしゃべりを交わしたのが四度。一度は礼儀正しく話を聞いてもらえたが、内容はまったく理解してもらえなかった。それは、デュッセルドルフからヴァカンスでやってきた女性で、〝オーケイ、ナイスガイ〟以外はドイツ語しか話せず、終始笑みをたたえながら、そのひとつ覚えの英語を何度でも連発していた。

まともに話をした隣人たちも、故ウィリアム・A・C・ライス四世に関しては何も知らないか、少なくとも、

カレンはにやりとした。オヴァビイもにやりと笑い返した。ジョージア・ブルーは先をうながした。

「すると、ボーリンがヒステリーを起こした。あたしのことを、どうしようもない間抜けで、拳銃とコンドームの違いすらわからない、とわめきはじめた。あたしはヒースで、あんたの連れがわめけばわめくほど、値段が高くなるからねと言ってやった。すると、彼は腕を振り上げ、ボーリンを殴り倒した。尻もちをついたままあたしをののしってる彼女を尻目に、あたしたちは手頃な中古のチーフ・スペシャル二挺の値段を交渉した。ボーリンがヒステリーを起こさなけりゃ、一挺たったの五百ドルだったんだけど、結局ヒューズは七百五十ずつ払うはめになったのさ」

思案顔でうなずいてから、オヴァビイは訊いた。「三八口径二挺だといくらになる？」

「一挺六百」

「考えとこう」と答えて、彼は本題に話を戻した。「二人はどうやって出ていった？」

「同じ黒塗りの古いリムジンで、運転手も同じ」

「すると、そういう手筈になってたのね」とジョージア・ブルー。

「だろうね。あたしの金は？」

「二人の行く先は知らない？」

「あたしは訊かなかったし、二人も言わなかった」

「オーケイ、カレン」オヴァビイが言った。「取り引きはこうだな。あんたはすでに千ドル手に入れた。グディスン兄妹について話してくれたことにあと千ドル払おう。二挺の得物にも千――ただし、状態がよければだが。リムジンのナンバーを教えてくれれば、さらに千。それで、さっきおれが言ったように、全部で四千になる」

「なんであたしがあの車のナンバーを知ってると考えるんだい？」

オヴァビイは肩をすくめた。「知ってるか知らないか、どっちかさ」

「ま、知らないはずあるかい？」そう言ってカレンは立ち上がり、散弾銃に手を伸ばしたが、ジョージア・ブルーの手のほうが速かった。

「これは置いてくのよ」ブルーが言った。

カレンは考え込んでいたが、やがて肩をすくめると、客間の奥のドアを抜けていった。彼女がいないあいだに、ジョージア・ブルーはハンドバッグから二個の弾丸を取りだし、散弾銃に装塡し直すと、薬室を閉め、撃鉄を二

「二人にかかってきたことは？」
「そしたら、ふんだくってやれたね」
「二人がテレビを、ケーブル・テレビの音を消したのはいつ？」ブルーが訊いた。
「消したとこったかい？」
「想像してるのよ」
「三日目の夜に消して、もう二度とつけなかった。その晩、二人は部屋を出てきて、あたしと仲よくなろうとしはじめた――馴れ馴れしすぎるほどに。まずヒューン、次にポーリー、それから二人一緒になって。スキンシップというやつさ。二人とも着てるものを脱ぐのも好きでね、しまいには、彼のほうはショッキー・ンョーツ一枚だけになったし、彼女はちっぽけな古いブラジャーとパンティのほかはみんな脱いじまった。それでも飽き足らず、ブラジャーとパンティも取っちまおうとする。あたしは、ときには三人でやったってかまやしないけど、あの二人の変態とはごめんだね。ヘビとワニと一緒にベッドに飛び込んだほうがましさ。で、あたしは新しい規則をこしらえた」
「どんな？」とジョージア・ブルー。
「規則その一、宿の女主人に手を触れてはならない。その二、コックとプッシーはつねに隠しておくこと」
「二人の反応は？」とオヴァビイ。
「くすくす笑ってただけさ。そのあと、食事のとき以外、二人とはあまり会わなかった。出ていく朝まで」
「一週間前のあした？」
「そのとおり」
「前もって出ていくとこったの？」ショージア・ブルーが尋ねた。
カレンは首を振った。「その朝、荷物をみんな持っておりてきたのさ。革の大きな古いスーツケース一個と、キャンバス地だか、山登りの連中が使う新素材でできた、週末旅行用のバッグを二個。二人ともすっかり盛装してて――ただし、すっかり盛装してるように見えるってことだけどね――あたしの言いたいことわかるかい？」
オヴァビイはうなずいた。
「で、あたしは二人のどこへ行って、〝もう出発かい？〟と訊いた。すると、ヒューズが真面目くさった顔になって、残念だけど、そろそろほかへ移らないといけない、とかなんとか答えた。それから、何か自分を護るものを売ってもらえないだろうかと言うので、コンドームは持ってないよ、と答えてやったのさ」

「秘密の合い言葉を言う」
「どんな？」
「週五千」
「三食つきの泊まり賃なんだよ、ねえさん」
「週一万でほかに得られるものは？」オヴァビイが訊いた。
「返金保証のプライヴァシー」
オヴァビイは満足したようにうなずいた。高いのはたしかだが、暴利ではないとでもいうかのようだ。「保安官補が立ち寄るのは？」
「一週おきの火曜日」
「で、何を持って帰っていく？」
「ひとり頭千ドル――そのひとり千は、たとえこっちがオケラでも払わなきゃならない」
「オーケイ」とショーンア・ブルー。「グディスン兄妹がチェックインした。それから？」
「部屋に三日いたね――食事も部屋でとった。テレビは四六時中つけっぱなし。くだらないロック専門のケーブル・テレビばっかり、ま、音は絞ってたけど。バックに音を流しときたいってふうだった。けど、ベッドでよがってる声までは消せない音量だったのはたしかだね」
「なぜ二人は本名を使ったのかな？」オヴァビイが訊いた。
「あのイギリス訛りで？　ばかばかしい。二人が口を開いたとたん、〝パスポートを見せとくれ〟と言ったさ」
「兄妹だと言った？」
「夫婦だって言ってたね。そうだろうとも、坊ちゃん、嬢ちゃん、とあたしは考えた。たまたま、同じ鼻と口と目と耳をしてるんだろうよ、とね。けど、近親相姦しようがどうしようが、知ったこっちゃないからね。で、あたしは、二人をミスタ・グディスン、ミセス・グディスンと呼んだ――少なくとも、ヒューシーとポーリーと呼んでくれと言われるまでは」
「二人の部屋に電話はあった？」とオヴァビイ。
「この家に電話は一台きりだし、鍵をかけてある」
「それを使わせてくれと言ったことは？」
「一度」

オヴァビイはうなずいた。
「グディスン兄妹のことを話して」ジョージア・ブルーがうながした。
「噂話が好きじゃないんだね、え、ねえさん？」
「グディスン兄妹よ」とブルー。
「オーケイ。グディスン、ヒュージーとポーリー。兄と妹。あの二人セックスしてんだよ。ま、それはあんたらも知ってると思うけど？」
オヴァビイはうなずいた。
「しまいには、あたしまでベッドに引き込もうとしてね」
〝しまいには〟というのは、正確にはいつのこと？」
ブルーが訊いた。
「最後の晩は、一週間前のあした」
「最初に戻らない？」
「あたしの金は？」
オヴァビイが上体を乗りだし、散弾銃に手を置いて言った。「おれのパートナーにこれを渡したら、金の一部を渡そう」
カレンは何度もせわしなく――オヴァビイには数えきれないほど――まばたきをした。「痩せっぽちに持たせとくわけにはいかないね」
「オーケイ。銃はあんたが持っていていいが、弾は彼女が預かる」
反論の暇を与えずに、オヴァビイはテーブルの向かいに坐ったジョージア・ブルーに散弾銃をすべらせた。彼女は薬室を折ってあけると、二個の弾丸を取りだしてハンドバッグにしまい、折れたままの散弾銃をカレンに向かってすべらせた。
散弾銃に手を置いたカレンは、オヴァビイを見やって言った。「金は」
オヴァビイは尻ポケットに手を入れ、すでに数えてある百ドル札十枚を取りだした。それを受け取ると、カレンはゆっくりと二度数えてから、顔を上げて訊いた。
「あと千ドルはいつもらえる？」
「グディスン兄妹のことを話し終わったら」
コリーン・カレンはバーボンの水割りをひと口飲むと、目にかかった黒髪を振り払った。「あの二人は、前もって何の連絡もなく不意に、二週間前のあした、黒傘りの古いノムシンで乗りつけてきたのさ」
ジョージア・ブルーが勝ち誇ったような薄笑いをオヴァビイに向けた。彼はそれを無視して、カレンに言った。

コリーン・カレンは散弾銃の銃口を下げると、二人に背を向け、オーク材の大きな丸テーブルに寄っていった。テーブルには、緑色がかったガラスの笠のついた真鍮の

「ときには」とオヴァビイは答えた。

カレンは三個のタンブラーにたっぷりとバーボンを注ぎ、水を少し加えた。そうして、片手で二個のタンブラーを持ってきて、まずジョーンア・ブルーに、次にオヴァビイに手わたした。

「早りたいなら、早ったらいい」テーブルに戻った彼女は、自分の坐る椅子を引きだした。オヴァビイとノルーもそれになった。

「あんたはある種の警官だった、そうだろう?」

ジョージア・ブルーはバーボンの水割りを飲むことで答えに代えた。

「けど、あんたはだね、伊達男」オヴァビイのほうを向いて続ける。「あんたのおもな仕事は、警官に出くわないようにすることだ、そうだろう?」

オヴァビイのかすかな微笑は何も告げなかった。

「あの二人、グライスン兄妹のことを話したら、レカレン。「いくら手に入る?」

「すでに千ドル手に入れてる」

「その分はもう話した」

「二人について知ってることを話してくれれば、さらに千ドル。二人の居所を教えてくれれば、二千」

「全部で四千?」

オヴァビイはうなずいた。「全部で四つ」

「あたしのことは誰から聞いた?」

情報主を裏切りたくないというように、オヴァビイは顔をしかめた。そのしかめ面を消して溜め息をつくと、残念そうな表情を作って言った。「ディッキー・ブラッキーン」

「あのエロ映画の男?」

コリーン・カレンがほとんど反射的に頭を振り、目にかかっていた豊かな黒髪を振り払った。髪型は一九二〇年代のショートヘアをまねたもので、後ろは短く、真ん中で分けられた髪が左右の耳のちょっと下まで垂れかかっていた。目にかかった髪を振り払うと、彼女はオヴァビイを見つめていった。「あたしの家に押し入ってきたわけを聞かせてもらおうか」

たぶん、まず金の話をしたほうがいいだろうな」オヴァビイが言った。

「誰の金だい？」

「おれの」

散弾銃の銃身がわずかに下がったが、すぐにまた上げられた。「あんたらの持ってるものは、何だって奪えるんだよ」

「おれはズボンの右ポケットに、たぶん最高で三百ドル持ってる、あとこのハートトリーか多めに見積もって六十だが、おれたちは、まとまった金であるものが買えればと願ってここへ来たんだ。で、まあ、おれたちのうち誰も、三百六十ドルをまとまった金とは呼ばないと思うんだが」

散弾銃の銃身がふたたびわずかに下がり、今度はそのままだった。「はっきりいって何を買うつもりなんだい？」

「情報」

「何に関する？」

「グディスン兄妹、ポーリンとヒューズ」ジョージア・ブルーが言った。立ち上がった彼女は、膝の埃を払おうと――ほんとうについているのか、そのふりをしているのか――上体をかがめた。

「立っていいと言ったかい、痩せっぽち？」

ジョージア・ブルーは上体を起こした。「お金の話が出たら、あなた銃のことを忘れたから」

「お望みなら」そう言って、カレンは散弾銃を彼女に向け直した。

そこでオヴァビイは立ち上がり、やはり上体をかがめて、ロンドン製の青いスーツの膝を払った。その動作を続けながら、彼は言った。「グディスン兄妹を知ってるんだろう、コリーン？　イエスと言えば、千ドル手に入る」

「それで千ドル」と言って、オヴァビイはまっすぐ立ち上がった。

19

[illegible]

「あんたは？」

「モーリス・オヴァビイ」

[illegible]

い、え？」

カレンの肌は、オヴァビイが言ったセピア色よりもずっと光沢があった。脂肪分の多いクリームを三分の二ほ[illegible]

記憶に残る顔だといえよう。

その顔の下には長い首があり、黒いタンクトップは、なめらかな肩と胸の発達した筋をおを出しにし、小さな堅い乳房の輪郭をきわだたせていた。タイトな黒いスラックスは、堅く締まった尻を目立たせているし、長い脚をことさら長く見せている。左右の足の位置と、数歩前進するなれたふうに落ち着いて構えている姿勢からは、体の各部がバランスよく連動すること、同時にまた、自信過剰の可能性もあることがうかがえた。

「これだけ、占い家だと、客間だろうな」

「オーケイ。客間」

オヴァビイは右手の引き戸に寄っていき、ノックした。それでも返事がなかったので、引き戸の一枚を壁のなかにすべりこませ、もう一度呼びかけた。「誰かいますか？」数秒待っても応じる声がないので、彼はジョージア・ブルーを振り返った。彼女がうなずいた。

オヴァビイはゆっくりと記室に入っていった。ブルーがあとに従う。彼は明かりのスイッチを手さぐりし、見つけてひねった。記室の反対側でいくつかの明かりが灯った。二人がそちらを振り返ろうとしたとき、鋭い女の声が警告を発した。

「動くと、撃つからね」

[illegible]

めた。ひと呼吸あってから、オヴァビイが唇だけを動かし[illegible]

「両手を頭の上に」女の声が命じた。「早くしな」

二人は命令に従った。

「ゆっくり振り向いて、両膝をつきな。両手は頭にのせたままで」

「そいつはちょっとむずかしいな」とオヴァビイ。

「片膝ずつつくんだよ、間抜けが」

「まず振り向かせたいのかな？」

[illegible]

り向いて、両膝をつきな。ほんとにばか面してるか見てやりと体をまわし、女を見つめた。女の手にした十二番径[illegible]られていた。

「どうしたってんだい？」女が言った。「青い目にブロンド、えくぼの女でも期待してたのかい？」

「ま、セピア色もいいもんだよ」オヴァビイは言った。

アのすぐ左手に細いステンドグラスの窓。長方形の扉の左がわだったと思う。三階建ての家、たぶん、大きな部屋が十五か十六　十七室あるかもしれない。二階の一室[illegible]トヨタのピックアップ・トラックと、半年か、ことによると一年は動かされてないみたいなMGだけね」

「車がないのに〈暗室〉のネオンサインはおかしいな」

とオヴァビイ。

「暗室はみなリムジンで来るのかもしれない」

「かもしれん」と言って、オヴァビイは運転席のドアを開いた。

　ポーチに続く階段のところでジョージア・ブルーが追いつき、二人は一緒に登っていった。オヴァビイがドアベルを見つけて押すと、ベルの音ではなく、ブザーが響きわたった。誰も出てこないので、もう一度、今度は少なくとも二十秒間押していた。さらに二十秒待ってから、ジョージア・ブルーがドアノブをまわしてみた。鍵がかかっていた。オヴァビイは肩をすくめ、あきらめたかのように玄関に背を向けた。その動きを見守っていなかったら、彼の右肘が不意にすばやく動いたのをブルーは見のがしていたかもしれない。細いステンドグラスの窓を[illegible]こいた、六×十インチのガラスを砕いた。

　オヴァビイはくるりと振り返ると、割れたガラスのあいだに腕を差し込み、内側から玄関ドアの鍵をはずした。

「肘がぶつかっちまったようだ」堅く元気のない笑みを浮かべてそう言うと、彼はなかに入っていった。

　ジョージア・ブルーが明かりのスイッチを見つけた。[illegible]開いた先は鏡板張りのせまい玄関ホールだった。彫刻の彫られた真鍮の鉤に乳白色の笠をのせたスタンドは対になっていて、階段の親柱から生えだしたように設置されていた。階段は高さ十四フィートの天井のなかほどまで登っていき、そこで反対側に折れ曲がって二階に達している。階段の左奥は食器室に続いているようで、その先にはおそらくキッチンがあるのだろう。ホールの左側には鏡板張りの一枚の引き戸があった。右側にも同じ引き戸がある。咳払いしてから、オヴァビイが大声で呼びかけた。

「誰かいますか？」

　返答のないのがわかると、ジョージア・ブルーが言った。「左手の引き戸はたぶん食堂に、右手のは居間に通じてると思うけど」

オヴァビイは道路から目を離し、彼女の新しい靴とドレスを見つめた。初めて気がついたとでもいうかのようだ。「なかなかいい。いくらした？」

「靴も入れて、九百六十何ドル」

賛意をこめてうなずきながら、オヴァビイは言った。

「あんたとおれとはだな、ジョージア、ちゃんとした服装が有利に働くってことをいつも理解してたからな」

オヴァビイはレンタルのフォードのハンドルを切り、曲がりくねったアスファルト道路からレンガ敷きのドライヴウェイに乗り入れた。フォードのヘッドライトに照らされ、金色の文字で〈カズン・コリーンの朝食つき宿〉と書かれた緑色の看板が浮かびあがった。その木製の看板の上には、あとから思いついて設置されたように、小さな赤いネオンで「満室」の文字がまたたいていた。

長々と続くレンガ敷きのドライヴウェイを進みながら、オヴァビイは、宿屋は細いアスファルト道路からできるかぎり隠れたところに建てられているのだろう、と推測した。平坦な敷地が、突如として、サンタモニカ山脈の急斜面に変わる地点まで引っ込んでいるのかもしれない。数多くの木々が生い茂っていた。宵闇がおりていたが、ジョージア・ブルーには、その形状と大きさからマツとスズカケが区別できたし、場違いなユーカリの木が一本あるのも見てとっていた。ヘッドライトに照らされた範囲に芝生と呼べそうなものは見あたらなかったが、ほったらかしの花壇があるのは目に入った。そこには、フリーウェイに咲いているデイジー、アザミゲシ、その他、彼女の知らない、あるいは名前を忘れてしまった、旱魃に強い品種の花が植えられていた。

レンガ敷きのドライヴウェイは古びた家を通りすぎたところで終わっていて、その先は扇形に広がり、十数台収容できる駐車場になっていた。しかし、車は二台しかなかった。一台はかなり新しいトヨタの白いピックアップ・トラック、もう一台は幌をおろした年代物のMG・ロードスター。オヴァビイはフォードを停め、シフトレヴァーをパークに入れると、エンジンを切ってライトを消した。そうして、ジョージア・ブルーを見て訊いた。

「どうだ？」

「階段を九段上がると屋根のついたポーチ、それが家の正面から西側にめぐらされてる」彼女は観察結果を述べた。「玄関ドアは堅木造り、すりガラスの球形の笠に入った、たぶん百ワットの電球で左右を照らされてる。ド

「まだよ。あなたは？」
「そこで何か食えるだろう」
〈サミット・バー&グリル〉を一瞥して値踏みすると、ジョージア・ブルーは自分を振り、あとで食べることにすると言った。
チーズ・トーストサンドにヒール・本ってことにすればいい」とオヴァビイ。「チーズ・トーストサンドを作りそこなうなんてことがあるか？」
「何だってやりかねないわ」
「たぶん、あんたの言うとおりだろう」そう言って、オヴァビイは地図をたたんだ。
「行き先はわかってるの？」
オヴァビイはうなずき、エンジンをかけた。「どうだったあの男――ブローチは？」
「如才ないわね」
「アイオニ・ギャンブルに関して何か面白いことを言ってたか？」
「自分はアイオニの最良の友で、彼女のエージェントであり、ビジネス・マネージャー、個人弁護士でもあるということだけね。最良の友であることには料金請求してないけど、それ以外の役割に対しては、彼女の総収入の二十パーセントをもらってる」
「グディスン兄妹に関しては？」
「すぐに胸くその悪い二人組だと判断したと」
新味のない情報だというように肩をすくめてから、オヴァビイは尋ねた。「コリーン・カレンの噂を聞いたことは？」
ジョージア・ブルーはまず眉をひそめ、それからオヴァビイを見つめて言った。「何年も前シカゴに、ブラック・パンサーとIRAの両方につながりを持ったカレンという女がいたけど、ファースト・ネームはコリーンじゃなかった。なぜ？」
「そのカレンが、ロスで最高の潜伏宿を経営してるらしい」
「彼女にグディスン兄妹のことを訊きたいわけ？」
オヴァビイは肯定した。
「無料で情報を提供してくれると思う？」
「何か情報を持ってれば、金を要求してくるだろう。ブースにもらった千ドルはまだ持ってるかな？」
「使ってしまったわ」
「何に？」
「靴とドレス」

来事をニュースにあたいすると考え、二十一カ所で引き起こされた交通渋滞のうちのひとつの写真を七面に三段抜きで掲載した。牽引の指揮はミス・トゥルーセル自身がとったし、到着後、三分割された邸宅を組み立て直し、現代化をほどこす作業も監督した。彼女はその巨大な古い家に独りで暮らし――何人か入れ代わったメキシコ人の家政婦は別にしてだが――一九八一年、肺気腫のためにベットのなかで死んだ。片手にはチェスターフィールド（タバコの銘柄）が、もう一方の手にはまだ擦っていないキッチン用のマッチが握られていたという。

一九八二年、検認裁判所によって競売にかけられた旧トゥルーセル邸の価格は、老朽化のために十六万五千ドルでしかなかった。当時二十二歳のコリーン・カレンが、二十枚の支払保証小切手でそれを落札した。それぞれ違った銀行や貯蓄貸付組合から振りだされたそれらの小切手には、どれも九千ドル以下の金額が記載されていた。ミス・カレンは、耳を傾けてくれる者には誰かまわず、その古びた邸を朝食つきの宿屋にするつもりだという計画を話して聞かせた。〝西部で最高の宿屋〟になるだろう、と誇らしげな様子で。

サンフェルナンド・ヴァレー・フリーウェイから州道二七号線に入ると、道はサンタモニカ山脈をトバンガまでくねくねと登っていく。そのあと、反対の海側斜面をやはりくねくねと下っていき、パシフィック・コースト・ハイウェイに続いている。その二七号線から海岸道路に入る交差点で、サンフランシスコ、サンタバーバラ、もしくはオクスナードに向かう世馴れたドライヴァーたちは、最近ロサンジェルス郡に編入され、財政難に苦しむマリブ市に貸しだされた郡保安官補どもの餌食にならないようにと、スピードを落とすことになる。

海岸道路とサンフェルナンド・ヴァレー・フリーウェイのほぼ中間地点、料道二七号線の高度がいちばん高まったところに、〈サミット・バー&グリル〉がある。いまそこで、レンタルのフォード・セダンの運転席に坐ったアザガイ・オヴァビイが、トーマス・ブラザーズ社のロサンジェルス郡の地図を調べていた。数分後、ショージア・ブルーの車が寄ってきて停まった。自分のレンタカーをおりた彼女は、オヴァビイの車の助手席に乗り込んできた。

「夕飯はすませたのか？」地図から顔を上げずにオヴァビイが訊いた。

18

いまはロサンジェルスのはずれになっているが、一九四七年当時は中心街だったところから、トパンガ・キャニオンの頂上近くに位置する五エーカーの敷地までの四十四マイル、旧トゥルーセル邸を牽引していくことは、ハリウッド・フリーウェイがなかったら不可能だったにちがいない。

種々雑多な自由人、麻薬常習者、神秘主義者、一般労働者、一九六〇年代のヒッピー、俳優、作家、芸術家、債権者に追われる哀れな連中——かつてそういった人たちがゆるやかに結ばれた地域社会を形成していたトパンガは、一九七〇年代後半から八〇年代にかけて、高級化という疫病に感染した。その結果、田舎の雰囲気の味わえた低家賃の逃避所も、ある評論家が〝ネオンまたたく緑の谷〟と呼ぶ場所に変貌したのだった。

一九四七年にトパンガまでの長い旅をすることになる、十五室を備えたその邸宅は、一九一〇年、ヴィクトリア朝風の装飾過多な様式をちょうどまぬがれいられる時期に建てられた。フリーウェイの通り道にあたったために、一九四八年に取り壊される運命となった邸宅を救ったのは、所有者ミス・マーサ・トゥルーセルだった。一九一一年にその家で生まれたミス・トゥルーセルは、そこで生涯を終えたいとの願いから、彼女の法律事務所の幹部を訪れると、現金一万ドル——一九四七年当時としては相当な額——の入った茶封筒を手わたして、〝誰であれ買収すべき人物を買収してちょうだい、ヘンリー〟と命じたのだった。

ただちに許可がおりた。結局、トゥルーセル邸は三分割され、トパンガ・キャニオンのわりと平坦な敷地まで時速三、四マイルで牽引されていった。その五エーカーの土地は、一九三二年、三百ドルの借金のかたとしてミス・トゥルーセルの父親が手に入れ、娘に遺贈したものだった。

機械の故障、峡谷の急勾配、小さな事故がいくつかあったりして、邸宅を新たな敷地まで移動させるには十三日かかった。《ロサンジェルス・タイムズ》は、この出

ドーミエのデッサンを細かく調べはじめた。やがてブローチに向き直り、ほほ笑みながら言った。「この三枚のドーミエは贋作ですね、ご存じないといけないので」

ブローチも笑みをみせ、背もたれの高すぎる耳つき椅子から立ち上がった。「しかし、実によくできた贋作、違いますかな？」

「悪くはないですね」

「シークレット・サーヴィスではそうしたことも教える？」

「偽物の見抜き方を教わりました」

「人間の偽者のほうも？」

「わたしの専門です」

「仕事が欲しくないというのはたしかですかな？」

「ご心配なく」

「もうひとつ質問していいですか？」

彼女はうなずいた。

「今夜ディナーを一緒にどうです？」

「残念ですが」

「また別の晩に？」

「さあ、どうでしょう？」そう言って、ショーンア・ブルーは別れの笑みを送ると、トアに消えていって聞き、出ていった。ジャック・ブローチは、それを間違いなく第一級の退場のしかただと評価した。

「彼女の最良の友ですな」

あなたの名前[illegible]、彼女はどれくらい[illegible]

[illegible]、今急ではなく、センシティブを知りたいんです」

わたしはアイオニのアパートメントであり、ヒンネス・マイ[illegible]であり、個人弁護士でしてね。それに対して、彼女は総収入の二十パーセントを払ってくれる。友情は無料ですかね」

「彼女の投資も任されている？」

ブローチはうなずいた。

「彼女は破産状態、裕福、富豪――どれです？」

「現在の彼女の純資産は、十年前だったら富豪といえたと思うが、今日ではきわめて裕福というにすぎませんな」

「彼女とウィリアム・ライス四世との破局の原因は？」

「まったくわからない」

「推測では」

「アイオニ自身に見当のつかないことが、わたしに推測できるはずもないですな」

彼女に何か弱みは？　つまり、精神病、ＨＩＶ陽性、麻薬中毒、性的異常、アルコール中毒、経歴に影響をおよぼす可能性のある、精神的もしくは肉体的病患をわずらっているといったことは？」

「いったいぜんたい何の話なんです？」

「恐喝」とジョージア・ブルーはいった。「で、答えは？」

「ノー」

「ギャンブルが彼を――ライスを――殺したと考えてます？」

「いいや」

「では、誰が殺したと？」

「見当もつかない。まったく」

「グディスン兄妹が姿をくらました、逃げだした理由はどのように？」

「もしそうだとしても、その理由もまたわたしにはわかりませんな」

「あなたがグディスン兄妹だったとして、姿を消したかったら、どこへ行きます？」

「大都市に」と答えてから、ブローチは笑みを浮かべてつけくわえた。「おそらく、ロサンジェルスに」

「お時間を割いていただき感謝します、ミスタ・ブローチ」ジョージア・ブルーは立ちあがると、後ろを向いて、

あの二人と同席した一時間が終わるころには、どうにも胸くその悪い二人組、と査定し直してましたがね」

「そのことはもちろんギャンブルに話した？」

「彼女の刑事弁護士の批判になるようなことは言えなかったですな」

「ハワード・モット」

ブローチはうなずいた。

「彼がグディスン兄妹を推薦した？」

「多少は」

「推薦した、しなかった、どっちです？」

「モットは二人の噂を聞き、身元調査をしてから、きわめて評判のいいロンドンのエージェンシーを通して雇い入れた。彼が話を聞いたロンドンの人間は、口をそろえて、グディスン兄妹ならブルーリボン賞の二人組だと請け合ったようですな」

「モットをギャンブルに推薦したのは？」

「国内最高の刑事弁護士を見つけてほしい、とアイオニがわたしに頼んだ。わたしが五人の弁護士を引き合わせたところ、彼女はモットを選んだ。賢明な選択をした、とわたしは彼女に言いましたよ」

「いまでもそう信じている？」

「もちろん」

「なぜ？」

「質問の意味が理解できませんな」

「わかってるはずです」とブルー。「あなたはモットを推薦した――何人かの候補のなかから。アイオニ・ギャンブルがモットを雇う。彼がグディスン兄妹を雇ったところ、急にすべてがうまくいかなくなった。わたしの質問は、それでもまだ、彼女がモットを選んだのは賢明だったと考えているかということ」

「賢明かどうかは関係ありませんな。アイオニは、ハウイ・モットと一緒にいると落ち着く。彼を信頼している。それにモットは、堂々たる信用証明を持った、最高の弁護士でもあるわけですからな」

「あなたも弁護士、そうでしょう？」

「なぜ？」

「弁護士同士はたいていかばい合うものだから」そこで言葉を切ると、ブルーは広いオフィスをゆっくりと見まわした。備品類を値踏みしているような目がやがてブロンチに戻され、新たな質問が口から出た。「助言を与える以外に、アイオニ・ギャンブルのためにどういったことをしてます？」

の局員がいるとは思わなかった」

「で、もっかわたしの依頼人に雇われている」

「ウーとデュラントに雇われている」

「ウーデュー有限会社」とブローチ。「人目を引く名前だ」

「覚えやすいのはたしかですね」

「彼らは、あなたが刑務所を出るとすぐに雇ったわけですな」

「彼らは、刑務所のゲートが大きく開かれたとき、ある人間がわたしを待ってるように手配したんです」

「ということは、あなたは以前から彼らを知っていたにちがいない」

「かならずしもそうとはいえないけど――でも、そう、以前から知ってました」

ブローチは椅子の背にもたれかかると、鼻の下で両手を合わせて指を伸ばし、数秒間彼女を見つめていた。やがて、指を折り曲げておろすと、言った。「わたしが何をして生計を立てているかご存じですか？　病んだ自尊心に集中治療をほどこしてやる。で、それが必要でなく思える人間に出くわすのはきわめてまれなことです」

「アイオニ・ギャンブルの自尊心は？」

「驚くほど堅固」

「彼女のためにしているおもなことは？」

「助言を与える」

「あなたが催眠術師を雇うように助言した？」

「それは彼女の刑事弁護士の勧めですな。もっとも、わたしもそれを支持したが」

「あの二人に、グディスン兄妹に会ったことは？」

ブローチはうなずいた。

「で？」

ジャック・ブローチは身を乗りだした。これまでにないかなり真剣な表情を浮かべている。〝この点はわたしを信用してください〟というときにいつもみせる表情なのだろう、とジョージア・ブルーは判断した。

「わたしはタレント業界の人間ですからね」彼は言った。「才能を見つけ、育成し、まとめ上げて、売り込む。ときには、それがもはや売り物にならない時期を判断する必要もある。というわけで、わたしは査定官のようなものなんです。で、ヒューズとポーリン・グディスンに対するわたしの最初の査定は、おべんちゃらを並べて近づいてくる平凡な追っかけ。アイオニと一緒に、一度だけ

感じさせるゆがんだ笑い顔――彼の専売特許というべきもの――を披露してから、ウインクを送って出ていった。

ジャック・ブローチは笑顔をみせて立ち上がると、十八世紀のフランスの職人が少なくとも一年はかけて作り上げたにちがいないデスクをすばやくまわってきた。デスクから完全に出てきたところで、ブローチは彼女の名前を呼んであたたかい挨拶をし、〝この小さなトーミエ〟と呼んでいる絵の下に置かれたカウチに坐るよう勧めた。

ジョージア・ブルーは彼に背を向け、三枚のハト描きのブッサンに目を走らせてから、向きを直って腰をおろした。ともに坐ったところで――彼女はカウチ、彼は背もたれの高すぎる耳つき椅子――ブローチが言った。「質問にお答えする代わりに、あなたを雇うか、代理人契約書にサインするよう口説きたいものですな」

「素敵なお話」とブルーは応じたが、〝おべんちゃらを〟と言いたいところだった。

自分の額のV字形の生えぎわを手で触れて、ブローチは訊いた。「その白い筋　それは本物、違いますか？」

「そう見えます？」

「そのはずですな。あなたには必要ないものだから」

ジョージア・ブルーはかすかな笑みをみせ、次の質問を待った。

ブローチの右手がふたたび髪の生えぎわをさまよった。「そうなるのにどれくらいかかりました？　一年？　ひと月？　どれくらい？」

「ひと晩」

「それはそれは、何があったんです？」

「刑務所に送り込まれて。フィリピンの」

ブローチはショックを受けたというより魅了されたようだった。「どういった刑で？」

「五年」

「いや、つまり――」

ジョージア・ブルーは最後まで言わせなかった。「ある人物を殺したと言われて。わたしは殺してないと主張した。数日前に減刑になったんです」

「恩赦というわけではなくて？」

「そういうわけではなく」

「で、その前は？」

「シークレット・サーヴィスにいました」

小さなアーチが好きな人物だったようだ。ブロンドの受[illegible]

[illegible]ら、笑顔をみせて、ミスタ・ブローチはほどなくお会いになるでしょうと伝えた。ブルーは、アメリカ人が〝ほどなく〟の代わりに〝ほどなく〟を使うのを最後に耳にしたのはいつだったか思い出そうとしたが、思い出せなかった。

コーヒーか紅茶かペリエはと言う受付嬢の勧めを丁重に断わったジョージア・ブルーは、クロムと革でできた椅子に腰かけて待ちながら、ここに来る前、ヘニーマン・マーカス百貨店で買ったアン・クラインのダークグレイのドレスの端を無意識のうちに引っぱっていた。活動資金としてブース・ストーリングズに渡された千ドルの大半はそれで消えた。そのあと、残った金のほとんどをジョーン&デイヴィッドの黒いパンプスにつぎこんだのだが、マンダルヨンの刑務所に入る前のサイズだった七AAAではなく、七Aがはけることを知って驚いた。

新しい靴とドレスを身につけた彼女は、マニラの〈ラスタン百貨店〉で買った衣装のほうをショッピング・バッグに入れ、〈ニーマン・マーカス〉をあとにした。そうして、レンタルのフォードを駐めておいた駐車場に入っていく直前、そのショッピング・バッグをごみ箱に捨てた。

ジャック・ブローチ・エージェンシーの内含室に坐いて十六分後、ジョージア・ブルーは、二流か三流どころの映画女優がひとりで出ていく姿を見守ることになった。その二分後、二十二、三歳の黒人の若者が――Tシャツに古ぼけたジーンズ姿、左手首には一万三千ドル相当のローレックス――三十代の白人の男二人に出口へと案内されていった。二人は、若者におもねっているように見られまいと骨を折っていた。

最後に、十九分待ったかいがあるといってもいい顔が現われた。それは、ジョージア・ブルーが子供のころから知っている顔だった。ただし、寄る年波と陽焼けとおそらくはウィスキーの飲みすぎで、皮膚が厚くなり、皺が刻まれた赤ら顔になっていた。薄くなった金髪も白くなりかけていたが、足取りは相変わらずすべるように軽快だし、背筋は棒でも入っているかのようにまっすぐだった。ジョージア・ブルーをチラッと見た老男優は、彼女がじっと見つめているのに気づくと、いくぶん狂気を

とさ、アザガイ」

オヴァビイは考え込む表情になった。「金を取っておいて、それから……わかると思うが？」

「裏切る？」とブラッキーン。

オヴァビイはおずかに眉をすくめて答えに代えた。あの女はビンネスウーマンとして高く評価されてる、あんたが彼女にさせたがってるようなことをすれば、評判を落とすことになるだろう

いくらかかる？

「あんたがほのめかしてることをさせるのにか？　最高限度額を要求するさ」

オヴァビイはシャツのポケットに手を入れ、十分に折られた百ドル札を三枚取りだした。ブラッキーンにそれを見せると、さらにもう一度折り、手のひらにくるんでテーブルの向かいにすべらせた。そうして、金をおおったままにした。「コーリーン・カレンの電話番号と住所を教えてくれれば、三百ドル」

「それをおれに書いてほしいのか？」

「言ってくれるだけでいい」とオヴァビイ。「二度」

17

シャノク・ブローチ・エーンシェンシーのオフィスは、ロバートソン・ブルヴァールの西側、ウィルシア・ブルヴァールから少し南に入ったところにあった。かつてシェーン・フォンダがエアロビクスのスタジオを構えていた場所から、北に数ブロックのところである。U字形の小さな三階建ての建物全体がブローチ・エーンシェンシーだった。外装として張られているのは慎重に選ばれた中古の化粧レンガで、はるか以前に乾いたモルタルがはみだしていた。シャカランダの美しい木立ちがスレート敷きの中庭に影を落とし、メキシコ・タイル製の三段になった噴水がゴボゴボと吹き上げている。噴水には、ていねいな手書きで、〈再処理水しか使っていません〉と書かれた小さい掲示板がついていた。

ブローチの建物を設計したのが誰であれ、ローマ風の

「[illegible]」

[illegible]

「[illegible]」

「[illegible]」

「[illegible]スペイン語[illegible]」

「イギリス英語しか話せないことでしたのね」[illegible]

「[illegible]」

ホセ・ビセンテは[illegible]

「パーティーズにある[illegible]スタジオ[illegible]」

[illegible]

ホセ・ビセンテは[illegible]

「[illegible]」

ホセ・ビセンテは[illegible]

「なるほど、[illegible]」

「[illegible]」

「[illegible]」

「最近[illegible]」

[illegible]

[illegible]

「[illegible]」

「若って[illegible]」

「イギリス[illegible]」

「イギリス人を嫌っているな」

「しかし、ビジネスなどの[illegible]」

[illegible]

の約束を思い出そうとしているかのようだ。渋面が消えたところで、彼はいった。「配役の決まってないのは、第三場の小さな役だけだな。それでよければ、きみにやるが」

「どんな役？」

ブラッキーンは興味を失いつつあった。「これまで本物の乱交パーティに出たことは？」

「どうかなあ。たぶん、あると思うけど」

「複数の男とのも、複数の女とのも、両方が参加したのも？」

彼女はうなずいた。

「なら、唯一の違いは、時代物の乱交パーティってことだな。きみはコスチュームを身につけることになる――十秒間ほどは」

「どういうこと、〝時代物の乱交パーティ〟、って？」

「歴史劇ってことだ。この場合は、ローマ物」ブラッキーンはウェイトレスへの興味を完全に失い、マティーニをすすっていた。

「でも、それがきっかけになるかもしれない、でしょ？」確信はまったくなさそうだ。

「もちろん」ブラッキーンもまったく同じ調子で言った。

「オーケイ。あたしやる」

「きみの本名、電話番号、住所、それに社会保障番号を、ホテルのわたしのメール・ボックスに入れといてくれないか」

「ありがとう、ディッキー」

ブラッキーンがうなずき、ウェイトレスが下がっていくと、オヴァビイはいった。「シカゴにいた例の連中が乗り込んできて、あんたを追いだしたものと思ってたが」

「連中にはおもだった作品を渡してやった、それだけさ。よけいな経費など誰が必要とする？　いまでは、おれはヒデオからカセットにまで進出してて、通信販売でだけ売ってる。ポルノ雑誌に広告を出してるし、ちょっといいポルノを聞かせる電話サーヴィスもいくつか設立したよ」ビジネスの話にブラッキーンは活気づき、陽気な笑みがふたたび現われた。「それにだな、おれはビジネスの基本原則の熱烈な信奉者にもなったのさ、アザガイ。賃金を低くし、利益を高める」

「うまい話のようだ」

ブラッキーンは肩をすくめた。「おれの必要性には充分こたえてくれる」

ンは言った。「冷たい物を飲みにいこうか」

ホテル・ブリッジズのバーには〈料金所〉との名前がついていた。平凡な照明、低いテーブルと柔らかくてふくれた椅子。午後五時二十分というのに、四分の三ほど客が詰まっていて、酔客の声はすでにハミングを越え、歌声に近いものになっていた。

隅のテーブルに行き壁を背にして坐ったブラッキーンは、若くてかわいいカクテル・ウェイトレスを〝かわい子ちゃん〟と呼びながら、マティーニを注文した。ジンのみならずベルモットの銘柄も指定する。オヴァビイはメキシコ・ビールを頼み、銘柄はなんでもかまわないとつけくわえた。

戻ってきたウェイトレスは、飲み物を出し、オヴァビイから代金を受け取ると――チップを見てにっこりする――ブラッキーンに向かって尋ねた。「撮影はいつ始まるの、ディッキー？」

「火曜日」

「あたしにくれる役があるかもしれない、と言ってたでしょ」

ブラッキーンは彼女を見上げて、顔をしかめた。過去

きな風景版画が飾られ、ロサンジェルスのクラシック専門FM局の音楽が流されていた。ごく低い音量なので、音楽というよりささやき声に近く聞こえる。

鉄格子のはまった会計窓口は防弾プラスチックに守られ、鉄格子のない受付カウンターには、四十代の最初そうな顔の男がついていた。黒い口ひげを生やしたその男は、九カ国語を身につけたが、いまでは、なぜわざわざみんなこんなことをしたのかと考えているような、あきらめきった様子をしていた。

ホテルの採値には警備員という地味な名称がふさわしくて、ヴァリーヒルズ署の元署長が副業としてやっていた。彼はオヴァビイのそばを二度通りすぎたが、一度チラッと見ただけだった。おそらくオヴァビイが、ロビーに一脚しかない、肘掛けがなく背もたれのまっすぐな椅子に足と膝をそろえて坐り、濃い灰色のフェルトの中折れ帽を膝にのせて、ひも付きの黒靴、白いシャツ、鈍い灰色のネクタイ、ロントンの店で買ったにちがいないストライプの青いダブルのスーツといった格好だったからにちがいない。慎重に選ばれたその服装は、口を開かないかぎり、外国人——たぶん北ヨーロッパの人間——といった印象を与えていた。

役に立つかもしれないとオヴァビイの考えた人物は、頭が二重になった中背のでっぷりした男だった。受付カウンターで郵便物と《ウォール・ストリート・ジャーナル》を受け取った男が、四、五通の封筒をひっくり返して見ているところに、オヴァビイは背後から寄っていって右肩をたたいた。

男はほんの一瞬だが凍りついたようになってから、奇妙なほど小さい足を軸にしてくるりと体をまわした。顔には、いちばん古い親友に出くわしたときにみせるような、陽気な驚きの笑みが浮かんでいた。右手を差しだし、

「あんたか、いったい何の用なんだ？」と言ったときにも、笑みの大半はまだ残っていた。

オヴァビイも笑みを返し、握手した手をはなしてから言った。「ここに《ウォール・ストリート・ジャーナル》を送ってもらってるんだな、ディッキー——毎月のアメックスの請求書も。ということは、ここでしばらく暮らしてるってことだ。ということはまた、この町に舞い戻ってから、たぶん、おれの知りたいことを知ってるくらい長くいるってことにもなる」

四十二歳になるリチャード・ブラッキーンは、見事に仕立てられた黒いスーツの上着の右ポケットに郵便物を

16

アザガイ・オヴ・ビイはホテル・ブリッジズのロビーにもう六十七分間坐っていた。そのときようやく、役に立つかもしれない人物が目に入った。ホテルは建てられてまだ十三年とたっていなかったが、すでに落ちぶれ貴族のような雰囲気を漂わせていた。その点が、ベヴァリーヒルズの郵便番号内に住所を構える必要のある連中を引きつけていた。

安くはないが、比較的手頃なホテルということで、贔屓客には内外のジャーナリスト、興行主、俳優が多く、ときには、自分の生涯が素晴らしい映画になるはずだと考える、欲の皮の突っ張った老人が泊まっていたりした。

オーク材を模した鏡板張りのロビーには、こげ茶色の上質な人造皮革を張ったさまざまな種類のカウチや安楽椅子が置かれていた。四囲の壁には中央ヨーロッパの大

ズはそう言っていた。わたしが話したのは彼だけだったから。しかし、どういった問題なのかは言おうとせず、わたしが着いたときには、すでに二人とも消えていた――身のまわりの品をすべて残したまま。まるで、何かに怯えて逃げだしたかのように」

「あるいは、そう見せたかったのかもしれない」とデュラント。

「かもしれない。とにかく、その二週間ほど前に正確な日付は調べてみないとわからないが――またヒューズから電話があった。彼は天気のことを、一年のこの時期にしてはいかに気候がいいかということを話したがった。わたしがあれこれ質問しはじめると、彼はさえぎって、自分のことは何もしないでくれ、警察にさえ[illegible]、個人的な問題を解決しようとしているところだと説明した。あれはでまかせだった、明らかに」

「あんたのした質問は？」デュラントが訊いた。

「なぜ姿をくらましたのかと訊いてみた。どこにいるのか[illegible]わたしにできることが何かあるかと。とにかく連絡が取れるか？　彼は、心配ないの一点張りだったが」

「ヒューズの声だったのはたしかかな？」

「絶対に」

モットはアイオニ・ギャンブルに向き直り、しげしげと見つめた。デスクの向こうにじっと坐ったままの彼女は、目を閉じ、唇にかすかな笑みを浮かべていた。「わたしたちに話したことをほんとうに覚えている？」

「ひと言残らず」とウーは答えると、もの柔らかな魅惑的といってもいい声で尋ねた。「虹のことを覚えている[illegible]？」

「ええ、覚えてるわ」目を閉じたまま彼女は答えた。「もう一度その色を思い出していくことにしよう。最後の色――黄色――にたどりついたら、きみは目を覚まし、とてもリラックスした、とてもやすらいだ気分になり、目の前の品[illegible]、心のなかで虹の色を言っていきなさい」

六秒後、アイオニ・ギャンブルは目を開き、アーティ・ウー[illegible]それから眉をひそめた。その顔が当惑した表情に変わったところで口を開いた。

「わたしが撃ったのはシャガールの絵よ、ビリーじゃなくて、そうでしょう？」

「そのとおり」ウーは答えた。「きみはシャガールの絵

足した軽い笑みを浮かべて、ウーはレコーダーをしまった。グディスン兄妹は彼女を催眠術にかけたが、かけなかったと信じ込ませた？

それはおかしくない、とウー。たいていの俳優にそれはあてはまる、彼らはさまざまな感情を意識のすぐ下に――すぐに取りだせるところに――しまっておくので、催眠による暗示を実に受け入れやすい」

「目を覚ましたとき、アイオニはビリー・ライスを殺さなかったことを覚えている？」

ウーはうなずいた。「今度は覚えている」

「ジャック・ブローチのことを忘れてないか？」デュラントが言った。「最初の催眠の際その場にいたのなら、彼女がライスを撃たなかったと言うのを聞いてたにちがいない。すると、なぜ彼はそう言わなかった？」

「最初のとき」ウーは説明した。「グディスン兄妹はアイオニを催眠状態寸前まで持っていき、いとも簡単にかけられるのを確認したにちがいない。そうして、彼女が何かしゃべりだす前に目を覚まさせ、失敗だったと告げた。ブローチは、彼女は催眠術にかからないと考えたのかもしれない――アイオニ自身もそう信じ込んでいたことだし――それで、二度目、三度目にはわざわざやってこなかった。そこで、グディスン兄妹はおそらくテープレコーダーを使ったのだろう」

モットはふたたびアイオニ・ギャンブルを見つめながら、「あの二人は、彼女がライス殺しを告白すると考えたにちがいない」と言って、頭を振った。「まさにそうなることをアイオニは恐れていたんだが」

「考えようによっては」デュラントが言った。「二人は金をもらって頼まれたことをしただけだとも言える――アイオニが記憶を取り戻す手伝いをする」

「たいしたことをしてくれたものだ」とモット。「アイオニを催眠術にかけた、それはいいが、そのあと彼女の消去ボタンを押して、信じ込ませた。ひとつは、催眠術にかからなかったのだと。ふたつ目は、ライスが殺された晩に起こったことは何ひとつ思い出せないのだと――そこでウーを見やった。「そうすることはむずかしくない、と言ってたが？」

「少しも」ウーは答えた。

ハワード・モットは不満そうだった。頭を掻き、次に左手の甲を掻くと、またウーを見て言った。「あの晩遅くベル・エア・ホテルから電話してきたとき、二人はある問題にぶつかったと言っていた。少なくとも、ヒュー

た。ロングヴューまでの四、五週間に、ハンクは催眠術の知識をすべてわれわれに伝授した。ハンクが去ったあと、リトル・ドクはどこかから赤と黒の絹のパジャマを見つけてきて、わたしに着せた。滑稽な帽子もかぶせられた。クインシイは客引きに仕立てあげられた」

「サクラに？」モットが訊いた。

「そんなところだ」とデュラント。「カーニヴァルの客をテントに引き込む営業をしなくてはならないわけだが、それにはショーに参加する素人が何人か必要だった。催眠術にかかりやすい人間の選び方はハンクに教わってた。騒々しいやつ、笑い上戸、社交好き、目立ちたがり屋。呼び込みが〝驚異のフー・チャン・ウー〟の口上を述べ立ててるあいだ、いつもおれは見物客のあいだを歩きまわり、三、四人の候補をアーティにそっと知らせといた。で、呼び込みが参加者をつのると、おれはまっさきにステージに飛びのり、さらに、おれの選んどいた三、四人をアーティが言葉たくみに誘ってステージに上げた」

「何をするために？」

「客寄せのための実演。まず、アーティがおれに催眠術をかけ、おれは板のように堅くなる。すると、アーティはおれを二つの椅子の上に横たえて――頭を一方の椅子に、踵をもう一方に――そうして三、四人の参加者に、おれの上に立つように言う。みんな嬉々として従ったものだ。それで、本番のステージを観ようと、一人五十セントで客がぞろぞろとテントに入ってくることになる。なかでは、選んどいた連中を笑い物にする演目が中心だった」

「どれくらいの期間……それをやっていた？」

デュラントはウーを見やった。「五、六カ月、じゃなかったか？」

ウーはうなずいた。「一座はテキサスを横断してルイジアナ北部に入り、ケイジャンの地方に下っていった――クローリー、ラファイエット、ニューイベリア、オペルーサス。われわれは、ニューオーリンズに入るところでリトル・トクと一座と別れた。われわれは、ニューオーリンズから、船で南アメリカか南太平洋に行くつもりだったんだが」

「何が起こった？」

「ニューオーリンズで出会ったある男が、われわれはプリンストンに行くべきだと考えた」

モットはアイオニ・ギャンブルに目を移し、いまだ満

15

メンフィスの綿花商が作らせたデスクを前にしたアイオニ・ギャンブルは、いまだ目を閉じ、椅子の肘掛けに左右の手を置き、じっと坐っていた。唇にかすかな笑みを浮かべた様子は、安らぎ満足しているように――幸福にさえ――みえた。

キャンブルを、分近く凝視したあと、ハワード・モットはウーを振り向いて尋ねた。「彼女にわたしの声は聞こえるのだろうか?」

ウーは首を振った。

「彼女はライスを殺さなかった」モットのその言葉は、ウーとデュラントにというより、自分自身に向けられていた。

「彼女が殺ったと考えていた?」デュラントが訊いた。

「わたしは、希望が論理をさまたげないようにしているので」とモットは答え、ウーのほうを向いて尋ねた。「どこで習ったんです?」

「十六歳のとき、あるカーニヴァルで」

「十七だな」デュラントが訂正した。「ベリトル・ドク舎長の驚異のカーニヴァルと巡回パノラマ〉。リトル・ドクは小人だった。身長三フィート。一座の化形催眠術師はソボウ、神秘のメスメリスト(メスメリストは催眠術を初めて医療に用いた人。ストーンの項)。ソボウは本名をハンク・スチームといった。彼に関する唯一の神秘は、六十八にもなって、あんな強い安酒をどうして五日に一本空けられるのかということだったが」

「ハンクはいいやつだった」ウーが補った。

「少なくとも、陽気な飲んべえだった」とデュラント。「われわれが雑役夫として雇われた直後、ハンクは、引退してコーパス・クリスティの娘のところへ行こうと決心した。そこで、リトル・ドクは代役を見つけだした――驚異のフー・チャン・ウー」

「わたしだ」ウーはにやりとして言った。「クインシイとわたしはエルパソで雇われた。カーニヴァルがロングヴューに着いたら――つまり、テキサスをまさに横断したところで――神秘のメスメリストはやめるつもりでい

めた。「ヒューズが初めてあなたの感応性をテストしたとき、この鉛筆のような、何か道具を使いましたか？」

ギャンブルはじっと鉛筆を見つめた。「いいえ」

「しかし、彼は虹の色の話をしたのですね？」

「ええ」

「虹の色には意を集中させなさいと言った、そうですね？」

「ええ」

「色を声に出してみなさいと？」

「ええ」

「黄色は虹の色、そうですね、アイオニ？」

「ええ」

「この鉛筆の黄色のように」

「ええ」

「目を閉じて、まだその黄色が見えるか言ってみてください」

「ええ」

「それでリラックスした感じになるのでは？」

「ええ」

「完全にリラックスしたとき、アイオニ、あなたは眠りに落ちていきます。リラックスするために、もう一度虹の色を考えてみなさい。赤から始めて。最後の色、黄色まで行きつくと、あなたは心の底から、完全にリラックスします」

「わかりました」

「黄色に行きつきましたか？」

「ええ」

「思い出そうとしても思い出せないこと、それを思い出したいですか？」

「ええ」

「ピリー・ライスの家に車で行った晩のことを思い出したいですか？」

「ええ」

「あの晩、何が起こったのか思い出しなさい、アイオニ。声に出しながら思い出しなさい　あなたが自宅を出たときから起こったことを、ひとつ残らず」

ギャンブルは柔らかな声で話しはじめた。そうして、ウィリアム・A・C・ライス四世の浜辺の邸宅にメルセデスを飛ばして行ったこと、そこで見つけたもの、電話をかけたことなどすべてを語った。

か何かお飲みになります？」

ウーは首を振った。「お話を最後までうかがうのがいいようです」

[illegible]

彼女はまた二人のほうに体をまわした。「ともかく、二人にやらせてみると、前の日と同じことが起こったんです。今度もわたしはトのほうに出ていきはじめ――そのうち、ハッとしてわれに返った。そして最後の――いわゆる感応性のテストも同じようにして終わった。その場でわたしは、もうこれ以上催眠術はやらないし、お二人に会うのもこれが最後です、と言いわたしました」

「二人の反応は？」ウーが尋ねた。

「これといって何も。たいして役に立てなかったことを詫びて、そういうことならしかたないと。で、帰っていきました」

デュラントはハワード・モットを見やった。「ヒューズ・グディスンからあわてた様子の電話があったのは、その日のことかな？」

「まさしく」とモット。

アーティ・ウーが溜め息をついて立ち上がった。メンフィスの綿花商が作らせたデスクにゆっくりと歩み寄っていった彼は、黄色い長い鉛筆を手に取ると、両端を左右の親指と人差し指でつまみ、くるくると回転させはじ

っている――横目でチラチラと鋭い視線を投げかけながら、患者の体のサイズを書き留めていく。ヒューズとポーリンにはそういったところがありました。ヒューズが自分の台詞を述べているあいだ、ポーリンがわたしを観察して――ま、何であれ彼らの欲するものを探している。次にポーリンが話す番になると、今度はヒューズが観察する」

「あなたはたいへん鋭い観察眼をお持ちだ」

「ハウイの仕事やわたしの仕事では、目くばせ、作り笑い、頬の引きつりといったものを、盗めないか、借りられないかというつもりで見ているんですよ。そうでしょう、ハウイ?」

モットは軽いうなずきと、さらに軽い笑みをみせて同意した。

「二人の演技が終わったあと、どういったことに?」デュアントが訊いた

「わたしに催眠術をかけてみたいと言いました――一種のテストということで。まだ心の準備ができていないと答えると、では、兄妹で実演してみようと言うんです。で、わたしが同意すると、ヒューズはほんの五秒でポーリンを催眠状態におちいらせました。つまり、アッという間に　彼女は催眠状態に入っていた。それから、ヒューズは妹を六歳のときに連れ戻し、きょう、ダンス学校で習ってきたことをみんなに見せてごらん、と言った。すると、彼女は立ち上がり、ぎこちないステップをちょっと披露して、また坐った」

「それから?」とウー。

「彼が催眠状態から覚ますと、ポーリンはリラックスした様子でした。幸福そうで、何も覚えていなくて　というか、自分ではそう言ってました。そこでヒューズは、わたしの感応性をテストしてみてもいいだろうかと訊いたんです。いまのところまだ催眠術にかけられたくないと答えると、彼はあれこれ褒め言葉を並べたて、催眠術にかかりたくないと思っている者をかけることはできないと説明した。わたしの〝感応性〟をちょっとテストしてみたいだけだと――それがお気に入りの言葉みたいでした。そうして、感応しやすいので有名なスターたちのことを次々に話しはじめた。そのうちの半分ほどはもうずっと前に死んでいる人でしたが、でも、かなり印象的なリストでした。それで、ジャックが同席していたこともあって、わたしは承知したんです」

そこでギャンブルは言葉を切り、尋ねた。「コーヒー

モットはかすかに笑みをみせた。「そう、この二人に

「性悪？」

「わたしは読心術師ではないので」

「エンノ・グリムが二人の人柄を保証した？」

「二人の人柄を保証した者はいなかったんだ、クインシ

かっているはずの連中が――グディスン兄妹は素晴らしいと言っていた」

「あの兄妹は性悪なんだ」とデュラント。「兄妹が行方不明だと知らされて、二十四時間とたたないうちに、おれは二人がいかに性悪かということを探りだしていた。わからないのは、エンノ・グリムの会社がなぜ同じことをしなかったのかということだな」

「〝誰がジョンを殴ったのか？〟という責任追及は、もこの[illegible]

「さしあたり、アイオニにいくつか質問してみたいのだが。反対意見は？」

[illegible]

をギャンブルにみせて、尋ねた。「グディスン兄妹――あなたの第一印象は？」

「スターの追っかけ」

「わたしが考えていたのは、むしろ二人の行動様式――スターの追っかけが終わったあとにみせた演技なんですがね」

[illegible]

をひかれたようだった。「あの二人をロンドンで知っていたのかしら？」

[illegible]

もなれば、とくに」

「あなたがたの演技は？」

[illegible]

最終的には、[illegible]

する」

ギャンブルはゆがんだ――恨みがましいといってもいい――笑みを彼に見せた。「あなたの言うとおりね。あの二人には行動様式がありました。初めてのお芝居さんにでも行ったときのような感じかしら。どこが痛いかこちらがまだ告げないうちに、お医者さん特有の演技にん

までお話しして、お二人をうんざりさせたくはないんですが、低くよく響くようにつくろっているといったふうでした――それでおわかりいただけるなら。ロントンからいらしたのですから、おわかりになると思いますけれど」

「ええ、わかります」ウーが言った。

「ま、見知らぬ男性のホテルの部屋に行ってはいけないと、わたし、かなり早いころから――四つか五つのころから――学んでましてね。それでヒューズに、わたしの家もとても静かでリラックスできる雰囲気だし、もし催眠術にかけられるのだとしたら、ここにしたいといったんです。で、住所と道順を教えると、二人はやってきました。それも、なんとリムジンで」

「何時ごろに？」デュラントが訊いた。

「午後の四時ごろ」

デュラントはモットを見やった。「あんたもその場に？」

「いや」

「なぜ？」

「グディスン兄妹がロスに着いたことも、アイオニとの面会を取りつけたことも聞いてなかったので」

デュラントはギャンブルに目を移した。「なぜ彼に知らせなかった？」

「連絡するつもりだったんですが、ジャック・ブローチが、わたしのサインが必要な何かを持って立ち寄ってたんです。ヒューズから電話があったとき、彼はまだここにいたので、そのまま残っていてほしいと頼みました。ハウイに連絡すべきかどうかも尋ねたところ、ジャックは、したほうがいいだろうと言いました。でも、これは初顔合わせの集まりにすぎないし、催眠術はしないとわたしが説明すると、それなら、わざわざハウイをわずらわせることもないだろうということなので、知らせなかったんです」

デュラントはふたたびモットを見やった。「グディスン兄妹に会ったことは？」

「一度だけ。わたしの泊まっているサンタモニカ・ホテルに二人がやってきた。館内電話で連絡してきて、部屋に上がって一杯ご一緒したいという話だった。バーのほうが落ち着けるだろうとわたしは答えた。そこで一杯飲みながら、何の重要性のない、とりとめのない無駄話をして、二人は帰っていったが」

「二人から読みとれたことは？」

「二人のことを話してください」ウーがうながした。

「オーケイ。二人には三度会いました。最後に会ったあと、ヒューズ・グディスンからハウイに電話があって、[illegible]らを、という話だったんです。とにかく、ヒューズはベル・エア・ホテルから電話していると言ったんですが、ハウイが着いたときには、兄妹は姿を消していた」

「二人はチェックアウトしていた？」デュラントが尋ねた。

モットが答えた。「いや、たんに消えていた。あらゆるものを残したまま」

「二人と初めて会ったときのことに戻りましょうか？」ウーが言った。

「オーケイ」とギャンブル。「こうなんです。グディスン兄妹はロンドンから飛んできて、ベル・エアにチェックインした。それから、二人が　というか、ヒューズがわたしに連絡してきて、ありふれたおしゃべりをしたあと、本題に入った――催眠術の話に。ヒューズの考えでは、わたしがヘル・エアの二人のスイート・ルームに来るのがいいだろうということでした。とても静かだし、リラックスできる雰囲気だからと。彼の声の印象に質問しにきているので、基本原則を決めておいたほ[illegible]領域はある？」

「それなら踏み込みようがない」

「オーケイ」とギャンブル。「どこから始めます？」

「グディスン兄妹のことから」デュラントは言った。

[illegible]にしますわ」

「ええ、グディスン兄妹。そう、あの二人は、会って二分もすると、ホリーとヒューバーと呼んでほしいと言いました。わたし、この町に住んで二十年になりますが――〝この町〟というのはロサンジェルスのことです――いわゆる保安の合格ではなかった。二十歳になるころには、キリスト教世界における、あらゆる種類の悪の帝王やら邪悪な女王にはもうすべて出会ったと思ってたんですが――それも、あのグディスン兄妹に会うまでのことと」

アイオニ・キャンブルは紺色の縄編みのコットン・セーターを着て、深いVネックからローシルク地のTシャツをのぞかせていた。グレイのフランネルのスラックスに白いリーボックの靴。モットが二人を紹介すると、ギャンブルはまずデュラントと握手した。彼女はていねいな挨拶の言葉をつぶやきながら、ツイードの上着、シャンブレー織りのオーダーメイドのシャツ、綾織りのズボン、履き古したローファーと値踏みしていった。隠れていた靴下がカラフルな格子柄なのに気づいたのは、彼が腰をおろして脚を組んでからだった。

続いて、ギャンブルはウーにほほ笑みかけて握手した。やはり愛想よく挨拶しながら、ハイロン風の襟の白いシャツにノーネクタイ、いくぶん品のない青いダブルのブレザー、パテ色のズボンと見てとっていった。石目模様のついたウイングチップの黒靴をピカピカに磨き上げているのは、それがひとかどの人物である印とでもいうかのようだ。ウーは結婚指輪をしているが、デュラントはしていないことにも気づいた。

挨拶を終えると、ギャンブルはメンフィスの綿花商が作らせたデスクに戻り、腰をおろした。モットは実用本位の肘掛け椅子に坐り、ウーとデュラントはインド更紗のカバーのかかったカウチに腰を落ち着けた。

デュラントが脚を組み、アーガイル柄の靴下を見せたのはそのときだった。アイオニ・ギャンブルに笑みを向けた彼は、言おうと思っていたことを口に出した。「われわれは、マリブのウィリアム・ライス邸を借りました」

彼女は驚きの表情を浮かべたが、それもすぐに消えていき、厳しい凝視に取って代わられた。その目はデュラントに向けられていたが、質問はハワード・モットに向けたものだった。「その家賃はわたしが払うのかしら、ハウイ?」

「エンノ・グリムが」とモット。

厳しい目つきが笑みに変わったところで、ギャンブルは言った。「としたら、あなたがたが滞在を楽しまれることを願いますわ。あそこは素敵な場所ですから」

「幸運な偶然からあの家を借りた?」モットが訊いた。

アーティ・ウーがうなずいた。「それは、今後役に立つかもしれないし、立たないかもしれない偶然の出来事のひとつですな。しかし、ミス・キャンブルの言われるように、あれはたいした邸です」

有罪でしたが」

「そうでなければ」とデュラント。「一時間千ドルの弁護士を必要とするかな？」

[illegible]

[illegible]

[illegible]

軽く頭を振って言った。「わたしたちがいままで会ったことのないのは奇妙なことだ、と考えてたんです」

われわれは互助的な必要とならないように努めている」デュラントが言った。

「賢明ですな」とモット。「オヴァビイは来ない？」

「そう」

「彼がこの町にいるうちに会ってみたい。電話では何度も話しているので、潜在的な依頼人と見なすようになってましてね」

「無理もないですな」とウーは応じた。

「わたしの義父はどうしてます？」

「恋をしてる」デュラントが答えた。

「ほんとうに？　誰と？」

[illegible]

モットは顔をしかめた。「香港のときの女性、犯罪人引き渡しでフィリピンに送られ、殺人罪で――」

ウーがさえぎった。「まさしくその女性」

「なるほど。あのときの五人、それがまた一緒になった。きっと、同窓会みたいなものですかね」

「運よく」とデュラント。「同窓会がみなそうであるように、これも一時的な結びつきにすぎない」

明らかにモットは何か言いたそうだったが――質問もひとつふたつありそうだ――口のなかで何か動かすにとどめた。舌にちがいない、とウーは思った。腕時計に目を落としたモットは、ミーティングは二階のアイオニ・ギャンブルのオフィスで開かれると伝えた。

「われわれ四人だけで？」階段を登りながらウーが訊いた。

「ほかに誰か？」

「ジャック・プローチの名前を出していたが」

「ジャックはよんどころない用事ができたので」

14

「実のところ、何にいらついているんだ？」

「グディスン兄妹にだろう」と言って、デュラントは縁石側のドアを開いた。

ウーが二音程のチャイムを鳴らすと、ほどなく玄関ドアが開かれた。開いたのはエルサルヴァドル人の家政婦ではなく、紺色のスーツに白いシャツ、落ち着いたネクタイ姿のハワード・モットだった。弁護士は二人の訪問者を見上げ、ちょっと見つめると、一度うなずいてから言った。「あなたがミスタ・ウーなら、こちらがミスタ・デュラント、わたしはハワード・モット。お入りください」

邸内に入り、握手が終わったところで、ウーが言った。「まずは、この数年来、あなたがわれわれにまわしてくれたヒンネスの御礼を申し上げたいですな　とりわけ、あのベイルートの一件に関して」

「あの後家さんは喜んでもいたし、金持ちにもなりましたよ、ご存じのように」モットは言った。「それに、あなたがたが紹介してくれた依頼人たちのことも感謝します。もちろん、いくぶん妙なのもいましたがね。魅力的なのも何人か。彼らは全員、ありがたいことに、支払い

午後四時五十六分、アテレート・トゥイヴにあるアイ・キャンプル邸の前に、アーティ・ウーはリンカーン・タウンカーの前部をつんのめらせるようにして急停車させた。デュラントはすぐにおりる気配をみせず、最悪の敵のうちの六人がそこにひそんでいるとでもいうように、邸宅をじっと見つめていた。

「ミノンショー様式が気に入らないのかな？　ウーが尋ねた。

「気に入らないのはあんたのひどい運転さ。質問：なぜあんたの運転する車に乗ると、国税局の監査を受けたような気になるのか？　回答：それが悲惨な結果に終わるとわかっているから」

「無事に着いたじゃないか」

「神のご加護で」

短い沈黙がおりた。その間、ウーはひとりひとりの顔を見つめていった。その視線はデュラントの背中にとまり、ふたたびもとにもどり、ふたたび開いたところでまた向けられていた。「ほかに何か？」

「もっと車が必要だな」とオヴァビイ。

「ハイウェイのちょっと先に〈バジェット〉の営業所がある」ストーリングズが教えた。「そこで必要な車を借りられる」

「ほかには？」とウー。

さきほどより長い沈黙が続いたあと、ジョージア・ブルーが言った。「ひとつ気になることがあるの。二人の催眠術師のことだけど――グディスン兄妹。カリフォルニアの法律では、催眠状態にある証人の証言は無効のはずよ。としたら、なぜモットは、わざわざロンドンから二人の催眠術師を呼びよせたりしたのかしら？　催眠術にかけられたアイオニ・ギャンブルは、みずからを弁護する証言はできないとわかっていながら」

いぜんとして海をみつめながら、デュラントが言った。「それは、おれがモットにしようと思ってる二番目の質問だな」

「最初の質問は？」ブルーが尋ねた。

「なぜ性悪な催眠術師兄妹を呼びよせたのか」

「性悪だとは知らなかったのかもしれない」

「それが三つ目の質問になる」とデュラント。「なぜ知らなかったのか」

一枚手に入れた。彼は、ハティントン署の刑事とも一女の刑事だ――話していて、兄妹の習慣やら奇癖を説明してもらった。それはすべてクインシイの書いたメモにのっている」

その一にはもうもらってる」とオヴァビイ

「よし、シャツ・アロー」を調べたあと、ショーシアはアザガイのグディスン兄妹捜しに加わる」

「時間はどれくらいある？」オヴァビイが訊いた。

「たいしてない。もっとも高では、公判はサンタセシカ上位裁判所で二日と決まっているそうだ。彼は証拠手続きの延期が認められるかを判事に問い合わせの日に公判になったら、勝ち目はないと考えている」

「死んだ男ライスとグディスン兄妹のあいだに、何らかの関係があると知ってる人間は？」とオヴァビイ。

「わたしの知るかぎりではいない」ウーは答えた。しかし、そういった人間を捜すのも悪くはないだろう」

「その兄妹が死んでるとわかったときは？」ジョージア・ブルーが質問した。

ウーは一瞬考え込んだ。「そのときは、われわれの仕事は完了ということになる――エンノ・グリムから新たな要求がないかぎり」

「こういう場合はどうなる」いせんとして海を見つめながら、ヴィラントが言った。アイオニ・キャンブルがライスを殺し、グディスン兄妹の失踪にも関係してることを示す証拠に行きあたったときは？」

ウーが答える前に、オヴァビイが言った。「その証拠を売って、引退すればいいさ――おれたち全員が」

ウーは溜め息をついた。「それは少々露骨だな――きなかやるにしてもだ、アザガイ

「そうした考えが頭をよぎらなかったなんていわんでくれよ、アーティ」

ふたたび溜め息をついてから、ウーはいった。「われわれは二つの仮定から出発すべきだと思う。まず、グディスン兄妹は生きているが、身を隠している。それは自分たちの意思によるものかもしれないし、そうでないかもしれない。二つ目の仮定は、アイオニ・ギャンブルはウィリアム・ライスを殺してはいない。警察はその反対方向から彼女に迫っているのであるから、われわれのアプローチが新たな事実、無実の証拠さえ見つけだすかもしれないというわずかな可能性があることになる――もっとも、実のところ、わたしはそうたいした希望を持っているわけではないが」

[illegible]ドルずつプースからもらったと思う。彼が新婚、兵役、家族を紹介する。主かに[illegible]たら、われわれは、ストロ[illegible]ということになる。何か言いたいことは？」

[illegible]

わたしは注意をまわってみようと思っているんだ、アーティ。ドク・ストーリングズ[illegible]さんとして自己紹介して、相手がちょっとでも乗ってきたら、しゃべりまくってうんざりさせる――話好きな学者というわけだな。わたしの経験では、そうした人間を黙らせて引き取らせるために[illegible]れるものなんだ」

[illegible]

いたのか探りだすようにしてくれ」とウー。

「心がけよう」

ウーは一同を見まわした。「ほかに質問は？」

デュラントが質問した。室内を振り返ることなく、「近辺の連中には、どんな仕事をしてると言うつもりなんだ、プース？」と訊いた。

[illegible]

るところだと話すつもりだ。もっかウーデュー[illegible]有限会社の[illegible]務たちは、ロサンジェルスで、ある秘密の調査計画の交渉にあたっているところだと」

「いいだろう」大平洋の黄ばみを続けながらデュラントは言った。

「ここに来る前に言ったように」ウーが話を続けた。「クインシイとわたしは正式にアイオニ・ギャンブルと会うことになっている。ハワード・モットも同席する。彼は、信なかの由緒ある法律事務所のひとつと考えていることも言っておこう。それで、カリフォルニアでギャンブルの代理人となれるわけだ。ギャンブルの個人弁護士ジャック・ブローチも　彼女のビジネス・マネージャーでもエージェントでもある男だが　一五時のミーティングに姿をみせるかもしれない。ブローチの線りを言っておく」

[illegible]

言った。「彼のことを調べ上げてくれ、ジョージア」

「何か特別に、それとも全般的に？」

[illegible]

続いてウーはオヴァビイを見やった。「アザガイ、催眠術師兄妹の捜索はきみに始めてもらいたい。クインシイが、グディスン兄妹の写真入りの宣伝びらをなんとか

「どんなふうに役立つのか、おれにはわからんな」人目を引くということ以外にアピュアリットが言った。

「まさしく」とウー。

運転席からアザガイ・オヴァビイが言った。「おいおい、おれならその家の利用法は考えられるぞ」

ウーは座席に深々と身を沈めて、両手を腹の上で組み、目を閉じて言った。「そのうちの二つを聞くとしよう、アザガイ」

午後一時十五分、十二に荷物をまとめ、ロー・アイスの千三百万ドルの〝浜辺の小屋〟を見てまわり、浜辺そのものの思い出も含めた居間に集まっていた。アーティ・ウーは、鎖で引かれたように、死んだ男が愛用していた椅子――ワインレッドの革を張った精巧なリクライニング・チェア――に引きよせられていた。

それがリクライニング式であることを示す見苦しいレバーはなく、肘掛けの目立たぬ一つのボタンのひとつでリクライニングできて、どんな角度にも調節できるようになっていた。もうひとつのボタンで電気マッサージ器のスイッチが入り、三つ目のボタンで居間の音響装置がコントロールできた。

その椅子の隣には、アイオニ・ギャンブルが九一一番にかけた、六回線の電話コンソールが置いてあった。椅子には左右に振り動かせる読書用テーブルもついていたし、左サイドのレバーのようには単独のポケットがあって、いまだに脚本が何冊か突っ込まれていた。点灯されたフロア・スタンド［　　］クロムの脚に艶消しの黒いメタルの笠をかぶせたスタンド――の位置は事件当夜のままだった。

ロース・スターリングスレーター・アルバーは、ある種の友好関係を暗示するかのように――公言するというほどではない――居間に三つあるカウチのひとつに並んで掛けていた。アザガイ・オヴァビイは本物のイームス・ロッキング［　　］を使い、その足載せ台に両足を載せていた。クインシイ・デュラントは全面ガラス張りの壁際に立ち、太平洋を検分していた。

［　　］物が欲しい者はいないかね？」と、アーティ・ウーは言った。「活動資金としてみんな

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ろだった。

助手席にはジョージア・ブルーが、後部座席にはデュラントとストーリングズが坐っていた。四人が駐車場の三階にやってきて、リンカーンのトランクに荷物を詰め込んだあと、オヴァビイが運転を買ってでた。そこでストーリングズは、「任せる」と言ってキーを投げわたしたのだった。

「行き先は？」オヴァビイが尋ねた。

「マリブ」とストーリングズは答えながら、自動車を、必需品というより、危険なものとみなしている自分は数少ないアメリカ人のひとりだと考えた。かつて　ことに外国でテロリズムに鼻を突っ込んでいたころ――十八カ月ものあいだ、個人の車には一度も乗らずにすませたこともあった。その代わりに、歩き、自転車に乗り、タクシーや公共輸送機関を利用した。今夜も車を買うことはないだろう、との確信に近いものが彼にはあった。もちろん、破格に安いモーガンか、あるいはジョウェット・ジュピターあたりに出くわさなければだが。

駐車場の一階にあるウーの愛車オヴァビイの目に入ったリンカーンが寄っていって停まると、ウーは後部座席のストーリングズの隣に乗りこんできた。「クインシイとわたしは――」と言ったところで、ウーは言葉を切った。オヴァビイがホテルの送迎用ヴァンの行く手を巧みにさえぎり、空港内の道路の追い越し車線にリンカーンを堂々と進入させるところだった。車が安全に流れに乗るまで、ウーは息を詰めていたことに気づいた。そこで、残っていた息を使って今度は最後まで言った。「クインシイとわたしは、きょうの夕方五時にアイオニ・ギャンブルと会うことになった」

「彼女と話をしたのか？」デュラントが訊いた。

「いや、ハリート・セットとだ」ウーはストーリングズを見やった。「あんたの義理の息子から、あんたの名前をもらった孫は元気に育っていると伝えてくれと頼まれたよ」

祖父になりたての男はわずかに笑みをみせた。「あの二人は助手をアース・ストーリングズ・モットと名づけたわけだが、小学校の二年生になるころには――ま、一年かもしれんが――ほかのガキどもから、B・S（糞っ垂れ）と呼ばれるなんてことは念頭になかったんだな」

ジョージア・ブルーが尋ねた。「その子にはもう会ったの？」

「まだだ。この九年ソレントには帰っていないからな

13

その日の午後一時三十七分、手荷物を満載したカートを押すアーティ・ウーを先頭にアザガイ・オヴァビイとクインシイ・デュラントが、遅刻と入国手続きをすませて、国際線到着ロビーに続く長い傾斜路を登ってきた。ロビーではブース・ストーリングズとジョージア・ブルが待っていた。

デュラントは、ウーがジョージア・ブルーに笑顔をみせ、抱きしめてキスをし、あたたかい挨拶の言葉をかけたあと、ストーリングズに向き直って握手するのを見つめていた。オヴァビイが次に続いた。彼はブルーの頬を軽くたたいた。彼女は頬をしかめたが、そのあと彼のかけた言葉に笑みを浮かべた。

デュラントは笑みをみせずに寄っていき、手を差しだした。ジョージア・ブルーはその手を握って言った。

彼はブルーの手をはなして言った。「二度とおれを置こうとするなよ、ジョージア」

二人は数秒間じっと見つめ合っていたが、やがて彼女が考え深げに二度うなずいた。デュラントはそれを、

うふうに解した。彼女が実際に口にしたのは、「変わってないわね」という言葉だった。

「きみもだ」

「いいえ、変わったわ」

れはそのままにしとくのか？」

「思い出として」

「なかなかいい」そう言うと、彼はブース・ストーリングズのほうを向いて挨拶した。

上着とネクタイをはずし、オーダーメイドの白いシャツの袖口を慎重に二度折り返したアザガイ・オヴァビイは、レンタルのリンカーン・タウンカーを発進させ、国際線ターミナルに戻る近道に乗り入れた。ターミナルでは、そろそろアーティ・ウーが電話をかけ終えているこ

彼はふたたびストーリングズを見やり、またジョーンア・ブルーに目を戻した。そうして、いくぶん顔をしかめ、大きな頭をまた親指でサッとこすってから言った。

「おこ人は分別のある世馴れた方のようだ。〝世馴れた〟という言葉に悪い意味合いはこめてませんよ。というわけで、こうお尋ねしてみたいのです」そこで俳優らしく短い間を置く。「まさにこのカーホン・ビーチに建っている、六寝室の豪邸を月一万五千ドルでお借りになるつもりはおありだろうか、たとえ、そこの前所有者が去年の八月一日に撃ち殺されているとしても？」

「誰が撃ち殺されたのかねえ？」ストーリングスは尋ねた。

「富豪のウィリアム・A・C・ライス。警察は、アイオニ・ギャンブルが撃ち殺したと考えてますがね」

「その家がこの海岸にあるの？」とジョージア・ブルー。

「ここから砂浜を歩いて百フィートのところに」

「一万五千ドル？」ストーリングズが確認した。

「そうです」

「一万二千五百では？」

「一万三千五百」

「延長も可能？」

「もちろん、結構です」

「そこを借りることにしよう」

「まずご覧にならなくてもいいのですか？」

「素敵な家だとおっしゃったわね、ミスタ・クイル」ジョーンア・ブルーが言った。「どれほど素晴らしいのか、着いてのお楽しみにしたいの」

「ま、この辺はですね、ミス・ブルー、実際にはカーボン・ビーチでして、いま二月ということもあって高くつくことになります。なにぶん、カナダから避寒客が飛んできてますし、一ポンドが二ドル、一マルクが六十九セント、一フランがなんと二十セント近いという恩恵にあ[illegible]るもので」

「高くつくというのはどれくらいに？」ストーリングズが尋ねた。

「ひと月、一万、一万五千、二万ドル」

[illegible]

クイルは左手の親指で大きな顎をサッとこすった。そうすることでいい考えがわくとでもいったふうだ。ストーリングズもほとんど反射的に自分の顎を[illegible]た。「バスする直前、いつもあんたはそのしぐさをしていた、違うかね？」

大の男が赤面するのをストーリングズは長いこと目にしてなかったが、その瞬間、クイルの顔は文字どおりピンクに染まった。不動産屋はそこでにやりと笑おうとしたが、できなかった。顔は真面に近かった。「わたしは世間の連中から、〝やあ、あんた、血まみれのバレンタイン》に、それから、あのくだらないテレビ映画《真昼の泥酔》にも出てなかったか？〟と言ってもらいたいと思[illegible]

[illegible]

はあやまった。

「ま、十八から二十一歳のあいだにしたことではなく、この二十五年間にしてきたことにむしろ注目してもらいたい、というだけのことなんですがね。プロになることもできたが、ならなかった[illegible]て、カレッジを終えるとすぐにこの土地にやってきて、以来、自分では俳優だと考えてるんですよ。もっとも、一九八八年のある月には、それまでの俳優業で稼いだよりも[illegible]テレビの再放送料もすべて含めてですね[illegible]不動産業の手数料で稼いだこともありましたがね」

「今後ずっと、あなたのことは俳優として考えることにしますわ、ミスタ・クイル」ブルーが言った。

「感謝します、ミス・ブルー。しかし、さしあたり、不動産屋のフィル・クイルに戻らなくてはなりませんな」

プ〉で買った紺色のポロシャツ。五、六百ドルの水色のカシミアのセーターを広い背中に垂らし、両袖を胸骨の上のところでゆるく結んでいる。かけていたサングラスをいまだにブロンドの豊かな髪に押しやげると、セーターと海の色にほぼマッチした青い目が現われた。

二人のテーブルにやってくると、男は南部訛りのある柔らかな声で自己紹介した。「わたしはクイル・クイルという者で、不動産業者です。銀行の支店長のベティから、お二人が海辺の家をひと月ほど借りたがっているとうかがいましてね」そこでふたたび笑みをみせる。「もちろん、マダムがミス・ブルーで、あなたがミスタ・ストーリングズだとしたらですが」

ストーリングズは立ち上がった。「ご明察ですな」と言って、差しだされた手を握ると、コーヒーか朝食を一緒にどうかと誘った。

「コーヒーを一杯いただけると嬉しいですね。いや、自分で取ってきます」

クイルがすばやい足取りで離れていくと、ショーシア・ブルーがその姿を見送りながら訊いた。「彼、なんであんなふうに歩くのかしら?」

「一時期、あの男は後ろにも横にもあれと同じくらいすばやく動けたものだ」

「いつ?」

「六〇年代の初め、アーカンソー大学のクォーターバックだったころ。最終学年にはUPI全米代表にも入っていた」

「彼のプレイを観たことあるの?」

「テレビで」

クイルは戻ってきて腰をおろすと、コーヒーをすすってから質問した。その前半はショーシア・ブルーに、後半はストーリングズに向けられていた。「おニ人のお考えはうかがいたいですね? どういった場所を探しておいでなのか?」

「少なくとも寝室が五つある、海に臨んだ家が希望なんだが」ストーリングズが答えた。

「期間は?」

「ひと月――さらにひと月の延長も可能ということで」

「このすぐ近くがいいですか、あるいはずっと先か、その中間か? そうお尋ねするわけはですね、マリブというのは長さ二十五マイル、幅一マイルあるからなんです」

「この辺ではどうかしら?」とブルー。

外観を呈していた。ストーリングズは一九八六年に短期
[illegible]
ーテルには、ポリネシア風の名前がついていたのではなかったか――マナクラだかトンガ・レイ、あるいはトンダレヤだったかもしれない。

マリブ・ビーチ・インでは、一泊ひとり百八十ドルで
[illegible]
た部屋で、太平洋が望め、打ちよせる波音が聞こえた。荷物を運ぶのを手伝ってくれた男は、引退した海難救助隊員だか老いぼれたサーファーのように見えた。怪らな表情を浮かべることもなく、男はストーリングズに、モーテルの図書室で成人ビデオが借りられると教えた。ストーリングズは眠くてたまらないのだと答え、そのメッセンジャー・ボーイだか何だかに五ドルのチップを与えた。男が下がっていくと、彼はジョージア・ブルーの部屋に通じるドアをノックした。

彼女はドアごしに、あしたの朝会いましょう、と応えた。小型冷蔵庫のなかにスコッチのミニチュア瓶を見つけたストーリングズは、飲み物を作り、カシューナッツの缶をあけて、バルコニーに出ていった。そこに坐ってスコッチを飲み、ナッツを食べながら、なぜおれは、一九四九年にマリブに移ってきて、不動産屋にならなかったのかと考えた。

翌朝、ストーリングズとジョージア・ブルーはロビーにおりていき、宿泊料に含まれているセルフサーヴィスの朝食をとった。ストーリングズの朝食はコーヒー二杯。ジョージア・ブルーがミルクを二杯飲み、全粒小麦のトーストと山盛りの果物を食べ終わったとき、がっしりした体つきの陽焼けした男がロビーに入ってきた。男は周囲を見まわし、ストーリングズとブルーに目を留めると、こぼれんばかりの笑みをみせて近よってきた。メキシコ製のタイルに足がかすかに触れるだけのようにみえるすばやい小股の足取り。その軽快な足運びに記憶を呼び覚まされたストーリングズは、フィル・クイルがかつて何者であったかをようやく思い出した。

不動産屋のいでたちは、タックが二本入ったギャバジンのズボン　ヒナギクの黄色より数段階薄い色合いだ――素足に靴底の薄いローファー――ストーリングズにはわからなかったが、ジョージア・ブルーはそれがフェラガモ社製なのを見てとっていた――おそらくヘギャッ

ね」

「あのそっくりな兄妹を捜しだせるくらい機略に富んでいる？」

「間違いなく」

「誰かがエリス・コイスを殺したのかをつきとめられるくらい機略に富んでいる？」

モットは彼女の目をじっと見やってから言った。「あなたがほんとうにそれを知りたいのであれば」

アイオニ・ギャンブルは眉をひそめ、下唇を噛んだ。やがて［illegible］、ひそめた眉をもとに戻すと、ところで、言った。「知りたいわ」

旧マリブ・ロードにあるアメリカ銀行の女支店長は、［illegible］

［illegible］は、ウーとデュラントが記入することになる二枚の署名カードをストーリングズに渡し、五千ドルの現金を無造［illegible］

［illegible］

「彼は俳優もしてましてね」女支店長は言った。「《マイアミ・バイス》か、［illegible］の、二話で、あなたも見たことがあるかもしれませんね」

ストーリングズはなぜかクイルの名前に聞き覚えがあったが、テレビ・ドラマで覚えたのではなかった。彼は支店長にそう言って、この五年間はとんど外国暮らしだったこと、ここに来る前はウーデュー有限会社の常駐代理人としてアンマンにいた、という説明を繰り返した。

「《マイアミ・バイス》はアラビア語にも吹き替えられていたと思いましたが」と支店長は言った。

前夜ロサンジェルス国際空港に降り立ったあと、スト［illegible］

マリブ・ビーチ・インを見つけたのはジョージア・ブルーだった。三階建てのその大きなモーテルは、スペイン風ミッション様式を巧みに取り入れているので古びた

キャンブルは首を振った。

「彼女を捜しだしたのが、その二人、ウーとデュラントだった。その際、ペリカン・ベイを大混乱におとしいれ[illegible]見やった。「そうだな、ハウイ?」

「そんなところだ」

「その人たちどうなったの?」ギャンブルが尋ねた。

「ウーとデュラント?」

[illegible]

片手の甲をしばらく見つめていたブローチは、その手をひっくり返し、今度は手のひらを見つめだした。手の甲だか手のひらだかが記憶を呼び覚ましたらしい。「アイヴォリーは麻薬の過量摂取でマイアミで死んだ、と思う。レースは億万長者といってもいい男と結婚し、業界から引退した。最後に聞いたシルクの噂は、エルサルヴァドルに行って、布教活動をしてるということだった」

身ごなしの下半を覆むガラス張りの壁面のほうに体をめぐらせたギャンブルは、そのまま景色を見つめながら言った。「その二人はどんな銘柄なのかしら、ハウイ?」

面くらったモットがブローチを振り返ると、ビジネス・マネージャーが翻訳してくれた。「宗旨を知りたがってるのさ――ウーとデュラントの」

「理由を訊いていいですか?」モットの質問にはとげとげしさが感じられた。

ギャンブルがガラス張りの壁から向き直った。「彼らがどんな宗旨でもかまいはしないの。ただ、二人の頭のなかに入りこむのに役立つわけね」

「彼らは芝居の登場人物ではないんです」

「いいから教えて」

紺色のスーツの左袖から目には見えないごみをはじき[illegible]は[illegible]、モットは[illegible]ウ[illegible]デュラントは名目上はメソジストだと思いますね。十四歳のとき、サンフランシスコにあるメソジストの孤児院を一緒に逃げだしているので。もちろん、すでに銘柄を変えているかもしれない――あるいは、完全に捨て去ったか」

「二人とはいつ会うの?」

「きょうの夕方か夜の早い時間では?」

「どちらでも」と答えた彼女は、ひと呼吸おいてから尋ねた。「その二人を一語で言い表わさなければならないとしたら、どう言えるのかしら?」

「機略に富む」モットは躊躇なく答えた。「非常に機略に富んでいる――もっとも、それでは一語以上ですが

が、あなたがグディスン兄妹を派遣してもらうのに支払った十二万五千トルを返還してもらう際に、その経費を差し引かれることはないのです」モットはブローチに顔を向けた。「その金はもう受け取ったのかな？」

ブローチはうなずいた。「きのう電信送金で」

キャンブルはふたたび黄色い鉛筆を手に取り、無意識のうちに親指で芯のとがり具合を調べた。「グリムは〝善後策〟を講じたというお話だけれど。それはどういうことなのかしら――お金を送り返してくれたということ以外に？」

「彼は、かなりの自腹を切って、ウーデュー有限会社というロンドンの会社を雇ったんです。その仕事は、グディスン兄妹を捜したことと、あなたとわたしに必要となるかもしれない手助けをすること」

「ウーデューの綴りを教えて」

モットが綴りを教えると、彼女は尋ねた。「何を意味しているのかしら？」

「何も。二人の共同経営者の名前、アーサー・ウーとクインシイ・デュラントをもじっただけです」

「ウーというのは――中国系？」

「そう」

「すると、絞首刑をまぬがれるには、間抜けなイギリス人二人組に頼らざるをえないというわけね」

「ガス室だな」とブローチ。

ギャンブルに彼を怒鳴ったりののしったりする暇を与えずに、モットは言った。「ウーもデュラントもアメリカ人でしてね。それに、二人とも間抜けでないことは保証します」

「としたら、その二人は何者なの――名士連中の秘密調査員？」

モットが答えようとしたとき、ブローチが指を鳴らしていった。「ああ、そうか！　アイヴォリー、レース＆シルク、そうだな？」

その質問はモットに向けられたものだった。一瞬躊躇してから、彼は軽くうなずいて同意した。

明らかにいらついた様子でキャンブルが尋ねた。「あのフォーク・グループの？　わたしがほんの子供だったころ、よく聴いていたあの人たちのこと？　いったい、彼女たちがわたしとどんな関係があるというの？」

「あんたとは何の関係もないさ」とブローチ。「しかし、ウーとデュラントには大いに関係がある。七〇年代にシルクが行方不明になったのは覚えてるかな？」

最小限に抑えている点だった。とはいえ、シンプルな白
[illegible]
かな胸によって、愛らしさは充分に満たされていた。
それに小道具としての鉛筆――削りたての長くて黄色い鉛筆。彼女はそれを三分近く黙って見つめたあと、左[illegible]のように振り戻ってきては、ハワード・モットの喉に[illegible]

[illegible]はインド更紗のカバーをかけたカウチにふたたび[illegible]ていた。エージェント兼個人弁護士兼ビジネス・マイーシャーの品のいいシャック・フローチは、実用本位の肘掛け椅子に戻っていた。緊張を破ったのはブローチの言葉だった。「アイオニ、その鉛筆をおもちゃにするのはやめてくれないか？」

練習を積んで完璧に身につけた、驚き傷ついた表情で顔を上げたギャンブルは、手元に目を落とした。初めて鉛筆が目に入ったとでもいったふうだ。ゆっくりと手を開くと、指のあいだから転がり落ちた鉛筆がデスクにカタンとあたってはねた。「ごめんなさい。わたし――気づいてなかったの」

シャック・ブローチは疲れたように二度手をたたき、その演技を称賛した。

ブローチを無視し、彼女はモットに甘すぎるほほ笑みをみせて言った。「考えていたのよ、ハウイ、もう一度説明してもらえないかしらと――できればごく簡単に――あの二人の大はか者の催眠術師を雇った理由を」

「もちろん」モットは応じた。「前にも言ったように、わたしがあの二人組のことを初めて知ったのは、イギリスのある法律雑誌で好意的な記事を読んでのことなんです。それでも、二人を雇うにあたっては、ロンドンの著名な法廷弁護士二人に話を聞いた。その二人のみならず、ロンドン警視庁の二人の幹部も、あの兄妹を強く推薦した。それに劣らず重要な事実は――少なくともわたしにとってはですね――ヒューズ・グディスンもポーリン・グディスンも、ともにエンノ・グリムの抱える専門家であって――」

「催眠術師の周旋屋ね」とギャンブル。

「――それだけでもう充分な推薦理由になるんです」

「つまり、彼の派遣した催眠術師兄妹が恐喝や詐欺をするはずがないとして、料金返還保証をしているということね？」

「まさしく。事実、グリムはすでに善後策を講じている

インシイ・デュラントに頼むでしょうな、とも」

ジョーンア・ブルーが立ち上がって言った。「搭乗のアナウンスをしてるわ」

エルメネヒルド・クルス警部は顔を右手に上げ、ブルーに笑顔を投せた。ハイヒール姿の彼女はクルスより四インチほど高かった。「お戻りにはならんように。そんなことはお考えになってもいけません」警部は言った。

ジョーンア・ブルーはこの上なく愛想のいい笑みを返した。「なんとも気のきいたご忠告だこと」

12

メンフィスの綿花商が作らせたテスクにふたたび就いたアイオニ・ギャンブルは、沈黙と一本の鉛筆だけを使って緊張を作りだした。その味わいと手ざわりまでもが感じとれそうだ、とハワード・モットは思った。この緊張を彼女があとわずかでも高めるようなことがあれば、電流の高ざわり、死の脅迫の肌ざわりといったものが味わえるのではないだろうか。

ギャンブルの演技は素晴らしい、とモットは判断し、その一部をどうにか盗むなり借りるなりして、今後法廷に立ったときに活かせないものかと考えた。彼がとりわけ感心したのは、そうした雰囲気を助長するのに、ギャンブルが豊かな明るい茶色の髪をオールドミス風の束髪に結い上げ、顔の化粧をすっかり落として、目立った特徴を強調するとともに、木枯らしの中を歩いてきたかのような愛らしさを

ンでの滞在延長を楽しみましたか、ミ・ミ・ミ？」
「そうでもないわね」
「またお戻りになる予定は？」
「ないわ」
「驚くべき書類ですな」彼女のパスポートを左手の親指の爪に打ちつけながら、クルスは言った。押収するか返すか決めるのに役立つかもしれないとでもいうかのように、そのままパスポートを打ちつけ続けていたが、やがてクリーム色の上着のポケットで両肩がわずかに動いた。肩をすくめた、とストーリングズは解釈した。その推測が正しかったことは、ほどなく警部がブルーにパスポートを返し、「お気をつけてご旅行を」と言ったことで証明された。
彼女が礼の言葉か何かを口にする前に、ストーリングズは尋ねた。「おかしな電話があったというのは？」
「そうでしたな」とクルス。「あの電話の件。そう、ドイツから――フランクフルトから――かかってきて、本人はグリムと名のっていました。エンノ・グリム。ご存じですかな？」
ストーリングズは首を振った。
「その男が知りたがっていたのは、アーティ・ウーとクインシイ・デュラントを推薦できるか、もしくは、たんに身元を保証できるかということでした。あなたの昔の、何と言ったらいいですか、ハートナーシ？」
「あの二人を何に推薦するのかね？」
「何かはっきりしないが、短期間の臨時の仕事。グリムは明言しなかったのです。実際、彼が明らかにしたことといえば、それがどこで行なわれるにせよ、フィリピン国内ではないということだけでしてね。それだけのことでさえ、聞きだすのにひと苦労でした。そのあと、あなたがマニラにやってきていると聞いたもので、ウーとデュラントが何をしようとしているのか知っているかもしれない、と思いついたわけです」
「この五年、二人のどちらとも会っていない」
「残念ですな」
「それで？」とストーリングズ。「二人を推薦したのかね？」
「わたしはなにぶん警官なもので、誰に対してであれ、あの二人を推薦することはできかねますな、と答えておきました。しかし、もし警官でなく、たとえば、地獄の入口から安全に連れ戻してくれる者を必要としているなら、間違いなく、アーティ・ウーとあの――まあ――ク

ジョージア・ブルーはヘニグノ・アキノ国際空港の中華航空のカウンターに行き、台北行きの搭乗手続をしていた。すると、三十代後半もしくは四十代前半、中肉中背のフィリピン人の男が一人のところへやってきて、警察手帳をみせて言った。「お二人はお似合いのカップルですな」

ジョージア・ブルーは、男をしげしげと見つめた。非の打ちどころのないクリーム色のスーツ、ブルーのシャツの胸元、鳶色の髪、鳶色の目、ネクタイピンの真珠、ポケットチーフの折り方、いかにも切れ者だとわかる大きなこげ茶色の目。

彼女は男が警察手帳をしまうのを見て言った。「クルス警部補を覚えていて、あなた――あの素敵な警官を？」

「クルス警部です」男は訂正した。

もちろん、ヒューストン・ブルー　「いまではそうなっているわけね、おめでとう」

クルスは軽い笑みを浮かべると、ストーリングズのほうを向いて言った。「あなたとは五年前にお会いしましたな」

「たしかに」

「わたしがここに来たのには二つの理由があるのです。ひとつはお別れの挨拶をするため、もうひとつは、一週間か十日前、おかしな電話を受けたもので、そのことに関してお聞きをしたいと思いまして。しかし、その件に入る前に、お二人のパスポートと航空券を拝見したいですな」

なぜ？　とストーリングズ

「いけませんか？」

ストーリングズは肩をすくめ、自分のパスポートと、ブルーの航空券を手わたした。ジョージア・ブルーのパスポートがそのあとを追った。

クルス警部補は航空券を調べた。「中華航空で台北に行き、シンガポール航空のファースト・クラスに乗り換え、リン・スティーブンのファイトでロサンジェルスへ。さぞかし快適なことでしょうな」

航空会社を変えて、クルスはスティーブンスのパスポートを調べた。ヨルダンはいかがでしたな」

「発ったときは雨だったな」ストーリングズは答えた。

「それはそれは」とクルス。彼のパスポートを返し、ジョージア・ブルーのを注意深く調べはじめる。ようやく顔を上げた警部は、彼女を見つめて訊いた。「フィリピ

「合衆国」

ストーリングズはポプリン地の褐色の上着の脇ポケットに手を入れ、パスポート・サイズのカラー写真を取りだすと、立ち上がってデスクに置いた。「彼女を覚えているかな?」と椅子に戻りながら尋ねる。

ミニイ・エスピリトは身を乗りだし、ジョージア・ブルーの写真をじっと見つめた。「もちろん。一九八六年のミス・悪党。元シークレット・サーヴィス。あんたら[illegible]

[illegible]、アキノの反対陣営と取り引きして、感化になった」

彼女はストーリングズを見上げ、にやにや笑いといってもいい笑みを浮かべた。「これはビジネスなのかい、それともロマンス? あるいはその両方?」

「わたしはきわめて寛大な性質の持ち主でね」

「どうしようもないばかな年寄りでもあるね」彼女はタバコをにらみつけていたが、コンクリートの床に落とすと、靴で踏みつぶした。そうして、吸殻を踏みにじり続けながら、「USドルで五千かかるよ」と言った。

「驚いたな」

「ビタ一文まけないよ」

「品質は?」

[illegible]「[illegible]

いるのがわかったんでね、その男のいくつもの賭博の借用書をあたしらが買い上げて、真新しいパスポート十通と交換で返してやったのさ。[illegible]ばかりに見えるのを渡してやれるよ」

「買おう」

[illegible]なら、[illegible]ネーム、生年月日、出生地が必要だね」

ストーリングズは上着のポケットにふたたび右手を差し入れ、一枚の紙片を取りだした。立ち上がり、それをミニイ・エスピリトに手わたすと、また椅子に戻って訊いた。「いつ取りにきたらいいかな?」

「金を持ってきてるんなら、待っててもいいよ」

「待っていよう」ストーリングズはシャツのなかほどのボタンを三つはずすと、ナイロン製のマネー・ベルトのジッパーを開いた。

翌日の午前十一時二十五分、ストーリングズとジョー

大きなコットンのワンピース姿。テントのような服を着てはいるが、五年前、香港で最後に会ったときほど太ってはいないようだ、とストーリングズは判断した。

「どうしてるね、ミニイ？」

ミニイ・エスピリトは椅子の背にもたれかかり、重々しい表情で彼を見つめていたが、やがて笑みをみせて言った。「坐って、ブース」

ストーリングズは最後列に置かれた折りたたみ椅子のひとつを選んだ。いくらか体重を落としたようだな元気そうだ」

「癌で体重が落ちたんだし、ひどい様子をしてるはずだね」

「気の毒に。知らなかった」

「あんたが知ってるはずもない。医者どもがかくしてたし、すっかり摘出したと言ってたけどね」と言って肩をすくめる。

「わたしにできることが――」

「ないね」彼女は最後まで言わせなかった。

短い沈黙があってから、ストーリングズは言った。

「あの二人の若者があちこち引きまわしてくれた。あらゆるものが崩壊しつつある、そうじゃないかね？」

ミニイ・エスピリトはまず溜め息をついてから、うなずいて言った。「マルコス式の汚職をアキノ印に換えてみたけど、これっぽちも違いがないとわかって、みんなショックを受けてるとこさ。この国の経済は手足をもぎ取られてるってのに、やってることといえば、薄汚い軍事基地のことでワシントンと言い争ってるだけ。知ってる、ブース？　あたしら、第三世界から、救いようのない第四世界へとすべり落ちてるんだよ。バングラデシュと一緒にまっさかさま。誰もそれに気づいてないし、気にもしてない」

「革命の見通しは？」

「ベルリンの壁の崩壊でほとんど押しつぶされちまったね。でも、あたしらいまでも戦ってる。誰かがやらなくちゃね――もっとも、ほんとにあたしがやらなくちゃならないのかってときどき考えるよ。すべて日本人に売っぱらっちまって、ゴルフ・コースだろうが女郎屋だろうが、あいつらの好きなふうに変えさせりゃいいんだと」

ふたたび溜め息をつくと、彼女はストーリングズにタバコの箱をさしだした。彼が首を振ってことわると、木枠を取って火をつけ、天井に向かって煙を吹きつけた。

「何がはしいんだい、ブース？」

べ棒の代金を差し引いてもそれだけの儲けになった。

助手席の若い女が――二十歳か二十一以上のはずはない、[illegible]ようやく振り向いて[illegible]この都市の荒廃ぶり、どう思う？」

「順調に進んでいるようだが」

「前にもマニラに来たことあるの？」

「九四五年、八六年、八八年に来た、とストーリングズは答えた。

女は運転手を振り返って言った。「このおじさんマッカーサーと一緒に来てたのよ！」運転手は肩をすくめ、〝だから？〟というような言葉をつぶやくと、車線をはずれたスクーターに向かってクラクションを鳴らした。

あてのないドライヴが終わったのは、陰鬱に伸び広がったスラム街の端に建つ大きな平屋の家の前だった。コンクリート・ブロックでできたその家は、堂々としたブーゲンヴィリアに半分おおわれた波形トタンの急傾斜の屋根が目を引いた。家の前の踏み固められた地面は不細工な杭と金網で囲まれ、二匹の山羊と三羽のアヒル、雌鶏六羽と雄鶏一羽が飼われていた。

トヨタが止まると、若い女がふたたび振り向いて言った。「彼女、待ってるわ」

「送ってくれてありがとう」ストーリングズは礼を述べ、車をおりた。門のあけ方に手間どったが、庭に入ると、注意深く門を閉め直してから、開いている玄関ドアまで歩いていってノックした。

色あせたバットマンのTシャツを着た、三十五歳くらいの筋肉質のフィリピン人が姿を現わし、ストーリングズを迎えた。男は仏頂面で長いこと睨めつけていたが、ようやくひょいとうなずいた。〝ま、せっかく来たんだから入りな〟、ストーリングズはそう解釈した。

なかに入ると、男は奥のドアを抜けて姿を消した。ストーリングズの立っているのは正方形の部屋だった。木製の古いデスクの前に、二十四脚の折りたたみ椅子が三列に並べられていた。デスクの真ん中には電話が置かれ、四隅にはタバコの焼け焦げあとがびっしりついている。デスク左手の壁には南京錠の掛かったスチール・キャビネット一事務用品を入れるようなやつだ。その左隣には東芝製の古びたコピー機。

デスクには、四十代なかばの白髪の目立つ丸顔の女が就いていた。鬼ひまわりの模様のついたゆったりとした

のない汁だくのドライヴでストーリングズをマニラじゅう引きまわした。

ストーリングズは、ショックを受けたとは言わないまでも、大都市の衰退ぶりに驚いていた。前回アザガイ・オヴァビイとともにここに来たのは、一九八七年初頭のことで、一九八七年秋の株価暴落による経済的損失を回復しようと努めていたのだ。

オヴァビイがみずからの計画を何度も何度もこと細かに説明してようやく、ストーリングズは投機団体に出資することに同意し、五トンだか五十トン、あるいは百トンとすら考えられている金塊探しに加わったのだった。その金塊は、言い伝えによれば、罠を仕掛けて埋蔵されているもので、一九四五年の初めに日本軍がマニラから撤退する際、ヤマシタの虎との異名をとった山下奉文将軍が残していったということになっていた。

フィリピンに関する権威のひとりと自認するストーリングズは、山下の金塊と呼ばれているものは、山下将軍によってここではなく、岩瀬将軍によって埋蔵されたのであると言いはった。岩瀬少将は、山下将軍の命令を実行した後、マニラを破壊した海軍少将である。

激しい市街戦を敢行し、マニラを破壊したのはその海軍少将だった。そのまったく意味のない最後の戦闘を行なうことで、岩瀬少将は金塊を隠すのに必要な時間をかせいだのである。

アザガイ・オヴァビイはストーリングズの長々しい説明を辛抱強く聞いていた。話が終わったところで、彼は尋ねた。「その金塊が存在する、とあんたは本気で信じてるんだな？」

「あんたは信じてないのか？」

「おれは、金塊が存在すると信じてる連中が数多くいることは信じるさ」オヴァビイは答えた。「ちょうど、処女懐胎を信じてる連中がいるのを疑わないようにだな。そこにおれたちは出資するんだ、ブース　純粋な盲目の信仰に」

一カ月後、マニラのすぐ北にある発掘現場で、大日本帝国と刻印された金の延べ棒が二本発見されると、投機団体への出資希望者が急増した。そこで、オヴァビイとストーリングズはただちに自分たちの権利を譲りわたし、八百パーセントの利益を得たのだった。オヴァビイが購入したときの価格は、発掘に携わった日本の金の延

「アーティとデュラントは、わたしの迎えになぜあなた
考えているんだな」
「そうなの？」
「あんたはどう思うね？」
「そうでないことを願ってるわ。わたしがあげられるものといったら、セックスしかないから」と言ってから、彼女はまったく感情のない声でつけくわえた。「それと赤ん坊」
れんな」ストーリングズは言った。

11

ズは四度目の電話をかけた。今回はマニラ・ホテルのロビーから。一度目の呼び出し音にまた別のフィリピン訛りの女の声が応え、きっかり六分後、マニラ・ホテルから
で車が拾うと教えた。午後十二時八分、ストーリングズは指定された場所に着き、その一分後、
イリピン人の男、エアコンは故障していた。
助手席には同じように若い妻だかガールフレンドが乗っていた。
イリピン人のあいだでは〈雀（スパロー）チーム〉と呼ばれている
――の片割れかもしれない、とストーリングズは思った。

が」

「アーティが言ってたわ。電話のベルが鳴りやむ瞬間に受話器を取って――シークレット・サーヴィスで教わったとおりに――あなたたち二人がオールドミスの伯母さんみたいに、わたしのことをぼそぼそ話すのを聞いてたのよ。ジョージアには何なりとしてやろう、かわいそうに、でしょう？　そこで、まずあなたにできることは、わたしにあるものを手に入れてくれることね」

「どういったものを？」ストーリングズは尋ねた。

彼女は笑みを浮かべた。「麻薬のことをいってるとは思ってるのね、違う？」

「何なりとお望みのものを」

「いいこと、わたしは重罪犯罪人で、恩赦でなく、減刑で出てきた身なのよ、合衆国で判決を受けていたなら、どこかの州が権利を回復してくれないかぎり、投票もできないし陪審員にもなれない、あるいは、大統領に選出されることもない。もっとも、カリフォルニアのたいていの重罪犯罪人が回復したがってる唯一の権利は、銃器携帯の権利のおけたけど。わたしは外国で有罪判決を受けたので、法律がどう適用されるのかはわからない。それでも、アメリカ大使館の連中が、わたしに新しいパスポートを発行するとか、母国に帰りたがってる重罪犯罪人に与える書類を発行するのに、一丸となって骨折ってくれたりはしない、それは絶対にたしかね」

「なぜ強制送還にならなかったのかね？」

「それが取り引きの一部だったのよ――強制送還はなし」

「オーケイ。パスポートが必要。ほかには？」

「衣類」

「では、身じたくをして、通りの向かいにパスポート用の写真を撮りにいこう。そのあと、金を渡すから、あんたは必要な服を買いにいけばいい。わたしはパスポートの手配をしてくる」

「どうしたらいいか知ってるの？」

「知っている」

「ずいぶんと実地経験を積んだにちがいないわね、アザカイレあちこち転々とするようになって、どれくらい――もう五年？」

「それくらいだな」

「何をしてるの？　本気で気にしてるわけじゃないけど」

「相変わらずさ」

のだ。その広く高い額の裏にはありあまるほどの[illegible]

た。

ジョージア・ブルーが立ったまま――化粧はしていず、髪もさっき片手でとかしただけだ――タマゴ、ソーセージ、缶詰産の果物を皿にたっぷりと取り分けている間、ストーリングズは、彼女へののぼせがついに妄執になってしまったのかどうか判定しようとしていた。結局そんなことはどうでもいいとの結論に達したとき、二個のソフト・ロールを皿に加えたブルーが言った。「まったく、ブース、六人で食べても充分なほど頼んだのね」

[illegible]

うところによれば」

「ミルク」と言いながら、彼女はグラスに注いだ。「ミルクの夢を見るなんて考えてもいなかったわ」

皿とグラスを小さなダイニング・テーブルに運んでいて[illegible]

たワゴンに戻ってきた。ナイフには目もくれない。そうして椅子に坐ると、むさぼり食べはじめた。ときおり、警戒しているような目をチラッと上げては、ベーコンとタマゴを皿に取り分けているストーリングズの様子をうかがった。

そうした警戒の視線のひとつに気づいたストーリングズは、彼女を見やって言った。「ガツガツしなさんな、ジョージア。誰もあんたの食い物をひったくったりしないさ」

その言葉を無視し、彼女はせかせかと食べ続けた。

[illegible]

かったのかね？」

「小さくて弱い女たちから食べ物を横取りしてたからよ」

[illegible]

のが不思議だ」

[illegible]

よ」

皿にまだ半分ほど料理が残っていたが、ブルーはフォークとスプーンを置き、椅子の背にもたれかかると、ストーリングズを見つめて言った。「あしたロサンジェルスに発つのなら、買っておきたいものがあるの」

「あした発つことに関しては何も言ってなかったと思う

る豪邸を借りてほしい。われわれ五人が楽に起居できる広さのを。一カ月借りることになるが、さらに一カ月延長する可能性もある点を了解させた上で。五万ドルをあんた名義でアメリカ銀行に電信送金する――旧マリブ・ロードの支店に。あんたとクインシイとわたしを共同名義人として、普通当座預金口座を開いてくれ。必要な現金を引きだし、支店長に不動産屋を推薦してほしいと頼む」

わたしの人物像は？」

「ウーティー有限会社の常駐代理人、会社の自動車は、ロンドン西一区バークリー広場ブルートン通り八番地。その向のホストは、わが社の中東常駐代理人で――本部はアンマン――うんざりするような調査研究を指揮していた」

「うんざりするといえば」とストーリングズ。「アサガイは現われたかね？」

「クインシイがディナーを――夜食と言ったほうがいいかな――おごっている。いまわたしが話したようなことを話しているはずだ」

「きっと、アサガイはクインシイに、アイオニ・キャンブルを個人的に知っていると話していることだろう」

溜め息だか葉巻の煙を吐きだす音だかがロンドンから聞こえてきたあと、アーティ・ウーが言った。「ということなら、好都合だが」

朝食のワゴンを運んできたルーム・サーヴィスが出ていくと、ブース・ストーリングズはスイート・ルームの居間を横切り、ジョージア・ブルーの寝室のドアへと向かった。彼がたどり着く前に、ドアが開いてブルーが姿を現わした。ホテルの白いパイル地のバスローブを着た彼女は、裸足で出てきた。

この二十四時間足らずのあいだにすでに七回目だったにちがいないが、ストーリングズは、彼女が素晴らしく長い脚で以前どおり優雅に颯爽と足を運ぶのに気づいた。裸足で五フィート十インチ、ハイヒールをはくと六フィートにはなる。薄緑色の目がストーリングズを越え、背後の朝食ワゴンに向けられた。ワゴンのところに行った彼女は、蓋を取り、飢えたようにひとつひとつ料理のにおいを嗅いだ。取り分け用のスプーンに手を伸ばす直前、幅一インチ弱の白髪の筋がめだつ赤茶色の短い髪を指で梳き上げた。二年足らず前、刑務所で三十五歳の誕生日を迎えてほどなく、額の真上中央の部分が白髪になった

た。続いて、溜め息だか葉巻の煙を吐きだす音が聞こえてから、またウーが話しはじめた。「ちょっとした知らせと、簡単に説明しておきたいことがある。問題の二人の催眠術師というのは、そうとう性悪のイギリス人の兄妹で、アイオニ・ギャンブルの事件に係わっていた」

「ほう、そう呼ばれている？」

[illegible]

「知らせというのは、ミズ・ギャンブルがあんたの義理の息子を弁護士として雇っているということだ」

「義理の息子は二人いるが」とストーリングズ。「ひと[illegible]し、そもそも弁護士ではない。ということは、ハウイ・モットの話をしているにちがいないが？」

「そう」

[illegible]

「まるで、ウィリアム・A・C・アイス同世殺害の容疑で、ミズ・ギャンブルが起訴されたという噂は耳に入ってないかもしれないな」

「世界中どこのホテルだろうと、USAトゥデイは[illegible]のドアにはさんでおいてくれるさ。その見出しは見たが、記事を細かく追っているとはいえんな」

「それなら、その件を自分で少々調べてみるのもいいのではないかな」

「オ・ケイ」

「まあ、そうだろうな。[illegible]、おまえさんたちをわたしに押しつけたのは[illegible]から」

「まだ会ったことはないが、共通の友人がずいぶんといるようだ」

ストーリングズは鼻を鳴らしただけだった。「こちらはいつロサンジェルスに行ったらいいのかね？」

「あした発てるかな？」

「ファースト・クラスで？」

「ジョージアにはファースト・クラスに乗るくらいの権利があると思う」

「間違いなく」とストーリングズ。「ロスでわたしにできることは？」

「ある。家具付きの家を、パリセーズ公園かマリブにあ

「行方不明になっている二人の催眠術師を捜しだす」
「ほかには？」
「それがゴールだが、そこに到達するには、例によって曲がりくねった脇道をたどらなくてはならないだろう」
「そうした脇道のある場所は？」
「ロサンジェルスとその周辺」
「残念だな、ロンドンとその周辺といったところを望んでいたんだが」
「ロサンジェルスのほうが気候がいい」
「たしかに」ストーリングズは同意した。
ほんの短い間があってから、ウーが訊いた。「話を続けられるかな？」
「ジョージアはまだ寝ているよ」
「いつ出てきた？」
「きのうの午後。ペニンシュラ・ホテルで借りたメルセデスで、マンダルヨンの女子刑務所に迎えにいってきた。花束とシャンパンまで携えて。シャンパンはいくらか飲んでくれたが、ホテルに着くと、花束は車のなかに置き去りにした」
「どんな様子かな？」
「たいして変わったようにはみえんな」
「精神的には？」
「あいかわらず頭の回転が速い。昔以上かもしれんな。しかし、取り除く必要のある感情的な傷がいくつかあると思う」
「彼女には何を話した？」
「ウーとデュラントが何かやろうとしてて、あんたとアザガイとわたしに手伝ってもらいたがっているということだけだな」
「それに対して彼女は？」
「保育園のゲームみたいな話ね、と言っていた」
「それだけかな？」
「これまでのところは」
「彼女が自信を回復するには、親身な手助けが必要かもしれない」
「お教え願いたいもんだな、アーティ。岩みたいに堅固な自我にどう自信を回復させてやったらいいというのかね？」
「そのうち方法も見つかるだろう」そう言って、ウーはしばらく口をつぐんだ。一万二千マイルの彼方から、カチリというかすかな音がストーリングズの耳に聞こえてきた。ウーがライターをつけた音だろう、と彼は推測し

10

日付変更線が存在するために、アーティ・ウーが火曜日の午前八時四分だった。

ウーとストーリングズが話をするのは五年ぶりだった。そのため、まず一分かそこら、高価につく儀礼的挨拶――ら、ウーは当面のビジネスの話に取りかかった。

「金の話をしよう、ブース。その点で合意できなければ、それ以外の話をしてもしかたないからな」

「異論はない」

うことになる。あんたとアザガイとジョージアにそれぞれ十万ずつ」

「うまい話のようだな、とりわけでかくはないが」とストーリングズは応じた。

しとして、別に二万五千ポンド払った。しかしその金は、

「おまえさんたち千上がってたにちがいないな、アーテ

「からからに」

「わたしの計算が正しいなら」とストーリングズ。「おして――七十万になるな、七十五万ではなくて」

とっておく。不慮の事態が生じなければ、五等分して、ボーナスだか逃走費用だかになる」

「あるいは両方に」

「あるいは両方に」

れるのに、われわれのすべきことは？」

冷たい警官の目がデュラントにそそがれた。「子供相手の変態がムショでどんな目にあうかは知ってるわね？」

デュラントはうなずいた。

「ま、気の毒なパパは何度も何度もやられたのね。もはや耐えられなくなり、ある晩、ビニールの袋を顔にかぶってベッドに入り、二度と起き上がらなかった」

「現在きみは順調にやっている？」

「階下の薬局で働いてるわ。家主は上得意の客に覚醒剤やら鎮静剤を売ってるので、一見さんが立ち寄って、クレジットカードで買えないと知ってゴタつくようなときに備えて、元警官をそばに置いときたいのね。あたしは帳簿にはのせられないお金をもらってるわけだけど、ま、充分だといえるわ」

「アリスはどうなったのかな？」

「訊いたことないわ」と言って、メアリ・ティッカーは何か考えるように眉をひそめてから、尋ねた。「二人が死んでる可能性は？」

「グディスン兄妹？」

うなずく。

「可能性はある」

「それは素敵ね」軽い笑みをみせて彼女は言った。幸福な表情からはほど遠いにせよ、満足げな顔といえなくもなかった。

日の朝、暇ができた。彼女の誕生日だったのよ、九歳の。で、プレゼントを持っていった。ベルが鳴らないのはわあたってみると、掛け金がかかってなかったので、入っていった。プレゼントを置いて、帰るつもりだった。そのとき、声が聞こえた。うめき声のような。大きなフラットじゃないのよ、ここたいして変わらない。ま、一階にあったけど」

そこで言葉を切った彼女は、ウィスキーを飲み、新たなタバコに火をつけた。そうして、溜め息とともに煙を

真っ最中の、かわいいアリスとやさしいネッド叔父さんが。あたしは気が狂ったようになった」

「どんなふうに？」

「アリスをつかまえ、バスルームに鍵をかけて閉じ込めた。それから、ネッド叔父さんを追いつめ、腕をへし折ってやった。左腕を。そうして、ほんとうのことを話さないと、右腕も折ってやると脅した。で、彼は真相を話したわけだけど、とにかく、いまいましい右腕もへし折ってやったわ」

「最初からアリスとネッド叔父さんであり、アリスと父親ではなかった？」

メアリ・ティッカーはうんざりしたようにうなずいた。

「アリスが五つのときから、二人は関係を持ってたのよ。ネッド叔父さんは、ヒューズとポーリンに三千ポンド払って、父親がやったらしく見せたのね。ヒューズとポーリンは、アリスに、催眠術にかかったふりをどうするか、パパについて何をどんなふうに言ったらいいのか教えた。ヒューズには、報道機関に内報してくれる友人がいた。もうめちゃくちゃね」

彼女は一杯目の酒を飲み終えたか、何の気配もなかったようだ。新たなタバコにライターで火をつけたところをみると、灰皿に吸いさしのタバコがのっているのは忘れてしまったらしい。煙を吐きだすと、彼女は続けた。

「誰ひとりあたしの話を信じなかった。ネッド叔父さんは、あたしが押し入ってきて襲ったと主張した。アリスはその証言を支持し、一度ならずあたしが彼女を愛撫しようとしたと言った。事情聴取を受けたグディスン兄妹は、あたしがポーリンに言い寄ったと言った。あたしは穏便に辞職することを許された。すべて内々に、こっそりと処理されたわ。ちょうどそのころ、アリスの哀れな父親が自殺したものだから、ことさらに」

ューズが、自分たちのしようと思ってることを簡単に説明した。費用のことで両親がぶつくさ言いはじめたので、あたしは、心配ない、費用はパディントン署が払うからと何度も説明した。ようやくその点を納得すると、二人は元気になり、近くの酒場に繰りだしていった。そこで、グディスン兄妹をアリスとネッド叔父さんに引き合わせに連れていった。でも、あたしは署に戻る用事があったので、彼らを残して帰った」

メアリ・ティッカーは空のグラスを上げて尋ねた。

「もう一杯どう？」

ああ、ありがとう、いただくよ

キッチンから戻ると、彼女はグラスをデュラントに渡し、自分のウィスキーを少し飲んでからまた椅子に坐った。「どこまで話したかしら？」

「グディスン兄妹はネッド叔父さんと一緒にいた」

「それにアリス」と彼女はつけくわえた。「二日後、兄妹は一家の居間で催眠術をかけた。その場にいたのは、あたしと巡査がひとり、警察医、両親、ネッド叔父さん、それともちろんグディスン兄妹。一分とたたないうちに、ポーリンがアリスを催眠状態におちいらせ、その一分後には、あたしを犯したのはパパなの、とアリスがしゃべっていた」

「きみはその言葉を信じた？」

「もちろん信じたわ」とティッカー。「ま、あれほどの大騒ぎにはまずお目にかかれないわね。父親がアリスにつかみかかったので、あたしは殴り倒さなくてはならなかった。母親は、人殺しとかなんとか、ばかな女の決まり文句を絶叫してた。ネッド叔父さんは揉み手をしてちょこまか歩きまわりながら、かわいそうに、かわいそうにと、あたしが黙らせるまで、それればかり繰り返してた。巡査と警察医かは親をなんとか黙らせようとしてるあいだも、アリスは、パパが自分にしたことをべらべらとしゃべり通しだった。それで、あたしは父親を逮捕した。結局、彼は裁判にかけられ、五年の刑を宣告された。母親は行方をくらませてしまい、アリスはネッド叔父さんと暮らすことになった。そのころには、グディスン兄妹は大々的な宣伝のおかげで有名になりつつあった」

「そのころ、きみと兄妹との関係はどうなっていた？」

「まったく無関係。二人はあたしを捨てたのよ」

「アリスがネッド叔父さんと暮らすようになってから、彼女に会ったことは？」

「暇ができたとき、ときどきふらっと寄ってたわ。ある日曜

テニラント「はうまく…」

「法はなんとかできるでしょ。ベロ十さえなければ」

「グディスンのことに決まってるじゃない」とヨ テニラント。

「あたし、アースのことを話すために三十分も長かったのよ。それで、ヒューズとボーソンと一緒に、おいしいランチをご馳走になったの。アースの話をするノンビリ気楽な夕食をとったの。アースの話を十

「法はうの　グディスン兄妹の三人組は…」

「あの二人組は最初から気味悪そうだったのよ。警察署で次の仕事を手に入れようとさんざんせっついておきながら、いざそれを提供されると、とたんにしおらしくなって、自信がない、もっと経験を積んでからのほうがいいと言う、とかなんとかお気にもないことを言って。それで、あたしのほうが二人にはとんど懇願するかっこうになった。最初はノーと言ってた二人も、そのうちに、ま、できるかもしれないということになり、ようやくイエスと言った。そのお祝いということで、あたしたち三人はハマースミスにある法律のフラットに行き、夜遅くまで…

スに長いことあったのよ」

「それはうの…」

「翌日、パニノンさんの上司に話を通した。法はあたしの言いつきに冷淡だったけど、しつこく言い続けると、ようやく、たぶん、懇願の立ち合いのもとでなら、ということころまで譲歩した。完全に次のようにして

「言えなかったけど、その晩あたしは、自分ができるだけ多くの情報をアースとまとめた。あの子はハミングしながらやってたわ」

「二時をう…」

「いろんな歌を。覚えわったままま、次から次へとハミングしてた。でも、同もしゃべろうとはしない。ひと言も。二度はいぎんとしてジンを飲んだくれ、エッセ教父さんは、"まったくなんてことだ"とかなんとかのつぶやきながら、あれこれ整理してきわってた」

「三時頃とエッセ教父さんは帰ったんだ…」

「二十八とも三十代の前半ね。なぜう…」

「実害はない」とテニラント。「たんなる記憶のおな

テ　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　

イスンは兄妹はまだアリスの記憶と話してみたがった。それで、あたしたちはあるカフェで会って…　ボーソンとと

わいいヒューズと愛らしいポーリンを喜ばせたいがために。あたし二人に惹かれてたのよ、あの兄妹に」

「それでどういったことに？」

「最初は、たんにキスしたり抱きしめたりといったことだった、二人であの二人は驚いたり、恥ずかしがるふりをしてたそうしてるめこまれ、とうとうあたしはしてしまった」

「何を？」

「二人に警察の仕事をやらせること」

「例のレイプ事件？」

彼女はうなずいた。「その晩はジェーニーがいたのね？」

「概略を」

メアリ・ティッカーはふた口でグラスを空けた。「あの子のことはアリスと呼ぶことにするわ」

「幼い女の子――レイプされた子」

「変態の餌食にされた子、血まみれにされて、両親は仰天してパニックにおちいり、おろおろするばかりだった。ようやくパディントン署に連絡してきたとき、あたしが受けたの」

「そこがきみの勤務先だった、パディントン警察署か？」

彼女はうなずいた。「あたしはアリスを病院に連れていき、ずっと離れずにいた。医者が治療するあいだも付き添っていた。あの子は顔を伏せて横たわり、声ひとつ立てず――なかばショック状態だったわけだけど――涙さえ流してなかった。医者はあたしにあの子の手を握らせていた。あのとき七つだったのよ、もう少しで八つ」

「ジェニー・アーリスの話では、アリスは口がきけない、あるいはきこうとしないということだったが」

「言葉はおろか、声を発することさえ。涙ひとつ流さないのよ。でも、医者の処置がすむと、あたしに弱々しくチックとは笑みかけた、胸のつぶれる思いがしたわ」

「グディスン兄妹にアリスのことを話したのは？」

「その晩のことね――アリスを家に送っていき、ベッドにくるみ込んで、今夜はママとパパはそんなに酔ってないし、もし酔いつぶれてしまっても、叔父さんが来てるからだいじょうぶ、と安心させたあとで」

「それはネッドだったのかな、叔父さんというのは？」

メアリ・ティッカーは冷たく容赦のない目で彼を見据えた。本物の警官の目だ、とデュラントは思った。「ジェニーがネッドの名前を教えたの？」

デュラントは笑いをこらえきれなくなった。
「ジェニーは言ったのね？」
「何もかもすべてを」
「あのパイのことも……」
デュラントはうなずいた。長い沈黙が続く間、メアリー・ディッキーは煙草をもみ消し、タバコを三口吸い、こうして言った。「あのニール、伝言なのよ」
「マディスン王女から？」
「そう」
「言いたいのは？」
「ニール、ママとパパを殺したのを、嘘じゃないわ。マックもそう。ハマースミスのフラットと数千ポンドの現金を手に入れるために、両親に毒を盛った」
「しかし、それは証明できない」
「できたの。自殺だと言っているわね」
「きみはマディスン王女と自分が言っていたのだと言っているわ」
「ジェニーがそう言ったの？」
デュラントはうなずいた。
メアリー・ディッキーはタバコを吸い、煙を吐きだして、言った。「それは本当のことなのね」
「何の話だ？」

「ニール、あなたをこちらにするのよ」[illegible]タバコを深く吸った。彼女は、[illegible]をまたせて[illegible]
・スキー……」
「いただくよ」
[illegible]、……[illegible]
「本当のことを話して」
ディッキーはゆっくりとキッチンに入っていき、本当のことを[illegible]
・スキーを手にして戻ってきた。彼女のために[illegible]
ほうが良いのにデュラントは気づいた。[illegible]口飲み、彼女は言った。「[illegible]はじまったわけじゃなかったのよ」
[illegible]の話なのかよくわからないまま、デュラントは眉を上げて言った。「じゃあなかった？」
「ニールはあたしに調子を合わせていた。とにかく友達なのよ。あの王女は、ほんとうのところ、どうしてもタバコをやめたがわるの」
「[illegible]でした」
「[illegible]……[illegible]」
[illegible]にはいらなかったのよ、[illegible]
[illegible]

心に配置されていた。テレビの向かいには奥まった小さなキッチンがあり、その先のドアは閉められていた。寝室とバスルームに続くドアなのだろう、とデュラントは推測した。テレビに向かって安楽椅子が二脚並べられ、真ん中の椅子の前には低いテーブルが置かれていた。お茶や夕食のトレイをのせるのにちょうどいい大きさと高さだ――実際そうしているのだろう。壁にはピンクの蔓バラをあしらった壁紙が貼られ、田舎の風景を描いた――デヴォン州の風景らしいとデュラントは思った――安物の版画があちこちに掛かっていた。クロゼットとして使われている鏡のついた戸棚。壁に取りつけられたマッチ箱の四段の棚には陶器の猫のコレクションが並び、安楽椅子のひとつには本物の猫――大きな毛猫――が丸まっていた。

「さあ、坐って」そう言うと、メアリ・ティッカーは小テーブルを前にした椅子に腰を落とした。デュラントは礼を言って、猫がのっていないほうの椅子に坐った。メアリ・ティッカーは吸っていたタバコからもう一本のタバコに火を移した。デュラントが数えてみると、灰皿のあちこちに七個の灰皿があった。

「グディスン兄妹がその悪癖を直したと聞いたが」と彼は言った。

「あの治療は効果がなかったってこと、ね？」彼女はタバコを小さく振ってみせた。「かまわない？」

「いっこうに」

「あの二人の消失ショーを聞かせて」

「詳しくは知らないんだ」デュラントは言った。「知っているのは、二人はアイオー・ギャンブルに催眠術をかけにロサンジェルスに飛んでいき――そうして、消えてしまったということだけだな」

「大金がかかってたにちがいないわね」

「かなりの」

「あなたはそれにどう係わってくるの？」

「われわれの会社が二人を捜したために雇われた」

「あなたの会社って？」

「ウーデュー有限会社」

「聞いたことないわね」

「小さな会社なんだ」

「それもそうしたことをしてるのかしら、失踪人を捜しにいくといったことを？」

「ときには」

「それ以外のときは何を？」

「あなたアメリカ人？」

「そう」

ね？」

「間違いなく」

「ま、それなら上がってきて」

ブザーが鳴って表がはずされると、デュラントは分厚いガラスのドアを抜け、階段を登っていった。小さな踊り場に着くと、建物の正面と裏手に位置するフラットの玄関ドアがあった。メアリ・ティッカーの自宅は正面側だった。彼がノックすると、すっとドアが開けられ、二十代後半の痩せた――ガリガリというほどではない女が彼を招き入れた。真っ赤なウールのセーターにグレイのスラックス。真剣そうな表情。左手の指には火のついたタバコをはさんでいる。

髪型の目のきついまなざしは、近視のために目を細めていた結果なのかもしれない、とデュラントは推測した。明るい茶色の髪は豊かだったが、無造作といってもいいくらいに短く刈られていた。赤い鼻、血色の悪い大きな唇、えらの張った顔が地味な感じになるのをまぬがれさせている。彼女はデュラントを見上げなくてはならなかったが、女にしては背が高いほうだ。五フィート九インチか十インチといったところか。

「ティッカーに事？」デュラントは訊いた。

彼女はしばしげしげと彼を値踏みした。彼の頭から足元へおろしていった目をふたたび上げると、首を振って言った。「違うわ」

「しかし、メアリ・ティッカーに事だったことはあるね？」

「グディスン兄妹のことで話をしたいんだが」

「なぜ？」

二人が消えてしまった――

その瞬間、ティッカーの顔に幸せそうな――喜んでいるといってもいい――笑みが浮かび、手入れのいい歯がむき出しになった。その笑みも、浮かんだのと同様、すぐに消えていったが、その直前に表情がやわらぎ、目つきからもきつい感じがいくぶん薄らいだ。笑顔がすっかり消え、苦々しげな表情に戻ると、彼女は言った。「たぶん、あなたを入れて、そのおいしい話を聞かせてもらうのがいちばんいいようね」

言葉は険しく、ビデオデッキつきの大きなテレビを中

9

その住所は、バディントンの北端、シャーランド・ロードにある薬局の二階のフラットであることがわかった。天気がよければ、デュラントの自宅から歩いてこられる距離だ。タクシーの料金を払うと、彼は二つのドアベルの上に両鋲で留められたカードの名前を読んだ。それぞれ違ったボールペンを使って活字体で書かれている。左手の名前はジョイ・トマーリン。右手の名前はメアリ・ティノカー・デュラントは右のベルを押した。

ほどなく女の声が応えた。インターホンを通してなので金属的な響きになっている。「はい？」

「グディスン兄妹（きょうだい）ヒューズとポーリンの件で」

「興味ないわ」

「わたしの名前はデュラント。シェニー・アーリスの友人で、彼女からあなたの名前と住所を教わったんだが」

「[illegible]た」「この件で二十三号、わたしを

[illegible]ことがある。あなたの法廷が[illegible]場合には、さらに二十三号。

[illegible]して[illegible]ただきたい」

「[illegible]で、これ[illegible]とも[illegible]」と[illegible]は言った。

「[illegible]」

「二十三号[illegible]を[illegible]ると、[illegible]三百[illegible]になります。すなわち[illegible]。これまでわたしは[illegible]見[illegible]たことはない。この一件[illegible]それを[illegible]ます[illegible]。[illegible]には三[illegible]に[illegible][illegible]思[illegible]ことがいえます。この事で二十三号、二百[illegible]に二十三号を[illegible]いましょう。そして、わたしは[illegible]すなわち、あなたたちは[illegible]の二十三号を手に入れる。わたしが[illegible]に[illegible]場合には、三十[illegible]でも[illegible]になる。[illegible]ただし、[illegible]しても[illegible]ボン[illegible]金です[illegible]の[illegible]までです。[illegible]」

「[illegible]」

「[illegible]ス[illegible]いいます」とチェ[illegible]ンは[illegible]

[illegible]

ジョニー・ファ[illegible]スに[illegible]た。[illegible]

[illegible]わたしは[illegible]ニ[illegible]に[illegible]のです[illegible]

[illegible]に[illegible]した。[illegible]

ファ[illegible]ス[illegible]に[illegible]を言[illegible]した。「それなら、わた[illegible]のです[illegible]、あなたに[illegible]ン[illegible]に言[illegible]して[illegible]の

[illegible]

ファ[illegible]はあなたに[illegible]を[illegible]させると、[illegible]言って[illegible]

ニ[illegible]を[illegible]って[illegible]、ファ[illegible]スに[illegible]を[illegible]た。

「とつきの[illegible]の[illegible]だ」チェ[illegible]ンに[illegible]ファ[illegible]スに言った。「[illegible]の[illegible]できるはずだ」

ファ[illegible]スは[illegible]のボ[illegible]ンをたた[illegible]てその言[illegible]た。

なぜ[illegible]したいのだろう。

[illegible]ス[illegible]ン[illegible]に[illegible]して[illegible]な言[illegible]を言っている[illegible]もしれない」

「[illegible]、[illegible]したのかいと言[illegible]」

「そうなんだ」

ジョニー・ファ[illegible]スは[illegible]な[illegible]えたおれた、言い直して、

[illegible]

[illegible]、[illegible]を[illegible]と、チェ[illegible]ンに[illegible]して言った。

言い続けることもできますが、〝かもしれない〟というのは回答ではない、違いますかな？」

「もし恐喝だとしたら」とウー。「金を払うのは――あなたですか、それともギャンブル？」

「わたしです」

「あなたはそれを回避することもできる」デュラントがいった。

「たしかに」グリムは認めた。「しかし、その噂が広まる、違いますか？　すると、わたしは顧客をすべて失い、残りの人生をあくせくと働かなくてはならない。さもないと、百万ドルの借金さえ返済できないわけですな。て、あくせく働いていないときには、アイオー・ギャンブルがわたしに求めている、一千万だか一千五百万ドルだかの損害賠償請求を回避できないものかと、弁護士たちと話し合うことになる。そんなことはしたくはない、だからこそ、あなたがたを雇おうとしているわけですな」

「グディスン兄妹を捜しだすために」とウー。

グリムはうなずいた。「生きていようと、死んでいようと、あるいはその中間の状態であろうと」

「ハワード・モットはどう考えている？」デュラントが訊いた。

「彼がどう考えているかは問題ではありませんな」とグリム。「問題は、このわたしがどう考えているかということ。モットはギャンブルの弁護士であり、彼女が無罪だと考えることで金をもらっている。わたしは、彼女が無罪か有罪かには関心がない。わたしの関心事は、グディスン兄妹を捜しだすこと。わたしにとっては、憶測をめぐらす時間は終わったということですな。あなたがたにカリフォルニアに飛んでもらい、あの二人を見つけだすか、もしくはその身に何が起こったのかを探りだしていただきたい。そうしてもらえれば、わたしのほうでも損失を少なくすることができるかもしれない」

「ということなら、金の話に入りましょうか」ウーが提案した。

「どうぞ。うかがいましょう」

「必要経費は全額払っていただく」

「明細書に記載があるかぎり」

「記載されるものもあれば、記載されないものもでてくる」

グリムはウーの主張を思案していたが、やがて、うなずいて言った。「そこまでのところは結構」

「われわれの報酬は七十五万、結果のいかんにかかわら

デュラントがさえぎった。「〝保証する〟とはどういうことかな？」

「つまり、グディスン兄妹のせいで、アイオニ・ギャンブルがこうむる損失はすべてわれわれが賠償するという[illegible]大金になる可能性もある」そこで言葉を切り、じっとウ[illegible]

[illegible]を見やって言った。「報酬に関する話でしたな」

[illegible]て、ポーリンと一緒にロサンジェルスに飛び、報酬十万ドル、プラス必要経費ということで、アイオニ・ギャン[illegible]

[illegible]の翌日出発したのです」

「それで、どういったことに？」ウーはうながした。

「一週間後、ミスタ・モットから連絡があり、グディスン兄妹は、三度、アイオニ・ギャンブルに催眠術をかけ[illegible]中の二時にミスタ・モットに電話をかけてきて、深刻な問題が生じたが、電話では話し合えないと言った。ミスタ・モットは、二人に落ち着くように、すぐそちらへ行くからと伝えた。彼はサンタモニカ・ホテルに、二人はベル・エア・ホテルに泊まってました。両ホテル間の移動にはふつう二十分か二十五分かかると思うのですが、ミスタ・モットは二十分とかからずに行き着いたそうです。ところが、グディスン兄妹はすでに姿を消していた」

「その後二人からの連絡は？」ウーは尋ねた。

「一度兄のほうからモットに電話があったが」グリムが答えた。「わけのわからないことを口走っていただけ、ということですな」

[illegible]

「？」デュラントが訊いた。

「まさしく」とグリム。

「それを証拠立てる事実は何もない」ウーが言った。

「まだいまのところは」とグリムは言って、「こういうことですな」と続けた。「二人は恐喝者かもしれないし、そうではないかもしれない。あるいは、二人は誘拐され、[illegible]

ウーはデュラントに目をやってから答えた。「実際に会ったことはないと思うが、違ったかな？」

「いや」とデュラント。「会ってはいない」

「しかし、それが誰だかはご存じですな？」グリムが重ねて訊いた。

ウーはうなずいた。

「ま、モットとわたしは以前にもビジネスをしたことがあるので、彼から連絡を受けてもそれほど意外ではありませんでした。わたしはフランクフルトに、彼はロサンジェルスにいました。正確にはサンタモニカですな。モットはアイオニ・ギャンブルの権利を代行していると言い、ヒューズとポーリン・グディスンのことを教えてほしいという話でした。それでわたしは、ロントンのジェニーに連絡を取るように――あるいは、彼女から連絡させよう――と言ったのです。急いでいるということなので、彼女の電話番号を教えてやり、モットは彼女に連絡しました。そのあとのいきさつは、ジェニーが話してくれるでしょう」

ウーとデュラントはジェニー・アーリスに目を移した。彼女はまずウーを見つめ、続いてデュラントに視線を移してから、話しはじめた。「電話をかけてきたミスタ・モットは、ご十分かそこら、グディスン兄妹に関してあれこれと問いただしました。わたしは、連絡すべき何カ所かの電話番号を――ロントン警視庁内の連絡先もいくつか含めて――教えてやりました。二時間後、彼は電話をかけ直してきて、アイオニ・ギャンブルの記憶を取り戻すために、グディスン兄妹を雇うか予約したいと言った。わたしが好奇心をひかれたのは、南カリフォルニアは有名無名のあらゆる種類の催眠療法医であふれているというのに、なぜあの二人を選ぶのかということでした。それで、ミスタ・モットに尋ねてみた」

「彼の答えは？」とデュラント。

アーリスは、アグネス・ウーとふた組の双子の肖像画をしばらく見つめていたが、やがてデュラントに視線を戻して言った。「ミスタ・モットは、口の固いことが保証されている催眠術師を――この場合は二人ともに雇いたかったのね。それで、グディスン兄妹の口の固さとか沈黙を守るといったことを、ヘルノ！が保証してくれるのだろうかと尋ねてきた。もちろんです、とわたしは答えた。わたくしどもの専門家はすべて口が固いと保証しますと。そのあと、わたしたちは報酬を決めて――」

らかですが。レイプされ、ショックで記憶を失った七歳の女の子に催眠術をかけてみる気はあるかと尋ねてみると、今度はポーリンが、二人ともこれまでそうした経験[illegible]けたいと認めたが、自分たちにできる[illegible]警察に協力したいということでした」

「刑部と話を[illegible]

[illegible]

「わたしは刑部が好きではありません」デュラントは言って、肩をす[illegible]

彼女はエヴィアンをもうひとくち飲んだ。「女刑事とし[illegible]いました。[illegible]

[illegible]

[illegible]結論になった[illegible]

[illegible]

てたが」デュラントが言った。

「たしかに」とアーリス。「でも、それはみな男性の警官なのよ。とにかく、ポーリンが[illegible]女の子に催眠術をかけたところ、子供は言葉も記憶も取り戻し、すぐに[illegible]して名指ししたのよ」

[illegible]

「それからどうなった？」デュラントがうながした。

[illegible]か、[illegible]わからないようですけど、わたしはずっとヒューズを疑ってます。大衆ゴシップ紙がこぞって、[illegible]にタイミングを合わせて[illegible]

[illegible]催眠状態の[illegible]

[illegible]

そこなど、ニッケンには[illegible]ず、[illegible]んでいました。ふたりは、ほかの[illegible]ニック[illegible]と十[illegible]、十三六[illegible]

[illegible]

ニーズとボーリンは自己[illegible]に長けていたのです。二人であなたの役目にとんだ実験つき[illegible]をしなおしては、それを十三件だけに限るという[illegible]なことをし、[illegible]るいは毎日[illegible]するグループを[illegible]のグループには毎[illegible]で[illegible]しました。[illegible]をふんだんに[illegible]のた[illegible]目を　そういうはび方でいいのだと思いますが、[illegible]次と[illegible]して、[illegible]もおおぜい参加させた。ボーリンは、[illegible]にかかりやすい[illegible]を選びだすのが[illegible]った

[illegible]

「まさしく[illegible]、ですなあ」とグリム。

「しかし、これまでのところはちんけな三流芸人だが」デュラントが[illegible]を述べた。

「もうしばらくお待ちを」

「絶妙の[illegible]が二人の戸口をノックした、というか、[illegible]しくたたいたのです」アーリスが続けた。「それは、ヘビースモーカーのある女性の[illegible]が、[illegible]を対象と[illegible]会だったかは覚えてませんが」

[illegible]

「その女[illegible]はメディスン兄弟の[illegible]に入会し、タバコをやめさせられなかったら[illegible]する、というような[illegible]を言いました。でも、[illegible]を二[illegible]けただけで、彼女は[illegible]にタバコをやめられた、おそらくは永遠に」

「"おそらく"というのは？」ウーが尋ねた。

「この数十[illegible]、彼女に会っていないからです。メディスン兄弟に出会ったとき、彼女はあるレイプ事件に取り組んでいました。[illegible]は七歳の女の子で、[illegible]がショックのために記憶喪失におちいり、誰にレイプされたのかを話せなかった、あるいは、どうしても話そうとしなかった。女[illegible]は[illegible]のネット[illegible]いはじめていたのですが」

アーリスはエヴィアンを注ぐと、ひと口飲んでから続けた。「女[illegible]とメディスン兄弟は、そのころすでに親しくなっていました。そこで彼女は、これまで子供を扱った経験は多くあるのかと二人に尋ねてみた。すると、子供というのは、しばしば、実に暗示しやすい被験者だという話だった　質問への答えになっていないのは[illegible]

「そのパーティで」アーリスが続けた。「あるアマチュアの催眠術師が客たちを催眠状態におちいらせて、いろいろとばかけたことをさせたのです。犬のように吠えさせたり、雄鶏やら猫の鳴き声をまねさせたりといった、害のないばかばかしいことを」

「それが二人を夢中にさせた？」デュラントが訊いた。

「もちろん違うわ。二人が魅せられたのは、自分たちが実に感応しやすい被験者だったということ。そのアマチュアの催眠術師にも、これほど感応しやすい人間を扱ったのははじめてだと言われたほどに」

「催眠術にかかりたくないと思っている人間をかけるわけにはいかんのですな」グリムがウーを見ながら言った。彼がまたメモをとるのを期待しているようだ。

しかたなく、ウーはもうひとつ心覚えをメモした。

ヘマニラのブースに連絡〉。

兄妹は催眠術との出合いに非常に興味をそそられ、ヒューズ・グディスンがそれに関する本を買ってきた、とジェニー・アーリスは話した。「それは、『催眠術で友だちを驚かそう』とかいう過度に単純化した通俗書でした。二人はまずたがいにかけ合って練習してから、親しい友人たちにかけてみたところ、面白いほどうまくいくことがわかった。そこで、催眠術の講習会にも申し込み、大家といわれる人たちの本も読みはじめた。たとえば、そう、エスタブルックがそのひとり、それから、ムーディ、ジラ、フロム、それに、えーと、ショー」

「なかなかの記憶力ですな？」グリムが言った。

「驚くべき」とデュラント。

兄妹で講習会に通いはじめた直後――アーリスの話は続いた――ヒューズは、妹とともに催眠術師の資格を手に入れる方法を調べてみた。すると、必要とされる条件は驚くほどゆるやかなものであることがわかった。催眠術学校の授業は四十時間だけだし――そのあと指導員のついた実習が十六時間――夜間クラスを受講することもできる、そうして全課程を終えれば、資格のある催眠術師として開業できるとわかった。

「それで、二人はまさしくそのとおりのことをしたのです」とアーリスは言った。

「二人の打ちだした新機軸を説明してやってくれんかね」グリムがうながした。

彼女はうなずいた。「そうですね。二人の新機軸――ミスタ・グリムの言葉を借りれば――それは、減量および禁煙のクリニックを開いたことです。ただし、二人は

行方不明になった二人のイギリス人催眠術師です」

短い沈黙が訪れた。その間、ウーとデュラントはたがいの目を見つめていた。

ずき、笑みをみせて言った。「そういったことならうまく対処できるはずですな」

8

ニューヨーク・アーガス紙の記事では、行方不明になっている二人の催眠術師、ヒューズ・グディスン三十二歳とその妹のポーリン二十七歳は、ふとしたきっかけで催眠術師の仕事に入ったということだった。

二人が催眠術に夢中になりはじめたのは、ある飲み会でのことでした」アーリスの説明が続いた。「そのとき、ヒューズは二十五歳で簿記係、五歳年下のポーリンは事務員兼タイピスト。二人は、両親の残したハマースミスのフラットで一緒に暮らしていた。両親は、その前年、マルタ島での休暇中に中毒死したのです」

「ボツリヌス中毒ですな」とグリム。「誰かがミルクを沸騰し忘れた」

アーティ・ウーがメモ帳にゆっくりと書きつけたが、それは〈葉巻〉という一語だった。

グリムはビールをグラスに注ぎ、ひと口飲んでから続けた。「わたしの母は戦後メイドをしていたのです。何人かのアメリカ陸軍将校、のちには軍属のための住み込みの家政婦。わたしはGIやバイリンガルたちに囲まれて育った。父親は、アメリカ陸軍の大尉か中尉、あるいは二等軍曹だったかもしれない。母にもはっきり突きとめられなかった。わたしが四六年の終わりに生まれたとき、母は二十歳で、父親候補たちはみな合衆国に帰ってしまっていたのですよ」

「父親を突きとめようとしたことは？」ウーが尋ねた。

「何のために？」

「好奇心」

「わたしはそれほど好奇心が強くないのです。一九四六年というのは、念のために申し添えておくと、われわれドイツ野郎にとっては苦難の年だったし、飢え死にをまぬがれるために、母はどんな仕事でもしなくてはならなかった。その〝どんな仕事でも〟に、アメリカ人たちとの親密交際が含まれていなかったら、わたしたちは餓死していたかもしれない。母はいま六十五歳で、ハンプルクに住んでいますが、冬はスペインかフロリダで暮らしている。二年前にはハワイに行ってみて、そこも気に入ったようですな。といったところがこのわたし、成り金のエンノ・グリム」そこで、またすばやくウーに顔を向けて訊いた。「あなたは中国皇帝位の継承権主張者だというふざけた噂を聞いてますが、どういうことです？」

ウーが答える前に、ジェニー・アーリスが言った。

「ミスタ・ウーは、実際、中国皇帝位を要求できる詳細な文書を――真偽のほどはわからないにしても――所有しているそうです」

いぜんとしてウーを見つめたまま、グリムは言った。

「中国は今後もう二度と皇帝を持たんでしょうな」

希望を捨てずにいるしかない」とウー。

ファクトが身を乗りだし、テーブルに肘をつくと、グリムに目を向けた。「オーケイ、われわれにしてほしいことを話してもらいたい。こっちはそれができるかどうかお答えする。無理だとわかれば、四人で最後に一杯飲んでお別れということになる」

グリムはジェニー・アーリスを見て言った。「きみから話してくれ」

彼女はしばらく眉をひそめ、どう切りだしたものかとでもいうように考えていたが、やがて言った。「あなたがたに捜したしていただきたいのは、カリフォルニアで

明不足ですからな。とりわ
ご仕事をしているのであれ

「会社名の発音間違いはお許し願いたい。
自己紹介

「英語をどこで学んだのか尋ねても、気にさわりませんかね？」ウーが訊いた。

「ちょっと待った。まず、仕事の説明をうかがいたいですな」

「ユーデュー有限会社は」ウーはゆっくりと言った。
ご存じのとおり、他人の自分たちの手ではできないことを代行する」

「料金をとって」とグリム

「もちろん、料金をとって」

「すると、いまいましい料金さえなければ、あなたがたは聖者を自称することもできる」

「しかし、われわれは手数料をとるのであるから」ウーは笑顔をみせて言った。「利他主義を仕事にしていると考えたらいかがです？」

「そうしてみますか」とグリムは答え、ひと呼吸おいてから言った。「わたしがアメリカ英語をどこで学んだかお聞きでしたな？　フランクフルト、まさにその地で。アメリカ軍基地の巨大な購買部からさして遠くないところ、I・G・ファルベン（ドイツ最大の化学工業コンツェルン）の建物から手の届く距離、中途の階には停まらないあのおかしなエレヴェーターのある建物ですな。あなたがたの陸軍航空隊が爆撃し忘れた場所だが、その理由に立ち入る必要はありますまい。古い歴史の話ですからな」

「大昔の」とデュラント。

ているのに満足すると、ミス・ヘイズリットはそっとドアを閉め、自分のデスクに戻って坐り、一九三〇年代、ショーンア周サヴァナに住む中年介護士の失恋物語を手に取った。

それぞれの名札の後ろには、エヴィアン水とドルトムンダー・ビールの瓶、それにグラスが二個ずつ置かれていた。お茶のカップは必要ならのちほど出されるはずだった。名札の右側には灰皿――ただし、タバコをやめたクライアントの席にはなし――楊門用のライターがおかれたために使われることのない緑色のラシャ地は、ミス・ヘイズリットが最初に買った備品のひとつである。各席に筆箱のない(中略)筆が置かれていた。

自分の名札があるのを見つけたアーリスは、驚いたというより、面白がっているような表情をみせた。彼女はデュラントを見上げ、ほほ笑んで尋ねた。「わたしがヘヘルプ!〉にいると、いつから知ってたの?」

「きみにテート・ギャラリーで引っかけられた翌日から。今度謎の女を演じるときは、本名を使わないことだ」

「わたし、嘘はかなりうまいとずっと思ってたのに」

「うまいもんだよ」とデュラント。

アーリスとデュラントのやりとりを聞き流したあと、明らかにいらついた様子で、エンノ・グリムがウーを振り返って言った。「いいかげんにして席に着き、話をはじめてはどうです?」

「もちろん」ウーは自分の椅子を引きだし、三人が坐るのを待っていた。全員が腰をおろすと、ウーの右側にグリム、右側にアーリス。アーリスにほほ笑みかけてから、グリムのほうを向いて言った。「あなたの問題を話していただき、それに対してできるとすればわれわれに何ができるかを話すというのでどうでしょう」

あなたがたに何かできないというのであれば、ここにすわってはいませんな」

「過大評価してもらっても困るが」デュラントが言った。

「いいですな」とグリム。「わたしの仕事は、金であれ決して過大評価しないことでしてな。しかし、わたしのことをやわらしい探偵と間違えている向きには、おこと人にうかがってみたいことがあります」

「あなたがたは自分たちをどう定義します? つまり、

7

約束の午後二時にエンノ・グリムがやってきたとき、ジェニー・アーリスが一緒だったが、ウーもデュラントも驚いた様子を見せなかった。

デュラントはウーに、「ジェニーにはもう会ったわけだ」とだけ言って、グリムを紹介した。彼らは、グリムが〝かなり小さな待合室〟と呼んだ部屋に立っていた。紹介がすむと、ウーがあとを引き取り、全員をオフィスに請じ入れて、クルミ材の厚板でできた長さ七フィートの楕円形のテーブルに案内した。デスクとしても、ときには会議用としても使われているテーブルである。

テーブルには四枚の小さなカードがテントのように立てられ、ウーデュー社の事務長、受付係、秘書、帳簿係、接待主任を兼任している、ミス・ベル・ヘイズリットの美しい手書きでそれぞれの名前が記されていた。ミス・ヘイズリットは――三年前に雇われたとき、彼女はそう呼ばれることを求めた――エンノ・グリムの想像とは異なり、小柄でもかわいくもなかったが、しゃれた服を着た整った顔だちの六十六歳の婦人だった。外務省で三十五年間、曖昧な、もしくは秘密めいた仕事をしていた女性で、六十二歳で退職したのだが、そのうちに退屈しはじめた。そこで、《ロンドン・タイムズ》に載った〝柔軟な完全主義者〟――アーティ・ウーの考えた言いまわしだ――を求めるという匿名広告に応募したところ、面接に入って五分で採用が決まったのだった。

ミス・ヘイズリットは、必要とあらば、連日十二時間の労働も楽しそうにこなしたし、ウーとデュラントの出張中には、何日でも――あるいは何週間でも――やはり楽しそうに何も仕事をしないでいた。暇な時間はアメリカの小説を読んですごす彼女は、とりわけ高温多湿の深南部を舞台にした作品がお気に入りだった。ウーデュー有限会社が資金繰りに窮して給料を払えないときには自宅に待機していて、新たな資金が間違いなく銀行に入ったとウーかデュラントから連絡があると、仕事に戻ってくるのだった。

広いオフィス内のあらゆるものがあるべき場所に収ま

てるかな？」そう尋ねたデュラントの声は、ふたたび穏やかでやさしい感じに、愛するに不吉なものになっていた。「おれたちはあの香港のフェリーの上にいる。彼女は拳銃を両手で握り、秘密検察局員独特の腰を落とした構えで、銃口をまっすぐおれに向けてる。一秒とたたないうちに、この女は引き金を引いて、おれを吹っ飛ばすだろう。それがおれの記憶にあるジョージアだ――彼女のことを思い出すときには、ということだが」

ウーはうなずき、また煙の輪を吐きだしたが、何も言わなかった。

「オーケイ」デュラントはふたたび声に戻って言った。「彼女を雇った。だが、あの女を信用しろなどとは言わないでくれ、絶対に」

さらに二度むっつりとうなずいたあと、ウーは明るい調子で言った。「彼女をブース・ストーリングズと組ませてはどうだろう？」

「彼はいまでもまだジョージアにのぼせてる？」

「アザガイにその点を訊いてみたところ、ゆうべ、列車に乗る直前、アンマンの彼から連絡があって、ブースの伝言というのを伝えてきた。それは、〝アーティには、ばか野郎、よけいなお世話だ、と伝えておいてくれ〟というものだった」

「いまだにのぼせてるわけだ」デュラントは呟いた。

後、やつが双子に連絡してき

得てたからだ。やつは割り込んできたんだ」

ういったものか、わたしは完璧に理解している」

「そうだな」デュラントは認めた。「すると、おれたちがグリムの仕事を引き受けなかったら、アザガイ商会は

「われわれは引き受けねばならない」そこでひと呼吸おいてから、ウーはつけくわえた。「それはきみにもよくわかっているはずだが？」

しばらく間があってから、デュラントはうなずいた。

「オーケイ。アザガイと一緒に仕事しながら、同時にやつを見張ることもできる。ストーリングズはつねにある種の雰囲気をかもしだしてくれる。だが、ジョージアにおれのことを納得させるのはあんたの仕事だ」

「できるかどうかわからんが」とウー。「二、三週間前、彼女から手紙が来た。ルソン島の女子刑務所から釈放されるそうだ」

「マンダルヨンにあるやつだな」とデュラントは言い、尋ねた。「いつ？」

サンフランシスコで投函されていた。ジョージアの話では、アキノの反対派と取り引きしたということだ。おれが八六年にしたことをなぞって、九〇年の選挙でもまたそれがアキノ陣営を悩ませる可能性があるらしい――釈放されるよう手をまわしてやるということで合意した」

「政治的な爆弾」

ウーはうなずいた。「ジョージアはいろいろな品をでっち上げたのだと思う――とにかく、確実に釈放されるように。手紙では、仕事やらコネを尋ねていた。社会復帰に役立つものを」そこでひと呼吸おく。「返事は出さなかったが」

「その代わり、彼女を雇い、その吉報をたずさえたブースをマニラに送った」

ウーは葉巻を見つめながら言った。「結局、わたしは贖い（あがな）を信じているのだろう。あるいは、信じたいと思っている」

「おれの記憶にあるジョージアがどういったものか知っ

アーティ・ウーはゆらめく煙の輪を左手に吐きだした。

「アザガイとは話をしただけではない、彼を雇った十四歳のとき、サンフランシスコのメソンスト派の孤児院を一緒に逃げだして以来パートナーを組んでいるウーは、デュラントの怒りの兆候をたやすく読みとることができた。まず、デュラントはじっと静止したようになる。やがて唇がぐっと引かれ、冷酷な一本線のようになる。その時点ではすでに目が細められていて、よく見ると、褪せることのない陽焼けをまとった顔から、わずかに血の気の失せているのがわかる。しかし、怒りが端的に現われるのはその声だった。穏やかでやさしく、ほとんどなだめすかすような調子になるのだ。まさしくそういった調子でデュラントが尋ねた。「何だってそんなばかなまねをしたのか、教えてもらいたいもんだな、アーティ？」

ウーはまず溜め息をつき、それから答えた。「家族の平安を保つため、アザガイは、アンカスとアーサーに連絡してきて、夏休みにクウェートで仕事をしないかと誘った。ひとり月二千ドル。アグネスは――ま、息子たちをアザガイに預けるよりは、銀行強盗でもさせたほうがましだという考えだ。わたしは二人に、行ってはだめだと言うこともできたが、そうしていたら、あいつらは寄宿舎を飛びだし、いまごろはアンマンまで残り半分といった地点にいることだろう」

「双子を独房に閉じ込めるのを手伝ってやってもよかったんだが」

「アザガイをこちらにおびき寄せるのがいちばんいい、とわたしは考えた。そうするためには、あいつがクウェートとヨルダンで何をしているのかは知らないが、それをあきらめさせるものを提供する必要があった」

デュラントの声はさらに穏やかになった。「やつは何もしてやしない、それはあんたにもわかってるはずだ」

「かもしれない」とウー。「とにかく、われわれはうまみのある新たな仕事を引き受けたところだと伝えて、彼だけでなく、フース・ストーリングズと、それにこの点は我慢してほしい、クインシイ――ジョージア・ブルーも必要だと言っておいた」

デュラントはあきらめる潮時を心得ていた。シマウマ模様の椅子の背にもたれかかった彼は、ウーの頭上のあたりを凝視していた。やがて口を開いたとき、声には無関心の響きが入りこんでいた。「アザガイのことを思い違えてるのでなければ――ま、そんなことは絶対ありえ

ロープロブノクス　　一万五千ほどの専門
　　なくとも二ダースの国
際企業からたんまりとお抱え料が
ことだ」
「それほどの数の専門家をそろえてるのなら、なぜわれわれのところへ来る？」デュラントが訊いた。
「おそらく、われわれが最高だと聞いたのだろう」
「失踪した催眠術師を見つけだすのに？」
　　
つけだしたいのか、あるいはなぜ彼らが失踪したのか、
「そうしたことは、きょうの二時に会ったときに話すと、うことだった」
「ほかに彼の言ったことは？」
　　その仕事を引き受けようと断わろうと、あの二万五千ポンドはわれわれのものだということくらいだな」
　デュラントは、アーティ・ウーが驚きを隠そうとしているのを楽しんで見つめていた。そんな機会はめったにないので、ウーが思慮深げに小さくうなずき、賢そうな軽い笑みをみせると、彼は思わずにやついた。ようやく、ウーが言った。「ほかに知っておくべきことは？」
「グリムというのは徹底してる。きのうオフィスに入ってれとあんたに関する報告をジェニー・アーリスから受けしてた。マニラのエルメネヒルド・クルスとか――いまでは警部だそうだ――アンマンのオヴァビイに問い合わ尋ねてみると、やつはプース・ストーリングズと一緒に、フセイン国王の個人用保安システムを点検中ということだった」
「グリムは、ベルリンの伯爵にもわれわれのことを問い合わせていた」
「フォン・ラフーゼンに？」
「われわれの知り合いに伯爵が何人いる？　そのついでアザガイに連絡したわけだ」
　デュラントの左の眉が持ち上がった。その怪訝そうな表情は声の調子にぴったり合っていた。「あんたもアザガイと話をした？」

という名で、やはり最後に感嘆符がつく。実のところ、その〈同志!〉がグリムに〈ヘルプ!〉のアイデアを与えた」

「〈同志!〉というのは？」

「外国人嫌いの連中の面倒をみるパック旅行業。グリムが前提とした考えは――いまでもそう考えているわけだが――休暇で外国に出かける人間の大多数は、家族もしくは友人、それがためなら、できるかぎり自分と同じような連中と一緒に行きたがるというものだ。一九七四年、グリムはホーイック商会を借りると、[illegible]たかもしれないが――フランクフルト郊外、ヘーヒストにある化学工場のうきうきした労働者たちを満載して、コスタ・デル・ソルに向かって飛ばせた。二週間のその休暇旅行の費用は、イタリアのアドリア海沿岸ですごす場合の半額だった。〈同志!〉が生まれたのは、フランコ統治下のスペインの海岸ということになる」

「その後は？」

「その後、〈同志!〉は高級化した。一般労働者の客も忘れはしなかったが、一方で、専門職に就く連中の面倒もみはじめた。同国人と一緒で、国内にいるのと同じ快適さをすべて与えられ、しかも経費で落とせるかもしれないなら、三週間の休暇を、たとえば、ボルネオで楽しもうといった連中だな。そこでグリムは、彼らを職業によって、公認会計士、医者、弁護士、株式仲買人、エンジニア等々のグループに分割した」

「グリムが〈ヘルプ!〉のアイデアをどこから得たのか、まだ話してないが」

「気むずかしい専門職の連中を募集しているうちに、グリムは、当初の予想とは異なった種類の人間が少なからずいるのに気づいた。単独行動の好きな、たいていは不満を抱えた連中、パック旅行に行くくらいなら死んだほうがましたという連中だ。そうした変わり者の多くがグリムに語ったところでは、正当な報酬をもらえるのであれば、どこか遠くのエキゾチックな土地に、三週間、一カ月、あるいは二、三カ月であっても、雇われていってもかまわないということだった。その時点で、グリムは〈ヘルプ!〉を設立した」

単色が消えているのに気づき、ウーは話をやめた。ふたたび火をつけると、煙を右手、デュラントからは離れたほうに吹きだして、続けた。「〈ヘルプ!〉は、依頼さえ受ければ、ヘーヒストにバレエの振付師を、マレーンアにリート歌手を派遣することもできる――すべて臨時

がなかった。そのあとで数日電話をかけてわかったのは、彼女は〈ヘルプ！〉に出向してるということだった。

H E L P に協賛記事だか広告だかがつく。その門外漢は、技術的な証明の仕事に、高度な技術を備えた専門家を即座に世界中どこにでも派遣すること。おそろしく高額な報酬で、ひと月かぶた月――もっと短いこ

[redacted]

要なら……ほかにも頭韻を踏んだ男があがってたが〈ヘルプ！〉にご連絡を――

「ウルグアイで泌尿器学者」とウー。

「まさしく。決して小さな会社ではない。英語で〈ヘルプ！〉、ドイツ語で〈ヒルフェ！〉、フランス語で〈オ・

[redacted]

ン語だけは感嘆記号が二つつく、最初のやつはひっくり返ってるが」

「合衆国にもあると思うが」

デュラントはうなずいた。「カナダ、シンガポール、香港、日本、オーストラリアにも」

「われらがジェニーは〈ヘルプ！〉で何をしている？」

「高額報酬設――」

「イギリスの」

「それはそれは――

――おれの示した反応と同じだな」とデュラント。

内ポケットから葉巻を取りだしたウーは、それを目の前にかざして検分していたが、やがて、むっつりした顔に皮肉そうな表情を浮かべて言った。「きのう聞いたばかりの話だが、〈ヘルプ！〉の国際司令部はフランクフ

[redacted]

した役割を一身に兼ね備えているのが、誰あろうわれわ

[redacted]

のうわれわれを破産から救ってくれた男だ」

[redacted]「サー・ダンカンと話をした、そうじゃないか？」

「話をしたのはアグネスだが」

「ダンカンは何と言ってる？」

「あのグリムは大金を持っていると。とてつもない大金

[redacted]

プ！〉を設立したのは、同様に儲けの大きいもうひとつの会社を設立したあとということだ。それは〈同志！〉

プラスチック製の石炭の塊りが積まれていた。そのそばには、ノウサギの毛皮――もしくはそれに類似した何かを張ったおそろいの箱型の安楽椅子が二つ置かれている。椅子から楽に手が届くところにある、クロムとガラスと黒檀製の磨きぬかれたキャビネットには酒瓶が並び、扉をあけると、アイラ・ガーシュイン作詞、ウォーノン・デューク作曲の〈きみには燃えない〉の最初の数小節が流れるようになっていた。

壁面には、一九二〇、三〇年代のパリ、ニューヨーク、ロンドン、ローマを写したポスター大の白黒の芸術写真が掛かっている。壁紙はさまざまな大きさと色合いの欧色の縞模様。おそろしく長いハバナ色のクッションのかたまりには、一九三八年製のラジオがあった。戦時中は、どこかの家族がそのまわりに集まり、サハラ砂漠での対ロンメル戦の進行状況を知ろうとしたのかもしれない。

この居間はだじゃれのジョークを二度聞かされるようで少々気が滅入る、というのがウーの感想だったが、デュラントはもう気にならなくなったと言っていた。

対になった安楽椅子に向かい合って坐った二人は、居間からは姿の見えないシェニー・アーリスが玄関ドアを出ていくのを待っていた。カチリと軽い音がし、パタンとドアが閉まると、アーティ・ウーが尋ねた。「どこで彼女を見つけた？」

デュラントは暖炉のにせの火を見つめた。正確な時と場所がそこに落ちているとでもいうかのようだ。「二週間前の日曜日、テート・ギャラリー、ターナーの絵の前」と答え、ウーに目を向けた。「ターナーのどの絵かは覚えてないが」

ウーはお茶を飲み終え、カップを置くと、腹の上で両手の指を組み合わせて微笑した。いつにも増して温和な表情になる。申し分のない一日を終えた仏陀のようだ、とデュラントは思った。

「二週間前の日曜日というのは人気が悪かったな」とウー。「なぜか降っていた、と記憶しているが」

おれが美術館に行くのは人気の悪いときなんだ。すいてるから。それに、そうした日に来てる女たちはふだんより近づきやすい」

「つまり、孤独だから」

「そうかな？」

「シェニー・アーリスは何をしている？」

「本人はＢＢＣの研究員だと言ってる」デュラントは説

いない。女は冷たい目で長いことウーを見つめてから口った。「こんな調子くから外まわりに出るには、ちょっと大物すぎるみたいだけど」

[illegible]

酒りを精一杯まねて、ウーはうなるように言った。

「どうやらウーデュー社のウーのようね」女が応じた。

「としたら、二人とも捕えてしまわないうちに入ったら

[illegible]

「誰なんだ？」奥の壁の向こうからデュラントのくぐもった声が聞こえた。

「中国人の紳士」女は大声で言うと、狭い玄関から居間へとウーを導いていった。「あなたの膝を撃ち抜きたがってるわよ」

[illegible]

足を開いて立った女は、両のこぶしを左右の腰にあて、いぜんとして冷たいまなざしで挑むようにウーを見つめて[illegible]

「わたしはジェニー・アーリス、ひと晩の泊まり客」彼女が口った。「お茶は？」

[illegible]

なしで」

「純とコートをお好きなところにおろして」そう言うと、彼女はスイング・ドアを抜けてキッチンに姿を消した。

デュラントは生涯の多くをホテルで暮らしてきていた。それでウーは、アッシュワース・ロードのフラットも、どこかの古めかしいホテルの九階あたりにある、居心地[illegible]て、それに簡易キッチンをつけ足したようなもののはずだといつも考えてしまうのだが、実際の室内は、現代美[illegible]にきわめて近いものだった。

居間の家具調度類の九割は、デュラントが生まれる前に考案されたか製造されたものだった。それらはすべて[illegible]得られるならば人殺しもしかねない連中〟を知っているとさえ主張していた。

居間の暖炉には、電気のスイッチを入れると赤く輝く

6

英国国有鉄道でエディンバラからロンドンまでは五時間と喧伝されているが、実際には七時間かけて走ったアーティ・ウーは、午前七時四分、革の小型鞄をさげてヴィクトリア駅から出てきた。しかし、セント・ジョンズ・ウッドの借家にも、メイフェアにあるウーファー有限会社のオフィスにも行かず、タクシーに乗って、メイダ・ウェイルにあるデュランドの小さなアパートに向かった。

七〇年代のなかごろ、抜け目のない投機家がアッシュワース・ロードの大きな二階建ての古い建物を買い取って、内部をすっかり取り壊し、各階二つずつ〝豪華な〟――と施主が形容する――四つのフラットに仕切ったのだった。二階のフラットは内部の階段を共有する普通の構造だが、一階のフラットにはそれぞれ独立した入口がついていた。デュラントの自宅はその左側だった。

デュラントはそこに三年近く住んでいたが、ほかの借家人のことはほとんど知らず、一階の隣人、猫と小型犬専門の獣医をしている四十二歳の独身男にも、〝おはよう〟とか〝いい天気で〟と挨拶するだけだった。デュラントのフラットの上には五十がらみの夫婦者が住んでいたが、実にひっそりと暮らしているので、通りで出会っても、奥さんのほうが小男の旦那より六インチ背が高いということでしか見分けがつかなかった。獣医のフラットの上には、きれいなブロンドの女が一人で住んでいた。彼女に関してデュラントの知っている事実は、平日の毎朝八時二十五分きっかりにフラットを出て、ホルボン・アウェーにある地下鉄のメイダ・ウェイル駅のほうへ早足で通りの角を曲がっていく、ということだけだった。

アーティ・ウーは革鞄を手に取ると、料金を払ってタクシーをおりた。装飾をほどこした小さな鉄製の門を抜け、板石を敷いた短い通路をデュラントの戸口へと向かう。ベルを二度押し、四十一まで数えたところで、三十代の女がドアを開けた。デュラントの青いオクスフォードのシャツを着ていたが、ほかにはほとんど何もつけて

翌日の午後一時八分、ブース・ストーリングズはホテルの部屋のドアをノックする音で起こされた。ドアを開けると、オヴァビイが傲然とした足取りで入ってきた。いつにも増して自信にあふれている。

「いまアーティと話してきた」そう言うと、オヴァビイは部屋の奥の机に行き、ストーリングズのウィスキーを一杯注いだ。

「それで？」

「おれはあさってロンドンへ行く。あんたは、そう、マニラ行きの次の便に乗らなくちゃならない」

[redacted]

みもなかったので、心臓発作でないことはわかった。不安でもなければ、その厄介な片割れである恐怖でもない。どちらもよく知っていたし、こんな感じではないことも承知していた。しかし、それが何であれ、その訪れのない感情は心拍数を一気に毎分百三十近くに高めたし、鏡をなめているような妙な苦わいも生みだした。不快ではないが、飲み込むのが困難な苦わい。そこで不意に、それが何なのかに思い至った彼は、それにふさわしい唯一の名前を与えた――困惑な期待。

オヴァビイが異変察そうに見つめているのに気づくと、ストーリングズは息から大きく息を吸い込み、声が割れないように咳払いしてから言った。「マニラに何かあるのかね？」

「デビュー・パーティ」

「誰の？」

オヴァビイは例のあたたかくて抜け目のない笑みを浮かべた。「ジョージア・ブルー。彼女が出所してくる。で、アーティの話では、彼とデュラントは、おれとあんたと彼女を使えるってことだった」

「オーケイ」とストーリングズは言ったが、それ以上は言葉が出てきそうもなかった。

「アーティは、あんたがいまだにジョージアに、ま、のぼせてるのかどうか知りたがってた」とオヴァビイ。

「それで事情が変わるというんじゃなくて、たんなる好[redacted]が」

オヴァビイは待っていたが、ストーリングズが何も答えないので、あらためて尋ねた。「で、あいつには何と言ったらいいんだ？」

「アーティには、ばか野郎、よけいなお世話だ、と伝えておいてくれ」ブース・ストーリングズは言った。

笑顔〟というふうにいつも考えていた。

その笑みをほぼ残したまま、オヴァビイは続けた。

おれは坊やたちに、この仕事の件は家族と相談してみなくちゃだめだ、とりわけ母親のアグネスに、という条件を出しといた。だから、もういっぺんアーティが仕事を依頼してきてもおかしくない」

ストーリングズはゆっくりと頭を振った。そこのところが、どうにもわかっていけんのだよ、アリカイ」

簡単なことさ。あの双子は十七か十八歳だ。二人が家族にクウォート石を作ると言えば、アグネスは気も狂わんばかりになり、アーティに言う――とはいえ、いつもどおりの実に落ち着いた口調でだが――息子たちをひと夏、アザガイ・オヴァビイの手もとですごさせるわけには絶対にいかないと。みずからの命令を確かめるように言葉を切った彼は、満足そうにうなずいてから続けた。「もちろん、アーティの心の働きをよく心得てなければ、これは成功しないが」

「で、それはどう働くのかね？」聞き役に徹することにして、ストーリングズは訊いた。

「アーティは息子たちに、自分がその年ごろにしたかもしれないことをするなとは決して言わない。しかし、一方でアグネスも安心させとかなきゃならない。そこで、あの男のすることは、さまざまな断片を並べ替え、新たなパターンを作り上げることだ」

「あんたがその断片のひとつ？」

オヴァビイはうなずいた。「あんたもだ。アーティはおれを雇うことにするだろうが、そのときおれは、ストーリングズも取り引きの一部だと言うことにする。あいつは同意するだろう。そこでおれは双子に連絡し、クウォートの仕事は流れちまったが、たぶん来年の夏に何か一緒にやることにしようと言う。そうすれば、坊やたちの感情も傷つくことはないし、アグネスも満足するし、アーティはグリムとの取り引きで――それがどんなものであれ――信頼のおける男を二人雇えることになる」

ファース・ストーリングズはゆっくりと立ち上がると、感服の面持ちでオヴァビイを見おろした。そうして立ち、しばらく見つめたままでいた。「あんたのような頭の持ち主が現実に存在しているんだな、え？」

その内にちょっと考えをめぐらしてから、オヴァビイは答えた。「ああ、数は少ないがいまだに存在してるんだと思う」

あんたとわたしのように」

からずにあの百万ドルを手に入れて、香港から飛び立ったわけだが、それを十八カ月ほどで失くしちまったじゃないか。ま、その大半を。しばらくのあいだは、書類上、二百か三百万近くになっちゃいたが」

損をした？」

「それぞれ五十万ずつだと聞いてる」

「それで気分がよくなった。では、伯爵がグリム氏にした話に戻ってくれんか」

「ま、フォン・ラフーゼンは、アーティに関して――あの糞ったれデュラントに関しても――悪口を言うつもりはなかったので、せいぜい宣伝しといてやった。しかし、グリムはそれで満足せず、ほかに誰に尋ねたらいいのかを知りたがった。伯爵は、アンマンのホテルにいるおれに連絡するように言った。で、グリムが連絡してきた」

「それで？」

「グリムがアーティとデュラントのことを訊いてきたので、なんで知りたいのかと聞き返した。もちろんやつが理由を言うはずもないが、そうとうでかい話だと推測できた。そこでおれは、ウーとデュラントはその道では最高だと言っといた――もっとも、デュラントは卑劣なこともできる野郎だがと。それぞまさしく自分の捜していた連中だ、とグリムは言い、礼を述べて、電話を切った。で、おれは二、三分考えてから、エディンバラ郊外の学校にいるアーティの双子の息子、アーサーとアンガスに

んだが」

ありがとう」とストーリングズ。「では、なぜ二人に電話したのか話してくれんかね？」

「湾岸戦争が終わったら、夏休みにクウェート市で双子に仕事を提供するってことさ――USドルで月三千をそれぞれに払う」

「甘い誘惑だな」

そこでオヴァビイがストーリングズにみせた笑みは、冷たくて抜け目のない、残酷なものであってとうぜんだったが、実際には、あたたかみのある笑み、やさしいといってもいい、妙に満足感の感じられる笑みだった。ストーリングズはこれまでにもその笑顔を見たことがあり、〝ライオンをむさぼり食おうとしているキリスト教徒の

なかには合法的なものもある――に係わっている彼の職業は、腕のいい詐欺師であり、同業者たちからは一目置かれていた。

兎の話など何も知らないとオヴァビイが答えると、ストーリングズは悲しそうに頭を振って言った。「スタインベックの兎のことを知らないのなら、アーティ・ウーからの仕事の依頼を、もういつ実現してもおかしくない、あの素敵な仕事の話をもう一度してくれんか」

「なんでもう一度聞きたがる？」

「安心するためだ」

オヴァビイはうんざりした口調になって言った。「オーケイ。先週このバーで、フォン・ラフーゼン伯爵に出くわしたときのことは覚えてるかな？」

「あのフォン・ラフーゼン伯爵とのひと夜は忘れようにも忘れられない」

「ま、彼は数日いたわけだが。東ドイツに――旧東ドイツってことになるが――二カ月滞在して、先祖伝来の土地の返還を求めようとしたら、〝くたばっちまいな、伯爵〟と言われたとしたら、あんたどうする？」

「その悲しい話を三度繰り返したところで、病床に伏しただろう」

「そうして、おいしいものを失った」とオヴァビイ。

「それはともかく、おれと伯爵とアーティとデュラントとは年来の知り合いだし、一、二度、一緒に仕事をした仲なんだ、どういうことかはわかると思うが？」

「どこで？」

オヴァビイは南シナ海にあたる方向に顎をしゃくってみせた。「たいていは向こうで。辺境の地。ほかにどこがある？　とにかく、伯爵の話では、一週間か十日前、ベルリンにいてツォー駅のあたりに滞在してたとき、エンノ・グリムって男から連絡があった」

「ドイツ人？」

「そんな名前でほかに何人（なにじん）が考えられる？」

「オーストリア人。スイス人かもしれんが」

オヴァビイはその意見を無視した。「グリムが伯爵に求めたのは、ヴードゥー有限会社の概要説明だった。最初、伯爵は、ヴードゥー有限会社なんてのはまるで知らないと考えたが、グリムのいうのはウーデュー有限会社のことなんだろうと思いあたった。アーティとデュラントがロンドンにおこした会社さ。その直後、あいつらは八七年の市場で大損したわけだが」

「あの二人は資金をもっと賢明に投資すべきだったな

5

上着とネクタイをつけているのは、テーブルに陣取ってスコッチの水割りを飲んでいる二人の男だけだった。ほかの客の大半はヨーロッパやアメリカの特派員で、長いカウンターに二、三人ずつ静かに坐っていた。ほとんど全員が砂

上着とネクタイ姿の二人の年長のほうは、青みがかった

国際企業――業務内容は秘密めき、いかがわしくさえある会社――の取締役会長としても楽に通ることだろう。若いほうは、白髪まじりのこげ茶色の髪、冷酷そうな目、用心深い表情をしている。年長の男の右腕としてつかえといったところだ。

その年配の男がスコッチを飲み干すと、グラスの角氷をカチャカチャさせながら、若いほうの男を見て言った。

「もう一度あの兎の話をしてくれんか」

兎の話を聞きたがっている男はブース・ストーリングズといった。博士号を所有したテロリズムの専門家、『テロの構造』の著者。一時期ホワイトハウスの顧問官を務め、

身を投じたのだった。

「何の兎だ？」モーリス・オヴァビイが尋ねた。少なからぬ数の法の執行者たちから、アザガイ・オヴァビイとしても知られている男である。長年にわたってオヴァビイは、警察の

「クウェート」

「誰から？」

「アザカイ・オヴァビイ」

アグネス・ウーの曖昧な表情が消えた。目から冷たいよそよそしさが失せ、熱くくすぶる灰色になったように見えた。ふだんより低い音域に落ちた声には、差し迫った警戒の響きがあった。「あの子たちにノーと言ってはだめよ。あなたが禁止すれば、鉄砲玉のように飛んでいってしまうわ」

「わたしが何と言おうと、あいつらは行ってしまうさ。あの二人にとって、アザガイは座興の王子様といったところなんだ」

どうすべきかをアグネス・ウーが考えている間、ふたたび短い沈黙が訪れた。結論にたどりつくと、彼女はひとつの命令を発した。とはいえそれは、塩を取ってくれないかと夫に頼むようにしか聞こえなかった。しかし、ウーはその調子をよく知っていたし、「彼女はいつも、アーティー」と妻が言ったときには、いくぶんエロチックな興奮も感じた。

アーティ・ウーは天井に向けて最後の煙の輪を吹きつけると、それに向かってほほえみかけた。[illegible]

ザガイを止めるつもりはない」と彼は言った。「彼を雇うつもりでいる」

わね」

「それはきみのほうが早く探りだせるな」

アグネス・ウーがふり向き、笑みを浮かべた。冷たくよそよそしいところのある美貌が輝き、陽気で大胆、ときどき残酷な感じさえある顔つきになった。「従兄のタンカンは

「餅は餅屋さ」とウー。「グリムが金持ちだとすれば、ダンカンが知っているだろう」

スコットランドに来ているのだから、彼に会いにいったほうがいいのはたしかね。子供たちのことを自慢してもいいし、ロンドンのゴシップを教えてやってもいい。それに、ウーデュー社に投資させなかったことで、いまだにあなたとテュラントに腹を立てているのかどうかも探りだせる」

破産寸前の会社に投資させてもらえなかったからといって、むくれる理由は何もないだろう」

むくれる理由のない従兄というのは、サー・ダンカン・ゴリアックのことだった。ゴリアック一族の名目上の長である六十二歳の彼は、一九八四年、英国政府への功労によってナイト爵を授けられていた。そのおもな功労とされるのは、北海油田景気の際、自分自身も、慎重に選択した少数の人間のために巨利を博したことにあった。

アグネス・ウーが言った。「ダンカンはお金のことなど気にしなかったはずよ。あなたとクインシイが刺激的な波瀾万丈の人生を送っていると考えてるので、自分にもその一部を疑似体験として買い与えたかっただけなのじゃあ、彼に電話して、長い週末をアバディーンに招かれるようにするわね」

「その前に話し合っておかねばならないことがある」

アグネスは窓辺を離れ、ベッドの端、革の小型鞄の隣に腰かけた。両手の指を組み合わせて膝に置き、慎重に表情を消した顔を取りつくろう。恐ろしい知らせを予期したときにみせる顔だ。これまでの結婚生活において、実際に必要だと本人が考えている以上に、たびたび採用してきた表情。

ウーの沈黙が何秒か続いたあと、妻がうながした。

「それで？」

今度は天井に向かって、彼はもうひとつ煙の輪を吐いた。「坊主たちに夏休みの仕事の依頼が来ていた」

「どこで？」

しばらく無表情だったが、やがてわずかに口が動いてこう言った。「オヴァビイ、モーリス・オヴァビイのことか？」

アーサーがにやりとした。「アザカイおじさん、あのおっさんだよ」

カレドニアン・ホテルの部屋の鏡台の前に坐ったアグネス・ウーは、髪をブラッシングしながら、クインシイ・デュラントからの電話の話をそっくりそのまま伝える夫に耳を傾けていた。

ウーは話しながら荷造りしていた。ほとんど何も考えずに、たたむべきものはたたみ、洗うべきものは丸め、自動的に荷造りしていった。それらはすべて、真鍮の留め金のついた使い古された革鞄、アグネスがクライトスン・ハッグ、ウーがたんにハッグと呼ぶ聖鞄に収められていった。

アグネス・ウーがブラッシングしている髪はいまだにごく薄い色のブロンドで、それを保つのに美容師の手はほんのわずかしか借りていなかった。最後のひと撫でが百回目のブラッシングとなったことを知りながら、彼女は鏡から向き直り、賢そうな大きな灰色の目で夫を見やって言った。「それはまた驚くべき偶然の一致ね――クインシイがまさにその瞬間に電話してきたというのは」

吸いさしの葉巻を灰皿から取り上げると、ウーは言った。「偶然の一致というのは、始終起こっている、よかったり悪かったりする小さな出来事にあてはまるのがせいぜいだな。クインシイの電話はそのどちらでもなかった。グリムから小切手を受け取った彼は、わたしたちが文無しなのを知っていたので、受話器を取った」

アグネス・ウーはクッションのついた鏡台用のベンチから立ち上がると、窓辺に行き、なかば凍りついたような歩行者が何人か行き来する、眼下のプリンスィズ・ストリートを見つめながら尋ねた。「ほんとうに余裕はあるの、プリンストンにやるだけの？」

「それは八月、九月の問題だな。まだ二月だ。しかし、二人の息子を同時にプリンストンにやるには、所得区分の上位二、三パーセントに入っていないとまず無理だろう。九月にはまたその階層に入れるものと踏んでいるんだが」

「グリム氏をあてにしているということね？」

「多少は」

[illegible]

[illegible]一緒に、[illegible]

[illegible]

[illegible]

二人の[illegible]はアーサーと同じくらいだが、[illegible]

[illegible]

[illegible]

顔つきになっている。

一気に入ってきた　[illegible]アーティーが尋ねた。

ウーは不審そうにアーサーを、続いてアンボスを見つめた。「何か話があるとき、いつでもおまえたち二人はわたしの手を取って過去に導き、思い出話をさせようとする。聞かせてもらおうか。何があったんだ？」

[illegible]

[illegible]

「[illegible]どこで、何をするの？」[illegible]に話してくれ」

「[illegible]」アンボスが言った。「つまり、[illegible]、いつになるかわからないけど、いまやってる戦争が終わったら。復興の過程で莫大な金が動きまわることになるし、ぼくたちが実績を築けたコンサルタント会社は、もうすでにあちこちにくいこんでる。でも、人手を、アメリカ人を必要としてて、アメリカ人になら喜んで払ってくれるんだ」

「どんな会社だ？」

「オヴァビイ・ストーリングズ商会」

アーティ・ウーの目が細められ、表情が消えていった。

「二時にここでグリムと会うことになってる」

「わたしも出られる」そういって、ウーは受話器を校長に戻した。

「よい知らせですか？」ラムジーが尋ねた。

「そこそこに」と答えて、ウーはスーツのポケットから小切手帳を取りだした。それをデスクに置き、ぼんやりしながらほかのポケットをたたいて探していたが、やがてパーキン・ラムジーに笑みをみせて言った。「ペンをお持ちですか？」

エディンバラのプリンスィズ・ストリートにあるカレドニアン・ホテルのバー、キャリンズで、ホックス席に坐ったアーノルド・ウーの双子の息子は、向かいの席で父親がその日二度目の小切手にサインするさまを見つめていた。アーサーとアンガスの前にはそれぞれ半パイントのラガー・ビールが、父親の前にはまだ口をつけていないダブルのウィスキーが置かれていた。

ウーは小切手をはぎ取り、アーサーに手わたした。九分間だけ年長の兄は、金額をチラッと見ると、片眉を上げ、小切手を脇にまわした。

アンガスは金額を見つめて口に出した。「四百ポンド」半信半疑といった調子。不充分な手持ち資金への懸念の表明だ。

「不渡りにはならんさ」とウー。「それで来月いっぱいもつはずだ。そのころにまた送金する。おまえたちはとにかく今学期を終えて、この夏には大陸を旅行し、八月にプリンストン大学に向かわなくてはならん」

アンガスは小切手を兄に返すと、父親の顔を注意深くうかがってから訊いた。「ぼくたちを四年間プリンストンに送るといくらかかるか、ほんとに考えたことあるの？」

ウィスキーをひと口飲んだウーは、頭のなかでいくつかの数字を処理してみた。「およそ十六万ポンドだな。それは遊興費抜きの四年間の経費だ。遊ぶ金が欲しければ、ポーカーをすることだ」

「父さんとアシスタントがしてたみたいに？」とアンガス。

「そうしょっちゅうしてたわけじゃない」

「アシスタントの話だと、スタット・ホーカーとトロー・ホーカーて、二人て月平均六百ドル稼いでたってことだけど」アーサーが言った。「それも、ドルが今の三、四倍の価値があったころに」

「なんとかやっていたな」とウー。

「……」

「……」

「……」

ピンク色に輝く鏡くとかった細い鼻は、こけた頬と驚くほど青い目を宿すくぼんだ眼窩によくマッチしていた。青い目の上には高い額が広がり、後退しつつある粗くもつれた赤い頭髪へと連なっている。

ハーキン・ハンターかハンターかなんかしまったところで、すでに十五分も遅れていたウーは口を開いた。双子かその五人が医務室に送り込んだといわれるのですね？」

溜め息まじりに答えたラムジーの声は憂鬱そうだった。

「今度はどうか注意してお聞きください、ミスタ・ウー。五人の少年はエディンバラの病院に行ったのです――この医務室ではなく。アンガスとアーサーは、ほぼ同じ年齢と体格の六人の少年に襲われました。六人のうち三人が逃げてきて、話したのです。フェアな喧嘩ではありませんでした」

「六対二で？　まあ、そうでしょうね」

「つまり、あなたの息子さんたちはフェアな喧嘩をしなかったということです」

アーティ・ウーはホッとしたようだった。「まわりにあるものをかまわず利用したのでは？　石とか？　棒切れ？　手頃な長さのパイプ？」

「二人は手と足、膝、肘を利用しました」

「どれくらい続きました？」

「三、四分。せいぜいそんなところです」

ウーは一着の内ポケットから太くて長い葉巻を取りだし、見るからに吸いたそうに見やっていたが、またポケットに戻した。「悪口が喧嘩のきっかけになったとおっしゃる？」

「そうです」

ウーは思案顔でうなずいた。ようやく、すべてが明らかになったとでもいうかのように。「すると、六人の悪たれが双子の悪口を言い、飛びかかっていったが、そのかいもなく少々痛い目にあわされた。それでも、悪たれたちは、昔ながらの悪態を思う存分ついて満足した――中国野郎とかアジア野郎、黄色い野郎、ヴェトナム野郎とか」

ウーが右の手のひらを挙げた。交通巡査の制止の合図。ウーが口をつぐむと、校長は言った。「重要なお話があるのですが、ミスタ・ウー？」

ウーはうなずいた。

「素晴らしい」とラムジー。「この二カ月、電話で、また郵便でお知らせしようとしてきたのですが、うまく連

[illegible]

[illegible]

[illegible]

のに、なぜミスタ・ウーの名前を言いそこなうのだろうか？　何かのテストなのか？　売り込みの駆け引きなのか？　それとも、たんにそのほうがしゃれて気がきいていると考えたのだろうか？」

グリムの骨ばった顔に青ざめたにやにや笑いが広がった。薄い色の目が喜びに――歓喜とさえいえるかもしれない――きらめいたのを、ヴェラントは見逃さなかった。それは初めてのことだった。「テストですな」

「わたしの記憶は――」

グリムは分厚い腕時計に目を落とした。「悪くない。あなたはかなり我慢した、ということは、腹をすかせているのは確かだが、飢えているわけではないということですな」

デュラントは何も答えなかったが、グリムは返答を期待していたわけではないらしく、契約を成立させる商談と同じようなセールスマンらしく、自信に満ちたなめらかな口調で続けた。

「こういうことなのです。何らかの交渉をする際、われわれはいつも、交渉相手の名前とその会社の名前を言い間違えることにしているのです」

「あるいは両方を」とデュラント。

「そう、そのとおり。この場合は両方ですな」

「なぜ？」

「もし相手がすぐにわたしの発音を正すなら、腹をすかせていないというのがわかる。十分か十五分我慢するなら、中くらいの腹のすかせ方、最後まで止さなければ、ほとんど飢え死にしかかっているということがわかり、こちらの思いどおりに交渉できる」

「われわれはまだ何の交渉もしていないが」

「もちろんそのとおりですな」エンノ・グリムは言った。

ことだが」

「オーケイ。つまり、彼は嘘をついたと。ヴァビイのこ[redacted]こうに、申告にいたことは？　ビジネスでということですが？」

[redacted]

「数年前」

「数年前というのは、まだ少々きな臭いころだったのでは、違いますかな？」

デュラントは黙って肩をすくめ、次に来るものを待った。それは売り込みになるはずだと推測したが、そうではなくて沈黙だった。長い沈黙が続く間、グリムは葉巻を噛んではぐし、耳つき椅子のなかでわずかに姿勢を変えることにもなった。沈黙が少しも苦痛ではないデュラントは、軽く警戒な笑みを浮かべてじっと待っていた。ついに、グリムが新たな質問で沈黙を終わらせた。「あなたは何をしていたのです――ベイルートで？」

「あるものを探していた」

「彼を見つけた？」

「"彼"とは言わなかったが」

「オーケイ。彼を？　彼女を？　それを？」

「われわれは探していたものを見つけた」

「"われわれ"というのはあなたとミスタ・ヴー、ですな？」その問いが肯定されるのを待たずに、グリムはすぐに続けた。[redacted]と全く同じといってもいい、ぶっきらぼうな口調だった。[redacted]

探しにいったのは、かなり重要な人物の死体だった。買いたところでは、その[redacted]かなり重要な人物の未亡人が、行方不明になって死んだと思われる夫にかかっていた、百万ドルの生命保険を受け取りたかった。しかし、法的に死亡が宣せられるまでの七年――だか何年だかを――じりじりしながら待ちたくはない。戦争行為と反乱に関する[redacted]は適用しないと保険会社が同意していたのなら、彼女の死んだ夫は――もしくは、誰にせよ彼を雇っていた者は――どえらい保険料を払っていたにちがいない。事実そうだったはずで、さもなければ、未亡人があなたとヴーを雇い、夫が死亡した証拠を探しに――ことによると、その証拠を誰かから買うためだったかもしれないが[redacted]送りだしたはずがない」

「うかがっておきたいのだが」デュラントは言った。「実際のところ、あなたは"W"を苦もなく整合できる

四インチ、体重はおそらく百七十五ポンド、せいぜい百八十ポンドどまり。もはや二度と四十歳には――おそらくは四十五にさえ――戻れない男だが、二十代の身のこなしを有している。また、その後半の、そこでただちに、目の前にいるのがほかならぬ〝糞ったれデュラント〟だというのがわかった、わたしが品をした直中は、みな、あなたをそう呼んでいましたな」

「わたしの身元照会先、信用証明書が」とデュラント。

グリムはうなずいた。

二人名前を挙げてもらいたい

「マニラ警察の警部、クルスというのはご存じですかな？」

「エルメネヒルド・クルスという警部補なら知っていたが」

[illegible]

リス・オヴァビイは？」

デュラントの表情がわずかに変化した。口もとが少々引きつれたか、それもまた[illegible]

ファビイは何をしている？」

「本人の話では、ＢＹＫの個人用保安システムの分析で滞在中ということですな」

「彼ひとりで？」

「頼りになるおもな人材は　それが何を意味するのかは知りませんがね――ブース・ストーリングズ博士ということだった。テロリズムに関する世界的な権威ということだが、わたしは聞いたことがない。あなたは聞いたことがある？」

デュラントは黙ってうなずいた。

グリムはふたたびにやりとした。ＢＹＫが何を意味するのか、あなたは尋ねていませんな　わたしは知らなかったので、オヴァビイに訊かなくてはならなかった。彼はヨルダンのアンマンにいて、わたしが連絡を取ると　[illegible]　とから取ったかはどうでもいいでしょう――電話口のオヴァビイは、横柄な口調で、ＢＹＫとは〈勇敢な〉[illegible]　ことだと教えてくれた　つまり、彼とか中東の専門家はみなフセイン国王をそう呼ぶのだと」そこでひと呼吸おく。「あの国王はもう決して若いとはいえんのにですな？」

「オヴァビイは中東の専門家だと自称した？」

「そうではないとおっしゃる？」

「それは、ミスタ・オヴァビイの人生における魅力的な新しい一章、これまで秘密にされてた一面というだけの

「勉強をさぼっている？」

「そんなふうなことで」

[illegible] ロンドンに？」

「なぜ？」それが警告にも、ことによると脅しにも取れるように一語で問い返す。

[illegible] いる――テロリストかもしれないと？」

[illegible]

ト。「たぶん、その話に入るべきでしょう」

「いいですかな。わたしはビジネスをする際――それがどんなビジネスであっても――そこの責任者、最高位にある者、[illegible]

[illegible] ヒースロー空港に降り立ち――」

「どこから？」

グリムはその質問を無視した。「――コノート・ホテルにチェックインしたあと――ずいぶん空室がありましたな――雪が降っていてもいなくても、ロンドン西一区バークリー広場ブルートン通り八番地、メイフェアの中心部、そういったところをちょっと散歩してみることにしたわけです。ヴードゥー有限会社が本物のビジネスを[illegible]の住所を組み合わせただけの場所ではないということを[illegible]そこが本物であるなら、翌朝、予約なしに、不意に訪れてみようと」

「たぶん、歓迎されることもなく」

[illegible]

く、この外のかなり小さな待合室に入ってきてまず気づいたことは、それに見合った小さくてかわいい受付嬢がいないということですな。それから、受付嬢のデスクに埃が積もっているのに気づいた――そうたいした量ではないが、一週間か十日は留守にしているとわかるほどに。しかし、だからどうだというのか？　病気で床に伏せっているのかもしれませんからな」

デュラントはかすかな笑みをみせた。「一時的な体調不良で」

「思ったとおり。で、誰も取り次いでくれる者がいないので、〈私室〉と書いてあるそのドアをノックし、鍵やらボルト錠、チェーンがすべてはずされるのを待っていた。ようやくドアが開かれ、二月にしては少々陽に焼けすぎている男が姿を現わした。身長六フィート三ないし

たるところに寒気と湿気が浸透していた。ウーファー有限会社の鏡板張りの会議室兼オフィスも例外ではなく、不充分なセントラル・ヒーティングを補うために、デュラントはクロゼットから電熱線の三本ついた電気ストーブを出してきて、飾り暖炉のなかに据えていた。

エンノ・グリムは、暖炉の右に置かれたおそろいの耳つき椅子のひとつに腰をおろした。炉棚の上には、ミセス・アーサー・クイス・ウーファー（旧姓アクセス・ファリアック）とウーファー家のふた組の双子を描いた大きな油絵が掛かっていた。

椅子に坐った十四歳の双子の姉妹は大人びたポーズをとり、目な表情をしている。十七歳の兄ボーイ・アーサーは立っていて、まったく同じ薄笑いを浮かべているために、いくぶん滑稽さの感じられる表情になっている。両家は、母親の整った顔だちと女優然とした態度を見事に再現していた。何か淫らなことでも考えていそうな、大きな灰色の目のきらめきまでも捉えられている。

エンノ・グリムは肖像画を無視して耳つき椅子にうずくまり、電気ストーブで両手をあぶっていた。顔をしかめているのは、カシミアの黒いダブルのオーバーをデュラントに渡してしまったのを後悔しているのかもしれない。

このオーバーは少なくとも千ポンドはしただろう、いや、三千トイツ・マルクといったところか、とデュラントは推測した。黒いクルミ材から彫りだされた、一九〇三年製たという凝りすぎの感のあるフィート掛けにそれを掛けてから、彼はもう一方の耳つき椅子のところへ行って腰をおろした。脚を組み、グリムが用件を切りだすのを待つ。

いぜんとして手のひらをあぶりながら、グリムは目を上げずに言った。「ミスタ・ヴューは同席されないのですな？」アーティ・ウーの姓を今度はヴュー・カレ（ニューオーリンズのフランス人街）のヴューのように発音した。フランス語としても通りそうだ。

「出かけてましてね」デュラントは答えた。「家族の用事で」

グリムは薄い灰色の目で肖像画を見上げた。みぞれに近い色合い、冷たさも似たようなものだろう、とデュラントは思った。「どなたか病気で？」適度な気づかいをまぶしてグリムは尋ねた。

「息子たちが学校で問題を起こしていて」デュラントは説明した。

りませんが」

3

エンノ・クレンツは予約なしでやってきた。右耳にまだ傷あとが残っていたが、えくぼに見えないこともなかった。その英語もアメリカ人として通りそうだったが、〝W〟にドイツ訛りが残っているので、ウーデュー有限会社をヴードゥー有限会社と発音していた。

全のにおいを嗅ぎつけたクインシイ・テュラントは、依頼人となりそうな男の発音の間違いを聞き流した。右頬の傷あとに関しては、小口径　　かに五口径の銃創によるものか、さもなければ、二十五年ほど前に校庭での喧嘩で九歳のガキ大将に鉛筆で突き刺されたのかもしれない、と想像した。

この二月は、イギリスのみならずヨーロッパの大半が北極なみの寒さだった。ロンドンでは八インチの雪が降ったし、リヴィエラのフランス側にも小雪が舞った。い

たというようなことを――告白したとしたら、どういったことになるかも考えました。もし、催眠術師がそれを録音していたら、そのテープを大金で売ることができる。ビデオテープに撮っていれば、いくらで売れるかは神のみぞ知る」

「その男も刑務所に行くことになる」

「誰かが押し入り、テープを盗んでいったと主張すれば、そんなことにはならないはず。ウォーターゲート事件のことが、ま、その一部が念頭にあるんですけれど。彼らはそういったようなことをした、そうじゃなかったかしら？」

「そうともいえませんがね」

「でも、催眠術師がテープを使ってできることがもうひとつあるんです、誰にも気づかれることなしに」とギャンブル。「わたしに売りつけることができる。それは恐喝と呼ばれる行為になるんでしょうが」

彼女はモットに冷たい微笑をチラッとみせた。討論者が点数をかせげる主張をしたあとにみせる笑み。モットは左手の甲を掻きながら尋ねた。「口が固いのを保証できる催眠療法医をわたしが見つけてきたらどうです？問題の晩の記憶を回復してみることに興味がありますか？」

ギャンブルは眉をひそめた。「それが重要なのかしら？　わたしの記憶が？」

「きわめて重要ですね」

「催眠術師をご存じなんですか？」

「それを知っている人間を知ってます」

「それをビジネスにしている人間――酔っぱらって記憶を失い、夫だかボーイフレンドを殺してしまったけれども、まるで覚えていない妻だかガールフレンドに、催眠術師を派遣する人間ということかしら？」

モットは笑顔をみせた。「きわめて優秀できわめて口の固いプロを、きわめて微妙な各種の任務に派遣している男」

ギャンブルはじっと彼を見つめ、ふたたび眉をひそめながら言った。「〝きわめて〟を連発するのは、わたしの弁護士になってくださるということ？」

「あなたのほうでよろしければ」

「オーケイ。わたしの弁護士として、どういったことを勧めます？」

「口が固くて腕のいい催眠術師」

「では、お任せして、その仲介者に連絡してもらうのが

[illegible]
た。婚前の取り決めの件をビリーが持ちだしたとき、わたしは結婚したいのであって、合併を望んでいるのではないと言ったんです。そう目新しい主張でもないはずな[illegible]ふうでした」
「なぜライスは心変わりしたのだと思います？」
「わかりません。そのあと、彼とは一度も話してないんです。少なくとも、話したという記憶がない」
「しかし、話そうとはした」
「何百回も連絡したにちがいないけれど、つながりませんでした。それで、大晦日に――結婚式がキャンセルになった翌日――わたしは飲みはじめました。一日中飲んでいて、ちょっと眠って、目が覚めるとさらにまた飲んで。で、ウォッカのパイント瓶を持って車に乗り込み、ビリーと話をつけようと、マリブの彼の自宅に向かった記憶はある。でも、死んで床に横たわったビリーのいるあの浜辺の家で、保安官補に起こされるまで、ほかには何ひとつ思い出せないんです」
「記憶を失った？」
「ええ」
もたせかけ、じっとギャンブルを見つめた。彼女はコーヒー・テーブルをはさみ、実用本位の肘掛け椅子の端に[illegible]ですか？」
「あるお医者さんに会うまで、わたし、記憶喪失というのはメロドラマの筋の趣向として知っているだけでした。ドラマには葛藤が必要でしょう？ それで、女性を記憶喪失、あるいは健忘症にする。そのお医者さんの話では、記憶喪失というのはアルコールによって引き起こされる健忘症の一形態で、アル中患者や大酒飲みにはよく見られるということでした。失われた記憶を回復させるには催眠術が使われているが、うまくいくこともあれば、だめなこともあると。でも、もしためしてみたいのなら、きちんとした資格を備えた催眠療法医を何人か推薦してもいいということだったので、わたし、考えてみますと言ったんです」
「考えてみた？」
「もちろん、考えてみました。それに、何か困ったこと、罪になるようなことを――ひょっとして、ビリーを殺し

と思うし、きみが監督をするのだから、その決定権はきみにある〟。その瞬間、わたしはビリー・ファイスと恋におちいってとうぜんだと考えた、あのろくでなしと」

「これまでのところ、彼は申し分ないようですがね」

「これまでは。ま、わたしたちは『ミルナー姉妹』を作り、批評家の評判はよくてしたか、興行的にはさんざん、ても、ビリーは気にしていないようで、なんともひどいアクノ・スクリーンに十万ドルのオプション契約金をポンと出し、脚本化に百万ドル払い、その小説のオプション権を行使して――それでさらに百四十万ドル――MTV（[illegible]）の二十四歳のイケメン人監督を雇い入れたんですよ。わたしはメイクイス役をやることになった男のように歩いたり話したりする元気一杯のヒロインで、老いぼれナイルズ・ブランドの相手役、ファンの子には五百万ドル・プラス数パーセントの興行配当。ま、総額三千八百万ドルかけて、それがみごとヒットした。わたしはロサンジェルス映画批評家賞をもらい、アカデミー賞にノミネートされた。アカデミー賞はのがしたけれど、それが残念だったのはもちろんわたしだけ」

「そのあとどんなことが？」

「そのあと、ビリーが求婚したんです。去年の初めごろに。わたし――いつになってもおばかさんで――もちろんよ、ビリー、愛してるわ、と答えて、二人で結婚式の日取りを十二月三十日に決めたんです。その間、ビリーは、十三カ月間[illegible]ニューヨーク・タイムスのベストセラー欄に載っていた『悪徳インディアンの死』を買った。即金で二百万ドル、オプション契約はなし。何人かの脚本家にさらに百万ドルかそこら払い、六千五百万ドル以上かける今度の西部劇超大作は、自分の未来の花嫁が、老いぼれナイルズ・ブランドとともに主演するばかりでなく、監督することにもなる、と公表したんです。わたしの話わかりますか、ミスタ・モット？」

「きわめて明快に説明してますね」

「ところが、去年のクリスマス・イヴに――ひと月ちょっと前のことですが――ゴシップ好きが〝短信〟と呼んでいる三行の新聞発表をビリーが出したんです。結局、自分はアイオニ・ギャンブルと結婚しないし、アメリカ・インディアンを描く素晴らしい映画を彼女が監督することも、また主演することもないと。わたしにはまったく寝耳に水の話でした」

「あなたは、その映画の契約書とか、婚前の取り決めとか、なにかにサインしていた？」

ほとんどいくつになっても仕事が入るものなんです」

「もちろん」とギャンブル。「男優にとってなら、三十

[illegible]

いける。でも、三十歳の男優を相手に、ラヴシーンを演

[illegible]

られるまで、一時間待ってもいいわ」

最後のひと切れを取りながら、モットは言った。

ギャンブルは笑みを浮かべたが、それがにやにや笑いに変わった。「彼女のファンなのかしら？」

保存し表名というだけのことでしてね」と言って、モットはピザに噛みついた。

「ま、とにかく、そういったわけで、三十歳の誕生日に泥酔したんです。で、それ以来、ビール三本とワイン八杯しか飲んだことがなかった――あの十二月三十一日までは」

「ミスタ・[illegible]

よう」

「オーケイ。彼はオフィスを構えていたわけです。さっき言ったように、センチュリー・シティに。彼がジャック・ブローチに連絡してきたので、ジャックがわたしに連絡して、行ってみたほうがいいと言ったんです。それで、わたしはエレヴェーターに乗って[illegible]階だったかしら？――申し分ないけれども何の個性もないオフィスに招き入れられ、そこで、ヒーローが駆けずりまわりながら、ローナ・ワイリーの小説にもとづく映画を手わたしたんです。『ミルナー姉妹』」

ギャンブルは気づかわしそうな表情でモットを見やったが、彼がその小説を読んだことがあると言うと、ホッと小さく息をついて、続けた。「それで、コーヒーが運ばれてきたあと、〝この企画にきみが必要だ〟とビリーが言ったんです。ま、どちらの姉妹も重要な役柄なんですが、ルイーズのほうがうま味がある。で、尋ねてみた、〝わたしどちらを演じるのかしら――ルイーズ、それともローズ？〟。すると、彼がどう答えたか想像できて？」

「だめですね」

「こう言ったんです。〝それは監督が決定すべきことだ

なったんです」

「三世が死んだのは？」モットは尋ねた。「十年前？」

「十二年。ビリー四世は八年間陣頭指揮にあたってましたが、八六年の初め、市場価格が大幅に暴したところですべて売却したんです。少なくとも十億ドル、たぶんもっと下にして、ハリウッドにやってくると、自分は独立した映画製作者だとふれまわった、銀行に十億ドルかそこらあったので、誰もが、〝そう、そのとおり〟と言ってました」

「そのころ彼に出会った？」

彼女はうなずいた。セシリー・シティにオフィスを構えていて、彼と、秘書と脚本編集者がそれぞれひとりだけでしたけれど」

「それが、いつのことです？　八六年、八七年？」

「八六年の終わり。わたしの三十回目の誕生日のひと月後。ということは、いまわたしは三十四歳、当年とって三十五、わざわざ計算しなくてすむように申しあげれば」

モットは笑みをみせただけで、ビールを飲んだ。

「三十歳の誕生日にも、わたし、酔っぱらって記憶を失ったんです」告白というより、事実の伝達といった調子だ。

「なぜ？」

「女優にとって、三十というのはもはや登り坂ではなく、平らな台地に着いたということなんです。運がよければ、四十までその状態でいられるかもしれない。そうしてトリはじめるわけですが、その速度はゆるやかな場合もあれば、あわただしい場合もある、急坂を転げ落ちるように」

「三十歳というのは驚くほど若いですよ」とモット。

「ついでに言えば、四十にしたところで同じですが」

「でも、四十五歳はそうじゃないんです。だからこそ、わたしはあらゆる手段を使って、監督業に就いたんです。そのために、テレビの連続ホーム・コメディや一話完結のアクション冒険物にゲスト出演することにもなって――たしし、監督をやらせてくれるならということで。それが監督修行に役立ったわけですが」

監督業というのは、あなたにとっては終身年金といったふうに聞こえますね」

「つまり、わたしは四十五になっても、五十五、六十五になっても――そんなふうに長生きできればの話ですけれど――俳優を続けるつもりなんです。ところが、役柄

ない黒縞のスーツ、染み一つない黒靴、白いシャツに英国タイ、異常なほど襟の長い男で、顔はがらくたを寄せ集めて作られたようだったが、彼女がこれまでに見たなかで最高に聡明そうな黒い目をしていた。その目をのぞきこみながら、ギャンブルは強い安堵感に包み込まれるのを感じた。

ジャック・ブローチが紹介した。「アイオニ・ギャン[illegible]・[illegible]」

ギャンブルはほほ笑みながらモットに近づいていき、右手を差しだした。「ぜひとも、わたしの弁護士になっていただきたいですわ、ミスタ・モット」

ハワード・モットは冷たく乾いた手を取ると、笑みを返して言った。「話し合ったあとでも、まだそうお思いになられるかどうかでしょうな」

モットがやってきたのは午前十一時だった。十一時四[illegible]、[illegible]ニューヨークへ[illegible]ために、[illegible]ニューヨークの家政婦ニックが、モットにはビールを、ギャンブルには新たなダイエット・ドクター・ペッパーをつけて、オフィス兼書斎に運んできた。

モットは品よくビザを噛み取ると、噛んで飲み込み、[illegible]して会ったのか話してください」

「ビリー・ライスと？」

モットはうなずき、ビザをもうひと口、噛み取った。

「彼がどういった人間だったかはご存じでしょう？　つまり、以前のことは？」

[illegible]ている人物像を話してください」

「彼、《カンザス・シティ・ポスト》の跡取り息子だったんです」

「ヘミングウェイの勤めた新聞社ではない」

「二〇年代にラジオに、四〇年代後半にテレビに進出した[illegible]国じゅうにテレビ局を二つ、ラジオ局を四つ所有し、小さな出版社を[illegible]つ、最高級紙[illegible]、[illegible]工場、それにカンザス・シティの中心街に巨大なビルを所有することになりました。それら全株式の九十パーセントは、創業者ウィリアム・A・C・ライス一世の孫、ウィリアム・A・C・ライス三世が独占してました。そのため、[illegible]世が亡くなって、すべてこの[illegible]世のもの[illegible]

キャンブルは眉をひそめた。"トノカン"という陳腐な表現はあなたのものなの、それとも弁護士連中の言葉？」

「わたしのだ　わたしか陳腐な表現を使うのは、血にてもわかるからなんだ。ま、だからこそ陳腐なんだが」

ダイエット・ドクター・ペッパーをまたすすってから、ギャンブルは言った。「彼を選ぶべきだと思うのね――そのワシントンの男を？」

ブローチは首を振った。「あんた自身がいちばん信頼できて、尊敬できる男を選ぶべきだろうと思う」

「気に入ったのではなくて？」

「この件に好き嫌いは関係ないな」

「彼は、わたしがビリーを殺したのかと訊くかしら？」

「わからない」

アイオニ・ギャンブルは天井を見上げた。自分の次の台詞がそこに書きつけてあるとでもいうふうに。いせんとして大月を見つめながら、彼女は言った。「あのエダヤ教徒は気に入ったし、バプテスト派は尊敬でき、米国聖公会員は――見るからにテキサスの田舎者だったけれど――信頼できたわね。でも、ユニテリアン派は、最終的にはわたしとベットをともにすることになる、という考えに身も心も焼きつくされているようだった」

「楽天主義に何か問題があるのかな？」

彼女は視線をおろした。

「真面目に相談にのってよ」

ブローチは首を振った。「自分で判断できるさ――ま、本能的にかもしれないが」

「そう思う？」

「間違いない」

玄関ドアの二音程のチャイムの鳴る音がした。

ブローチが立ちあがった。「彼が来たようだ。わたしが出て、ここへ連れてきて、あんたに紹介する。それでわたしは失礼する」

「この格好でだいじょうぶ？」

ジャック・ブローチは答える手間をはぶいた。

ジーンズに格子縞のシャツ、素足にティンバーランド社製の履きふるしたカジュアル・シューズ姿のアイオニ・ギャンブルは、ブローチがワシントンの弁護士を連れて戻ってきたとき、ガラス張りの壁際に立って太平洋と峡谷を見つめていた。振り返った彼女の目に入ったのは、四十代の中背の男だった。非常に高価だが体に合ってい

が、[illegible]を

[illegible]

以前にはオーティス[illegible]

[illegible]ジョニー・プロ・キ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

オーティス[illegible]の三方の壁は書棚になっていて、小説と法律書[illegible]。[illegible]一冊はオーティス[illegible]

[illegible]

ンプスは一八三七年にメンフィスの[illegible]

スクを前にして坐り、プロ・キはそのそばに置かれた[illegible]

[illegible]

言入りのダイナマイト・ドクター・ペッパーを二本の缶

[illegible]と言った。「これ

までわたしは、[illegible]

[illegible]

「[illegible]だな」プロ・キが言っ

た。

「そのくらいのことを[illegible]

さ」

[illegible]

[illegible]ガンプスのいちばん親しい友人で[illegible]弁護士を[illegible]としている。実際は

[illegible]。それまでの四人は、[illegible]と

[illegible]ったが、ワシントンのその男は、「いや、たいして

[illegible]

[illegible]

「そんなことより、[illegible] そのワシントンの男は

[illegible]」

「前の四人は[illegible]が、わたしの一目置く[illegible]

[illegible]だ、あの男は[illegible]だと言ってる」

いるか軽蔑している連中からビリー四世と呼ばれてきた男だった。もっとも、のちにある者が言ったように、〝あの男を三分以上知っていたほとんどすべての人間が、嫌ったか軽蔑した〟のであるが。

2

一九九一年一月の第三週には、アイオニ・ギャンブルはウィリアム・A・C・ライス四世殺害のかどで起訴され、保釈金を積んで釈放されていた。ロサンジェルスの郡検事補は保釈金を少なくとも一百万ドルとするよう求めたが、サンタモニカの郡上位裁判所の判事は二十万ドルと定め、なおかつの決定を修辞疑問の形で擁護した。〝世界中に顔を知られている身で、いったいどこに逃げ込んだり、隠れたりすることができるというのかね？〟

もっかギャンブルが――隠れているのではないにせよ――身をひそめているのは、サンタモニカのアデレード・ドライヴに建つ、築三十五年、十三室を備えたミッション様式の自宅だった。彼女はそこに独りで暮らしていた。たし、カレーンの一に造られた部屋にはエルサルヴァドル出身の夫婦者が住んでいたし、ほかにも猫が六

ろと世界中で――いちばん恵まれた連中が暮らしているのを彼女は事実として知っていた。

[redacted]の隅に大きな白っぽい塊りがあるのに気づいた。何らかに忘れ去られたといったような塊り。好奇心から、彼女は居間を横切って近づいていった。拳銃を左手に持ち替え、右手で卓上スタンドのスイッチをひねると、その塊りがウィリアム・A・C・ライス四世であることがわかった。

彼は仰向けに横たわっていた。見開かれた青い目は、梁がむき出しになったカテドラル風の天井をじっと見つめている。長い脚は右膝がわずかに曲げられ、左脚はまっすぐに伸ばされていた。両腕は適当に配置されたかのように、右手は真北を差し、左手は南よりもいくぶん西に向けられている。胸毛のない裸の胸には、右の乳首のわずか左側に黒い穴が二つあいていた。素足、白いテニス・ショーツには染みが浮きだしている。

少なくとも三十秒、アイオニ・ギャンブルは死んだ男を凝視して立ちつくし、せわしなくあえいでいたが、やがてその息づかいをやめて言った。「ああ、なんてこと、気の毒に、と思えたらいいのに――

そうして体をまわしたギャンブルは、いくぶんよろめきながら、小さなバー・コーナーへと歩いていった。ウィスキーを目分量で二オンスほどグラスにそそぎ、一気に飲み干す。むせて咳き込むことになったが、二分ほどして収まると、よろよろと居間を横切って電話のところへ行った。ビリー・ライスのお気に入りだったのを知っている椅子にくずおれるように坐り込んだ彼女は、ベレッタを膝にのせ、受話器を取って九一一番を押した。

警察の緊急電話が鳴りはじめた。八回目の呼び出し音を聞きながら、彼女はあくびを漏らした。十回目の呼び出し音で、まだ鳴っている受話器をテーブルに置くと、膝に置いたベレッタの握りを両手でくるみ、目を閉じて、意識を失った。

午前六時二十七分、二人の郡保安官補が居間に入ってきたときにも、アイオニ・ギャンブルはまだベレッタをつかんだまま気を失っていた。拳銃を取り上げた保安官補は、彼女を揺すって起こし、権利を読み聞かせると、ウィリアム・A・C・ライス四世殺害の容疑で逮捕した。ウィリアム・ライスというのは、一九五〇年、カンザス・シティ最高の私立幼稚園に入園して以来、彼を嫌って

て、ギャンブルはクリーム色のスエードのジャケットについたごみのホコリを探っていた。

それぞれのポケットを四度ずつ探ってから、ぼんやりとではあったが、サンタモニカの自宅を飛びたしてくる際、車のキーとウォッカのパイント瓶をひっつかんできただけで、茶色い革のクラッチ・バッグは手に取らなかったことを思い出した。ライス邸の玄関ドアの鍵は、そのバッグのジッパーのついた小銭入れに入っているのだ。

それでも、まだビリー・ライスを起こす道が残っている。ドアをカリカリひっかいたり、ベルを鳴らし、ヨーテのように吠えたり唸ったりしながら、彼が起きだしてくるのを待てばいい。コヨーテのまねをしようと決めかけたところで、ドアがすでにいくぶん開いていることに気づき、一度そっと押してみてから、ぐっと強く押すと、ドアは大きく開いた。

暗い邸内に入ったギャンブルは、左手にあるのを知っている明かりのスイッチを手探りし、探しあてて押した。大理石造りの玄関ホールが照らしだされる。その先には広々とした居間があり、さらに先には同じくらいの広さのテラスがあった。

玄関ホールの間接照明は、向かい合った壁に掛かっている二つの絵を浮きたたせるように配置されていた。右側のはシャガール、右側のはホックニー。ホックニーの絵の下には、こぶのある木で作った小さな四角いテーブルがあった。その日の郵便物と車のキーをセット置けるだけの大きさだったが、この朝は、九ミリ口径のベレッタ・センチュリオンも載っていた。

ギャンブルは拳銃を手に取って調べると、声を張り上げた。「ねえ、ビリー、わたしが足の親指を吹っ飛ばすのを見たくない？」

頭をトげ、拳銃を右脇に垂らし、叱責されるのを期待しているような様子で彼女は待っていた。しかし、誰も現われないとわかると、ベレッタを持ち上げ、慎重に狙いをつけた。そうして、ヘヴァリーヒルズの射撃場で教わったとおりに引き金を引き絞り、シャガールの絵の左下半分に小さなまん丸い穴をあけた。

銃声が響いても、叫び声も泣き声も上がらなかった。そこで、ギャンブルは大理石の玄関ホールをゆっくりと進み、居間に入っていった。向かいの全面ガラス張りの壁を通してサンタモニカの街明かりが見え、そのずっと先にはパロス・ヴァーデスの灯もかすかに望むことができた。後者の町には、カリフォルニアで——ひょっとす

[illegible]

[illegible]

[illegible]

1

九日の午前五時を少しまわったころ、高速八十マイルを越えるスピードで走り抜けていく、中型の車は、特売価格十万千四百十四ドル二十八セント、まだ納車といってもいいメルセデス・ベンツ500SLだった。それを左手一本で運転しているのは、目の覚めるほどの美人というわけではない〝兼業家〟のアイオニ・ギャンブルだった。

六、七年前から注目されだした女中アルバイトは農場は・・・

ことは、同じしたがって、それは彼女の人生において・・・目のことだった。

女優兼売春婦という二つの技能を持つ彼女が、ハリウッドの隠語で兼業家と呼ばれているギャンブルがいまだに・・・

に持った受話器を耳に押しあて、二十五回目の呼び出し音に聞き入っていたからである。そこで電話を切った彼女は、今度は、助手席に横たえておいた四〇〇のウォッカ、スミルノフの一パイント瓶を手に取った。そうして、最後の一オンス半を飲み干すと、電動スイッチを押して助手席の窓をあけ、空瓶をほうりだした。瓶は、九八六号線ホンタ・シニックに当たって砕けた。

彼女はメルセデスを停め、損害賠償を約束する・筆を残そうかという気になったが、頭のなかで文面を組み立て、何度も推敲しているうちに、ホンタ・シニックは・マイル後方に去り、目的地のカーボン・ビーチが近づきつつあった。数秒後、カーボン・ビーチに着いたときには、文面も砕けた瓶もホンタの町も記憶からきれいに消え去っていた。

すでに法定制限速度の時速四十五マイルにスピードを落としたメルセデスは、ハンティック・コースト・ハイウェイの中央分離帯をそれまでの情性のような速度で走っていた。同時にギャンブルは、どこかに置き忘れた[illegible]を探したりしていた。それは千二百万ドルの邸宅を守る鉄製の門を開くはずのスイッチだった。邸宅の所有者はそこを〝浜辺の小屋〟と呼び、ほとんどの知人から顰蹙を買っていた。

登場人物

アーティ・ウー
クインシイ・デュラント……ウーデュー有限会社の経営者

アザガイ・オウァヒイ……[illegible]助

ブース・ストーリングズ……[illegible]

ジョージア・ブルー……[illegible]

アイオニ・キャンブル……女優[illegible]

ウィリアム・A・C・ライス四世……映画プロデューサー

ジャック・ブローチ……[illegible]

ハワード・モット……刑事弁護士

エンノ・グリム……[illegible]

ジェニー・アーリス……同常務取締役

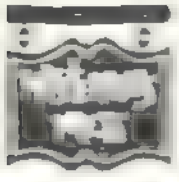
ヒューズ・グディスン
ポーリン・グディスン……催眠術師

フィル・クイル……[illegible]

リック・クリーヴランド……[illegible]

コリーン・カレン……[illegible]

[illegible]



THE MYSTERIOUS PRESS

Tokyo New York London

[illegible]

獲物

ロス・トーマス
Ross Thomas
菊地よしみ＝訳

獲物
VOODOO, LTD.

THE MYSTERIOUS PRESS
Tokyo

VOODOO, LTD.

「獲　物」

ロス・トーマス　菊地よしみ/訳

四人の男と一人の女——
いずれ劣らぬくせ者たちが、
ひと儲けしようと集まった。

予断を許さぬプロットで描く待望の最新作。

MYSTERIOUS PRESS
THE MYSTERIOUS PRESS, TOKYO　早川書房
50th HAYAKAWA